

朝来郡和田山町

梅田古墳群Ⅱ

—播但連絡道路（5期）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書V—

2003年3月

兵庫県教育委員会

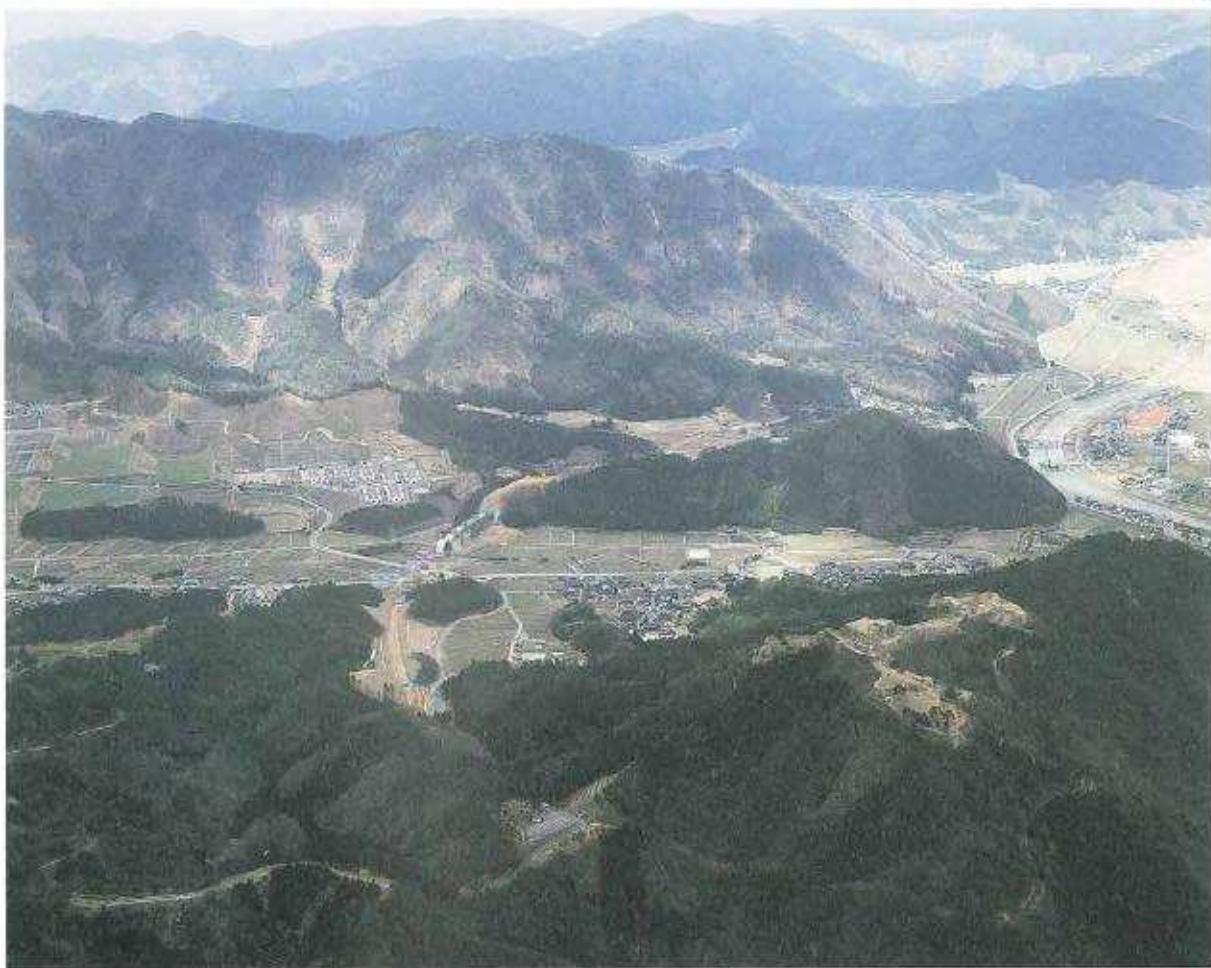
朝来郡和田山町

梅田古墳群Ⅱ

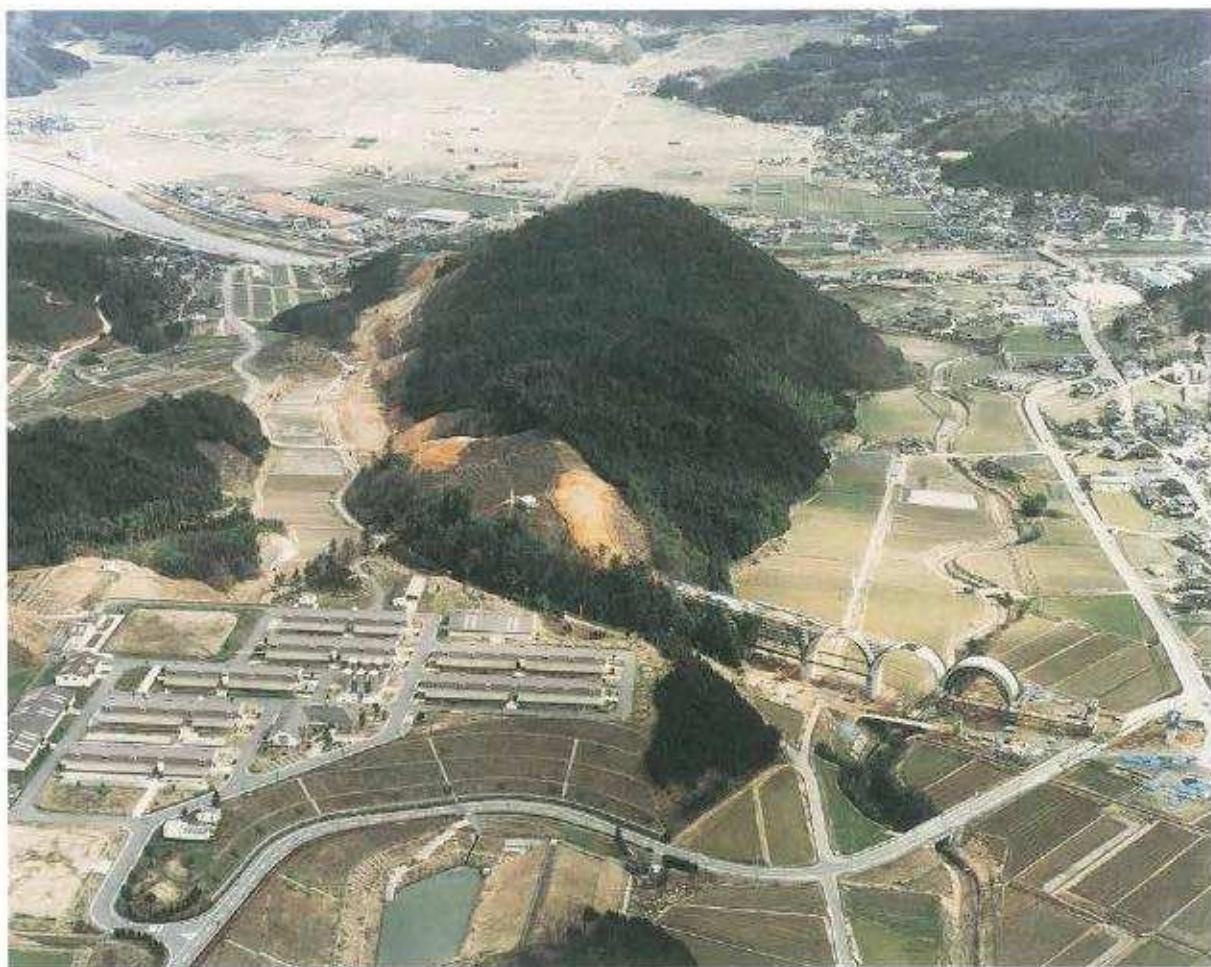
—播但連絡道路（5期）事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書V—

2003年3月

兵庫県教育委員会



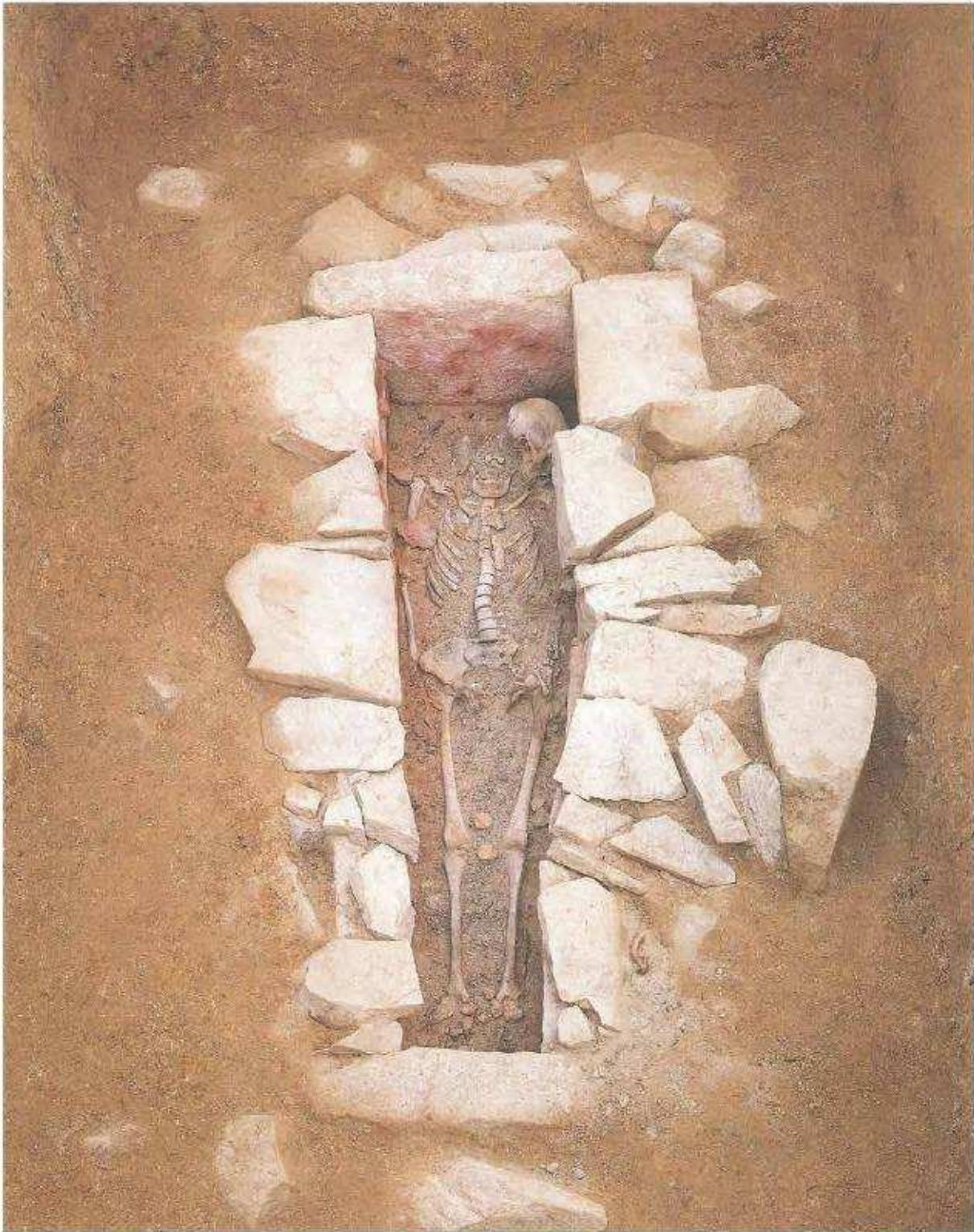
遠景（南西から）



全景（西から）



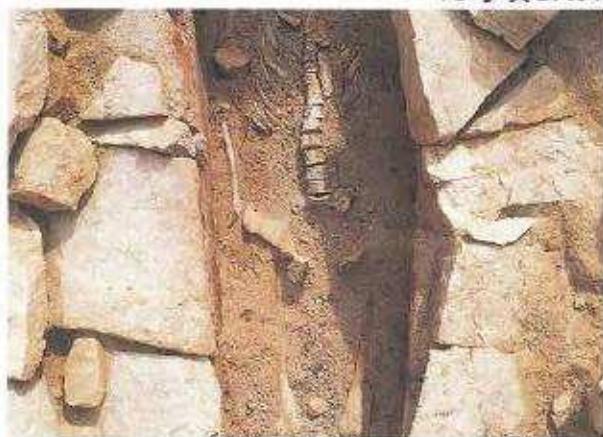
調査古墳全景（南西から）



人骨出土状況（西から）



人骨出土状況（北西から）



（西から）



（西から）



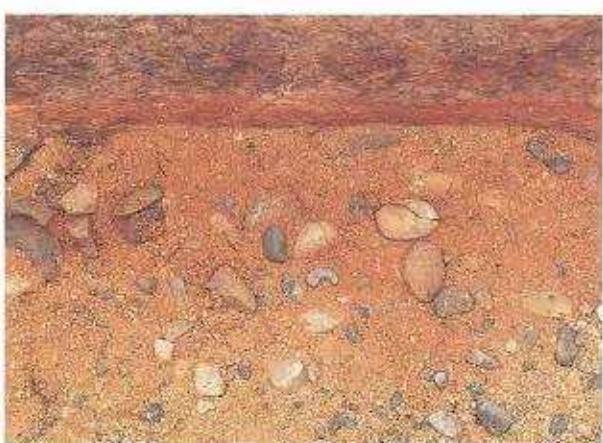
（北から）



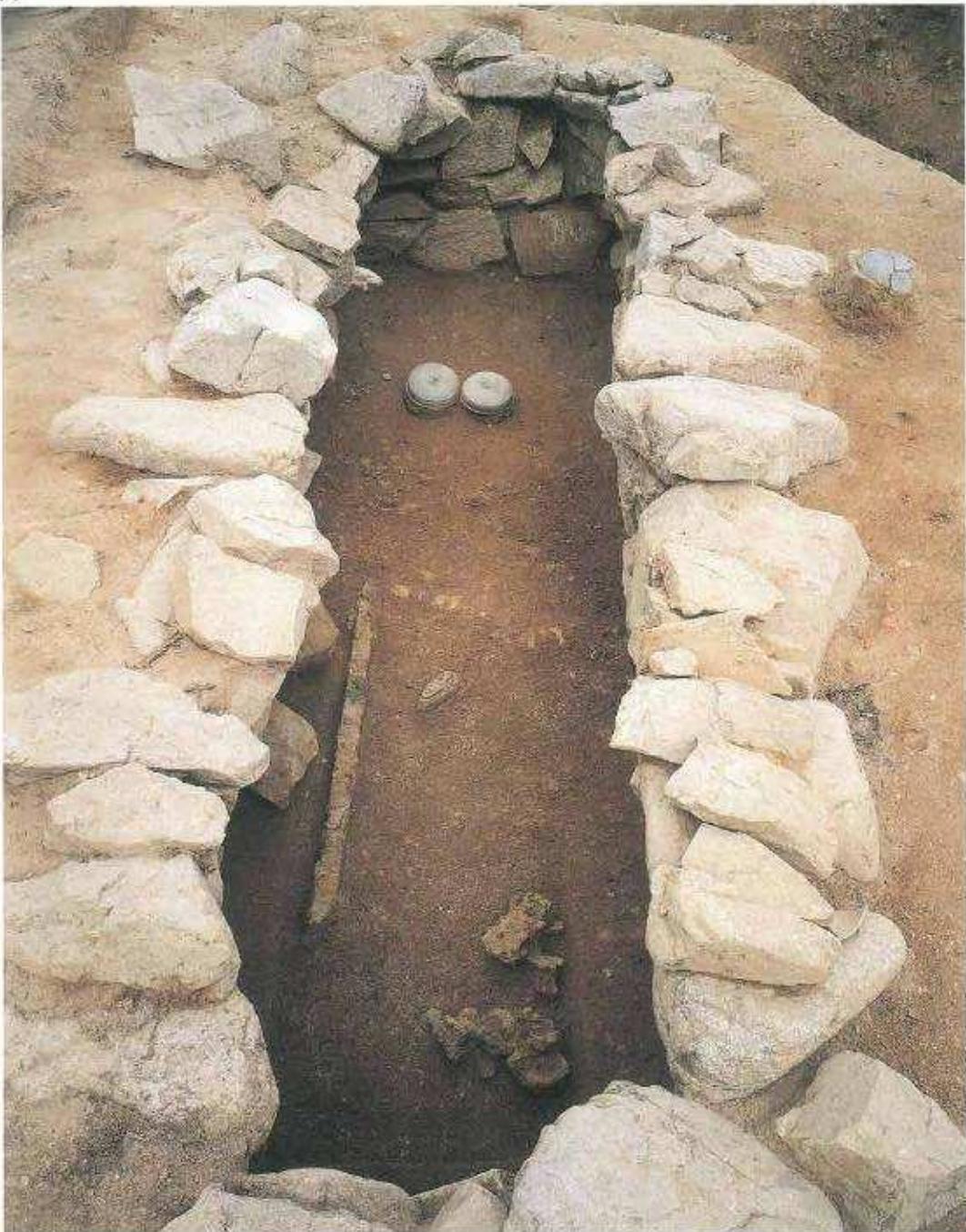
（北から）



（東から）



勾玉出土状況（南から）



SX01 遺物出土状況（西から）



SX01・02 出土遺物



梅田古墳群Ⅱ

出土遺物



11号墳

赤色顔料付着土器 (25・26)



15号墳

勾玉 (S 1)



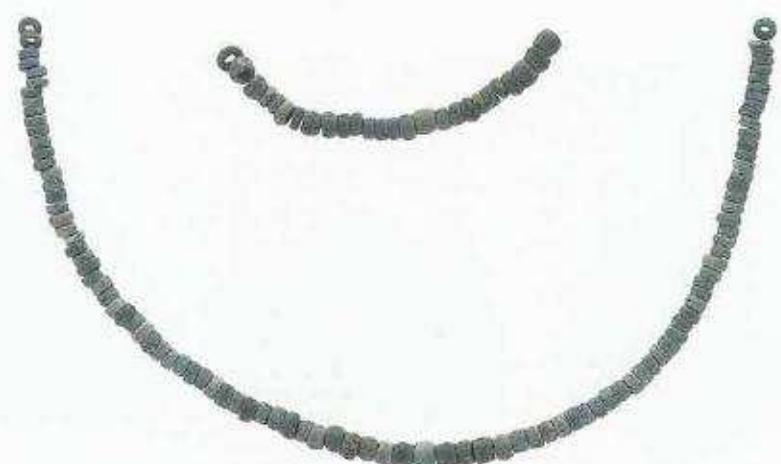
19号墳

玉類 (S 2～S 13)



13号墳

玉類 (S 15～S 28)



28号墳

玉類 (S 47～S 147)



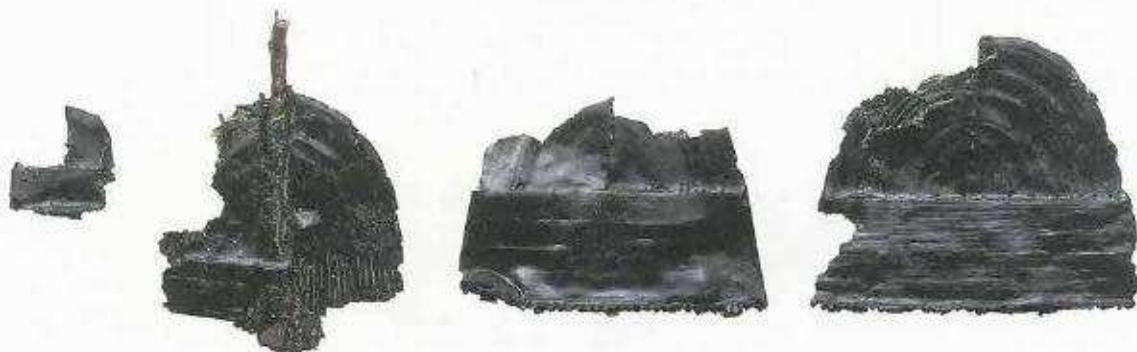
25号墳

馬具 (M27~M29)



27号墳

馬具 (M38)



28号墳

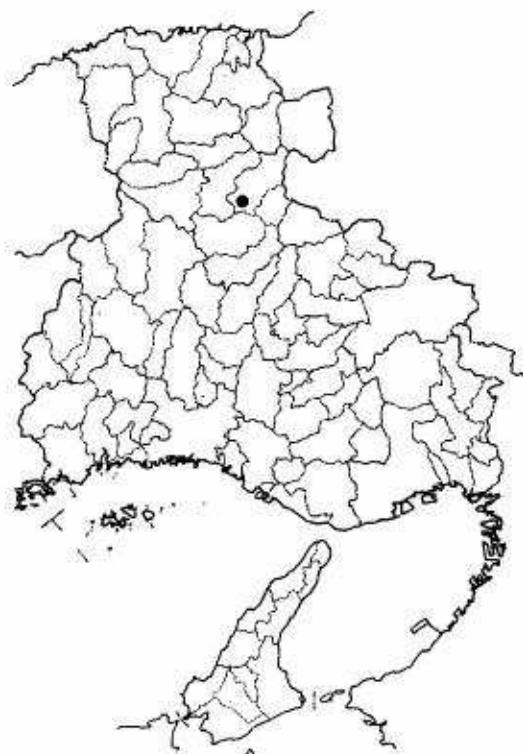
堅櫛 (W1~W4)

例　言

1. 本書は、朝来郡和田山町久留引字梅田・同 加都字向山に所在する梅田古墳群6～33号墳の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、播但連絡道路（5期）事業に伴うもので、兵庫県道路公社播但連絡道路建設事務所の依頼に基づき、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が平成9・10年度に実施したものである。
3. 遺跡の測量は、国土座標を基準とし、方位は座標北を示す。平面図に記した座標値は、平面直角座標V系原点からの距離である（単位はkm）。また、標高値は、東京湾平均海面（T.P）を基準としている。
4. 第1図 播但連絡道路（5期）事業 道路路線図は、兵庫県道路公社播但連絡道路建設事務所発行のパンフレットを一部改変し、第5図 梅田古墳群の位置は、国土地理院発行の5万分の1図「但馬竹田」「出石」（明治31年測量、平成6年修正）をそれぞれ使用した。
5. 本書に使用した写真的うち、遺跡の航空写真は、空中写真測量を委託した株式会社バスコ（平成8・10年度）およびアジア航測株式会社（平成9年度）が撮影したものである。遺物写真については、イーストマン（平成13・14年度）に撮影を委託した。
6. 本書に掲載した遺物には、通し番号一上器以外のものは、金属器にはM、玉類・石製品にはS、木製品にはWを頭に付して分類一をつけており、遺物番号は、本文・挿図・写真図版とともに統一している。
7. 土層などの色調については、小山田正忠・竹原秀雄編著『新版 標準土色帳』1992年版を使用した。
8. 本書の執筆は、第6章を除き、仁尾一人・菱田淳子・大前篤子が分担し、編集は大前の補助を得て、仁尾が行った。
9. 梅田15号墳から出土した人骨の分析については、京都大学靈長類研究所の片山一道氏に、また、15号墳出土鉄製品に付着した赤色顔料の分析については、独立行政法人 奈良文化財研究所埋蔵文化財センターの高妻洋成氏に、その他の赤色顔料の分析については、パリノ・サーヴェイ株式会社にそれぞれ依頼し、玉稿をいただいた。
10. 本報告にかかる遺物・写真・図面などは、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所で保管している。

凡 例

1. 各古墳の墳丘については、墳丘裾部が不明瞭なものが多いため、墳丘規模は、区画溝側は溝の墳丘側法裾、斜面下方側は旧表土上の盛土の裾あるいは区画溝の両端とし、計測している。また、区画溝の幅は墳丘断ち割り断面を基準とし、深さはその位置での墳頂部からの数値としている。
2. 各古墳の埋葬施設は、墳頂部から検出された墓壙とその内部に納められた木棺あるいは石棺などから構成されており、主軸（短辺の中心を結んだ線）とそれに直交する線を基準にそれぞれの長さ・幅・深さを計測している。
3. 横および大刀・刀子・矢（鉄鏃）の各部分の名称あるいは種類などについては、『梅田古墳群Ⅰ』の第7・8図による。



本文目次

第1章 調査の経緯と体制	
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の体制と概要	
1. 調査の体制	1
2. 平成8年度の調査の概要	3
3. 平成9年度の調査の概要	3
4. 平成10年度の調査の概要	4
第3節 整理作業の経過と体制	6
第2章 梅田古墳群の環境と分類	
第1節 梅田古墳群の環境	9
第2節 梅田古墳群の分類	11
第3章 I群／主尾根の古墳の調査	
第1節 梅田15・16号墳 SK02・03 梅田17号墳	19
第2節 梅田21・22号墳	50
第3節 梅田18~20号墳	57
第4節 梅田23号墳 石蓋土壙 梅田24号墳	69
第5節 梅田6・8号墳	75
第6節 その他の遺構	77
第4章 II群／支尾根の古墳の調査（1）	
第1節 梅田10・11号墳	81
第2節 梅田12・13・33号墳	89
第3節 梅田14号墳	99
第5章 III群／支尾根の古墳の調査（2）	
第1節 梅田25・31号墳	105
第2節 梅田26・27号墳	113
第3節 梅田28~30・32号墳	129
梅田古墳群II 墳丘および埋葬施設一覧表	159
梅田古墳群II 土器・金属器・玉類觀察表	161
第6章 自然科学分析の成果	
第1節 梅田15号墳で出土した人骨の形態学的分析：被葬者の人物像	167
第2節 梅田15号墳出土鉄製品に付着する赤色顔料の分析	178
第3節 梅田古墳群から検出された赤色顔料の分析	180
第7章 遺構・遺物の検討	
第1節 出土遺物について	183
第2節 墳丘および埋葬施設について	188
第3節 梅田古墳群の形成過程	190
第4節 さいごに	193

挿図・写真目次

- 第1図 播但連絡道路（5期）事業 道路路線図
- 第3図 梅田古墳群 道路路線内地形図
- 第5図 梅田古墳群の位置（1／50,000）
- 第7図 梅田古墳群 調査古墳分類図（1／2,000）
- 第9図 I群 断面図（1／200）
- 第11図 梅田15号墳 墳丘断面図（1／100）
- 第13図 梅田15号墳 SX01 墓壙断面図（1／30）
- 第15図 梅田15号墳 SX01 平・断面図(2)（1／30）
- 第17図 梅田15号墳 SX01 蓋石平面図（1／30）
- 小口石および基底石平面図（1／30）
- 第19図 梅田15号墳 SX02 墓壙断面図（1／30）
- 人骨頭部平面図（1／2）
- 第21図 梅田15号墳 SX03 平・断面図（1／30）
- 第23図 梅田15号墳 SX04 平・断面図（1／20）
- 第25図 梅田16号墳 SX01 平・断面図（1／30）
- 第27図 梅田16号墳 SX03・04 平・断面図（1／30）
- 第29図 SK02 平・断面図（1／30）
- 第31図 梅田17号墳 墳丘断面図（1／100）
- 第33図 梅田21号墳 SX01 平・断面図（1／30）
- SX02 平・断面図（1／30）
- 第35図 梅田21号墳 SX03 平・断面図（1／30）
- 第37図 梅田18・20号墳 墳丘断面図（1／100）
- 第39図 梅田18号墳 埋葬施設 平・断面図（1／30）
- 第41図 梅田19号墳 SX01・02 平・断面図（1／40）
- 第43図 梅田20号墳 埋葬施設 平・断面図（1／30）
- 第45図 梅田23号墳 埋葬施設 平・断面図（1／20）
- 第47図 梅田24号墳 埋葬施設 平・断面図（1／30）
- 第49図 梅田6号墳 埋葬施設 平・断面図（1／30）
- 第51図 I群 出土遺物 金属器
- 第53図 梅田10号墳 墳丘断面図（1／100）
- 第55図 梅田10号墳 埋葬施設 平・断面図（1／30）
- 出土遺物 平面図（1／10）
- 第57図 梅田11号墳 埋葬施設 平・断面図（1／30）
- 第59図 梅田12・13・33号墳
- 調査後地形測量図（1／200）
- 第61図 梅田13号墳 墳丘断面図（1／100）
- 第2図 梅田古墳群 調査区配置図（1／2,000）
- 第4図 和田山町の位置
- 第6図 梅田古墳群と周辺の古墳群（1／10,000）
- 第8図 梅田古墳群 調査全域図（1／1,000）
- 第10図 II・III群 断面図（1／200）
- 第12図 梅田15～17・21・22号墳他
- 調査後地形測量図（1／200）
- 第14図 梅田15号墳 SX01 平・断面図(1)（1／30）
- 第16図 梅田15号墳 SX01 平・断面図(3)（1／30）
- 第18図 梅田15号墳 SX01 人脊平面図（1／10）
- 第20図 梅田15号墳 SX02 平・断面図（1／30）
- 第22図 梅田15号墳 SX04 墓壙断面図（1／20）
- 第24図 梅田16号墳 墳丘断面図（1／100）
- 第26図 梅田16号墳 SX02 平・断面図（1／30）
- 第28図 梅田16号墳 SX05 平・断面図（1／20）
- 第30図 SK03 平・断面図（1／30）
- 第32図 梅田17号墳 埋葬施設 平・断面図（1／30）
- 第34図 梅田21号墳 SX03 墓壙断面図（1／30）
- 第36図 梅田22号墳 埋葬施設 平・断面図（1／30）
- 第38図 梅田18～20・23・24・6号墳他
- 調査後地形測量図（1／200）
- 第40図 梅田19号墳 墳丘断面図（1／100）
- 第42図 梅田19号墳 SX02 出土遺物 平・断面図（1／2）
- 第44図 梅田23号墳 墓壙および石棺内断面図（1／20）
- 石蓋土壤 平・断面図（1／20）
- 第46図 梅田24号墳 埋葬施設 石棺内断面図（1／30）
- 第48図 梅田6号墳 墳丘断面図（1／100）
- 第50図 I群 出土遺物 土器
- 第52図 I群 出土遺物 玉類
- 第54図 梅田10・11号墳 調査後地形測量図（1／200）
- 第56図 梅田1号墳 北西裾平坦地断面図（1／100）
- 梅田11号墳 墳丘断面図（1／100）
- 第58図 梅田12号墳 墳丘断面図（1／100）
- 第60図 梅田12号墳 埋葬施設 平・断面図（1／30）
- 第62図 梅田13号墳 埋葬施設 平・断面図（1／30）

- 第63図 梅田13号墳 出土遺物 平面図(1/2)
- 第65図 梅田14号墳 調査後地形測量図(1/200)
墳丘断面図(1/100)
- 第67図 II群 出土遺物 土器
- 第69図 II群 出土遺物 金属器・玉類
- 第71図 梅田25号墳 調査後地形測量図(1/200)
梅田31号墳 調査後地形測量図(1/150)
- 第73図 梅田25号墳 出土遺物 平面図(1/10)
- 第75図 梅田26号墳 墳丘断面図(1/100)
- 第77図 梅田26号墳 墓葬施設 平・断面図(1/30)
- 第79図 梅田27号墳 SX02 調査後地形測量図(1/150)
区画溝断面図(1/50)
- 第81図 梅田27号墳 SX01・02 断面図(2)(1/40)
- 第83図 梅田27号墳 SX01 平・断面図(2)(1/30)
- 第85図 梅田27号墳 SX02 平・断面図(1/30)
- 第87図 梅田28・29・32号墳
調査後地形測量図(1/200)
- 第89図 梅田28号墳 出土遺物 平面図(1/2)
- 第91図 梅田29号墳 墓葬施設 平・断面図(1/30)
- 第93図 梅田28・30号墳 調査後地形測量図(1/200)
- 第95図 III群 出土遺物 土器(1)
- 第97図 III群 出土遺物 金属器(1)
- 第99図 III群 出土遺物 金属器(3)
- 第101図 III群 出土遺物 金属器(5)
- 第103図 III群 出土遺物 金属器(7)
- 第105図 III群 出土遺物 金属器(9)・玉類他
- 第107図 III群 出土遺物 金属器(11)
- 第109図 ラマンスペクトル図
- 第111図 梅田古墳群の形成過程
- 第64図 梅田33号墳 墓葬施設 平・断面図(1/30)
- 第66図 梅田14号墳 墓葬施設 平・断面図(1/30)
- 第68図 II群 出土遺物 金属器
- 第70図 梅田25・31号墳 墳丘断面図(1/100)
- 第72図 梅田25号墳 墓葬施設 平・断面図(1/30)
- 第74図 梅田31号墳 墓葬施設 平・断面図(1/30)
- 第76図 梅田26・27号墳 調査後地形測量図(1/200)
- 第78図 梅田27号墳 墳丘断面図(1/100)
- 第80図 梅田27号墳 SX01・02 平・断面図(1)(1/40)
- 第82図 梅田27号墳 SX01 平・断面図(1)(1/30)
- 第84図 梅田27号墳 SX01 出土遺物 平面図(1/20)
- 第86図 梅田28号墳 墳丘断面図(1/100)
- 第88図 梅田28号墳 墓葬施設 平・断面図(1/30)
- 第90図 梅田29号墳 墳丘断面図(1/100)
- 第92図 梅田30号墳 墳丘断面図(1/100)
- 第94図 梅田30号墳 墓葬施設 平・断面図(1/30)
- 第96図 III群 出土遺物 土器(2)
- 第98図 III群 出土遺物 金属器(2)
- 第100図 III群 出土遺物 金属器(4)
- 第102図 III群 出土遺物 金属器(6)
- 第104図 III群 出土遺物 金属器(8)
- 第106図 III群 出土遺物 金属器(10)
- 第108図 III群 出土遺物 金属器(12)
- 第110図 赤色顔料のX線回折図

写真1 梅田1号墳 遺物出土状況

写真3 北東方向を望む(手前は梅田1号墳)

写真5 建設中の道路と南方向を望む

写真7 調査状況

写真9 調査状況

写真11 調査状況

写真13 調査状況

写真15 頭骨の正面観

写真17 頭骨の右側面観

写真19 頭蓋骨の後面観

写真21 下頬骨の上面観

写真2 片山氏による現地指導状況

写真4 現在の向山・市条寺西古墳群

写真6 調査状況

写真8 調査状況

写真10 調査状況

写真12 調査状況

写真14 梅田15号墳で出土した人骨の頭骨

写真16 頭骨の左側面観

写真18 頭蓋骨の上面観

写真20 下頬骨の全体像

写真22 左右の鎖骨

写真23 左右の上腕骨	写真24 左右の橈骨
写真25 頸椎	写真26 胸椎
写真27 横椎	写真28 骨盤骨
写真29 左右の大腿骨	写真30 左右の脛骨
写真31 左右の恥骨の結合面	写真32 大腿骨骨体の後面下部にできたネズミ類による咬痕

表目次

第1表 梅田古墳群 調査一覧表	第2表 梅田古墳群Ⅱ 墳丘および經葬施設一覧表（1）
第3表 梅田古墳群Ⅱ 墳丘および埋葬施設一覧表（2）	第4表 梅田古墳群Ⅱ 出土土器観察表
第5表 梅田古墳群Ⅱ 出土金属器観察表（1）	第6表 梅田古墳群Ⅱ 出土金属器観察表（2）
第7表 梅田古墳群Ⅱ 出土金属器観察表（3）	第8表 梅田古墳群Ⅱ 出土櫛観察表
第9表 梅田古墳群Ⅱ 出土玉類観察表	第10表 X線回析分析試料

卷首図版目次

卷首図版 1 梅田古墳群 遠景（南西から） 全景（西から）	卷首図版 3 梅田15号墳 SX01 人骨出土状況（西から）
卷首図版 2 梅田古墳群 調査古墳全景（南西から）	卷首図版 5 梅田27号墳 SX01 遺物出土状況（西から） SX01・02 出土遺物
卷首図版 4 梅田15号墳 SX01 人骨出土状況（北西から）・（西から） 人骨出土状況（西から）・（北から）・（北から） 人骨出土状況（東から）・勾玉出土状況（南から）	卷首図版 7 梅田15号墳 出土勾玉（S1） 梅田19号墳 出土玉類（S2～S13） 梅田13号墳 出土玉類（S15～S28） 梅田28号墳 出土玉類（S47～S147）
卷首図版 6 梅田古墳群Ⅱ 出土遺物 梅田11号墳 赤色顔料付着土器（25・26）	卷首図版 8 梅田25号墳 出土馬具（M27～M29） 梅田27号墳 出土馬具（M38） 梅田28号墳 出土豎轔（W1～W4）

写真図版目次

写真図版 1 梅田古墳群 遠景（西から） 梅田古墳群および梅田東古墳群（手前） 全景（東から）	写真図版 3 Ⅱ群 調査後全景（北から） I・Ⅲ群 調査後全景（北東から）
写真図版 2 梅田古墳群 調査前全景（北西から） 調査前全景（南西から）	写真図版 5 15・16・17号墳 15～17号墳 全景（南から） 15・16号墳 全景（東から）
写真図版 4 I群 遠景（南から） 全景（南西から）	

写真図版6 15・16号墳	調査前全景（北東から）	写真図版7 15・16号墳	調査後全景（北東から）
	調査前全景（北から）		調査後全景（北から）
写真図版8 15号墳	全景（南西から）	写真図版9 15号墳 SX01	墓壙断面（西から）
	SX01~04（西から）		蓋石検出状況（西から）
			蓋石検出状況（東から）・（南から）
写真図版10 15号墳 SX01	蓋石検出状況（西から）・（南から）	写真図版11 15号墳 SX01	人骨出土状況（南から）
	蓋石検出状況（西から）		人骨出土状況（西から）
	棺内（南西から）・（東から）		
写真図版12 15号墳 SX01	人骨出土状況（西から）	写真図版13 15号墳 SX01	石棺完掘状況（西から）
	人骨出土状況（西から）・（北東から）		石棺完掘状況（西から）
写真図版14 15号墳 SX01	石棺北側壁（南から）	写真図版15 15号墳 SX01	墓壙西壁階段状掘り込み（東から）
	石棺南側壁（北から）		南西角部階段状掘り込み（北東から）
	石棺東側壁（西から）・石棺西側壁（東から）		北西角部階段状掘り込み（南東から）
写真図版16 15号墳 SX01	棺内漆床（西から）・漆床断ち割り断面（西から）・（南から）		
	石棺北東側控え石（西から）・石棺南東側控え石（西から）		
	墓壙断ち割り断面（西から）・石棺東側控え石（東から）		
写真図版17 15号墳 SX01	石棺控え石検出状況（西から）		
	墓壙断ち割り過程（西から）・小口石および基底石検出状況（西から）		
	小口石検出状況（西から）・小口石除去後（西から）		
写真図版18 15号墳 SX02	墓壙断面（西から）	写真図版19 15号墳 SX02	棺内（南西から）
	蓋石検出状況（西から）		人骨頭部出土状況（西から）・（北西から）
	棺内（西から）		石棺完掘状況（西から）
写真図版20 15号墳 SX02	石棺控え石検出状況（西から）	写真図版21 15号墳 SX03	墓壙断面（西から）
	墓壙断ち割り断面（南から）・（南から）		木棺断面（西から）
	墓壙完掘状況（西から）		木棺完掘状況（西から）
写真図版22 15号墳 SX03	墓壙断ち割り断面（西から）	写真図版23 15号墳 SX04	墓壙断面（南西から）
	墓壙断ち割り断面（南から）・（南から）		蓋石検出状況（南西から）・棺内（南西から）
	墓壙完掘状況（西から）		石棺完掘状況（南西から）
写真図版24 16号墳	調査前全景（西から）	写真図版25 16号墳	調査後全景（西から）
	調査前全景（北東から）		調査後全景（北東から）

写真図版26 16号墳	写真図版27 16号墳 SX01
全景（東から）	墓壙断面（南西から）
SX01～04（北東から）	木棺検出状況（南西から）
	木棺断面（北東から）
	赤色顔料検出状況（北東から）
写真図版28 16号墳 SX01	写真図版29 16号墳 SX01
木棺完掘状況（北東から）	墓壙断ち割り断面（北東から）・（南東から）
木棺完掘状況（北東から）	墓壙断ち割り断面（南西から）・（南西から）
	墓壙断ち割り断面（南西から）・（南東から）
	墓壙完掘状況（北東から）
写真図版30 16号墳 SX02	写真図版31 16号墳 SX02
墓壙断面（南東から）	木棺完掘状況（北西から）
木棺検出状況（北西から）	小口南外側縁検出状況（西から）
木棺断面（北西から）	小口北外側縁検出状況（南東から）
	棺内疊床（北西から）・（北東から）
写真図版32 16号墳 SX02	写真図版33 16号墳 SX03・04
疊床断ち割り断面（南から）・（南東から）	墓壙断面（北東から）
墓壙断ち割り断面（南東から）・（北西から）	木棺検出状況（北東から）
墓壙断ち割り断面（南東から）・（南西から）	SX04 木棺断面（南東から）・（南東から）
墓壙完掘状況（南東から）	
写真図版34 16号墳 SX03・04	
木棺完掘状況（北東から）	
木棺完掘状況（北西から）	
墓壙完掘状況（北東から）・SX03 墓壙断ち割り断面（南東から）・（南東から）	
写真図版35 16号墳 SX05	
墓壙断面（南東から）・（北東から）	
蓋石検出状況（南西から）・東側区画溝断面（北西から）	
蓋石検出状況（北西から）・木棺完掘状況（南西から）	
木棺完掘状況（南東から）・墓壙完掘状況（南東から）	
写真図版36 16号墳	
墳丘北側断面（西から）・墳丘裾部土器出土状況（北西から）	
墳丘南側断面（西から）・墳丘裾部土器出土状況（南西から）	
墳丘東側断ち割り断面（北西から）・墳丘北側断ち割り断面（北東から）	
墳丘北側埋葬施設（SK02・03）検出状況（北東から）	
写真図版37 SK02	
墓壙および木棺断面（南から）	
墓壙上面土器出土状況（西から）・（北から）	
墓壙完掘状況（北から）	

写真図版38 SK03	木棺断面（北から） 木棺完掘状況（北から） 墓壙完掘状況（北から）	写真図版39 17号墳 調査前全景（北西から） 調査後全景（北西から） 調査後全景（南から）
写真図版40 17号墳	墓壙断面（南西から） 木棺検出状況（南西から） 木棺断面（南から）・（南西から） 木棺完掘状況（南西から）	写真図版41 17号墳 木棺完掘状況（南西から） 墓壙断ち割り断面（南西から）・（南東から） 墓壙完掘状況（南西から）
写真図版42 15・16号墳	15号墳 東側区画溝断面（南東から） 15号墳 西側区画溝断面（北西から） 16号墳 西側区画溝断面（北西から）	写真図版43 15・16号墳 15号墳 東側区画溝完掘状況（南東から） 15号墳 西側区画溝完掘状況（北西から） 16号墳 西側区画溝完掘状況（北西から）
写真図版44 21・22号墳	全景（南から） 全景（南西から） 21号墳 全景（北東から）、22号墳 全景（南東から）	写真図版45 21号墳 SX01 墓壙断面（南西から）・木棺断面（南西から） 木棺完掘状況（南東から） 木棺完掘状況（北東から）
写真図版46 21号墳 SX01	木棺完掘状況（南西から） 墓壙断ち割り断面（南東から）・（南西から） 墓壙完掘状況（南西から）	写真図版47 21号墳 SX02 墓壙断面（西から） 木棺断面（東から） 木棺完掘状況（東から）
写真図版48 21号墳 SX02	木棺完掘状況（南から） 墓壙断ち割り断面（南から）・（西から） 墓壙完掘状況（東から）	写真図版49 21号墳 SX03 墓壙断面（南西から） 蓋石検出状況（南西から） 蓋石検出状況（南東から）・（南西から）
写真図版50 21号墳 SX03	棺内（南西から）・石棺内断面（南西から） 石棺完掘状況（南西から） 石棺完掘状況（南東から）	写真図版51 21号墳 SX03 墓壙断ち割り断面（南西から） 墓壙断ち割り断面（南東から）・（南東から） 石棺抉え石検出状況（南西から）
写真図版52 21号墳 SX03	小口石および側壁石検出状況（南西から） 小口石および側壁石検出状況（南東から）・（北西から） 石棺底石検出状況（南西から）・墓壙完掘状況（南西から）	
写真図版53 22号墳	墓壙断面（南西から） 木棺検出状況（北東から） 木棺検出状況（北東から）・木棺断面（北東から）	
写真図版54 22号墳	木棺完掘状況（北東から） 木棺完掘状況（南東から） 墓壙完掘状況（北東から）・墓壙断ち割り断面（南東から）・（南東から）	写真図版55 I群 I群 全景（南東から） 18～20号墳 全景（南西から）

写真図版56 18~20号墳	調査前全景（南西から）	写真図版57 18号墳	全景（南西から）
	調査前全景（北から）		全景（西から）
			全景（南東から）
写真図版58 18号墳	塚丘断面（南東から） 墓壙断面（南東から）・木棺断面（北西から） 木棺完掘状況（南東から）		
写真図版59 18号墳	塚丘北側裾部土壤状の掘り込み断面（西から）・墓壙断ち割り断面（南東から） 墓壙断ち割り断面（南西から）・（南西から） 墓壙完掘状況（南東から）		
写真図版60 19号墳	全景（南西から）	写真図版61 19号墳	SX01・02 木棺完掘状況（南東から）
	全景（南東から）		SX01 刀子および砥石出土状況（南東から）
			SX01 鉄鏃出土状況（北東から）
			SX02 玉類出土状況（南東から）
写真図版62 19号墳	半円区画溝土器出土状況（南東から） 半円区画溝土器出土状況（南東から）・（南東から） 半円区画溝土器出土状況（南東から） 塚丘上土器出土状況（南東から）	写真図版63 19号墳	塚丘断ち割り断面（南東から） 塚丘断ち割り断面（南西から）・（南西から） 両区画溝断面（北西から） 両区画溝完掘状況（北西から）
写真図版64 20号墳	全景（南西から）	写真図版65 20号墳	塚丘断面（南東から）
	全景（南東から）		墓壙断面（南東から）・木棺断面（北西から）
			木棺完掘状況（南東から）
写真図版66 20号墳	土器および鉄剣出土状況（北東から）・（北西から） 鉄鏃出土状況（北東から）・刀子出土状況（南西から） 墓壙完掘状況（南東から）	写真図版67 石蓋土壤	蓋石検出状況（東から） 蓋石検出状況（南から）・（南から） 木棺断面（東から） 木棺完掘状況（東から）
写真図版68 23号墳	全景（南西から）	写真図版69 23号墳	墓壙断面（西から）・区画溝断面（南西から）
	全景（南東から）		蓋石検出状況（東から） 蓋石検出状況（南から）
写真図版70 23号墳	石棺検出状況（西から）・石棺内断面（西から） 石棺完掘状況（南から） 石棺完掘状況（西から）	写真図版71 23号墳	石棺北側壁（南から）・石棺南側壁（北から） 石棺西小口（東から）・石棺東小口（西から） 小口石および基底石検出状況（東から） ・墓壙完掘状況（南から）

写真図版72	24号墳 蓋石検出状況（南から） 蓋石検出状況（西から） 蓋石検出状況（西から）・石棺内断面（南から）	写真図版73	24号墳 石棺完掘状況（南から）・（西から） 石棺東側壁（西から）・石棺南小口（北から） 墓壙完掘状況（南から）
写真図版74	6～8号墳 全景（南から） 調査前全景（北東から） 調査前全景（北から）	写真図版75	6号墳 全景（南西から） 全景（南東から） 8号墳 調査区外の墳丘（北東から）
写真図版76	6号墳 木棺検出状況（南東から） 木棺完掘状況（南東から） 墓壙完掘状況（南東から）・土器出土状況（東から） ・墓壙断ち割り断面（南から）	写真図版77	6号墳 区画溝断面（南東から） 区画溝完掘状況（北西から） 墳丘断ち割り断面（北西から） 墳丘断ち割り断面（南西から）・（南西から）
写真図版78	主尾根平坦地 全景（北西から）・（北東から） 平坦地東側（南西から） 第2次確認調査トレンチ断面（南から）・（西から）	写真図版79	10・11号墳 全景（北から） 調査前全景（南西から） 調査後全景（南西から）
写真図版80	II群 1号墳北西側平坦地 全景（南西から） 10号墳 全景（南西から） 11号墳 全景（東から）	写真図版81	10号墳 木棺検出状況（東から） 木棺断面（南から）・（南西から） 木棺完掘状況（南西から）
写真図版82	10号墳 鉄鏃出土状況（南東から）・刀子出土状況（南東から） 墓壙完掘状況（南西から） 区画溝断面（北東から）	写真図版83	11号墳 木棺検出状況（西から） 木棺断面（南西から）・（西から） 木棺完掘状況（西から）
写真図版84	11号墳 鉄鏃出土状況（北から）・鉄鏃出土状況（北から） 墓壙完掘状況（西から） 区画溝断面（東から）	写真図版85	II群 12・13・33号墳 全景（北から） 14号墳 全景（北西から）
写真図版86	II群 12～14・33号墳 調査前全景（北東から） 12・13・33号墳 調査前全景（南西から） 14号墳 調査前全景（南西から）	写真図版87	II群 12・13・33号墳 調査後全景（北東から） 12・13号墳 調査後全景（南西から） 14号墳 調査後全景（南西から）
写真図版88	12号墳 墓壙上面土器出土状況（東から）・（北から） 墓壙および木棺断面（西から）・木棺断面（西から） 木棺完掘状況（西から）	写真図版89	12号墳 全景（南西から） 全景（西から） 全景（南から）

写真図版90 12号墳

刀子出土状況（西から）
鉄鏃出土状況・（北から）・墓壙断ち割り断面（西から）
鉄鏃出土状況・（南から）
区画溝断面（西から）
墳丘断ち割り断面（西から）

写真図版91 13号墳

墓壙および木棺断面（南西から）
木棺完掘状況（南西から）
玉類出土状況（北西から）・墳頂部土器出土状況（南西から）
区画溝土器出土状況（北東から）

写真図版92 13号墳

全景（南西から）
全景（南東から）
区画溝断面（南西から）

写真図版93 13・33号墳

13号墳 墳丘断ち割り断面（南西から）
墳丘断ち割り断面（北西から）
・（北西から）
33号墳 木棺完掘状況（北から）
土器出土状況（北から）
墓壙掘削痕跡（北西から）

写真図版94 14号墳

全景（東から）
木棺完掘状況（北東から）
墓壙断ち割り断面（北東から）・（北西から）

写真図版95 III群

25～27号墳 全景（東から）
28～30号墳 全景（南西から）

写真図版96 III群

25号墳 調査前全景（東から）
26・27号墳 調査前全景（東から）
28・29号墳 調査前全景（南西から）

写真図版97 III群

25号墳 調査後全景（東から）
26・27号墳 調査後全景（東から）
28・29号墳 調査後全景（南西から）

写真図版98 25号墳

墓壙断面（南西から）・木棺断面（南西から）
木棺完掘状況（南西から）
木棺完掘状況（南から）

写真図版99 25号墳

土器および馬具出土状況（南東から）・（東から）
墓壙断ち割り断面（南西から）・（南東から）
・墓壙完掘状況（南西から）
全景（南西から）

写真図版100 25号墳

区画溝断面（南西から）
墳丘断ち割り断面（南西から）
墳丘断ち割り断面（北西から）・（北西から）

写真図版101 31号墳

墓壙断面（南西から）・木棺断面（南西から）
全景（南西から）
木棺完掘状況（南西から）

写真図版102 31号墳

25・31号墳 全景（南西から）
 墓壙完掘状況（南西から）
 土器出土状況（南西から）・鉄斧出土状況（北から）
 区画溝断面（南西から）

写真図版104 26号墳

全景（西から）
 全景（東から）
 区画溝断面（西から）
 墳丘断ち割り断面（西から）

写真図版106 27号墳 SX01

石室内断面（西から）
 石室天井石遺存状況（西から）
 石室天井石遺存状況（西から）・木棺検出状況（東から）

写真図版108 27号墳 SX01

石室完掘状況（西から）
 石室南壁（南東から）
 石室北壁（北西から）

写真図版110 27号墳 SX01

石室解体過程（西から）・基底石検出状況（西から）
 墓壙断面（西から）・（西から）
 墓壙断面（南から）・（南から）

写真図版112 27号墳 SX02

木棺完掘状況（西から）
 大刀出土状況（南西から）・（南から）
 SX01・02 石室および木棺完掘状況（西から）

写真図版113 27号墳 SX02

木棺完掘状況（西から）・墓壙断ち割り断面（西から）・（南から）
 SX01・02 墓壙完掘状況（西から）
 全景（西から）

写真図版114 27号墳

区画溝断面（西から）
 墳丘断ち割り断面（西から）
 SX02 区画溝断面（北東から）・（北西から）

写真図版103 26号墳

墓壙断面（西から）・木棺断面（西から）
 木棺完掘状況（西から）
 墓壙断ち割り断面（南から）・（西から）
 ・墓壙完掘状況（西から）

写真図版105 27号墳

調査前状況（南から）
 SX01・02 検出状況（南から）
 SX01・02 検出状況（東から）

写真図版107 27号墳 SX01

土器および大刀出土状況（東から）
 大刀および馬具出土状況（東から）
 大刀および鉄鎌出土状況（南から）
 石室内遺物出土状況（東から）

写真図版109 27号墳 SX01

石室西壁（東から）
 石室東壁（西から）
 石室北東角部（南西から）

写真図版111 27号墳 SX02

墓壙断面（西から）・木棺断面（西から）
 木棺検出状況（西から）
 ・墓壙北壁平坦面石列検出状況（西から）

写真図版115 28号墳

墓壙断面（西から）・木棺断面（西から）
 棺内遺物出土状況（西から）
 堪撃出土状況（西から）
 ・鉄鎌出土状況（北から）
 鉄鎌および鉄斧出土状況（南から）
 ・墳丘東斜面鑿出土状況（南西から）

写真図版116 28号墳	棺内遺物出土状況（西から）	写真図版117 29号墳	墳丘上盛土断面（南西から）
	本棺完掘状況（西から）		墓壙断面（南西から）
	全景（西から）		埋葬施設内遺物出土状況（南西から）
写真図版118 29号墳		写真図版119 30号墳	
	全景（南西から）		墓壙断面（北西から）・木棺断面（北西から）
	刀子他出土状況（南東から）・墓壙完掘状況（南東から）		木棺断面（南西から）
	土器出土状況（南から）		・土器出土状況（北西から）
	墳丘断ち割り断面（南西から）		木棺完掘状況（北西から）
写真図版120 30号墳			
	墓壙断ち割り断面（北西から）・（北東から）		
	墓壙完掘状況（北西から）		
	全景（南東から）		
写真図版121 16・19号墳 出土遺物（土器）			
写真図版122 10・15・19・20・33号墳 出土遺物	(土器および磁石)	写真図版123 6号墳 出土遺物（土器）	
写真図版124 15・16・19号墳 出土遺物（金属器）		写真図版125 20号墳 出土遺物（金属器）	
写真図版126 10・11号墳 出土遺物（土器）		写真図版127 33・12・13号墳 出土遺物（土器）	
写真図版128 10号墳 出土遺物（金属器）		写真図版129 11号墳 出土遺物（金属器）	
写真図版130 33・12・13号墳 出土遺物（金属器）		写真図版131 25・31号墳 出土遺物（土器）	
写真図版132 26～28号墳 出土遺物（土器）		写真図版132 29・30・28号墳 出土遺物（土器）	
写真図版134 25号墳 出土遺物（金属器1）		写真図版135 25・31号墳 出土遺物（金属器2）	
写真図版136 27号墳 出土遺物（金属器1）		写真図版137 27号墳 出土遺物（金属器2）	
写真図版138 27号墳 出土遺物（金属器3）		写真図版139 27号墳 出土遺物（金属器4）	
写真図版140 27号墳 出土遺物（金属器5）		写真図版141 28号墳 出土遺物（金属器1）	
写真図版142 28号墳 出土遺物（金属器2）		写真図版143 29号墳 出土遺物（金属器1）	
写真図版144 29号墳 出土遺物（金属器2）		写真図版145 29号墳 出土遺物（金属器3）	
写真図版146 金属器付着繊維（1）		写真図版147 金属器付着繊維（2）	
写真図版148 金属器付着繊維（3）			

第1章 調査の経緯と体制

第1節 調査に至る経過

兵庫県の南西部に位置する播磨地域と北部に位置する但馬地域とを結ぶ高速自動車道・播但連絡道路は、兵庫県道路公社によって昭和45年に着工され、これまで4度の事業を経て、神戸～姫路を結ぶ国道2号線バイパスと接続する姫路ジャンクションから朝来郡生野町円山までの47.9kmが供用されている。平成6年度より開始された播但連絡道路（5期）事業は、生野町円山からさらに北に延伸する「北伸事業」として朝来郡和田山町加都までの17.2kmの供用区間を建設するものである。

兵庫県教育委員会では、この（5期）事業にともなう道路路線内の埋蔵文化財について、平成5・7年度に遺跡の分布調査を、平成8年度には確認調査を順次実施し、平成8年11月からは梅田古墳群（第1次調査）および梅田東古墳群の本発掘調査へと移行していった。道路路線内の埋蔵文化財調査は、平成10年度に実施した加都遺跡山内北C地区をもってすべて終了し、平成12年5月には着工以来、31年の歳月を経て、姫路市と和田山町を結ぶ約65kmにおよぶ全線が開通した。

本書『梅田古墳群II』は、平成9・10年度に調査を実施した梅田6号墳以下、33号墳までの26基（うち2基は抹消）の調査成果を所収している。平成8年度に調査を実施した梅田1～5号墳については、『梅田古墳群I』として、平成13年度に刊行されている。

第2節 調査の体制と概要

1. 調査の体制

梅田古墳群の調査にあたっては、兵庫県教育委員会が主体となり、発掘調査については平成8～10年度のいずれも株式会社川井組と、空中写真測量については平成8・10年度が株式会社バスコ、平成9年度がアジア航測株式会社とそれぞれ委託契約を締結して実施した。

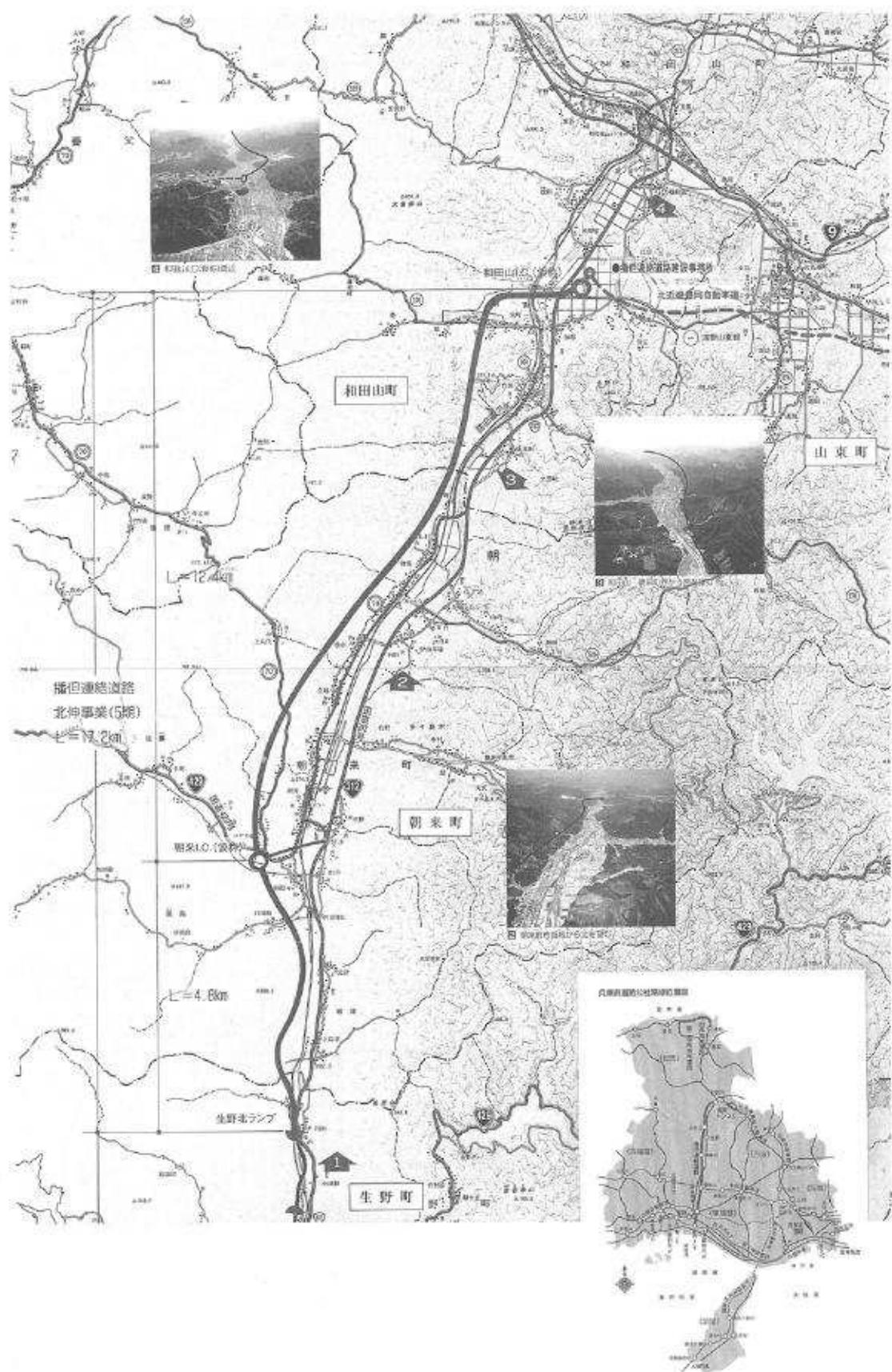
本書に関わる平成9・10年度の調査事務は、下記の体制によって行われ、分布調査以降、調査に携わった調査員あるいは調査期間などについては、文末に記すこととする（第1表）。

平成9年度 調査事務 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長	上田 熊
副所長	木下 猛（管理事務担当）・大村敬通（発掘調査担当） 龍見祐輔（土木技術担当）
総務課	課長 岩澤重則・事務職員 服部征太郎
調査第2班	調査専門員 吉田 昇
企画調整班	技術職員 柏原正民

平成10年度 調査事務 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

所長	寺内幸治
副所長	木下 猛（管理事務担当）・大村敬通（発掘調査担当）



第1図 播但連絡道路（5期）事業 道路路線図

岩本伸之（土木技術担当）

総務課 課長 岩澤重則・主査 若林洋子
調査第2班 主任調査専門員 池田正男
企画調整班 主査 高瀬一嘉

2. 平成8年度の調査の概要

平成7年度に路線ルートの確定によって実施された2度目の分布調査によって、和田山町久留引に所在する独立した山塊の尾根筋に点在する古墳状隆起および平坦地は、播但連絡道路No33地点（以下、No33地点）と仮称され、遺跡の存在する可能性が高い地点と考えられた。No33地点は、ほぼ東西に伸びる主尾根とそこから北に派生する支尾根およびさらに分岐した枝尾根を中心としたおよそ3万m²にわたる広い範囲におよんでいる。

確認調査（第1次） 平成8年4月に実施された第1次確認調査では、道路路線内の尾根筋や谷中に幅1mのトレンチ11本を設定し、調査を行った。このうち、トレンチ11を設定した地点（H8-11トレンチ）は、道路工法の変更により現状での保存が可能になったが、一部調査を行っている（第4章 第2節に記載）。また、周辺には国史跡竹田城や安井城など中世山城が数多く存在することから、平坦地などの地形に山城に関連した遺構の存在が考えられたが、確認することはできなかった。なお、古墳群の名称については、和田山町の遺跡分布図に記載がないため、古墳が点在する山塊の地番（和田山町久留引字梅田）により、梅田古墳群と総称することとなった。

本発掘調査（第1次） 平成8年11月から第1次本発掘調査は開始され、梅田1～5号墳の調査が実施された。調査は、事前に空中写真測量によって調査区全域の地形測量を実施し、その後、1号墳については電気探査を行い、人力による調査区全域の掘り下げを行っている。各古墳の詳細については、「梅田古墳群Ⅰ」に記載されているが、1号墳からは長大な木棺が検出され、内部から鏡・大刀・琴柱形石製品・豊富な副葬品が出土し、学術的に非常に重要な古墳と考えられた。このため、兵庫県教育委員会では、遺跡の重要性と次年度以降に予定されている古墳の立地や規模などを考慮し、兵庫県道路公社に対し、保存協議の必要性と路線ルートの変更あるいはトンネル化などの設計変更を要望した。

3. 平成9年度の調査の概要

本発掘調査（第2次） 平成8年度の調査成果をうけて、兵庫県教育委員会と兵庫県道路公社との間では、遺跡の現状保存による路線ルートあるいは道路工法の変更などについての協議が行われたが、一方で道路建設の進捗に併せ、本発掘調査が計画・実施された。平成9年度当初には、古墳群南西端に立地する梅田6～8号墳の調査が行われた。調査開始時には、すでに道路の橋脚（虎臥城大橋）工事が行われており、古墳の立地する山塊斜面の削平が進んでいる状況であった。

調査は、調査前の地形測量を行い、その後、人力による調査区全域の掘り下げ、検出された墳丘および埋葬施設などの実測・写真撮影を行い終了した（第3章 第5節に記載）。

本発掘調査（第3次） 第3次本発掘調査は、平成9年5月から梅田古墳群の北東に位置する3地点を対象として実施した。平成8年度に調査された梅田1号墳の裾から北西に緩やかに傾斜する地点に立地する2基の古墳（梅田10・11号墳）をB地区、1～5号墳が分布する尾根筋の東側の支尾根に立地す

る2基の古墳（梅田12・13号墳）をC-1区、さらに最北端の丘陵裾に立地する梅田14号墳をC-2区とそれぞれ呼称し、3地点5基（12号墳上方に現状保存されるH8-11トレンチを除く）の調査を順次実施した。

調査は、事前に道路路線内の古墳群全域の地形測量を空中写真測量によって行い、その後、人力による調査区全域の掘り下げ、検出された墳丘および埋葬施設などの写真撮影を行った。墳丘および調査区の地形測量は空中写真測量によって行い、各古墳の埋葬施設などについては、隨時詳細に実測し、図面を作成した（第4章に記載）。

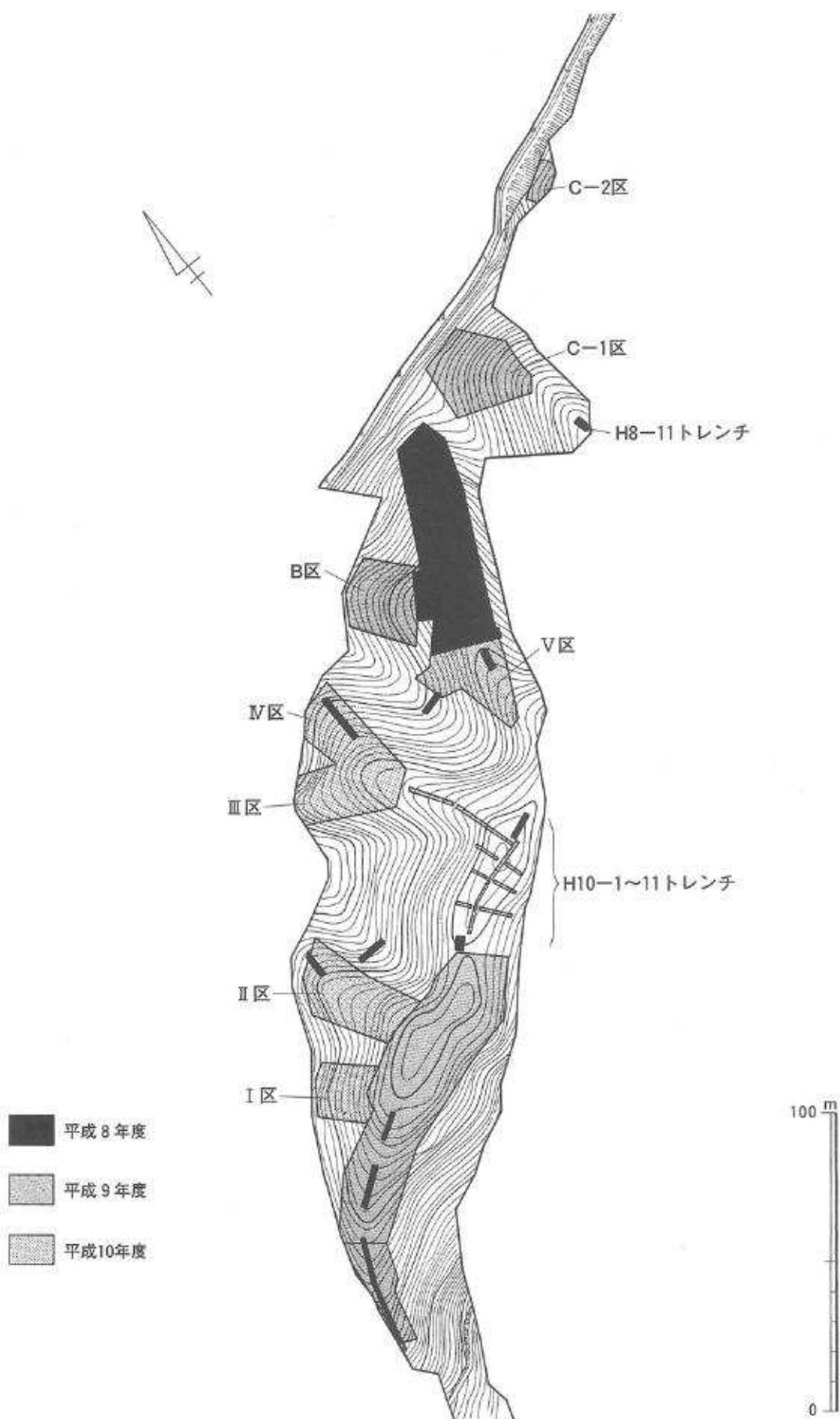
本発掘調査（第4次） 第4次本発掘調査は、平成9年12月からほぼ東西に伸びる主尾根に立地する古墳の調査を実施した。この主尾根は、比較的平坦な頂部（以下、平坦地）と、平坦地から西側にむかって緩やかに傾斜する斜面地（以下、西緩斜面）に分けられ、調査前の地形観察では、平坦地には明瞭に2基の古墳が存在することが考えられた。また、西緩斜面には、古墳2基と人工的に造られたと考えられる平坦面が1ヶ所存在することが確認されていた。調査を進めるに従い、平坦地に築造された古墳の南北斜面や西緩斜面に立地する古墳の墳丘裾部からも新たに埋葬施設が検出されたため、溝や地山整形などによって区画されたものを古墳とし、区画をともなわないものは古墳の埋葬施設との混乱を避けるため、土壙として遺構番号を付して調査を行った。これにより、調査区内には、10基の古墳（梅田15号～24号墳）と3基の埋葬施設（SK02・03・石蓋土壙）が確認されることとなった。

調査は、事前の地形測量をもとに調査区を設定し、人力によって調査区全域を掘り下げ、検出された墳丘および埋葬施設などの写真撮影を実施した。墳丘および調査区の地形測量は空中写真測量によって行い、各古墳の埋葬施設などについては、隨時詳細な実測を行った。但し、平坦地に立地する2基の古墳（梅田15・16号墳）とその周囲の古墳（梅田17・21・22号墳）については、梅田1～5号墳同様、現状保存を要望する必要性が高いと考え、保存を前提とした調査を実施した。このため、墳丘および埋葬施設の断ち割りなどは行わず、調査を終了した（第3章 第1～4節に記載）。

4. 平成10年度の調査の概要

確認調査（第2次） 平成10年5月に実施された第2次確認調査は、第4次本発掘調査が行われた主尾根平坦地の東側に広がる頂部（以下、東側平坦地）を中心とした範囲を対象とした。調査前には、明瞭な墳丘の高まりはみられなかったが、但馬地域でみられる墳丘をともなわない埋葬施設が存在する可能性が高いと考えられたため、幅1mのトレンチ11本、総延長122mを設定し、調査を実施した。調査の結果、東側平坦地に設定した9本のトレンチ（トレンチ3～11）および北西に派生する支尾根斜面地から分岐部分に設定した2本のトレンチ（トレンチ1・2）からは、遺構・遺物とともに発見されず、古墳は存在しないことが明らかとなった。

本発掘調査（第5次） 第5次本発掘調査は、第4次本発掘調査が行われた主尾根の北斜面に立地する古墳（梅田25・31号墳）をI区、北西に派生する支尾根上に立地する2基の古墳（梅田26・27号墳）をII区、第2次確認調査の東側平坦地から北西に派生する支尾根の先端が二股に分かれた枝尾根上に立地する4基の古墳（梅田28～30・32号墳）をIII・IV区、さらに梅田1号墳南側の地点をV区とそれぞれ呼称し、調査を実施した。これにより、I～IV区では、7基の古墳（梅田25～31号墳）と1基の古墳（梅田32号墳）の区画溝の一部を調査することになった。II・III区の下方（北側）に立地し、調査の対象となっていた古墳については、道路工法の変更によって現状保存されることになったため、調査区か



第2図 梅田古墳群 調査区配置図 (1/2,000)

らは除外した。また、V区の調査は、平成8年度の調査に時間的制約があり、梅田1号墳の区画溝の一部が未調査となっていたために行ったものであり、南側（山側）区画溝の肩部の一部を確認した。

調査は、事前の地形測量をもとに調査区を設定し、人力によって調査区全域を掘り下げ、検出された墳丘および埋葬施設などの写真撮影を実施した。墳丘および調査区の地形測量は空中写真測量によって行い、各古墳の埋葬施設などについては、隨時詳細な実測を行った（第5章に記載）。

本発掘調査（第6次） 第1次および第4次本発掘調査（梅田1～5号墳・梅田15～24号墳）の成果を受け、平成10年4月に改めて兵庫県教育委員会と兵庫県道路公社との間で、路線ルートあるいは道路工法の変更による古墳の保存協議が行われた。しかし、兵庫県道路公社が技術的に検討し、提示した4つの案（①開削案1・②開削案2・③開削トンネル案・④山岳トンネル案）では、古墳は完全に破壊される（①～③案）ことや、周辺の橋脚工事などとの関係から交通安全上、現実的に不可能である（④案）などの諸条件を考慮した上で正式に保存は困難であるとの回答を得るに至った。これを受け、兵庫県教育委員会でも道路の交通安全上の問題は最重要であるということ、さらに周辺の工事の進捗状況から、工法の変更は容易ではないという結論も十分に理解することができた。このため、現状保存を前提として、墳丘および埋葬施設の断ち割りなどを行わなかった梅田15～17・21・22号墳についての追加調査を平成10年8月に実施した。

調査は、埋葬施設の構築状況の確認および完掘、古墳築造時の地山整形痕の確認などを行い、隨時詳細な写真撮影・図面作成による記録保存を実施した（第3章 第1・2節に記載）。これにより、道路路線内に分布するすべての古墳の調査は終了した。

なお、平成9・10年度の現地調査では、下記の方々に現場事務員および室内作業員としてお世話になりました。

平成8年度 田村綾子・柄本由香

平成9年度 秋森真由美・足立智美・天野美千代・山本 薫

第3節 整理作業の経過と体制

出土した遺物については、発掘調査時に監督員詰所において土器の洗浄とネーミングを行い、本格的な整理作業は、平成13・14年度の2カ年にわたり、神戸市兵庫区に所在する兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所において実施した。

平成13年度は出土土器の接合・補強を行い、実測すべき遺物をピックアップし、実測・復元・写真撮影を行った。また、多量に出土した金属器および櫛の保存処理（櫛については株吉田生物研究所に外部委託）と実測も併せて実施した。

整理担当職員 整理普及班

主査 加古千恵子・主任 中村 弘・技術職員 岡本一秀（保存処理）

主査 美田淳子

調査第3班

技術職員 仁尾一人

調査第1班

事務職員 服部 寛

整理嘱託員 増田麻子・大前篤子・川村由紀
眞子ふさ恵・岡井とし子・小寺恵美子・横山キクエ・前田恭子
早川有紀・西野淳子・藤井光代・三好綾子・野上裕子・三島重美

平成14年度は出土金属器の写真撮影（一部、保存処理と実測）を実施し、遺構図の補正、遺構・遺物図版のトレース・レイアウト、原稿執筆から報告書刊行までの作業を行った。

整理担当職員 整理普及班

主査 加古千恵子（保存処理）・主査 菱田淳子

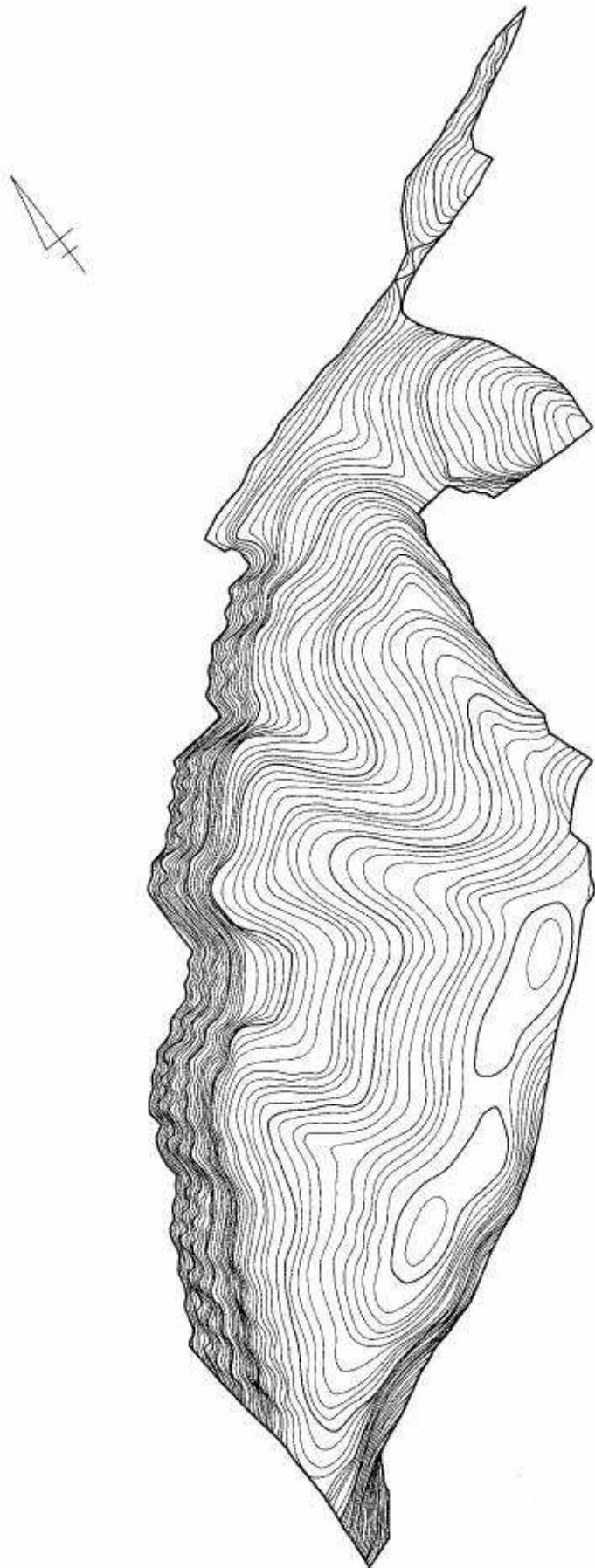
調査第3班

主任 仁尾一人

整理嘱託員 森本貴子・大前篤子・岡田美穂・高田めぐみ・高瀬敬子・垣本明美
西野淳子・藤井光代・三好綾子・三島重美

第1表 梅田古墳群 調査一覧表

調査の種別	遺跡調査番号	調査担当者	調査期間	調査面積
分布調査（第1次）	930206	大平 茂・山本 誠 鈴木敬二・岡 昌秀	平成6年3月22日 ～3月23日	約3万m ²
分布調査（第2次）	950079	大平 茂・別府洋二 菱田淳子・深江英憲 國本綾子	平成7年4月24日 ～4月26日	約3万m ²
確認調査（第1次）	960013	別府洋二・丹家昌博 池田征弘	平成8年4月15日 ～4月19日	106m ²
本発掘調査（第1次） 梅田1～5号墳	960340	岡田章一・菱田淳子 水島正稔	平成8年11月29日 ～平成9年3月19日	1643m ²
本発掘調査（第2次） 梅田6～8号墳	970148	吉識雅仁・松野健児 服部 寛	平成9年4月30日 ～5月29日	437m ²
本発掘調査（第3次） 梅田9～14号墳	970189		平成9年5月19日 ～8月17日	437m ²
本発掘調査（第4次） 梅田15～24号墳	970401～0406 970446・0449		平成9年12月17日 ～平成10年3月25日	2050m ²
確認調査（第2次）	980074	吉識雅仁・佐々木俊彦 仁尾一人		122m ²
本発掘調査（第5次） 梅田25～32号墳	980075 980076～0082		平成10年5月22日 ～9月6日	2594m ²
本発掘調査（第6次） 梅田15～17・ 21・22号墳	980123			1300m ²



第3図 梅田古墳群 道路路線内地形図

第2章 梅田古墳群の環境と分類

第1節 梅田古墳群の環境

梅田古墳群は、兵庫県の北部、朝来郡和田山町に所在している。和田山町は、東西約11.5km、南北約11km、面積約126.5km²の範囲に広がっており、南に朝来郡朝来町および山東町、西に養父郡養父町、北に出石郡出石町および但東町がそれぞれ接し、東は京都府天田郡夜久野町と府県境となっている。町域の約75%におよぶ範囲は山野が占めているが、限られた平野部には古くから東西に古代山陰道が走り、播磨から続く交通路とこの地で合流している。現在でも古代道路にはほぼ沿うように、国道9号線とJR山陰本線が東西に走り、南から国道312号線とJR播但線が合流しており、交通の要衝としての重要性は変わっていない。

兵庫県では、県の中央やや北側に播但山地と呼ばれる中国山地から続く山地によって、瀬戸内海へ流れる河川と日本海へ流れる河川とに分かれる。朝来郡の南端に位置する生野町円山を源流として日本海へと北流する円山川は、総延長約70kmにわたる但馬地域唯一の一級河川である。和田山町内の円山川は、安井川・与布土川・東河川・糸井川などの小河川が合流し、北東方向の流れは町の中央部、玉置付近ではほぼ90°に屈曲し、北西方向に大きく流れを変えていく。

円山川の支流のひとつである安井川は、東流して狭い谷底平野を形成しており、合流付近の北側に広がる山塊には梅田古墳群の他に、向山古墳群や市条寺古墳群など数多くの古墳が分布している。向山・市条寺両古墳群は、平成2年度に県立北部農業技術センター整備にともない、15基の古墳（向山1~11号墳・市条寺1~4号墳）が発掘調査され、事業予定地外に立地する11基の古墳（向山12~14号墳・市条寺5~12号墳）については現状保存されている。梅田古墳群と向山・市条寺両古墳群は、それぞれ独立した山塊の尾根筋に分布しているが、梅田古墳群については一部南向き斜面に点在する古墳がみられるが多くは北向き斜面につくられている。標高227mをピークとする東西に長い不整形な三角形状を呈する山塊の西半部に梅田古墳群は立地し、東端の北斜面には弥生時代後期後半から古墳時代初頭に位置付けされる梅田東古墳群が分布している。梅田東古墳群も播但連絡道路（5期）事業によって5基（梅田東10~14号墳）の古墳と18基の木棺墓群が発掘調査されており、安井川下流域に形成された古墳群の様相が明らかになりつつある反面、周辺一帯の自然環境は大きく変貌している。

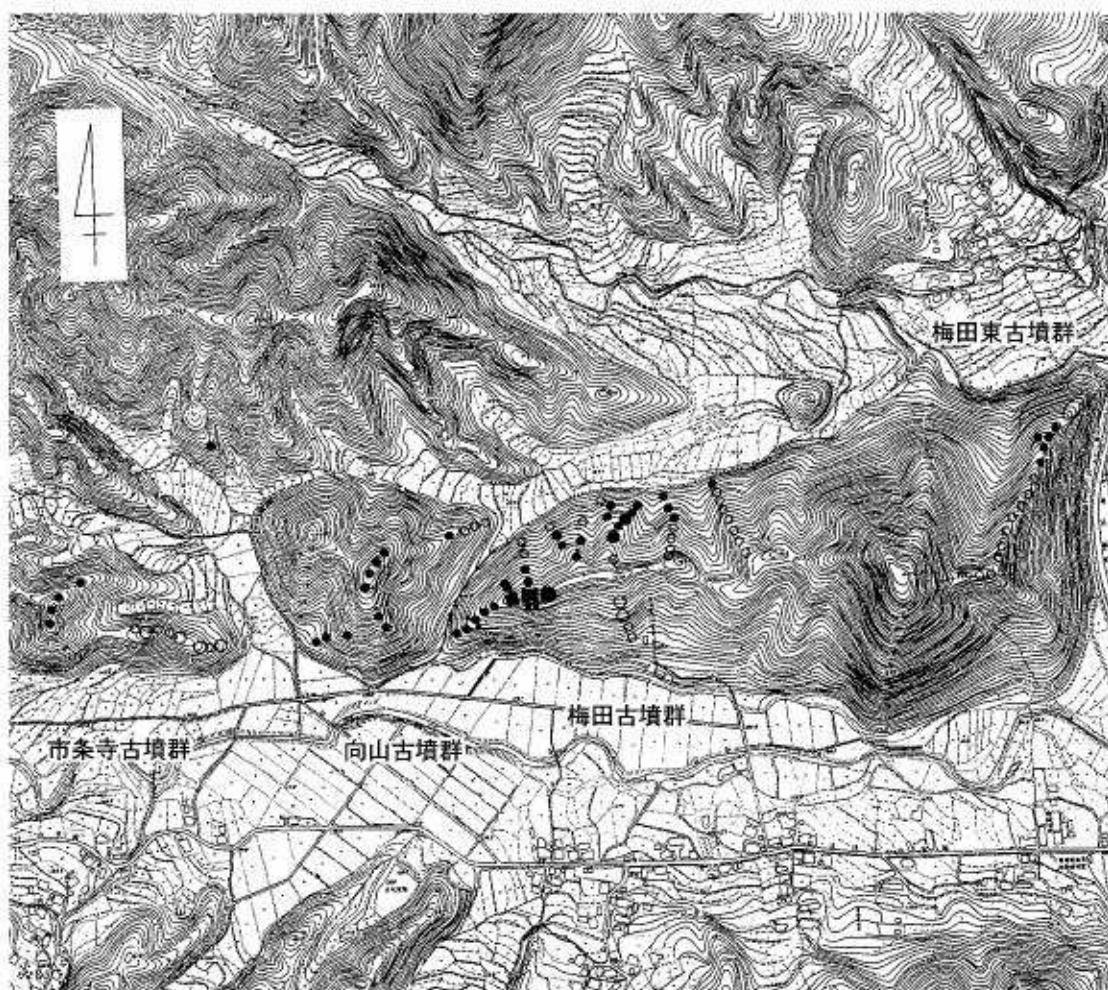


第5図 梅田古墳群の位置 (1/50,000)

第2節 梅田古墳群の分類

梅田古墳群については、今回の道路建設によって現在確認されている52基から構成される古墳群のはば6割にあたる33基（うち2基は抹消）の古墳の調査が行われた。調査は、第1章に詳述しているように、平成8年度から3カ年にわたって、道路工事の進捗状況に合わせて実施された。このため、33基の古墳については、5次にわたる本発掘調査（6次は追加調査）の進行に従って順次便宜的に古墳の号数を付しており、古墳群内で散乱し統一されていない。平成12年度から始まった整理作業でも、時間的な制約などから調査時の号数を継続して使用し、報告書刊行に至っている。このような経緯により、本書に所収している梅田6～33号墳は、古墳群内に煩雑に点在しているため、古墳の立地する尾根筋を基準に以下の3群（I・II・III群 第7図）に分類し、第3章以下、群単位で本文、図版などを構成していくものとする。

梅田古墳群の概要 現在確認されている梅田古墳群52基の立地を詳細にみてみると、ほぼ東西に伸びる主尾根（以下、主尾根）の西端および西側にむかって緩やかに傾斜する地点に12基の古墳が分布している（I群下記詳細）。主尾根中央の頂部平坦地には古墳は築造されていないが、天満宮西側の南向き斜面の尾根筋には4基の古墳が確認されている。これらの古墳は、梅田古墳群では数少ない、南に面しているものである。



第6図 梅田古墳群と周辺の古墳群 (1/10,000)

主尾根から北側に派生する支尾根は4本を数え（以下、西から西端・西側・中央・東側と仮称）、うち2本の支尾根はさらに分岐しており、北向き斜面の尾根筋には30基を超える古墳が分布している。西端の支尾根上には4基の古墳が点在し、さらに西方の斜面地には古墳2基（墳丘下層に別の古墳が存在）が築かれている。西側の支尾根は、主尾根頂部から約10m下がった地点から二股に分かれるが、古墳も分岐地点を中心にV字形に6基の古墳が点在している（以上、Ⅲ群下記詳細）。

中央の支尾根上には、主尾根頂部から約15m下がった地点に梅田古墳群内で中核と考えられる梅田1号墳が築造され、北東方向の緩斜面には4基の古墳が階段状に並んでいる。さらに梅田1号墳の裾から北西に伸びる斜面にも3基の古墳が点在している。東側の支尾根には、主尾根の東端からほぼ真北に伸びる尾根の上方から裾部までに7基の古墳が確認されている。さらに比較的大きな谷筋を隔てた東にも北西方向に尾根が張り出しており（以下、東端と仮称）、直線的に8基の古墳が確認されている（以上、Ⅱ群下記詳細）。

I群／主尾根の古墳 主尾根の頂部は標高約171mを測り、比較的平坦な地形が東西約200mにわたって広がっている。道路建設によって主尾根の西端および西緩斜面に立地するすべての古墳が調査の対象となり、第2・4・6次調査によって発掘調査が行われた。

調査前の地形観察では主尾根西端の平坦地には、明瞭に2基の古墳と地形の変化がみられるものの古墳の可能性が高い1基のあわせて3基が存在することが想定された。調査ではこれら3基の他に、南斜面に溝によって区画された2基の古墳が発見され、前者を東から梅田15・16・17号墳、後者を東から梅田21・22号墳と呼称している。また、15・16号墳の北斜面では、溝をともなわない埋葬施設が2基検出され、溝によって区画されたものを古墳とし、溝をともなわないこれらを古墳の埋葬施設との混乱を避けるため、土壙として遺構番号を付して（SK02・03）調査を行った。

主尾根平坦地から西側には、地形は緩やかに傾斜しており、その西緩斜面には7基の古墳が分布している。標高約165mから約145mの範囲には、上方（東）より梅田18・20・19・6・8号墳と呼称した5基の古墳が並び、19号墳の墳丘南裾および西・南下方には2基の古墳（梅田23・24号墳）と埋葬施設1基（石蓋土壙）が存在している。このうち、8号墳については墳丘の大部分は路線範囲外になっており、墳丘南端のわずか一部分の調査にとどまっている。また、当初7号墳と考えられた平坦地は、自然地形であり、古墳が確認されなかったため、抹消している。以上のように、主尾根一帯をその範囲としたI群では、主尾根平坦地の西端に古墳5基（15～17・21・22号墳）と埋葬施設2基（SK02・03）、西緩斜面に古墳7基（18～20・23・24・6・8号墳）と埋葬施設1基（石蓋土壙）のあわせて12基の古墳と3基の埋葬施設の調査が行われた。

II群／支尾根の古墳（1） 主尾根から北に伸びる4本の支尾根とさらに谷を隔てた東端の支尾根上には30基を超える古墳が分布している。これらは、広範囲におよんでいるため、分割して第1・3次調査が行われた中央の支尾根以東の東半部をII群／支尾根の古墳（1）とした。

中央の支尾根上には、5基の古墳が階段状に並んでおり、上方から梅田1～5号墳と呼称している。その最も高位置に立地する梅田1号墳は、豊富な副葬品が整然と配置された古墳であり、近接する向山・市条寺両古墳群を含めた中でも抜きん出た存在である。また、1号墳の北西裾にはわずかに地山整形された平坦面がつくられ（9号墳として調査、のち抹消）、その下方斜面には、3基の古墳が点在している。このうち、上方に立地する2基の古墳を梅田10・11号墳と呼称し、調査を実施した。

主尾根の西端および中央の支尾根を貫いた路線ルートは、東側および東端の支尾根では、道路工事に

よる影響は尾根部のわずかな範囲に限られている。東側の支尾根上には7基の古墳が尾根筋に沿って弓なりに立地しているが、当初裾部に位置する3基の古墳が道路路線内に含まれていた。最終的には、道路工法の変更によって下方の2基が調査の対象となり、梅田12・13号墳と呼称し、調査を実施した。残る1基（H8-11トレンチ）についても、古墳全体の調査には至らなかったものの確認調査（第1次）によって一部埋葬施設の状況が明らかとなっている。このため、H8-11トレンチから検出された埋葬施設および周辺の地形は明らかに古墳と判断されるため、梅田33号墳と呼称することとする。

東端の支尾根は、ほぼ東西に伸びる主尾根からわずかに標高が下がり、屈曲したラインを描きながら山塊のピークに向けて上昇していく途中から北西方向に派生している。尾根上にほぼ直線的に8基の古墳が確認されており、道路工事による調査は梅田14号墳と呼称した尾根裾のわずか1基のみである。以上のようにⅡ群内においても、尾根筋によってさらに3つに細分（中央・東側・東端の各支尾根）する必要も考えられるが、ここではそれらを一括してⅡ群として捉えている。

Ⅲ群／支尾根の古墳（2） 上述したように、北向き斜面の東半部をⅡ群とし、Ⅲ群／支尾根の古墳（2）は、第5次調査を行った西側の支尾根以西をその範囲とした。

主尾根平坦地に築造された16号墳から北方向には、弓なりに支尾根が伸びており、4基の古墳が確認されている。このうち、道路路線内に立地する上方の2基の古墳を梅田26・27号墳と呼称し、発掘調査を実施した。また、26・27号墳が立地する西端の支尾根の西方には、比較的急な斜面地に古墳が築造されており、梅田25号墳と呼称し、調査を実施した。調査を進めるうち、25号墳の下層から別のある小規模な古墳が検出されたため、新たに梅田31号墳として調査を行った。

主尾根平坦地の中央から東側は、比較的平坦な地形が広がっているが古墳はつくられていない。そこから北に伸びる支尾根は、約10m下がった地点でさらに北西方向に分岐する枝尾根が続いている。この分岐地点に古墳はつくられており、梅田28号墳と呼称し、調査を実施した。分岐した枝尾根上に立地する3基の古墳は、当初道路路線内に含まれていたが、道路工法の変更によって最終的には、上方に位置する梅田29・32号墳と呼称した2基の古墳の調査にとどまった。但し、32号墳は、南側（山側）区画溝のわずか一部分だけの調査となり、墳丘および埋葬施設などは不明である。また、28号墳の下方（北側）についても最終的には、梅田30号墳と呼称した1基のみが調査の対象となり、残る古墳は現状保存されている。

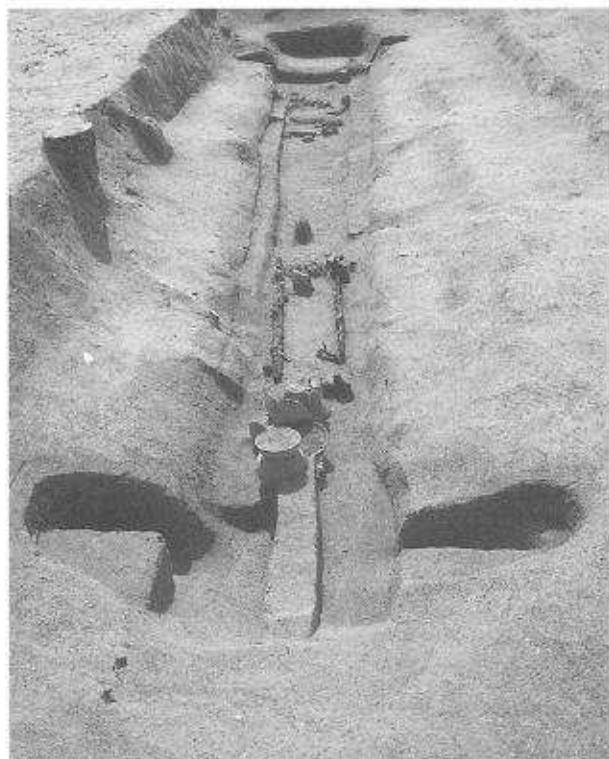
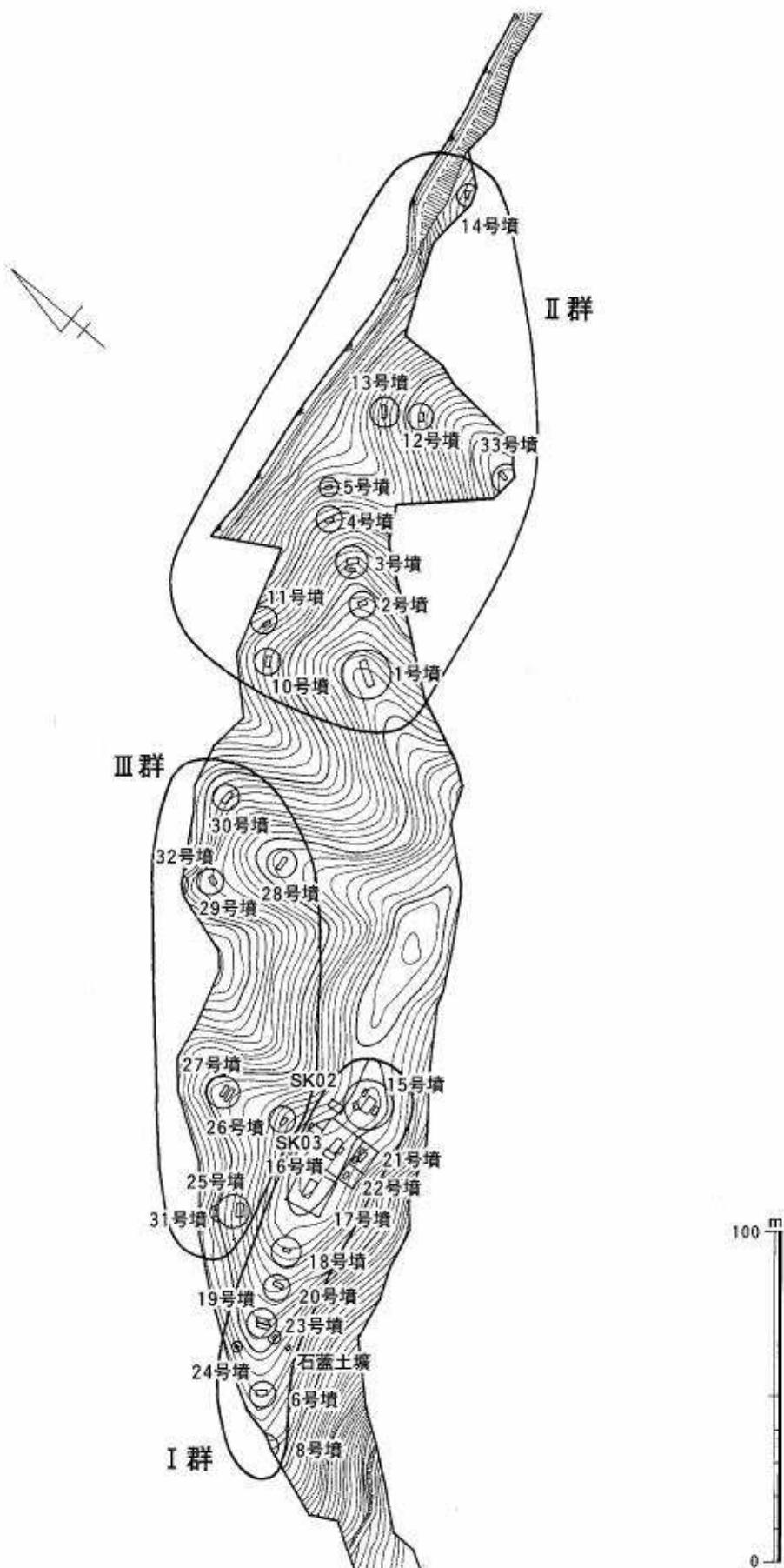
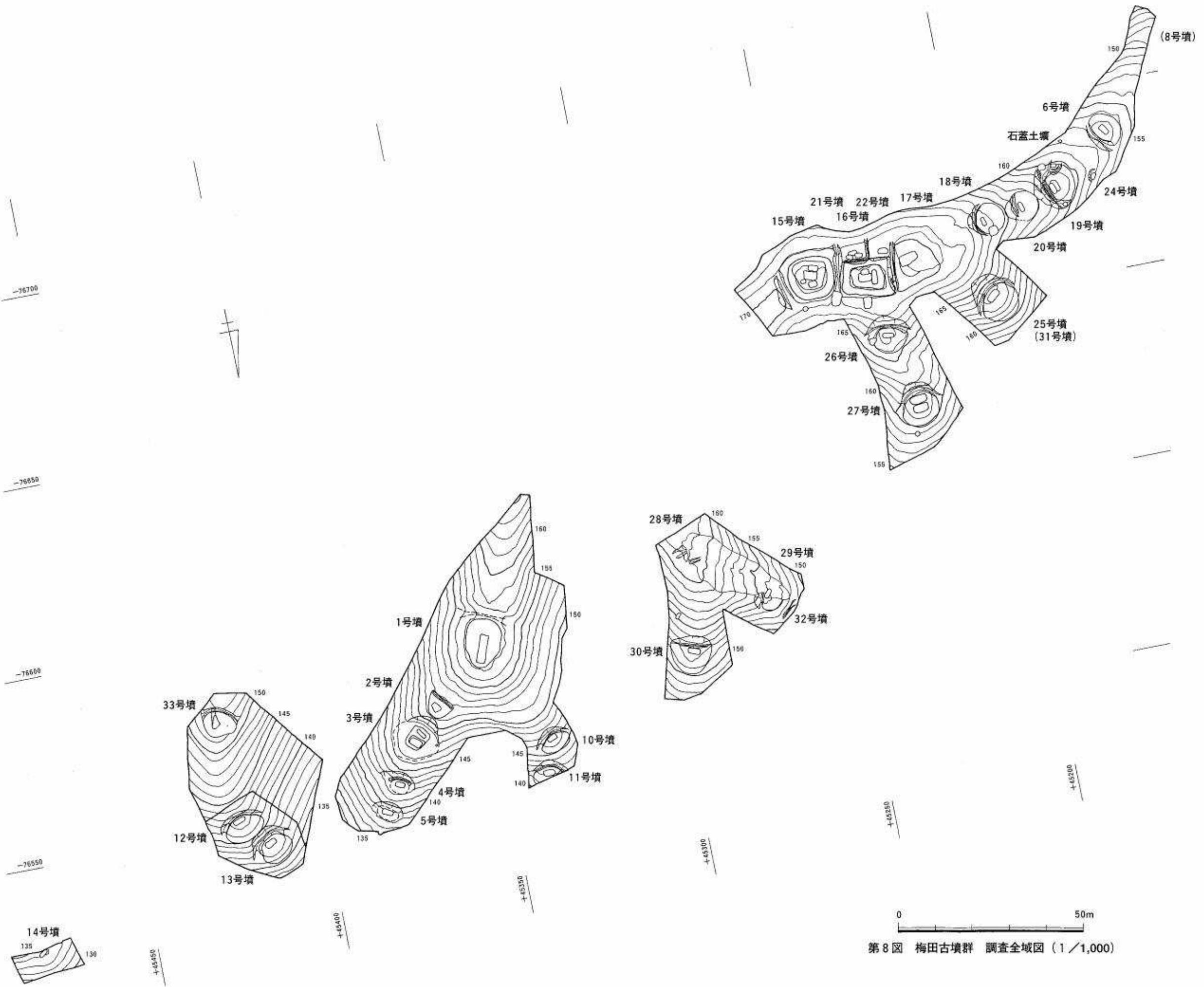


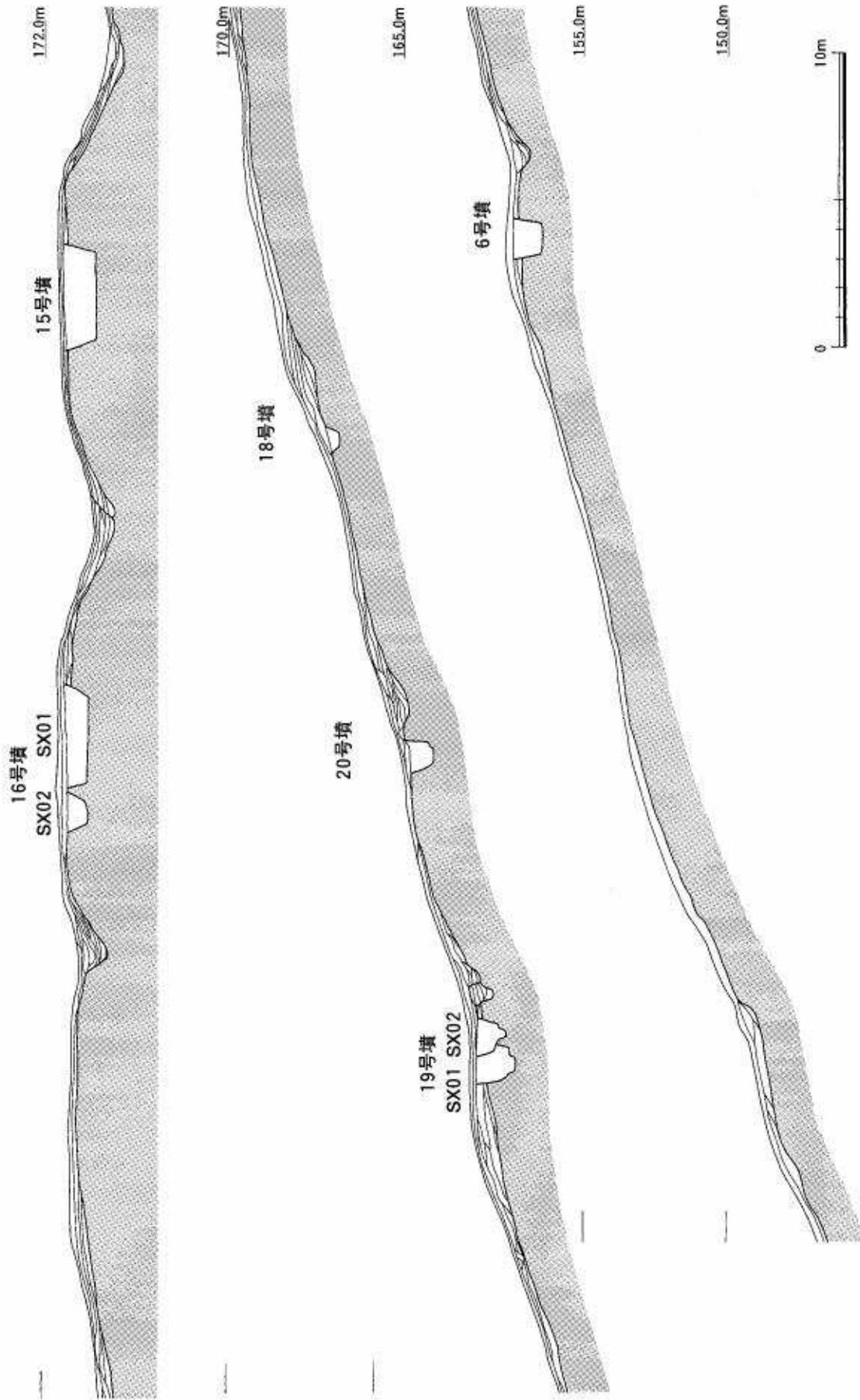
写真1 梅田1号墳 遺物出土状況



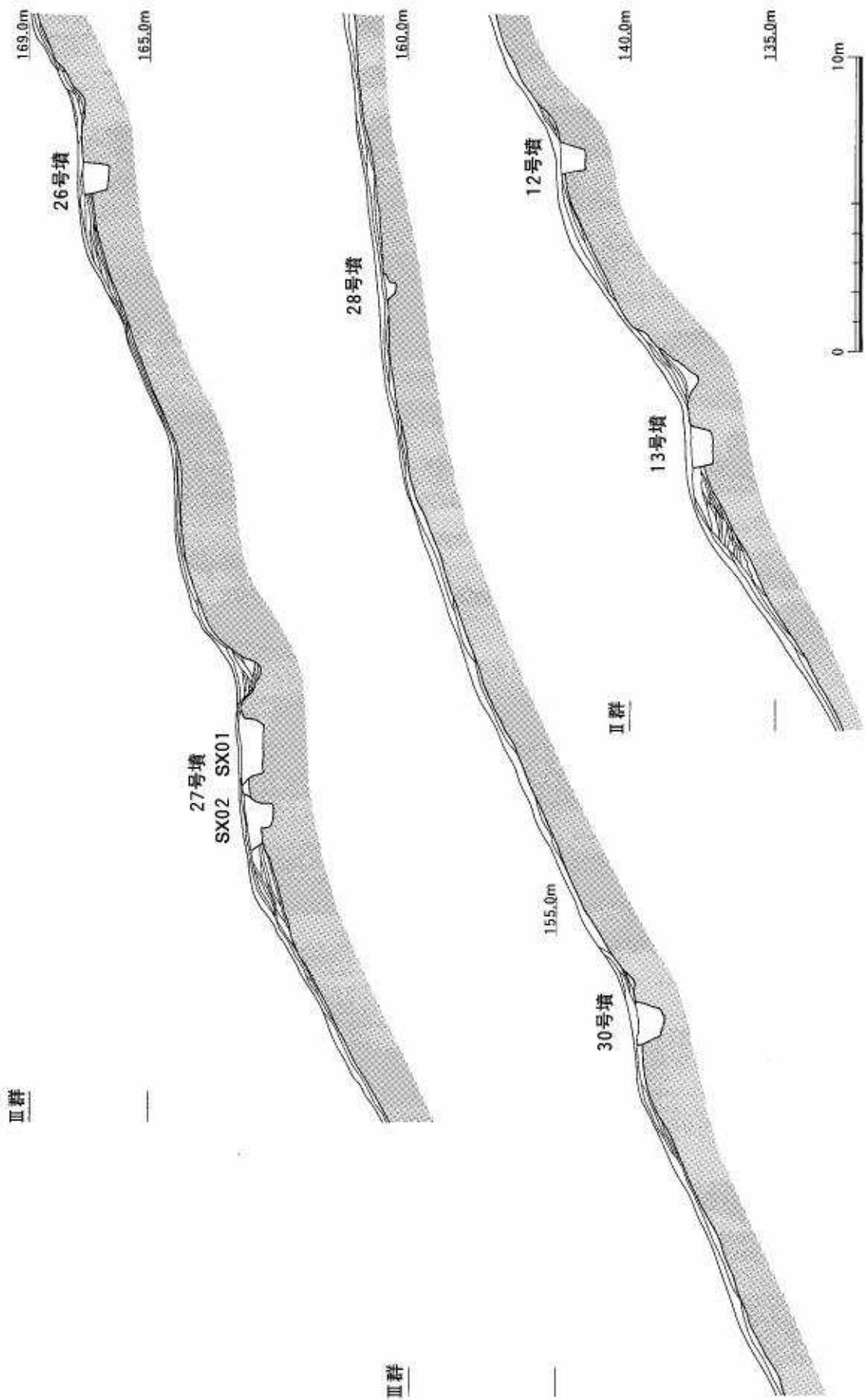
第7図 梅田古墳群 調査古墳分類図 (1/2,000)



第8図 梅田古墳群 調査全域図 (1/1,000)



第9図 I群 断面図 (1/200)



第10図 II・III群 断面図 (1/200)

第3章 I群／主尾根の古墳の調査

第1節 梅田15・16号墳 SK02・03 梅田17号墳

梅田15号墳

(第11~23図・巻首図版3、4・写真図版5~23、42、43)

立地および墳丘

ほぼ東西に伸びる主尾根の頂部は、比較的平坦な地形が約200mにわたって続いており、標高約171m、平地との比高差は約45mを測る。主尾根平坦地の中央およびそれ以東に古墳は存在しないが、西端には3基の古墳（梅田15~17号墳）が築造されている。3基の古墳のうち、15・16号墳と呼称した東側および中央に位置する2基の古墳は、調査前の地形観察で明瞭にその存在が確認されていた。墳丘部からの眺望は開け、西および南北方向は眼下に広がる風景を良好に見渡すことができる。また、円山川の東岸、北東方向に位置する和田山町最大の平野部に所在する古墳時代中期から後期の集落遺跡である加都遺跡も一部ではあるが、視界に入れることができる。

15号墳の東は、尾根筋が北東方向に若干屈曲し、南東には緩く傾斜する支尾根状の地形が形成されている。この尾根幅が広くなった地点に15号墳は立地し、西側には区画溝を共有する16号墳が隣接している。墳丘は、東西14.6m、南北13.4mを測る不整形な円形を呈している。東西両側は、尾根に直交する溝によって明確に区画され、南北両側は地山を掘り下げて整形し、墳丘を形づくっている。南北側の墳丘裾部は明瞭ではないが、東西の区画溝の底部は、東側で標高169.2m、西側で169.6mを測り、墳丘部とは約2~2.5mの比高差がある。このため、墳丘は2mを超える高さが認められ、平地からでもその姿を望むことができる。

墳丘の断ち割り調査では、墳丘部のほぼ全域に厚さ約0.1mの盛土が行われていることが確認されたが、盛土下は平坦に削られ、整形された地山面が広がっていた。このため、墳丘部の盛土は墳丘築造時、墳丘部を削った残土あるいは東西両側を掘り込んだ区画溝から発生した残土を積み上げた可能性も考えられるが、その後の埋葬施設構築時の残土と判断される。

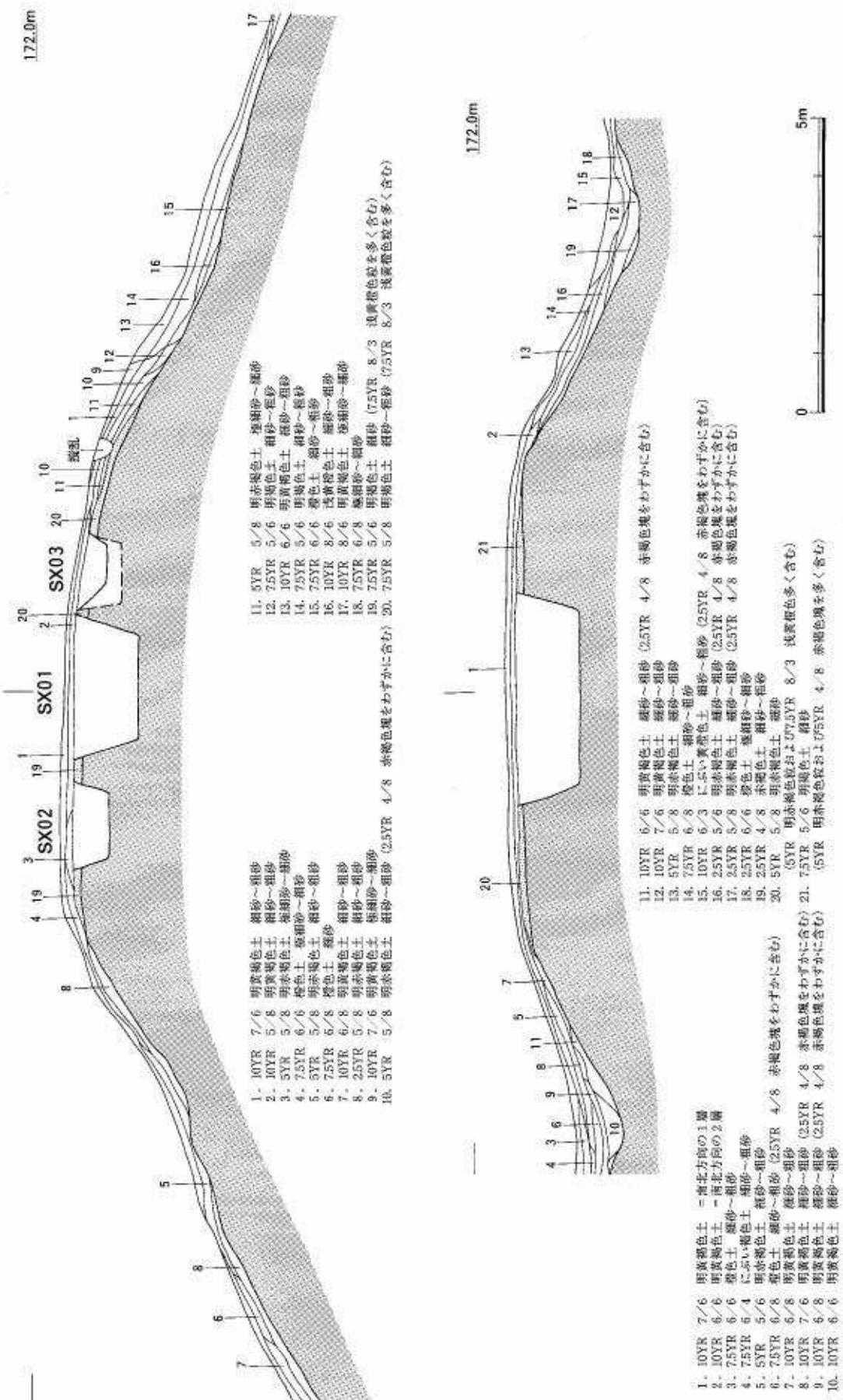
西側区画溝の上層から須恵器の杯身（1）が出土した。

埋葬施設

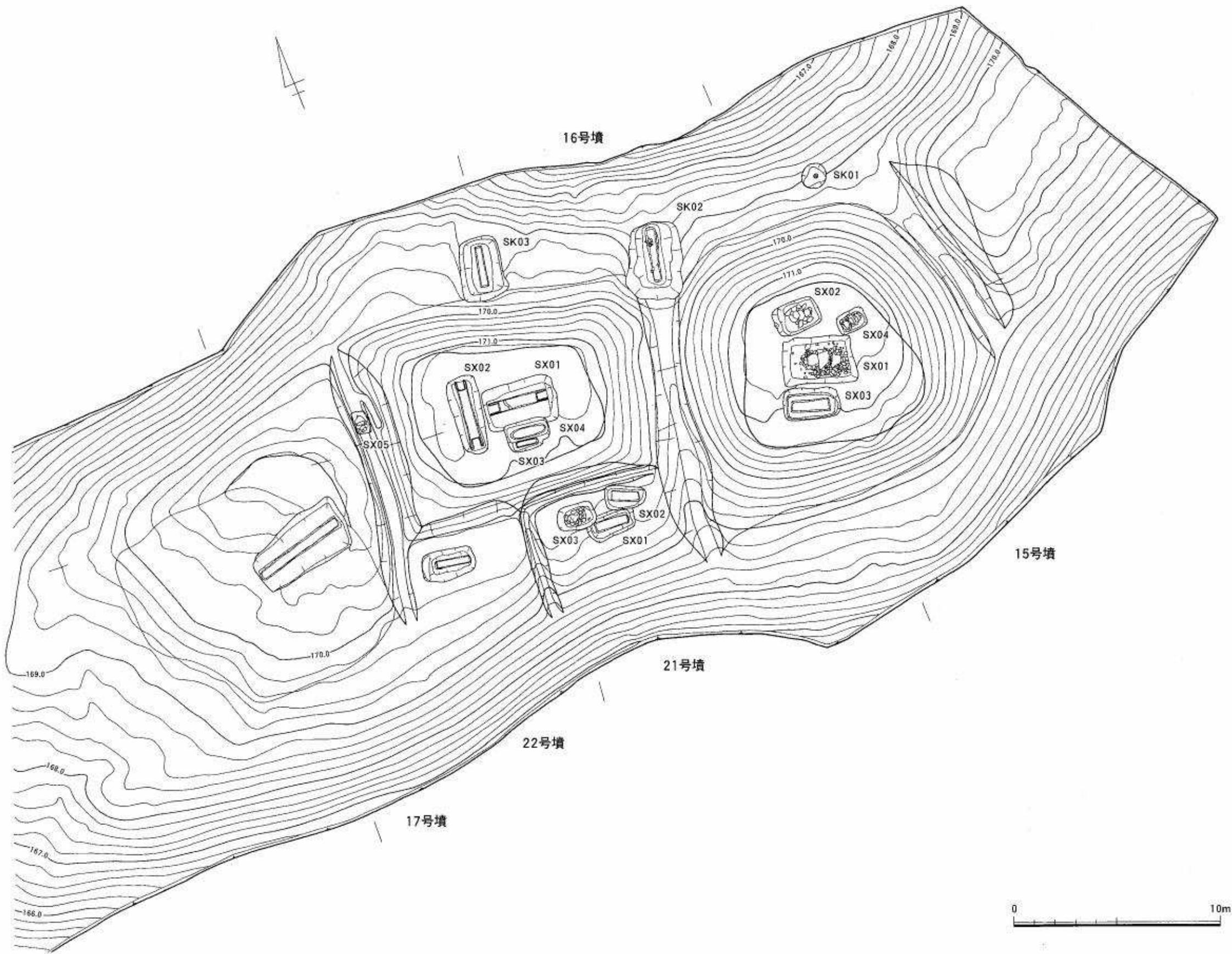
墳丘部にはおよそ50mにおよぶ不整形な五角形状の平坦地が広がっており、4基の埋葬施設が検出された。ほぼ中央に位置する15号墳の中心となる埋葬施設をSX01、その北に位置し、平坦地の北辺に平行する2基の埋葬施設をSX02・SX04、さらにSX01の南にはほぼ並行して検出されたものをSX03とそれぞれ呼称している。

SX01

墳丘平坦地の中央に位置し、ほぼ東西方向（N117°E）を主軸とする埋葬施設が検出された。墓壙は長さ3.42m、幅2.26mを測り、墓壙上面から約0.9m掘り下げた地点で、中央に約60cm~1m四方の3石の蓋石とその周囲を覆う約10~30cmの多量の角礫が検出された。蓋石は東側で1段、中央から西側では2段に架構され、上段（検出時）では3石、下段（石棺直上）では4石の石材が架構されていた。架構

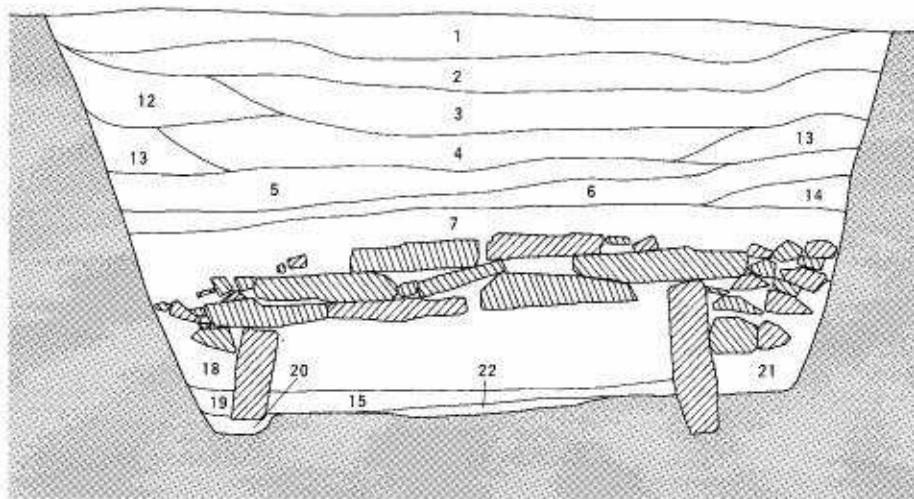


第11図 梅田15号填 填丘断面図 (1/100)

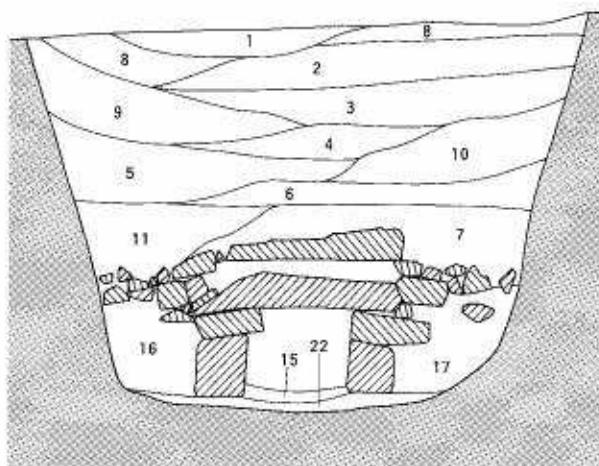


第12図 梅田15~17・21・22号墳他 調査後地形測量図 (1/200)

171.4m



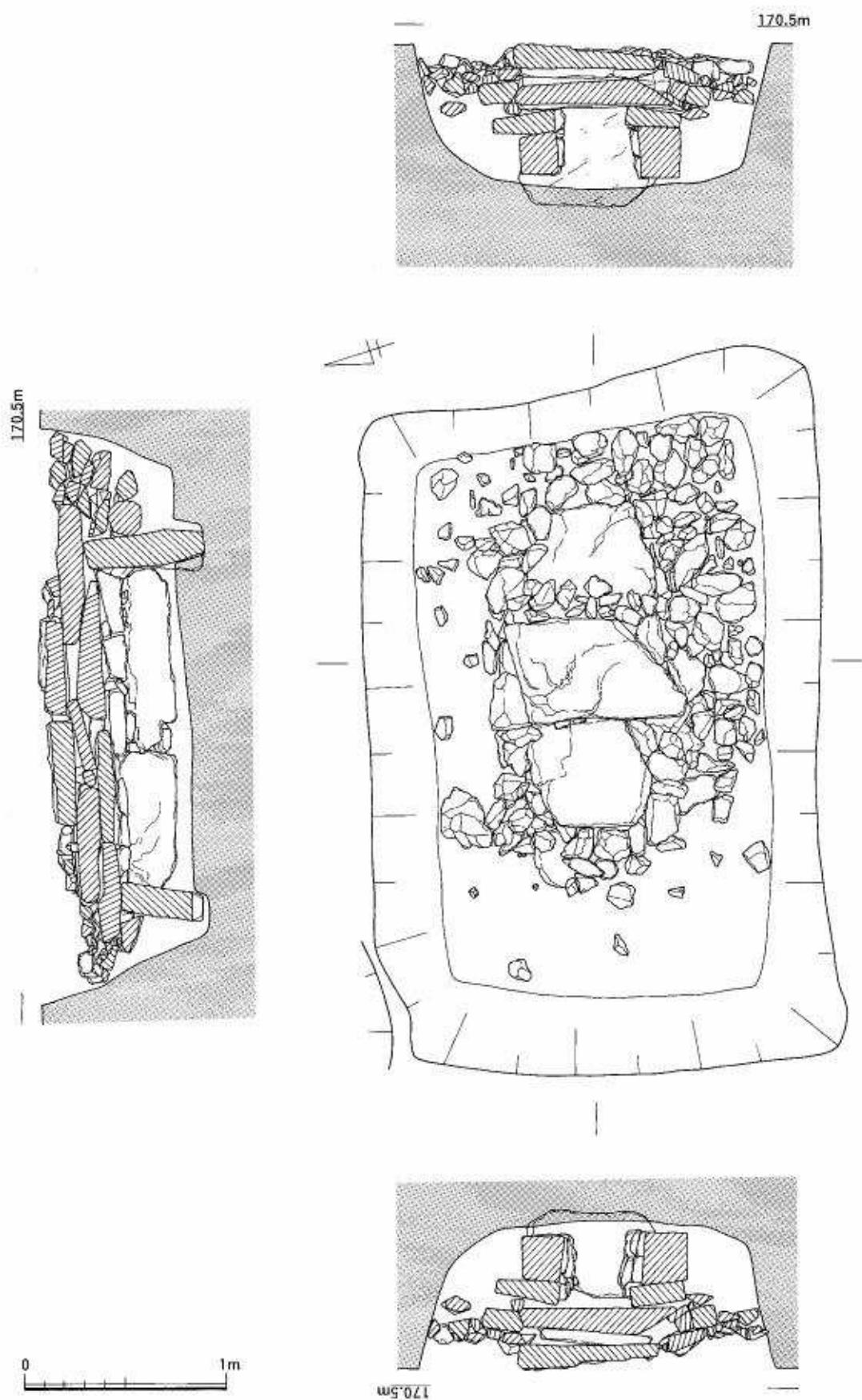
171.4m



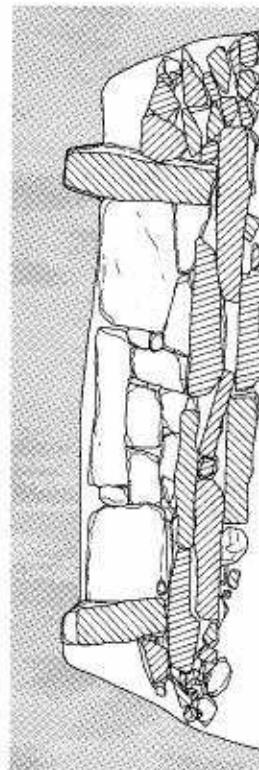
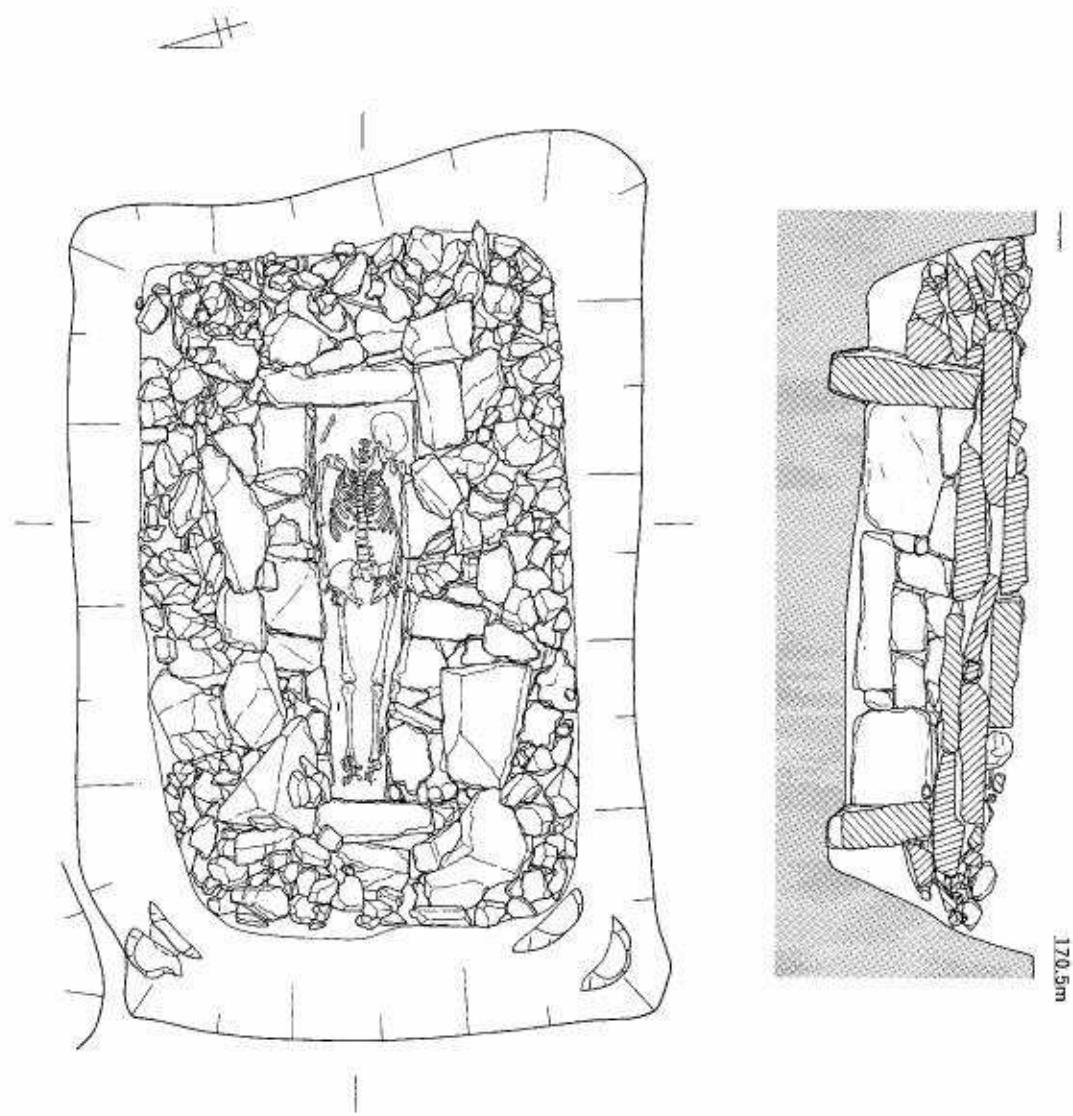
0 1m

1. 7SYR 6/6 棕色土 細砂～粗砂 (7SYR 8/3 淡黃棕色塊をわずかに含む)
 2. 5YR 5/8 明赤褐色土 細砂～粗砂 (7SYR 8/3 淡黃棕色塊をわずかに含む)
 3. 5YR 5/6 明赤褐色土 細砂～粗砂 (7SYR 8/3 淡黃棕色塊を多く含む)
 4. 7SYR 6/6 棕色土 細砂～粗砂 (7SYR 8/3 淡黃棕色塊を多く含む)
 5. 7SYR 6/4 にぶい褐色土 細砂～粗砂 (7SYR 8/3 淡黃棕色塊をわずかに含む)
 6. 5YR 6/8 棕色土 細砂～粗砂 (7SYR 8/3 淡黃棕色塊を多く含む)
 7. 5YR 6/6 棕色土 細砂～粗砂 (7SYR 8/3 淡黃棕色塊を多く含む)
 8. 7SYR 7/8 黄褐色土 細砂～粗砂 (7SYR 8/3 淡黃棕色塊を多く含む)
 9. 5YR 7/6 棕色土 細砂～粗砂 (7SYR 8/3 淡黃棕色塊を多く含む)
 10. 7SYR 6/6 棕色土 細砂～粗砂 (5YR 8/3 明赤褐色塊をわずかに含む)
 11. 7SYR 7/6 棕色土 細砂～粗砂 (7SYR 8/3 淡黃棕色塊を多く含む)
 12. 5YR 5/8 明赤褐色土 細砂～粗砂
 13. 5YR 6/6 棕色土 細砂～粗砂 (7SYR 8/3 淡黃棕色塊をわずかに含む)
 14. 5YR 6/8 棕色土 細砂～粗砂
 15. 5YR 4/8 深褐色土 細砂 (約1~2cmの小礫を多く含む)
 16. 10YR 5/6 明黄褐色土 細砂～粗砂
 17. 7SYR 5/4 にぶい褐色土 細砂～粗砂
 18. 10YR 7/6 明黃褐色土 細砂～粗砂
 19. 10YR 6/6 明黃褐色土 細砂～粗砂
 20. 7SYR 5/6 棕色土 細砂～粗砂 (7SYR 8/3 淡黃棕色粒を多く含む)
 21. 7SYR 6/6 棕色土 細砂～粗砂 (7SYR 8/3 淡黃棕色塊をわずかに含む)
 22. 7SYR 6/6 棕色土 細砂

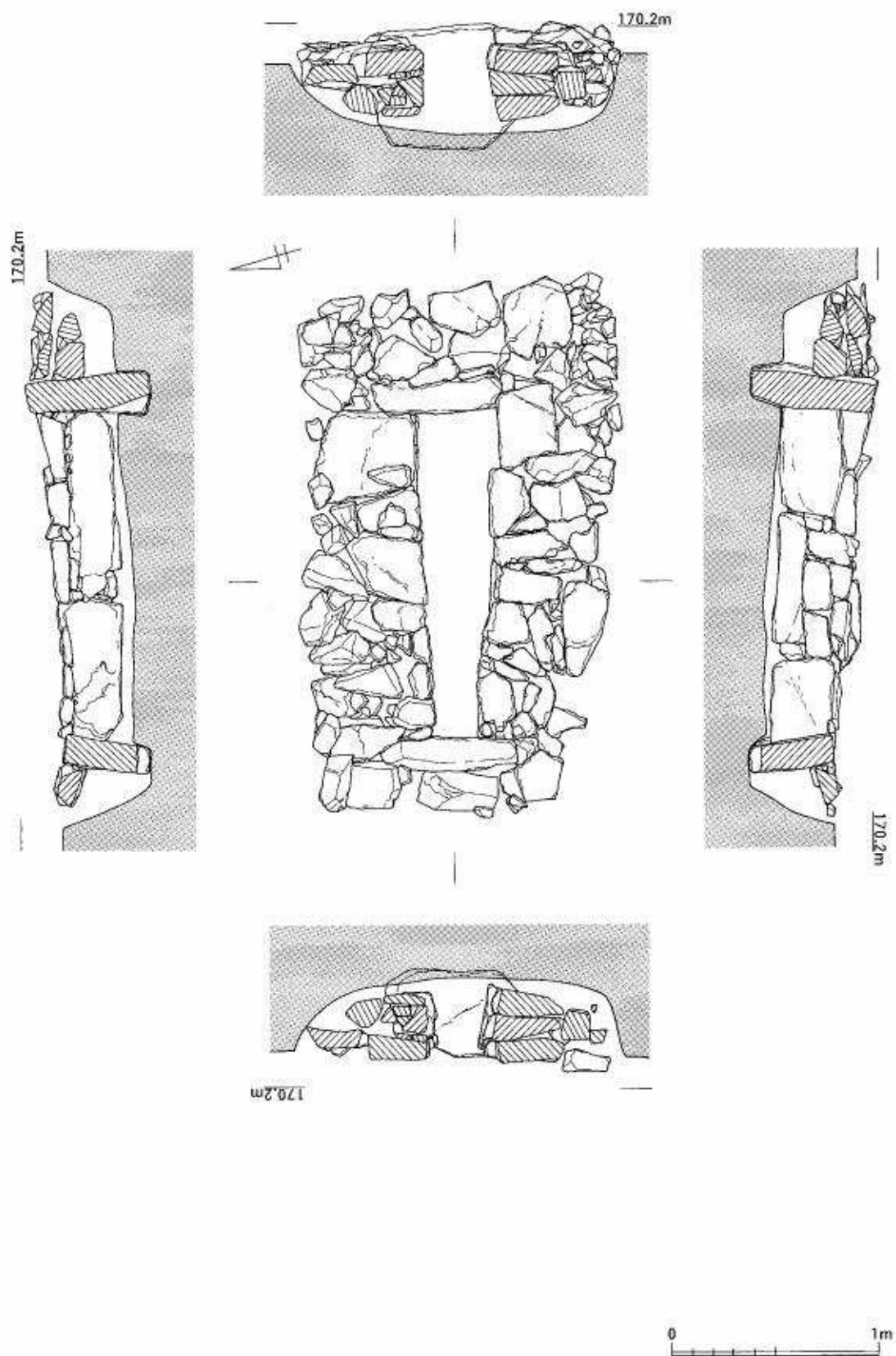
第13図 梅田15号墳 SX01 墓壙断面図 (1/30)



第14図 梅田15号墳 SX01 平・断面図 (1/30) (1)



第15図 梅田15号墳 SX01 平・断面図 (1/30) (2)



第16図 梅田15号墳 SX01 平・断面図 (1/30) (3)

作業は西側から始められ、蓋石を架構するとともに蓋石と墓壙との間を角礫で埋め、蓋石の隙間には板状の石材を詰めて東側へと進めている。東側に蓋石を架構したのちは、再度西側へ折り返し、同様の工程を行い終了している。

蓋石をすべて取り上げると、石棺内部から人骨が一体発見された。土砂が人骨を覆い隠すように堆積していたが、密閉状況が保たれていたため、人骨は完存していた。人骨の保存状態は極めて良好で、東側に頭部が据えられ、各関節が繋がった交連状態（まったく動いておらず、関節がすべて填まっている状態）で出土した。但し、南壁際に倒れた状態で発見された頭骨は、骨になってからもしばらくは下顎骨とあわさっていたものが、その後なんらかの自然的要因で倒れ、発見時の状態になったものと考えられる。また、両手は右手を骨盤の下、左手を骨盤の上にして埋葬されており、このような例は他の遺跡から発見された人骨にも確認されているようである。出土した人骨から被葬者は、年齢が20代の成人女性であり、身長140～145cmの当時でも身長の低い人物であったと推定される（人骨については、第6章第1節「梅田15号墳で出土した人骨の形態学的分析：被葬者の人物像」に詳細記載）。

この遺体が埋葬された石棺は、長さ1.56m、東壁際幅0.39m、中央部幅0.32m、西壁際幅0.22mを測る。中央部（骨盤付近）から西側（足元）にかけて石棺の幅は狭められ、高さも頭部が置かれた東側は0.46m、足元の西側は0.28mと低くなっている。石棺の両小口は板状の平石を1石立て、両側壁は基底石を配し、その上に2段あるいは3段に小口積みをして築かれていた。床面は砾床であったが、砂が多く混じり、非常に柔らかい状態であった。また、四方の壁面および頭部の蓋石内面には、赤色顔料が塗られていた。

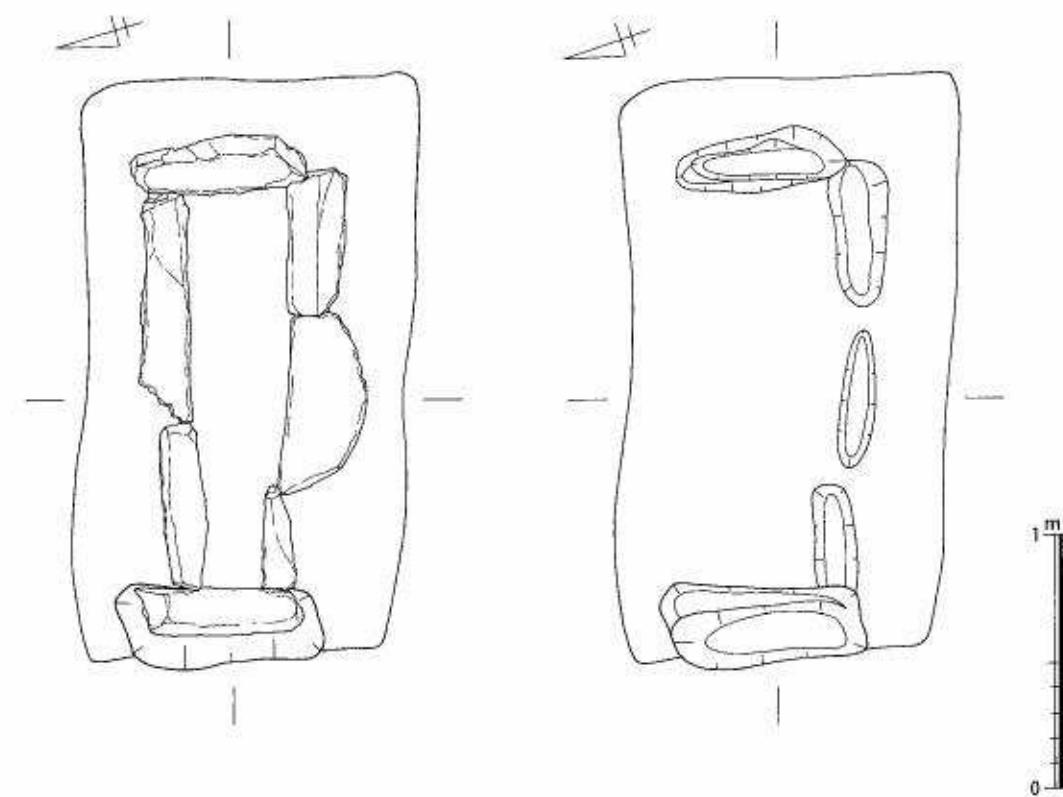
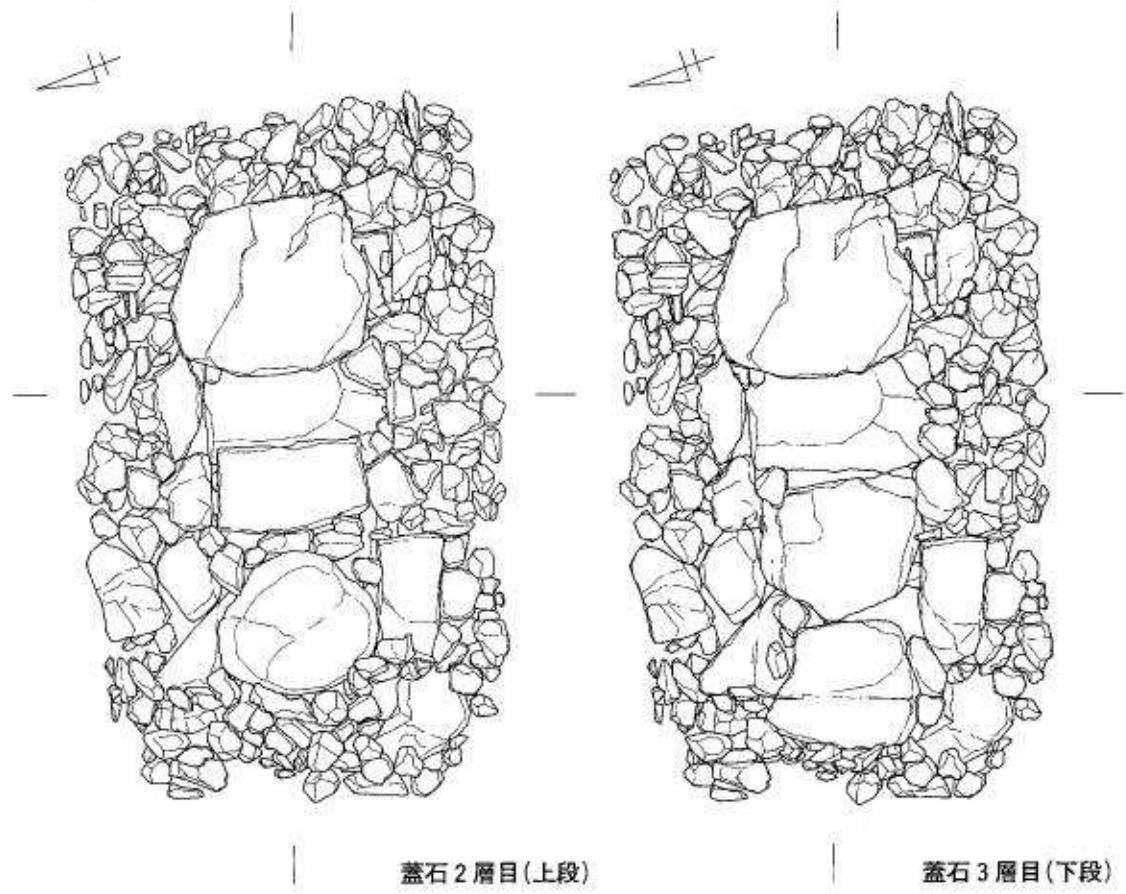
棺内の頭骨右横からヤリガンナ（M1）が、右手首にあたる位置から小型の勾玉（S1）が出土した。

（以上 平成9年度調査）

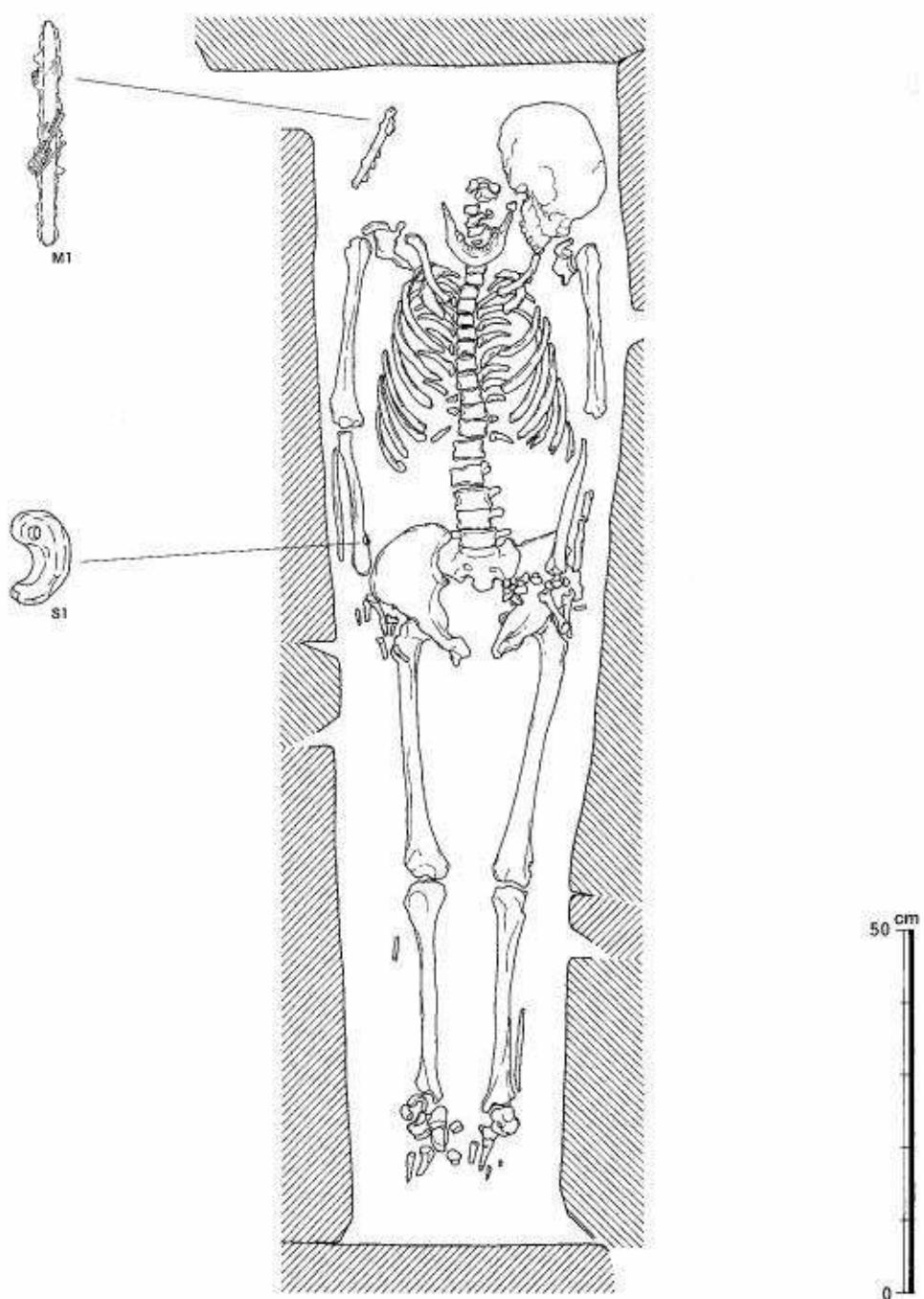
埋葬施設の断ち割りおよび墓壙の完掘調査によって、石棺は南辺の中央を除いて、板状の平石を箱型に組み、側壁はその上に足元の西小口付近では1段の、頭部の東小口際では3段の小口積みを行って構築されていた。両小口では高さの違う1石を配し、石棺の高さを東西で約0.2mの高低差をつけ、頭部にあたる東側の空間を広くしている。両小口は小口穴を掘り、小口石を立てたのち穴を埋め、その背後の墓壙との間に石の上方まで土を固めて埋めている。さらに控え石がその上に据えられ、小口石を固定している。また、側壁の基底石のうち、南辺中央の石だけは横位置で据えられており、石の形状あるいは大きさなどから、立てることによって棺の構築に何らかの不都合が生じることを考慮したためと推定



写真2 片山氏による現地指導状況

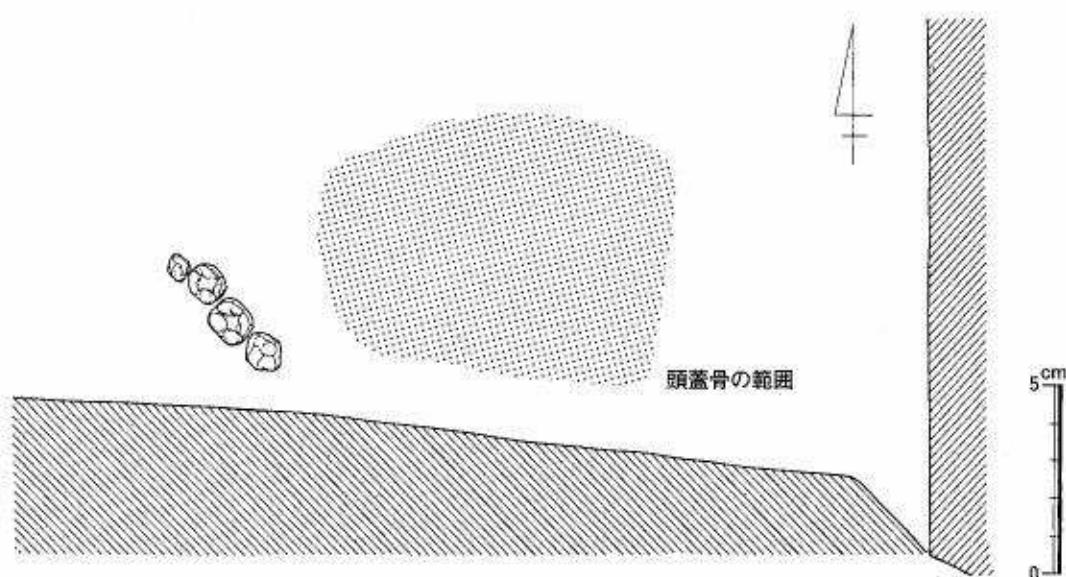
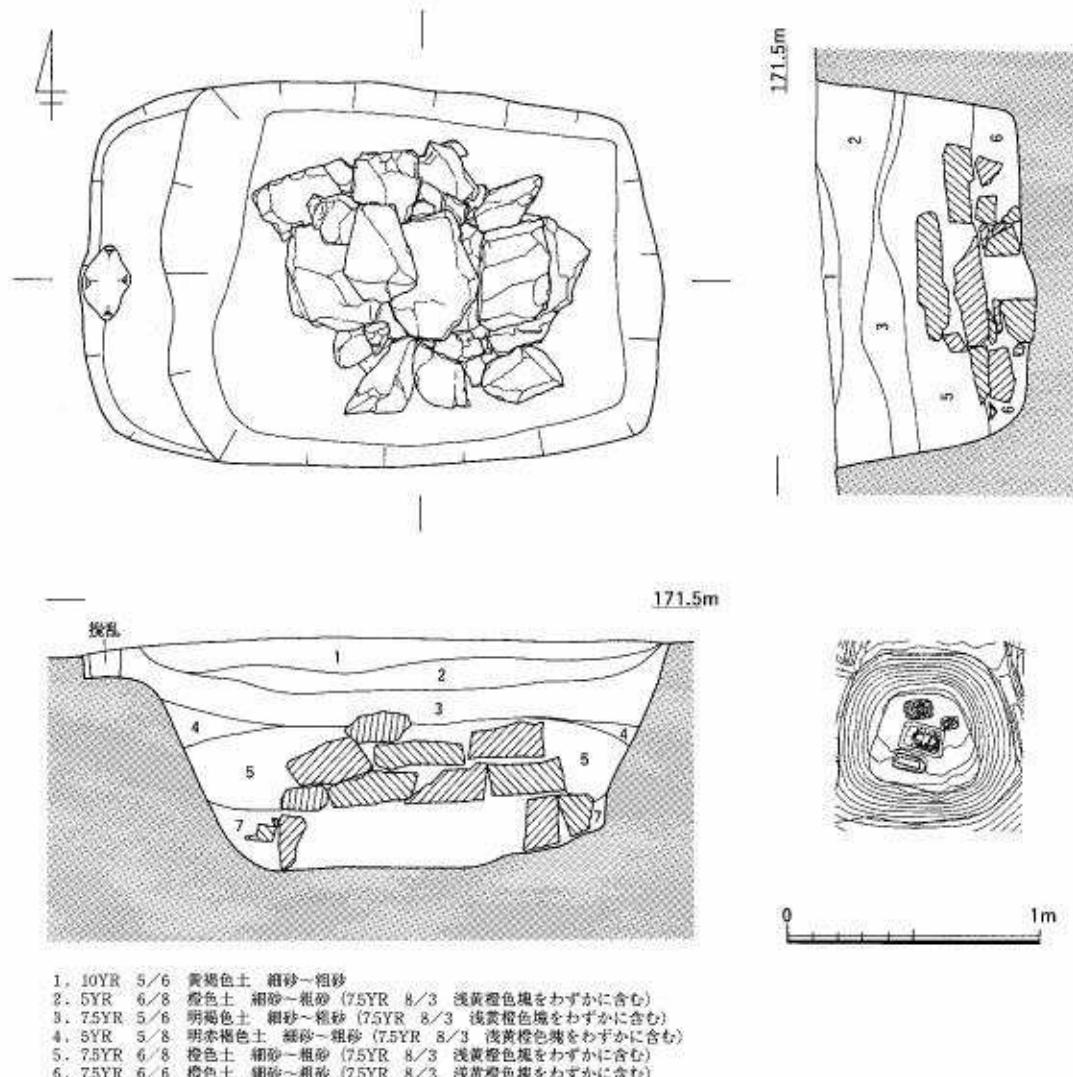


第17図 梅田15号墳 SX01 蓋石平面図 (1/30) 小口石および基底石平面図 (1/30)



遺物(鉄器1/4 石製品1/1)

第18図 梅田15号墳 SX01 人骨平面図 (1/10)



第19図 梅田15号墳 SX02 墓壙断面図 (1/30) 人骨頭部平面図 (1/2)

される。棺に使用された石材は、主に花崗岩であり、控え石は付近に露頭している石材が使われている。石棺材および控え石をすべて取り除いた墓壙の床面は、長さ2.30m、幅1.26mを測る長方形を呈しており、墓壙検出面から約1.5mの深さである。

この他、墓壙の南西角部と北西角部にはそれぞれ2段の階段状の掘り込みが設けられている。南西角部の下段は墓壙床面から約0.6mの高さに位置し、北西角部の下段は墓壙床面から比較的高い約0.85mの高さに位置している。しかし、石棺上面からは北西角部の下段は約0.4mの高さに設けられており、この下段の高さから、南西角部は墓壙掘削終了時に、北西角部は石棺構築後にそれぞれ設けられ、階段として利用されたものと考えられる。

以上のことから、SX01の埋葬状況を復元すると、①墳頂平坦地に墓壙を掘り込んだのち、②小口穴を掘削し、③両小口石を立てる。④両側壁の基底石を立て、⑤控え積みを行い、⑥側壁を積み上げる。⑦控え石を据え、墓壙と棺との間を十分に埋める。⑧石棺内に遺体を納め、⑨足元（西側）から頭部（東側）むけて蓋石を架構する。⑩蓋石の隙間に板石を詰め、⑪墓壙と蓋石の間には角礫を埋める。⑫胸部（中央東寄り）から足元にむけて再度蓋石を架構し、⑬隙間および墓壙との間を埋めていく、という順序で行われたものと考えられる。この時、遺体と石棺にはほとんど隙間がみられないことから、被葬者の大きさを計測し、石棺を構築した可能性が高いと考えられる。 (以上 平成10年度調査)

SX02

SX01の北に位置し、東西方向（N91° E）を主軸とする埋葬施設が検出された。SX01とは約25°主軸が北にふれており、後述するSX04と呼称している小型の石棺とは主軸をほぼ同じにしている。墓壙は長さ2.30m、幅1.49mを測り、西壁には約0.1m掘り下げた地点で幅約0.25mの平坦面がつくられていた。墓壙上面から約0.3mの地点で最上段の蓋石1石が確認され、さらに約0.1m掘り下げた面から3石の蓋石（以下、上段の蓋石）と約20~40cmの角礫数石が検出された。蓋石は比較的扁平な石材を利用しておらず、順次取り上げていくと、さらに石棺直上を覆った4石の蓋石（以下、下段の蓋石）が検出された。このため、SX02では下段の蓋石を架構したのち、一部隙間に角礫を詰め、それら蓋石の3ヶ所の合わせ目を覆うように上段の蓋石を再度架構し、墓壙との間に角礫を埋めたと考えられる。

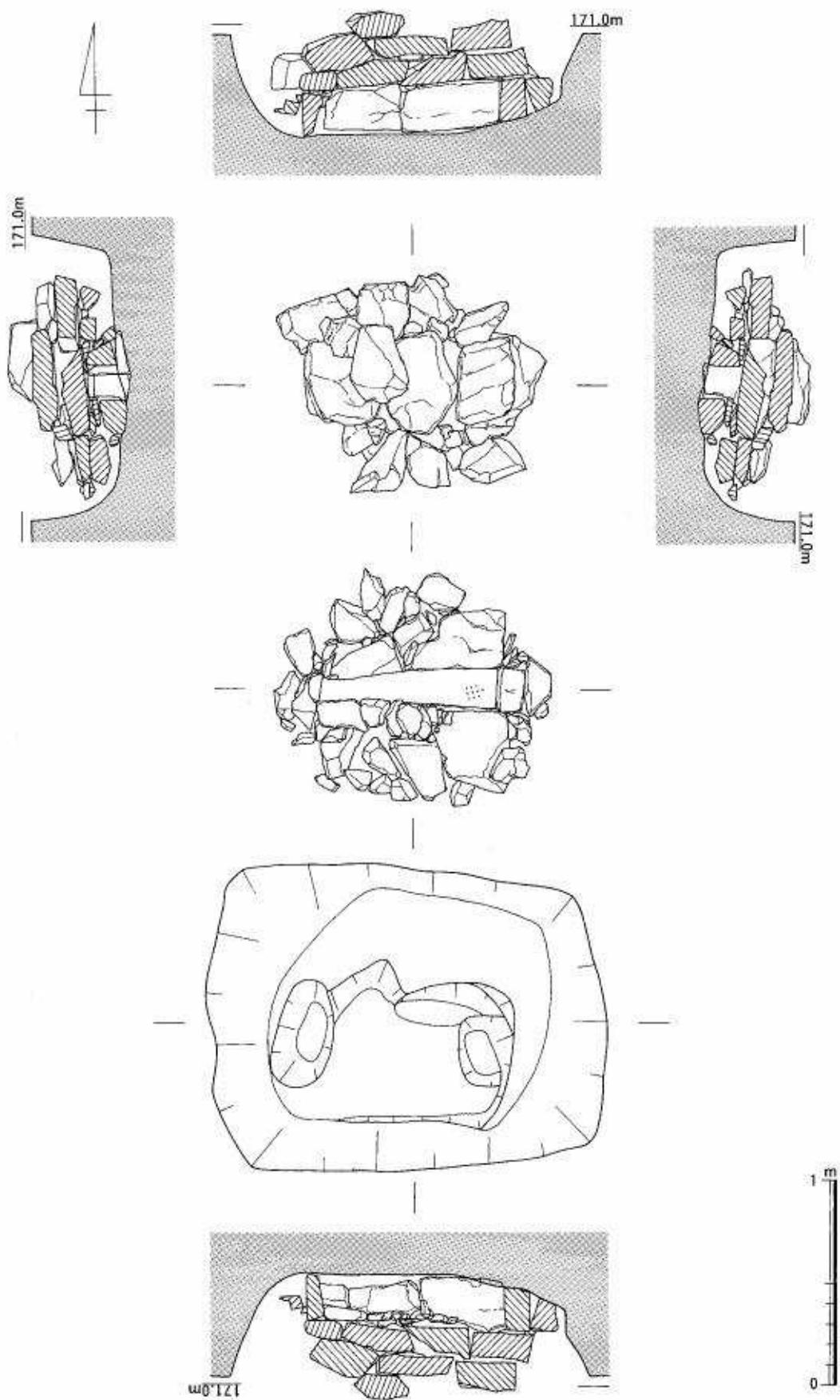
蓋石を取り上げた石棺内部からは、人骨頭部の一部が発見された。人骨の保存状態は極めて悪く、わずかに遺存していた歯から、埋葬されていたのは2~5歳の子供と推定される。この遺体が埋葬された石棺は、長さ0.89m、東壁際幅0.20m、中央幅0.16m、西壁際幅0.11mを測る小型のものである。SX01と同様に頭部にあたる東小口は、幅・高さともに西側よりも若干広い空間をつくっている。床面に礫は敷かれておらず、四方の壁には赤色顔料の痕跡はみられなかった。

棺内から遺物は出土しなかった。

(以上 平成9年度調査)

埋葬施設の断ち割りおよび墓壙の完掘調査によって、石棺は東西両側に1石ずつ小口石を立て、東小口側の南北側壁には厚さ0.2~0.3mの扁平な石材を1石ずつ据え、西小口側の北側壁には1石、南側壁には2石の基底石を立て、南側壁ではさらに高さを揃えるために15cm前後の角礫を並べて構築されていた。東小口側の両側壁の基底石は、ともに比較的大きな石を配し、壁面には石の平坦面を利用している。また、東小口石の背後および両側や、西小口側の基底石と墓壙との間には約20~30cmの角礫を十分に詰め、埋めている。石棺および控え石をすべて取り除いた墓壙の床面は、長さ1.40m、幅1.14mを測る歪な五角形を呈し、南に偏った位置に小口石および基底石を据えるために掘られた浅い窪みが認められた。墓壙は検出面から最も深いところで0.92mを測る。

(以上 平成10年度調査)



第20図 梅田15号墳 SX02 平・断面図 (1/30)

SX03

SX01の南に近接し、主軸もほぼ東西方向に並行する（N 109° E）木棺直葬の埋葬施設が検出された。15号墳で検出された4基の埋葬施設のうち、唯一の木棺墓である。墓壙は長さ2.75m、幅1.46mを測り、平面形は角部が曲線を描くほぼ長方形を呈している。

墓壙の中央には、長さ1.90m、幅0.57m、深さ0.24mを測る木棺が納められており、墓壙検出面から約0.3m掘り下げた地点で確認された。木棺の東壁際の幅は0.60m、西壁際は0.50mを測り、SX01およびSX02の頭部に位置する東側が2基と同様にわずかであるが広くなっている。

棺内および墓壙内から遺物は出土しなかった。

SX04

SX01の北東、SX02の南東に位置し、東西方向（N 73° E）を主軸とする埋葬施設が検出された。墓壙は長さ1.39m、幅1.04mを測り、平面形は長方形を呈するものである。墓壙上面から約0.3m掘り下げた地点で蓋石と15cm前後の角礫数石が検出された。蓋石は2段に積まれており、下段（石棺直上）では4石の蓋石が架構され、上段（検出時）の3石はそれら3ヶ所の合わせ目を覆うようにして置かれ、墓壙との間には角礫が詰められていた。

蓋石を取り上げた石棺内部には約0.1m、壁面の中程まで土砂が堆積していたが、遺物は出土しなかった。石棺は長さ0.54m、幅0.16mを測り、SX02よりもさらにひとまわり小さいものであり、東小口側の北側壁は崩落しつつあった。 (以上 平成9年度調査)

埋葬施設の断ち割りおよび墓壙の完掘調査によって、石棺は東西両側に1石ずつ小口石を立て、北側壁では3石、南側壁では2石の基底石が両小口石を挟むように据えられて構築されていた。小口石および基底石と墓壙との間には約10~30cmの角礫を十分に詰め、埋めている。また、東小口石は断面形が三角形を呈する石を立てているため、東壁面は垂直ではなく、約50°の傾きがみられる。石棺および控え石をすべて取り除いた墓壙の床面は、長さ1.0m、幅0.64mを測り、北辺際は一部基底石を据えるために深く掘られていた。墓壙は検出面から最も深いところで0.73mを測る。 (以上 平成10年度調査)

出土遺物（第50~52図・巻首図版7・写真図版121, 122, 124）

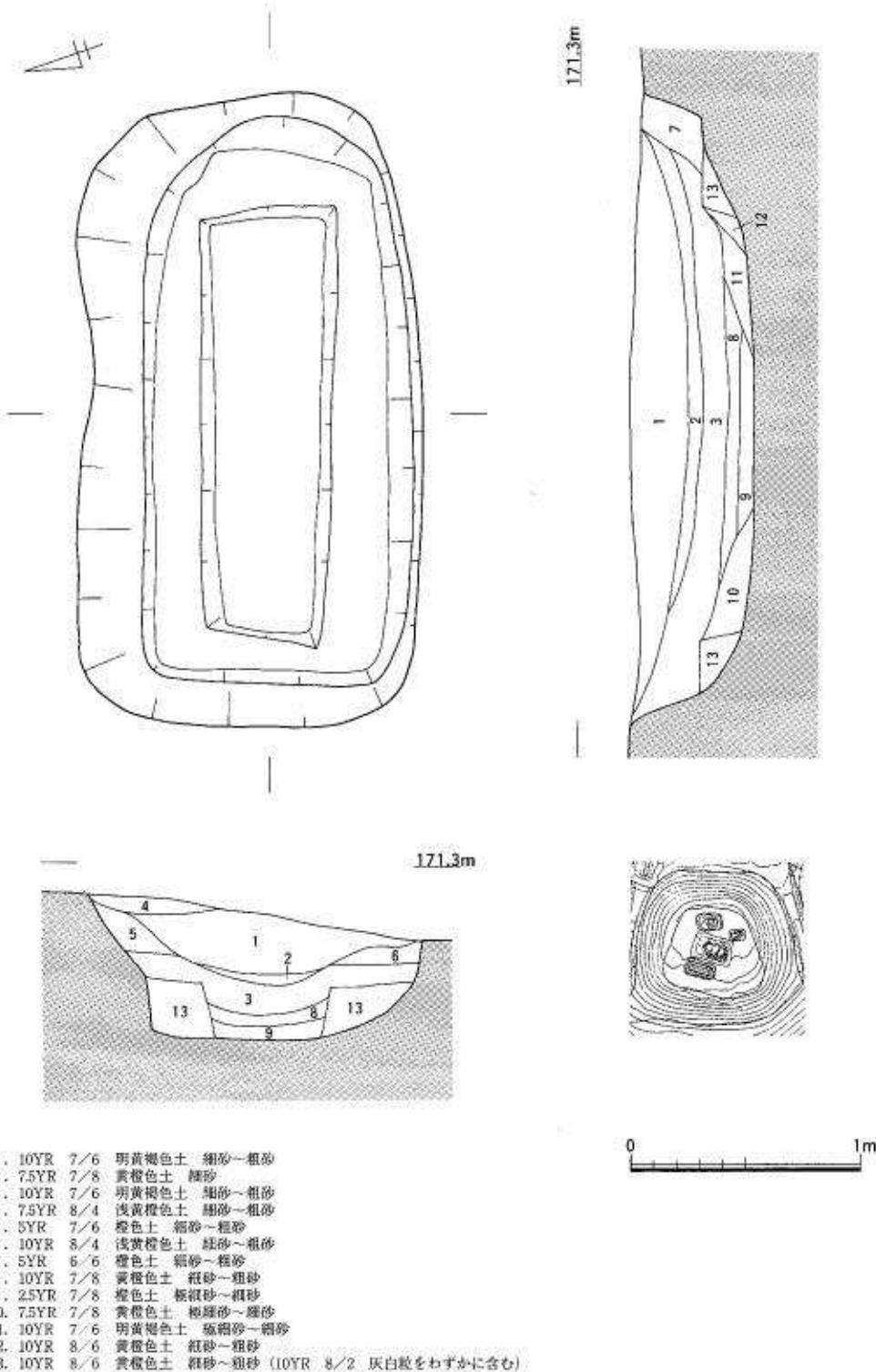
15号墳では、西側区画溝の上層から須恵器1点（1）と、SX01の石棺内からヤリガンナ1点（M1）・小型の勾玉1点（S1）が出土している。

1の杯身は、口縁部の小破片であるため、詳細は不明であるが、口径12.7cm、器高2.5cmに復元される。

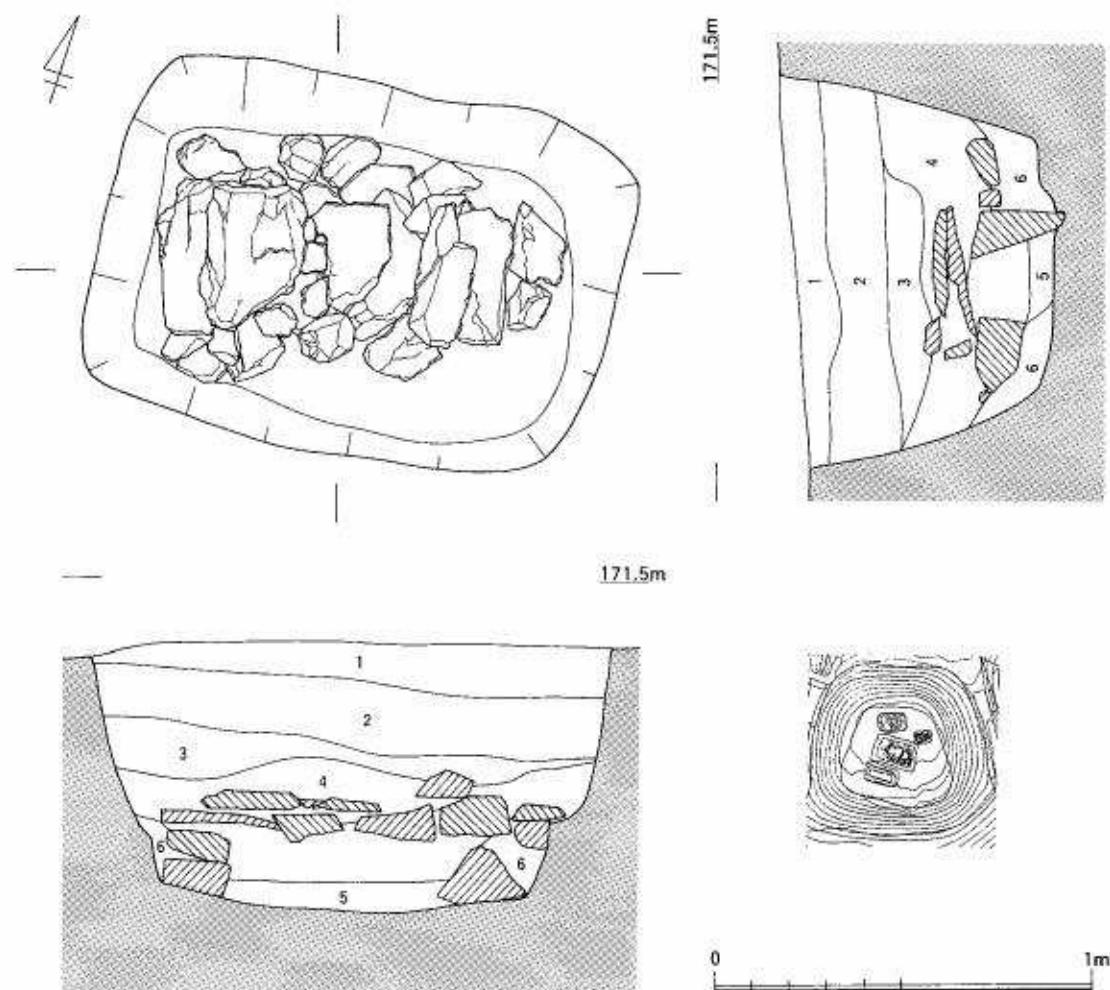
M1は全長12.2cm、幅2.15cm。刃部と茎部が同幅で連続する柳葉形のヤリガンナである。刃先のそりから考えて裏側にあたる方向に斜め方向に櫛の歯らしきものが付着しているため、鏽落としを控えており、刃の長さは正確には不明であるが、刃先から3cm程度までが刃であろうか。

S1は滑石製の小型の勾玉である。全長12.9mmで、梅田1号墳のものが全長7~8mm程度であったのより一回り大きい。

以上、15号墳について記載を行ったが、15号墳から出土した遺物は非常に少なく、築造時期を確定することは困難である。しかし、出土したヤリガンナおよび勾玉と、後述する16号墳との関係で5世紀前半までに築造されたものと考えられる。

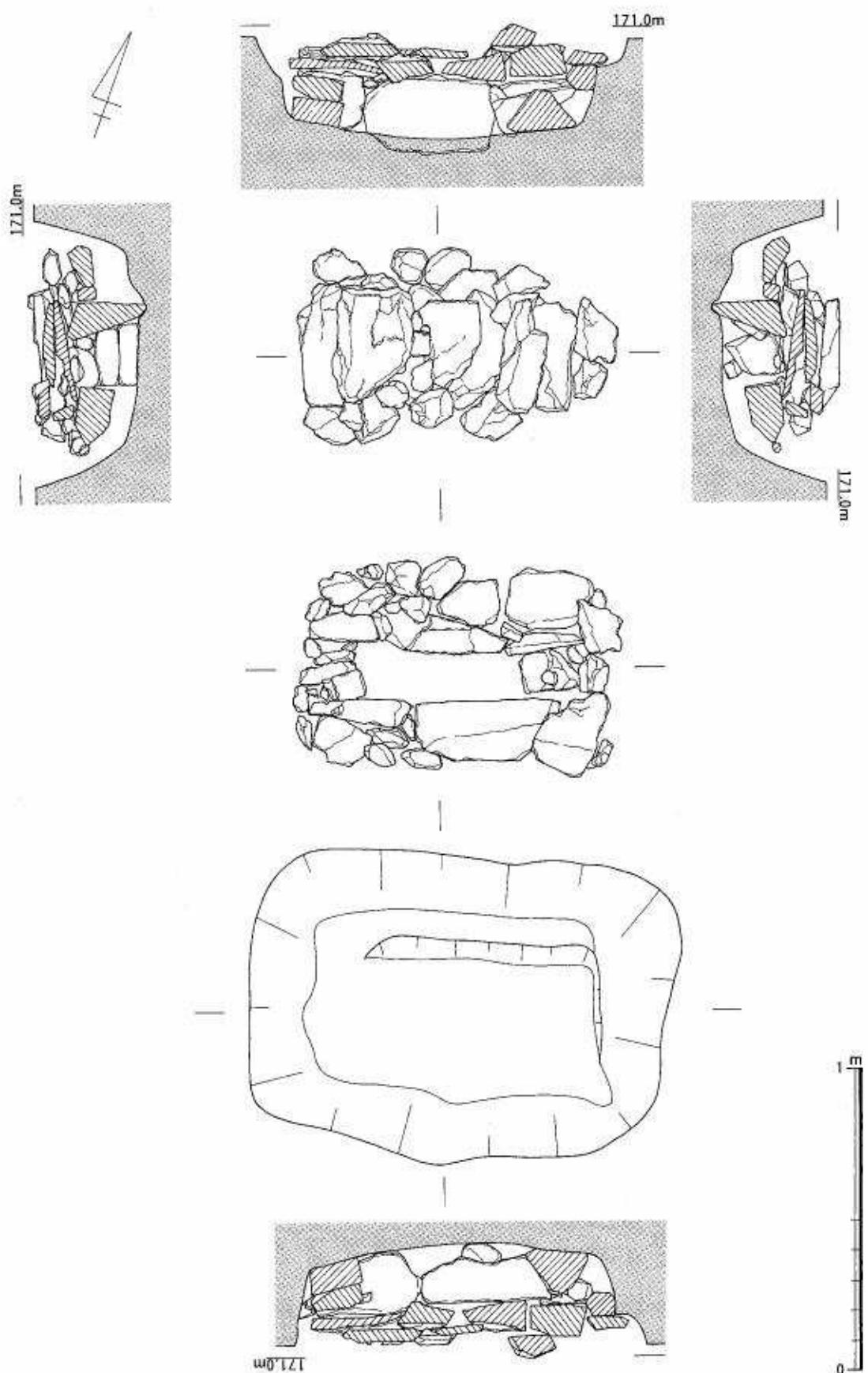


第21図 梅田15号墳 SX03 平・断面図 (1/30)



1. 7.5YR 7/8 黄橙色土 粗細砂～粗砂 (5YR 6/8 橙色塊をわずかに含む)
2. 10YR 7/8 黄橙色土 細緻砂～粗砂
(2.5YR 5/8 明赤褐色粒および7.5YR 8/1 灰白色塊をわずかに含む)
3. 10YR 6/8 明黄褐色土 粗細砂～細砂
4. 2.5YR 6/8 明赤褐色土 細砂～粗砂 (5YR 6/8 橙色塊を多く含む)
5. 2.5YR 5/8 明赤褐色土 細緻砂～細砂
6. 7.5YR 7/8 黄橙色土 細砂～粗砂 (5YR 6/8 橙色塊をわずかに含む)

第22図 梅田15号墳 SX04 墓壙断面図 (1/20)



第23図 梅田15号墳 SX04 平・断面図 (1/20)

梅田16号墳

(第12. 24~28図・写真図版 5~7. 24~36. 42. 43)

立地および墳丘

16号墳は15号墳の西、主尾根から北に支尾根が派生する分岐点に位置している。墳丘は周囲の地山を削り出して築造されており、東西両側には、尾根に直交する直線的な区画溝が設けられている。また、南北両側には平坦地がつくりだされ、墳丘裾部を比較的明確にとらえることができる。しかし、南側裾部の平坦地には16号墳の墳丘を一部削って区画溝を設けた21・22号墳と呼称している2基の古墳が築造されており、墳丘は、東西14.4m、南北約11mを測る長方形を呈する方墳であったと考えられる。東西区画溝の底部は、東側で標高169.6m、西側で169.8m、南北平坦地の裾部は、それぞれ169.9m、169.7mを測り、墳頂部とは約2mの比高差がある。このため、墳丘は15号墳同様、約2mの高さが認められ、平地からでもその姿を望むことができる。また、西側には17号墳が隣接し、北側裾部の平坦地からは、2基の埋葬施設(SX02・03)が検出された。

墳丘の断ち割り調査では、墳頂部の東半部から北半部の範囲に盛土が行われていることが確認され、東側では約0.3m、最も厚い北側では約0.5mの高さに積み上げ、平坦地を造成している。

なお、東側の区画溝の断面観察では、堆積して埋まつた15号墳の西側区画溝を16号墳の築造時に改めて掘っていることが判明したため、15号墳より後出する古墳である。

墳丘裾部から土師器の高杯(2)が出土した。

埋葬施設

墳頂部にはおよそ45mにおよぶほぼ長方形を呈する平坦地が広がっており、4基の埋葬施設が検出された。ほぼ中央に位置する埋葬施設をSX01、その西に位置しSX01の主軸と直交するものをSX02、さらにSX01の南側から並んで検出された2基の埋葬施設をSX03・04とそれぞれ呼称している。このうち、SX01・03・04の3基の埋葬施設は、切り合い関係が認められ、調査時においてSX02を含めた4基の構築順序がほぼ明らかとなっていた。このため、旧いものから順にSX01~04と遺構番号を付している。また、西側の区画溝内からも埋葬施設が1基(SX05)検出されており、16号墳はあわせて5基の埋葬施設をもつ古墳である。

SX01

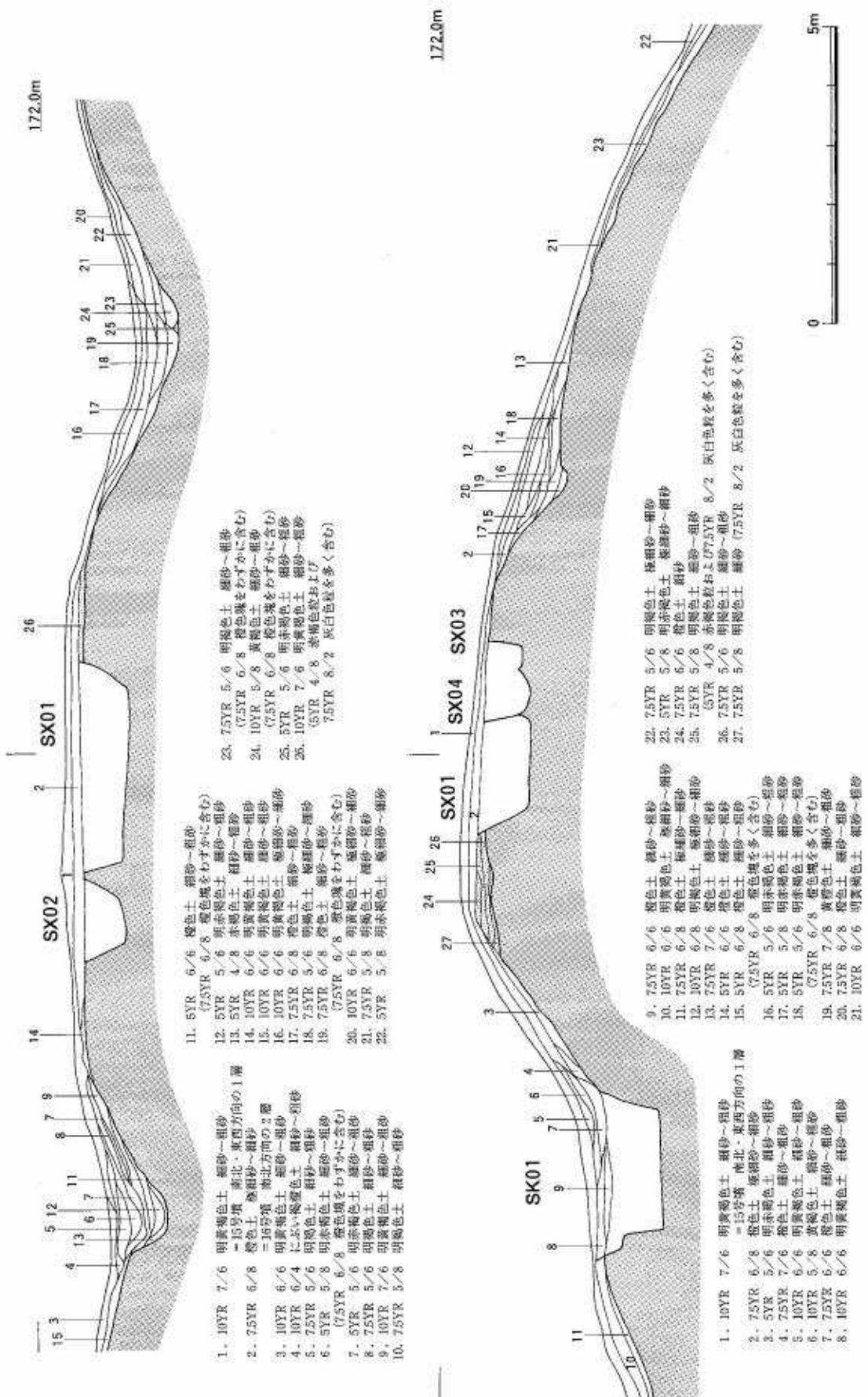
墳頂平坦地の中央に位置し、ほぼ東西方向(N96°E)を主軸とする埋葬施設が検出された。墓壙は長さ3.54m、幅は後出するSX04に南側中央が壊されているため、残存する東端部で2.26mを測る長方形を呈している。

墓壙の中央やや北寄りには、小口板が側板の内側に挟み込まれる「日」字形構造の木棺が納められていた。木棺は墓壙検出面から約0.6m掘り下げた地点で確認され、長さ1.86m、幅0.52mを測る。両側板はともに2.84mを測り、中央に小口板で仕切った棺空間を設け、小口板から外側はともに0.49m長く均等に伸びている。棺の幅は東側で0.49m、西側では0.54mとほぼ同じであり、深さは0.24mを測る。棺内西端の床面約0.1m上面から赤色顔料がわずかに検出された。

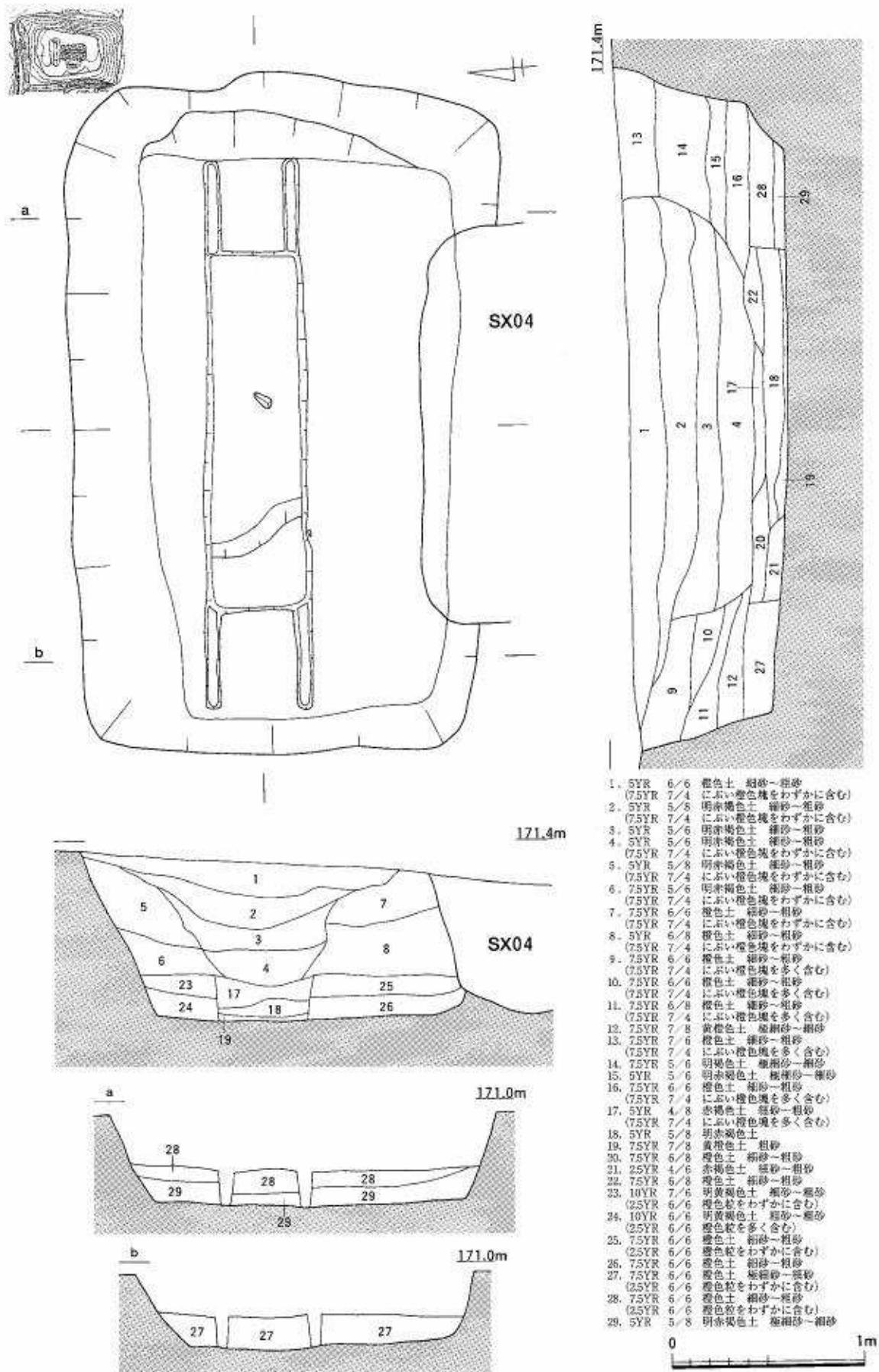
棺検出時、棺外に位置する地点から刀子(M2)が出土した。

(以上 平成9年度調査)

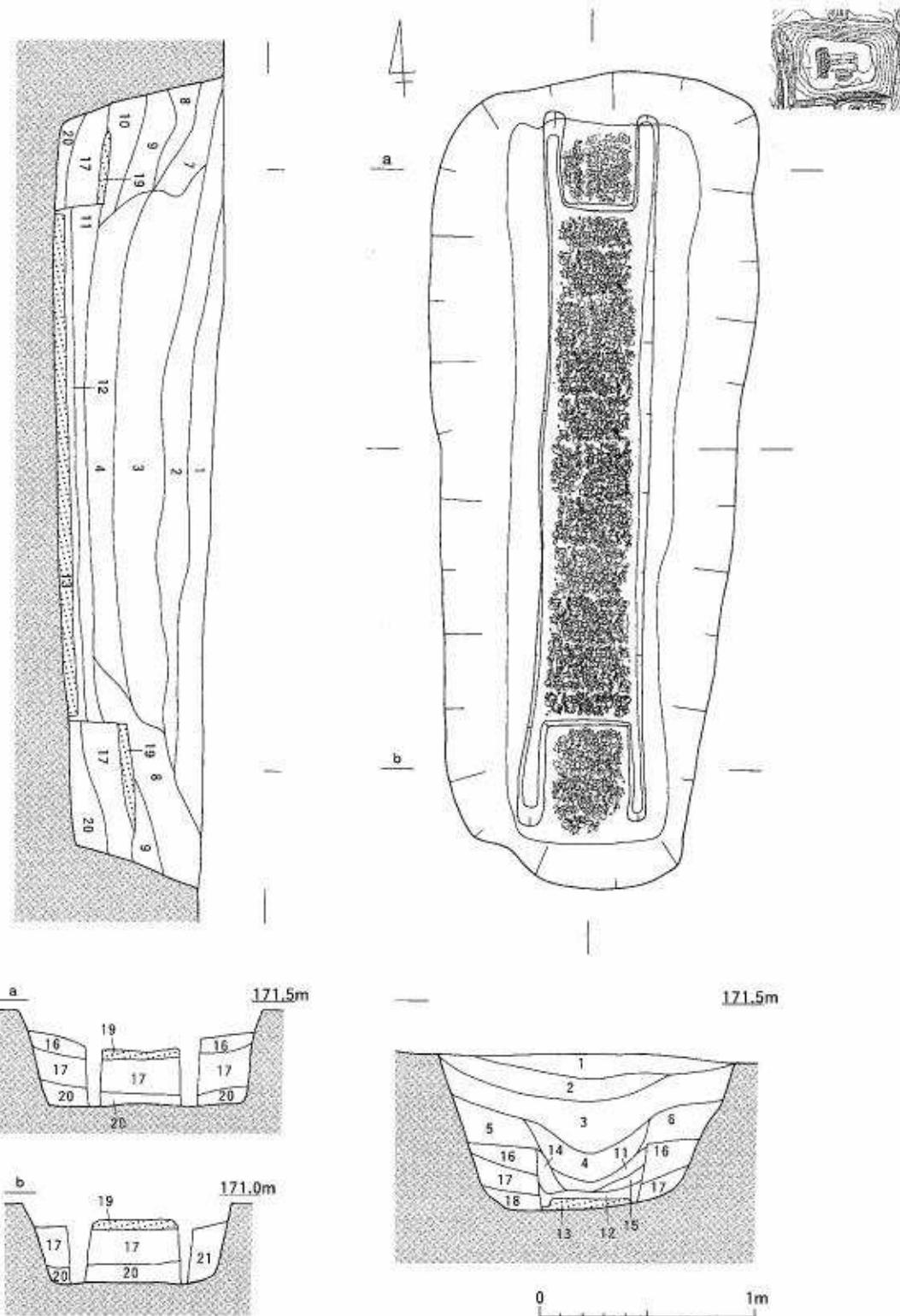
埋葬施設の断ち割りおよび墓壙の完掘調査によって、墓壙はやや内側にむかって掘り下げられており、床面は長さ2.90m、幅は南側の立ち上がりがわずかに残存しており1.96mを測る長方形を呈している。



第24図 梅田16号墳 墳丘断面図 (1/100)



第25図 梅田16号墳 SX01 平・断面図 (1/30)



1. 25YR 7/8 棕色土 塵細砂～粗砂
 2. 75YR 6/6 棕色土 細砂～粗砂
 3. 5YR 5/6 明赤褐色土 細砂～粗砂
 4. 5YR 4/8 赤褐色土 細砂～粗砂 (10YR 6/6 明黃褐色塊をわずかに含む)
 5. 75YR 5/6 明褐土 粗砂～粗砂
 6. 75YR 6/6 棕色土 細砂～粗砂 (10YR 6/6 明黃褐色塊を多く含む)
 7. 10YR 8/4 淡黃褐色土 枯葉砂～粗砂
 (25YR 6/8 棕色土および10YR 6/6 明黃褐色塊をわずかに含む)
 8. 10YR 8/4 淡黃褐色土 枯葉砂～粗砂 (10YR 6/6 明黃褐色塊を多く含む)
 9. 25YR 6/8 棕色土 砂質砂～粗砂
 (10YR 6/6 明黃褐色塊をわずかに含む)
 10. 10YR 8/4 淡黃褐色土 砂質砂～粗砂
 (10YR 6/6 明黃褐色塊を多く含む)
11. 25YR 6/8 棕色土 植物砂～粗砂 (10YR 6/6 明黃褐色塊をわずかに含む)
 12. 10YR 7/6 明黃褐色土 植物砂～粗砂 (10YR 6/6 明黃褐色塊を多く含む)
 13. 10YR 6/6 明黃褐色土 植物砂 (よ1～4cmの小礫層)
 14. 75YR 7/6 棕色土 細砂～粗砂
 15. 75YR 7/8 黄褐色土 植物砂
 16. 75YR 6/8 棕色土 細砂～粗砂
 (10YR 6/6 明黃褐色塊を多く含む)
 17. 10YR 6/6 明黃褐色土 細砂～粗砂
 18. 75YR 6/8 棕色土 細砂
 19. 10YR 6/6 明黃褐色土 細砂～粗砂 (よ1～4cmの小礫層)
 20. 10YR 6/6 明黃褐色土 細砂～粗砂
 (5YR 5/8 明赤褐色土および10YR 8/4 淡黃褐色土をわずかに含む)
 21. 75YR 5/8 明褐色土 植物砂～粗砂

第26図 梅田16号墳 SX02 平・断面図 (1/30)

木棺の両側板は、墓壙床面とほぼ同じ長さをもち、墓壙の東壁とは接し、西壁ではわずかに4~6cm程度の隙間がみられるに過ぎない状態である。このため、側板の規格にあわせて墓壙を掘り込み、木棺が組み合わされたものと考えられる。小口板および側板は、西半部では1層、東半部では2層に周囲を埋め固定されている。墓壙は、検出面から深さ約0.8mを測る。

(以上 平成10年度調査)

SX02

SX01の西に位置し、南北方向(N 5° E)を主軸とする埋葬施設が検出された。3基並んだSX01および後述するSX03・04と主軸は直交し、それらとの切り合い関係は認められなかった。墓壙は長さ3.76m、幅1.39mを測り、南側の幅がわずかに狭まる平面形は台形状を呈している。

墓壙の中央にはSX01と同様に、小口板が側板の内側に挟み込まれる「H」字形構造の木棺が納められていた。墓壙検出面から約0.5m掘り下げた地点では、長さ2.42m、幅0.52mを測る木棺の痕跡と、両側板に挟まれた小口板の南北両外側から1~4cm程度の小礫を敷き詰めた礫群が検出された。側板は、ともに約3.3mを測り、中央に小口板で仕切った棺空間を設け、小口板から外側は北側で0.4m、南側で0.48m長く伸びている。棺検出面から約0.25m掘り下げた棺底には、1~4cm程度の小礫が一面に敷き詰められた礫床が広がり、東西壁際には、幅・深さとも約4cmを測る側板の痕跡が確認された。

棺内中央の東端から刀子(M 3)が出土した。

(以上 平成9年度調査)

埋葬施設の断ち割りおよび墓壙の完掘調査によって、墓壙はやや内側にむかって掘り下げられており、床面は長さ3.34m、幅0.76mを測る細長い長方形を呈している。木棺の両側板は、墓壙の南壁では5~9cm程度の隙間がみられるが、墓壙床面とほぼ同じ長さをもつことから、SX01同様、側板の規格にあわせて墓壙が掘り込まれたものと考えられる。小口板および側板は、2層あるいは3層で周囲を埋め固定され、棺底および小口板外側の棺上面と同一の高さに礫を敷き詰めている。礫敷きは、その他からは確認されず、断ち割り断面の観察でも礫を一面に敷き詰めただけで積み重ねていないものであった。墓壙は、検出面から深さ約0.8mを測る。

(以上 平成10年度調査)

SX03・SX04

SX01の南から2基の埋葬施設が検出され、SX01を含めた3基は北にSX01、中央にSX04、南にSX03が並んで位置している。SX03・04の2基については、墓壙検出時の平面では両者の切り合い関係を明確に判断することができなかったが、南北方向の土層断面の観察から中央のSX04が南北両側のSX01・03を切り込んでつくられた最も新しい埋葬施設であることが判明した。

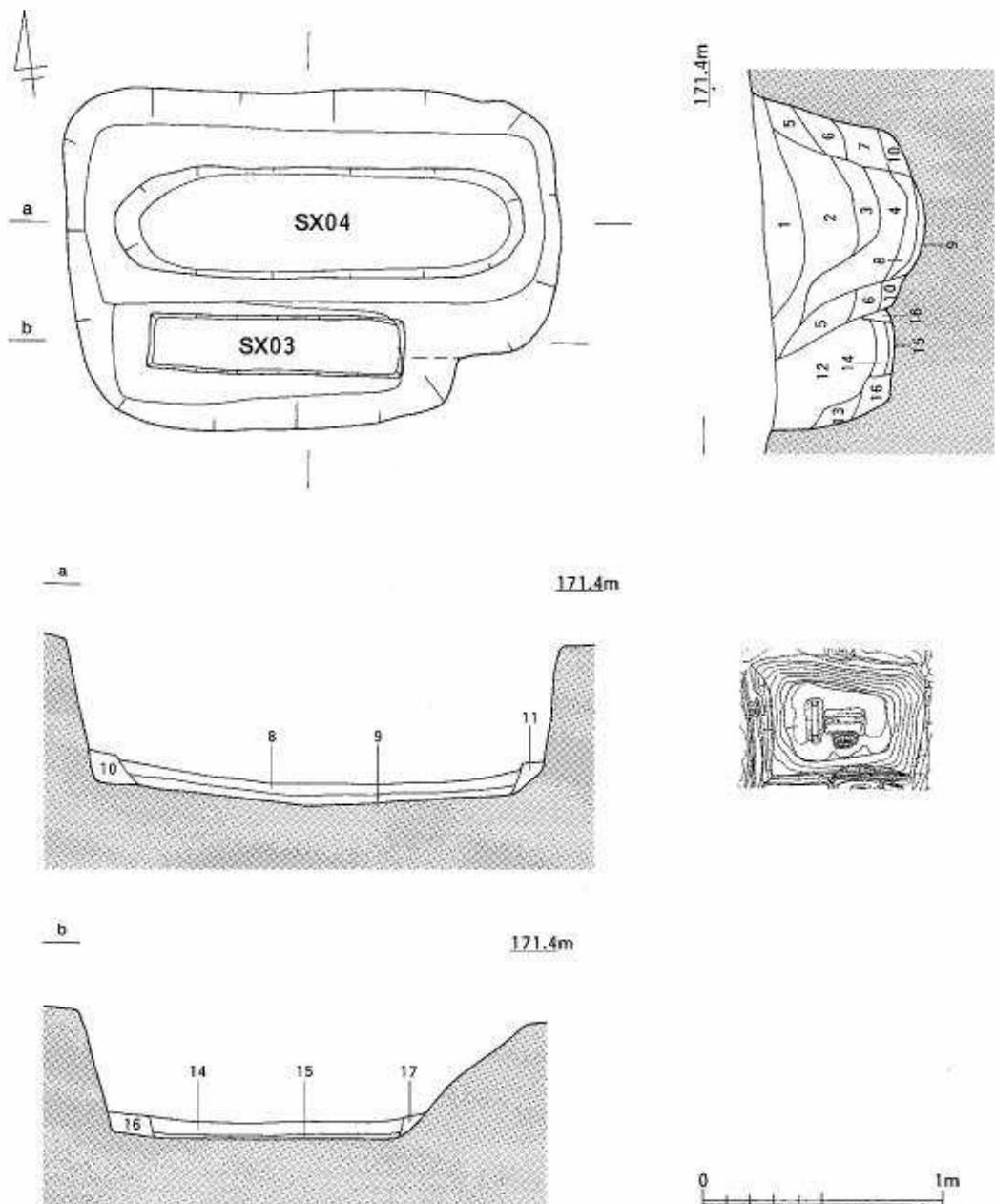
SX03は、ほぼ東西方向(N 100° E)を主軸とし、墓壙の北半部はSX04の構築時に壊されているが、残存する南半部から推定すると、長さ約1.6m、幅約0.7mを測る長方形を呈していたものと考えられる。墓壙のほぼ中央には、長さ1.06m、幅0.24m、深さ約0.1mを測る小型の木棺が納められており、墓壙検出面から約0.4m掘り下げた地点で確認された。

棺内および墓壙内から遺物は出土しなかった。

SX04は、平行するSX01・03とほぼ主軸と同じ(N 98° E)にし、墓壙は長さ2.07m、幅1.10mを測る平面形は長方形を呈している。

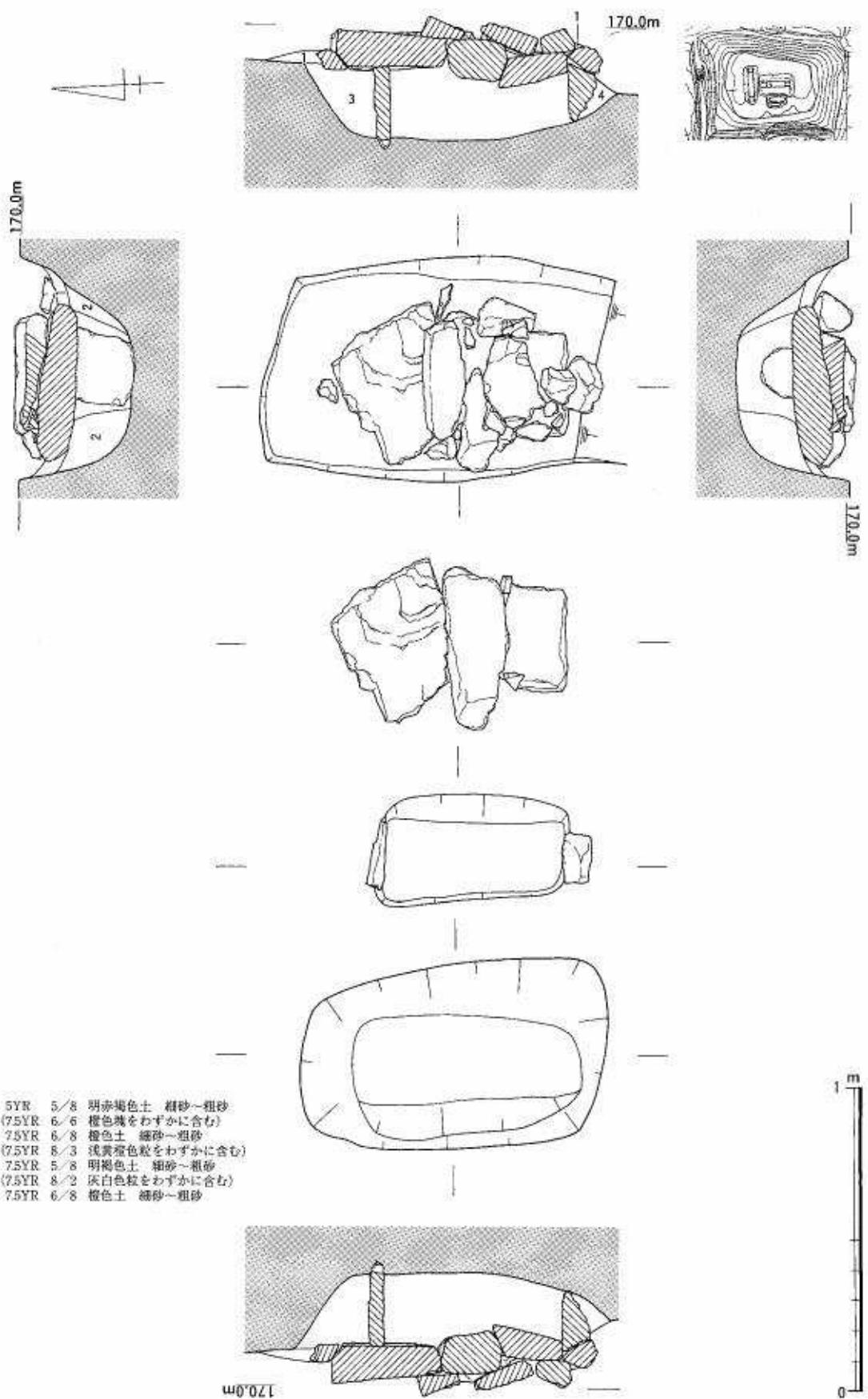
墓壙の中央には、検出面から約0.5m掘り下げた地点で、長さ1.70m、幅0.46mを測る長楕円形を呈する棺の痕跡が確認された。棺の壁面は内側に傾斜し、床面も緩やかな曲線を描いていることから、舟形の木棺が納められていたものと考えられる。

棺内および墓壙内から遺物は出土しなかった。



1. 7SYR 7/6 橙色土 細砂～粗砂 (10YR 7/4 にぶい黄橙色塊をわずかに含む)
2. 7SYR 6/8 橙色土 細砂～粗砂 (10YR 7/4 にぶい黄橙色塊を多く含む)
3. 7SYR 6/6 橙色土 細砂～粗砂 (10YR 7/4 にぶい黄橙色塊を多く含む)
4. 25YR 5/8 明赤褐色土 細砂～粗砂
5. 7SYR 6/8 橙色土 硬粗砂～粗砂 (10YR 7/4 にぶい黄橙色塊を多く含む)
6. 5YR 6/6 橙色土 細砂～粗砂 (10YR 7/4 にぶい黄橙色塊を多く含む)
7. 5YR 5/6 明赤褐色土 細砂～粗砂 (10YR 7/4 にぶい黄橙色塊を多く含む)
8. 7SYR 6/6 橙色土 硬粗砂～粗砂
9. 10YR 7/4 にぶい黄橙色土 細砂～粗砂
10. 10YR 6/6 明黄褐色土 細砂～粗砂 (10YR 8/3 浅黄橙色粒をわずかに含む)
11. 7SYR 6/6 橙色土 細砂～粗砂
12. 7SYR 6/6 橙色土 粗砂～粗砂 (10YR 7/4 にぶい黄橙色塊を多く含む)
13. 5YR 6/6 橙色土 硬粗砂～粗砂
14. 7SYR 5/6 明褐色土 硬粗砂～粗砂
15. 7SYR 7/6 橙色土 硬粗砂～粗砂
16. 7SYR 6/8 橙色土 細砂～粗砂 (10YR 8/3 浅黄橙色粒をわずかに含む)
17. 7SYR 6/8 橙色土 細砂～粗砂

第27図 梅田16号墳 SX03・04 平・断面図 (1/30)



第28図 梅田16号墳 SX05 平・断面図 (1/20)

SX05

16号墳の西側区画溝内の中央やや北に位置し、南北方向（N 4° E）を主軸とする埋葬施設が検出された。溝がかなり埋まつた段階に埋葬されたものであるため、16号墳にともなうものとは断定できない部分が残されている。東側には、区画溝底部から新たに16号墳の墳丘西裾を削り込んだ溝状の遺構（東側区画溝）が掘られている。墓壙は長さ1.02m、幅0.74mを測り、平面形はほぼ長方形を呈している。墓壙上面からは、3石の蓋石とそれらの合わせ目を覆うようして置かれた板状の2石および約10~20cmの角礫数石が検出された。

蓋石を取り上げた内部には、両小口に板状の石が立てられており、両側壁には側板を用いた木棺が納められていたと考えられる。木棺は長さ0.59m、幅0.39m、深さ0.24mを測る。

棺内および墓壙内から遺物は出土しなかった。

出土遺物（第50、51図・写真図版121、124）

16号墳では、墳丘裾部から土師器が1点（2）と、SX01の棺外およびSX02の棺内中央の東端からそれぞれ刀子（M 2・M 3）が1点ずつ出土している。

2は土師器の高杯の杯部である。脚部は欠損しているが、杯部の口縁は外側に開く形状を呈し、調整は全体的に摩滅により不明瞭であるが、内面の一部に横方向のヘラミガキの痕跡が残る。

M 2とM 3は刀子である。M 2は鋒の一部で、現存長2.85cm、幅1.3cm、厚0.3cmである。M 3は目釘孔の半分から茎尻にかけて欠損するため、現存長10.2cm、刀身長7.75cm、幅1.4cm、厚0.4cm、片側で反りが強い。茎は現存長2.5cm、幅1.1cm、厚0.3cm、目釘孔は推定径0.3cmになる。刀子と布地の間に木質は確認できなかったことから、鞘及び柄などの装具をつけずに直接、布に捲いて副葬したようである。特に鋒周辺に布地が残る。

SK02・03

（第12、29、30図・写真図版37、38）

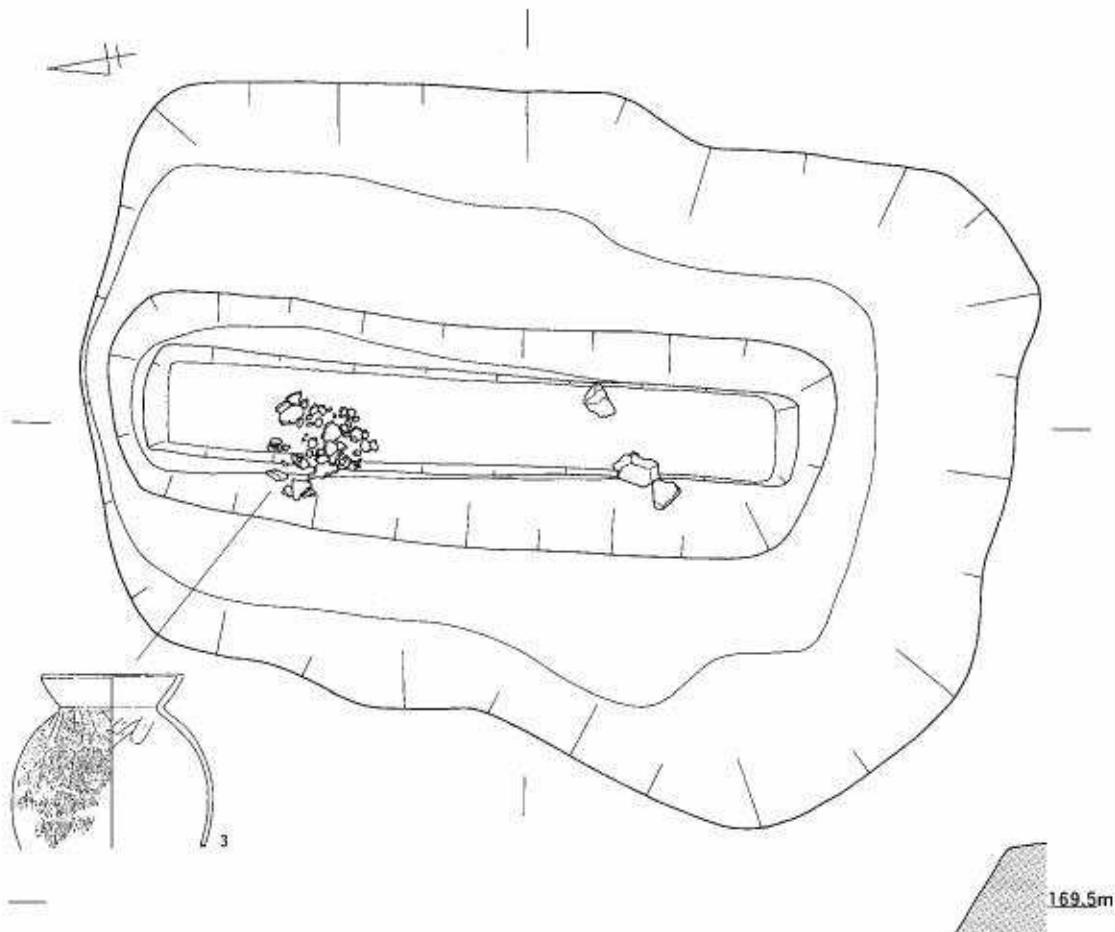
立地および埋葬施設

SK02 SK02は15号墳と共有する16号墳の東側区画溝の北端に位置し、区画溝および15・16号墳の墳丘北側裾部の一部を削り込んでつくられた埋葬施設である。SK02が立地する15号墳北西付近は比較的緩やかに北方向に傾斜する地形であるが、検出された墓壙の上端（南）と下端（北）では約1mの高低差がみられる。墓壙は長さ3.68m、幅2.52mを測る不整形な五角形を呈しており、南側では約0.9m、中央部では約0.3m掘り込んで平坦面をつくり、さらに深く掘り下げている。

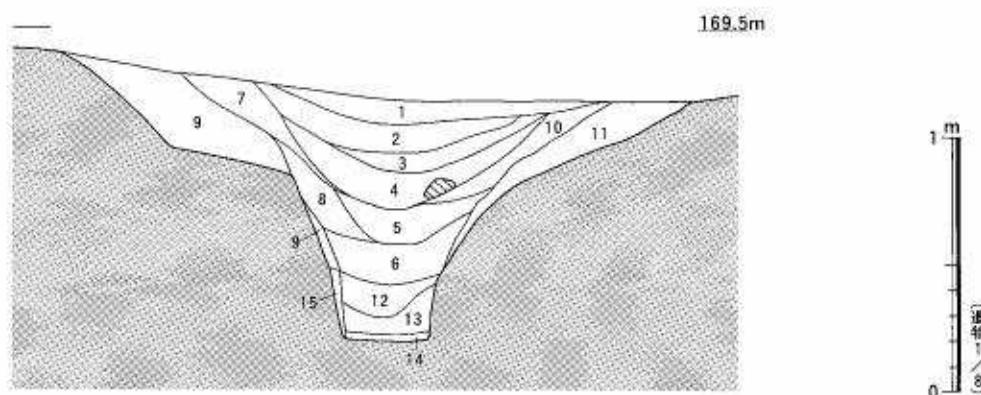
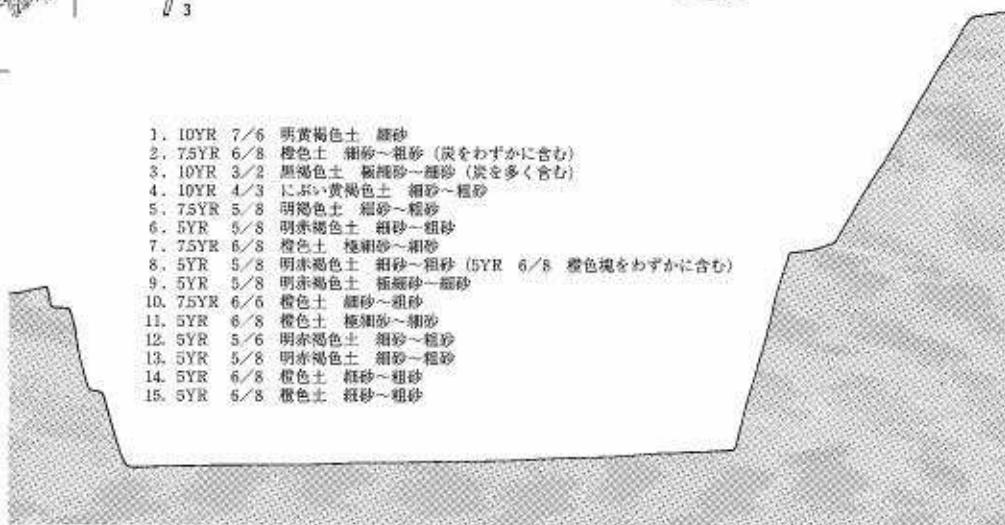
墓壙の中央には、南北方向（N10° E）を主軸とする木棺が納められており、墓壙検出面から約0.7m、墓壙平坦面から約0.4m掘り下げた地点で確認された。木棺は長さ2.61m、幅0.39m、深さ0.28mを測る。墓壙上層から土師器の甕（3）が散乱した状態で出土した。

SK03 SK03は16号墳の北側裾部の平坦地中央に位置し、16号墳の墳丘の一部を削り込んでつくられた埋葬施設である。墓壙は長さ3.06m、幅2.04mを測る平面形は長方形を呈しており、約0.3~0.7m掘り下げて平坦面をつくり、さらに深く掘り下げている。

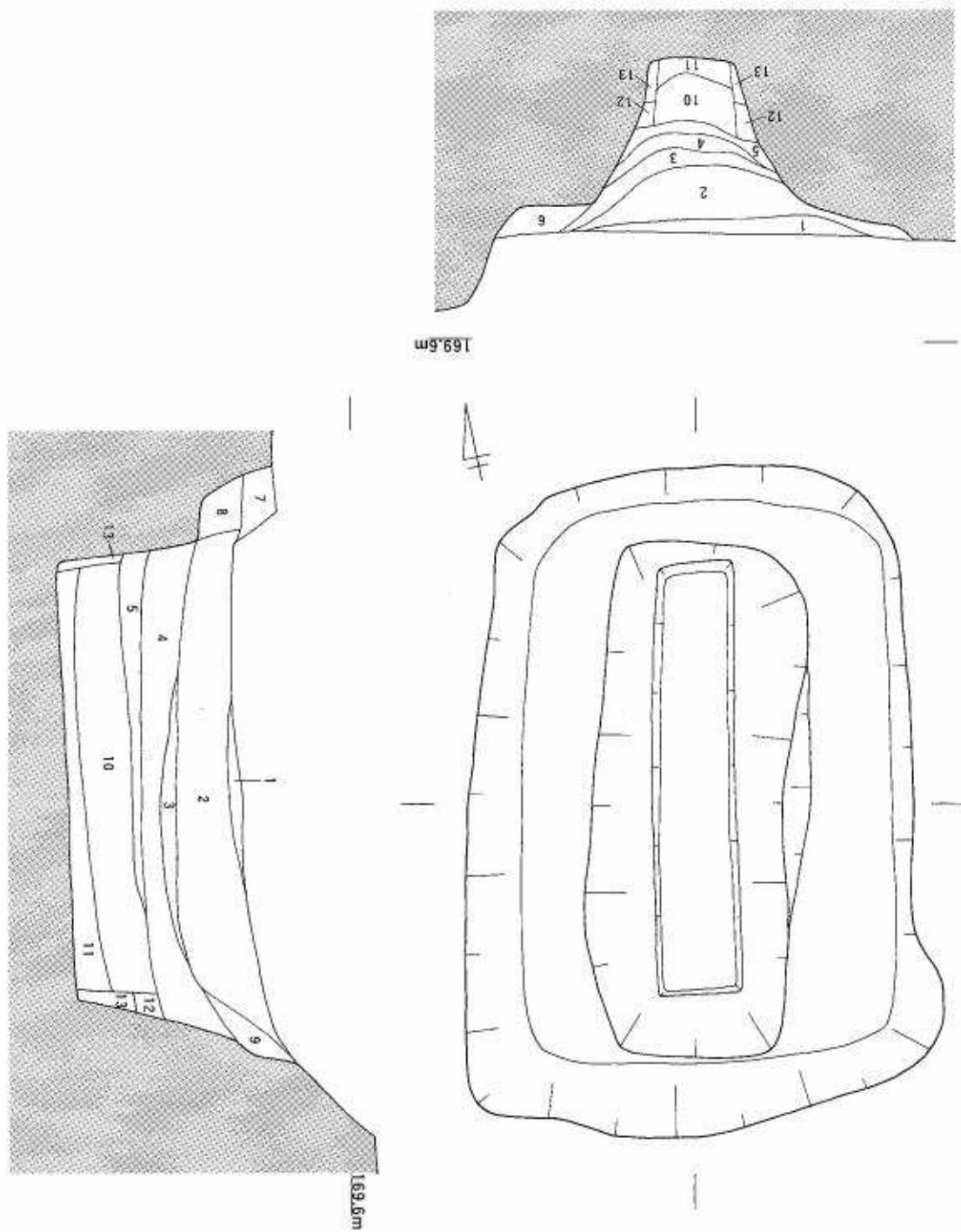
墓壙の中央には、ほぼ南北方向（N14° E）を主軸とする木棺が納められており、墓壙検出面から約



1. 10YR 7/6 明黄褐色土 細砂
2. 75YR 6/8 棕色土 細砂～粗砂 (炭をわずかに含む)
3. 10YR 3/2 黒褐色土 極細砂～細砂 (炭を多く含む)
4. 10YR 4/3 にぶい黄褐色土 細砂～粗砂
5. 75YR 5/8 明褐色土 細砂～粗砂
6. 5YR 5/8 明赤褐色土 細砂～粗砂
7. 75YR 6/8 棕色土 極細砂～粗砂
8. 5YR 5/8 明赤褐色土 粗砂～粗砂 (SYR 6/8 橙色塊をわずかに含む)
9. 5YR 5/8 明赤褐色土 極細砂～細砂
10. 75YR 6/6 棕色土 細砂～粗砂
11. 5YR 6/8 棕色土 極細砂～細砂
12. 5YR 5/6 明赤褐色土 細砂～粗砂
13. 5YR 5/8 明赤褐色土 細砂～粗砂
14. 5YR 6/8 棕色土 細砂～粗砂
15. 5YR 5/8 棕色土 細砂～粗砂



第29図 SK02 平・断面図 (1/30)



- 1. 10YR 7/4 にぶい黄褐色土 細砂～粗砂
- 2. 10YR 7/3 にぶい黄褐色土 細砂～粗砂
- 3. 10YR 7/3 にぶい黄褐色土 細砂～粗砂 (10YR 6/2 灰黄褐色塊をわずかに含む)
- 4. 10YR 4/3 にぶい黄褐色土 極細砂～細砂
- 5. 10YR 6/6 明黄褐色土 極細砂～粗砂
- 6. 10YR 5/4 にぶい黄褐色土 細砂～粗砂
- 7. 10YR 7/6 明黄褐色土 細砂～粗砂
- 8. 75YR 6/8 褐色土 粗砂～粗砂 (75YR 7/8 黄褐色塊を多く含む)
- 9. 75YR 6/8 褐色土 粗砂～粗砂 (75YR 7/8 黄褐色塊をわずかに含む)
- 10. 10YR 3/3 褐褐色土 極細砂～粗砂
- 11. 10YR 5/4 にぶい黄褐色土 細砂～粗砂 (7.5YR 7/8 黄褐色塊をわずかに含む)
- 12. 10YR 5/4 にぶい黄褐色土 細砂～粗砂 (10YR 8/2 灰白色粒をわずかに含む)
- 13. 10YR 6/6 明黄褐色土 細砂～粗砂 (10YR 8/2 灰白 色粒をわずかに含む)

第30図 SK03 平・断面図 (1/30)

0.5m掘り下げた地点で確認された。木棺は長さ1.96m、幅0.38m、深さ0.36mを測る。

棺内および墓壙内から遺物は出土しなかった。

出土遺物（第50図・写真図版121）

SK02の墓壙上層から土師器1点（3）が出土している。

3は土師器の甕である。球形の体部に外傾する口縁部をもつもので、体部外面にはハケメがみられる。

口縁部はナデにより調整され、体部内面にはヘラケズリが認められる。

梅田17号墳

（第12、31～32図・写真図版39～41）

立地および墳丘

17号墳は16号墳の西、主尾根平坦地の西端に位置している。東側は16号墳の西側区画溝によって直線的に区画された古墳築造時の形状をとどめているが、西および南北両側は広く削平され、後世の地形改変の影響をうけたものと考えられる。このため、墳丘は北東および東側裾部のわずかな部分のみが残存している状態であり、墳形および墳丘規模などの詳細は不明である。しかし、残存している墳丘や周囲の地形あるいは検出された埋葬施設の位置などから、東西約11m、南北約13mを測る方墳であったと考えられる。16号墳の西側区画溝の底部は標高169.8mを測るため、墳頂部とは最高で約1mの比高差が認められる。

埋葬施設

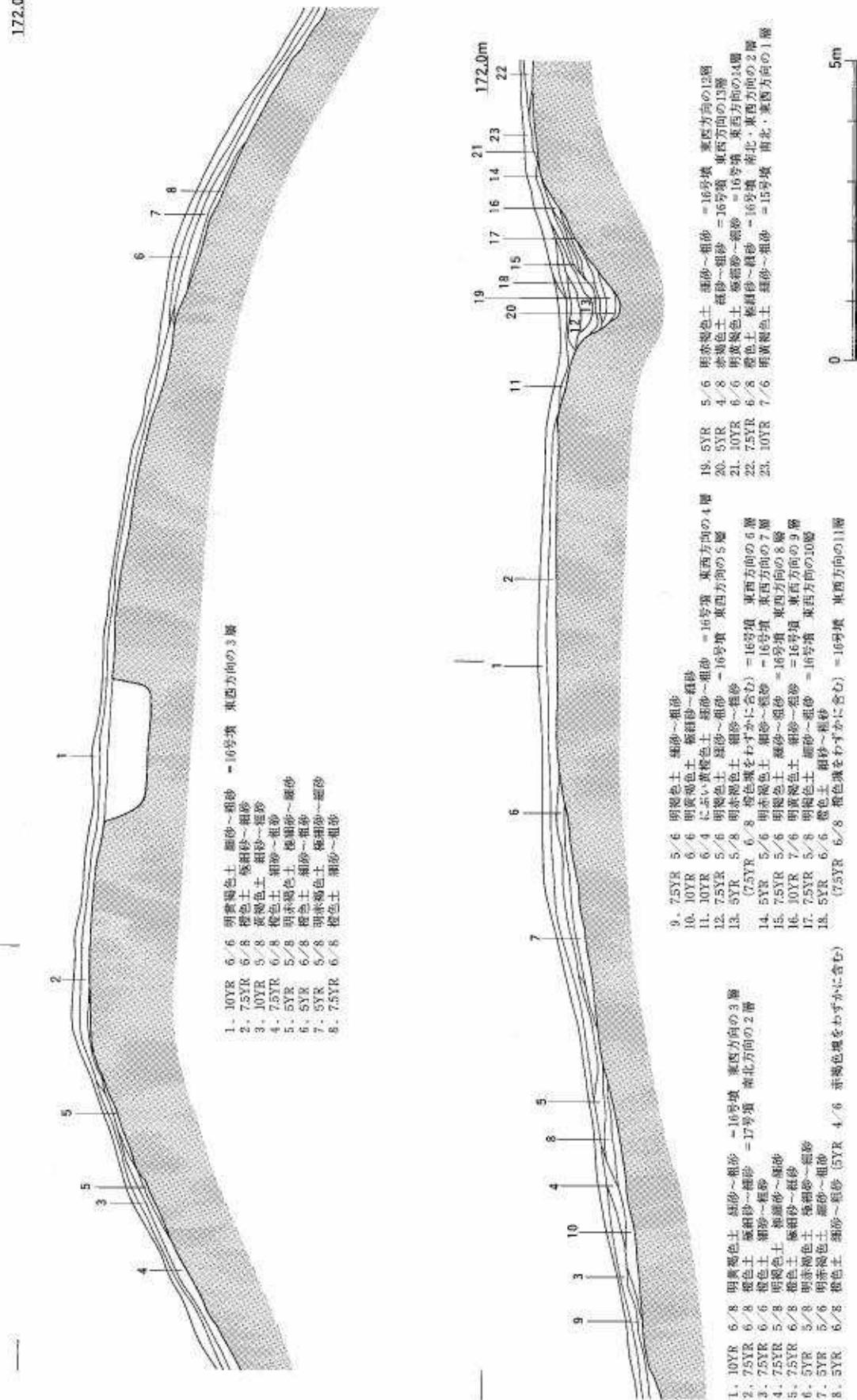
墳頂部からわずかに南に下がった地点から、ほぼ東西方向（N76°E）を主軸とする木棺直葬の埋葬施設が1基検出された。墓壙は長さ4.88m、幅2.42mを測り、平面形は西側が若干狭まった台形状を呈している。墓壙上面から約0.4m掘り下げた地点で平坦面がつくられ、中央はさらに深く掘り下げが行われている。

墓壙の中央には、長さ4.54m、幅0.54m、深さ0.22mを測る長大な木棺が納められており、墓壙検出面から約0.4m掘り下げた地点で確認された。棺の側壁の立ち上がりおよび床面の形状などから割竹形の木棺であったと考えられる。

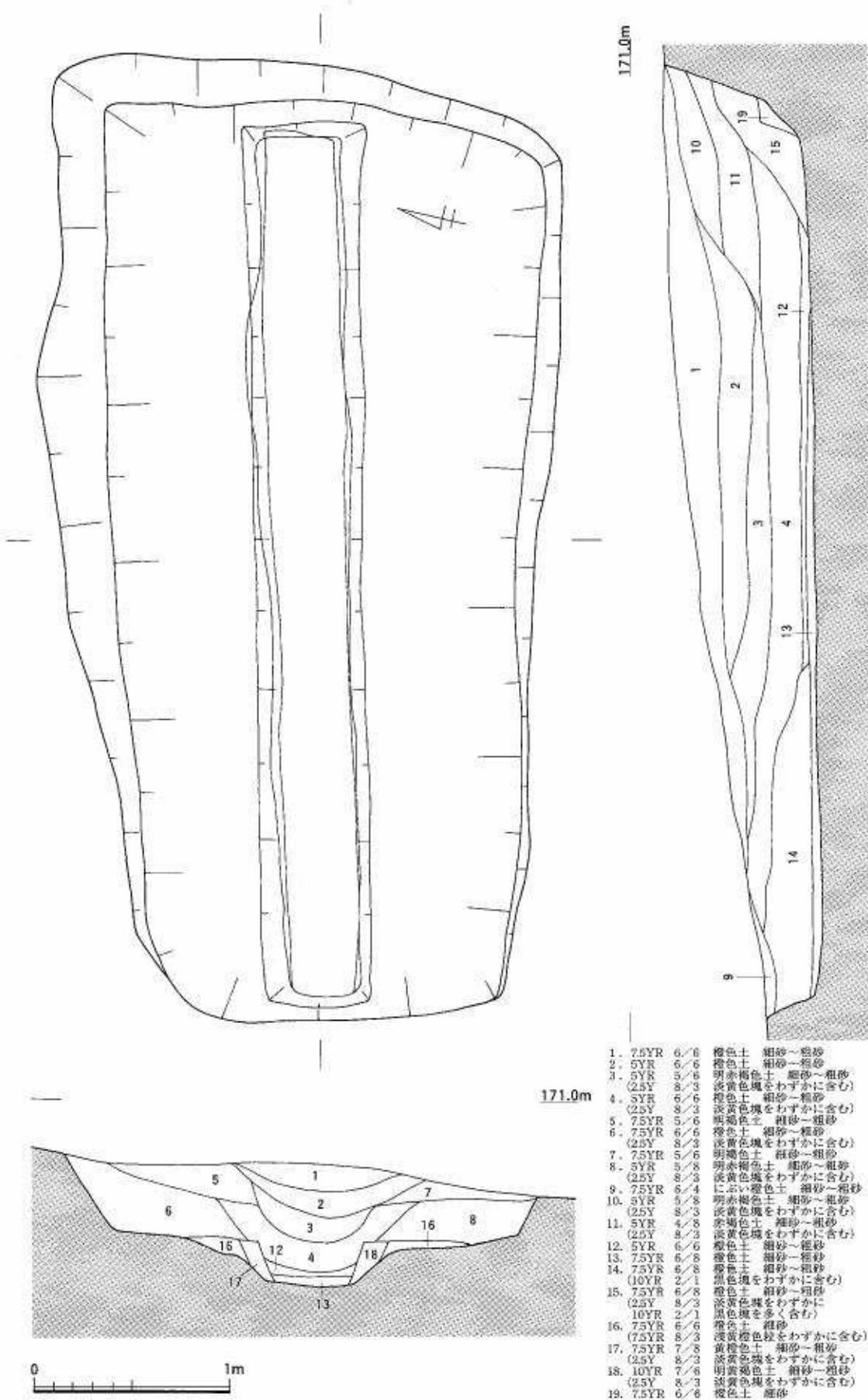
棺内および墓壙内から遺物は出土しなかった。

出土遺物

墳丘および埋葬施設から遺物は出土しなかった。



第31図 梅田17号墳 墳丘断面図 (1/100)



第32図 梅田17号墳 埋葬施設 平・断面図 (1/30)

第2節 梅田21・22号墳

梅田21号墳

(第12. 33~35図・写真図版44~52)

立地および墳丘

16号墳の南側裾部は、東西両側の区画溝との間に幅約5mの平坦地がつくられており、21号墳はその平坦地の東半部に築造された古墳である。16号墳の墳丘南側裾部を一部削ってつくられた長さ約7m、幅約0.5m、深さ約0.1mを測る東西方向の溝（以下、北側区画溝）は、平坦地中央で南に直角に折れ曲がり、「L」字形に続いている。折れ曲がった南方向に続く溝（以下、西側区画溝）は、長さ約5m、幅約1m、深さ約0.1mを測り、平坦地を二分している。区画溝の両端は、立ち上がりがなくなり、斜面に同化するように収束している。また、墳頂部から南側へは緩やかに傾斜しているが、溝は確認されなかった。

北および西側に設けられた「L」字形の区画溝と16号墳の東側区画溝の延長によって南側を除く三辺は、わずか0.1~0.2mであるが周囲と明確に区画されている。このため、墳丘は東西7.5m、南は区画溝先端までとし、南北5.5mを測る長方形を呈する方墳である。

埋葬施設

墳頂部からは3基の埋葬施設が検出され、中央に位置するものをSX01、東側に位置するものをSX02、西側のものをSX03とそれぞれ呼称している。東西2基の埋葬施設はともにSX01を切り込んでつくられており、また、SX03は他の2基の埋葬施設よりも上層で検出されているため、3基の中で最も新しく構築された埋葬施設と考えられる。

SX01

墳頂部の中央に位置し、東西方向（N93°E）を主軸とする埋葬施設が検出された。墓壙は、北東部はSX02に、北西部はSX03によって壊されているが、長さ2.32m、幅1.32mを測り、西辺が若干弧状を描く平面形は不整形な馬蹄形を呈している。

墓壙の中央には、長さ1.63m、幅0.48m、深さ0.27mを測る木棺が納められており、墓壙検出面から約0.5m掘り下げた地点で確認された。

棺内および墓壙内から遺物は出土しなかった。

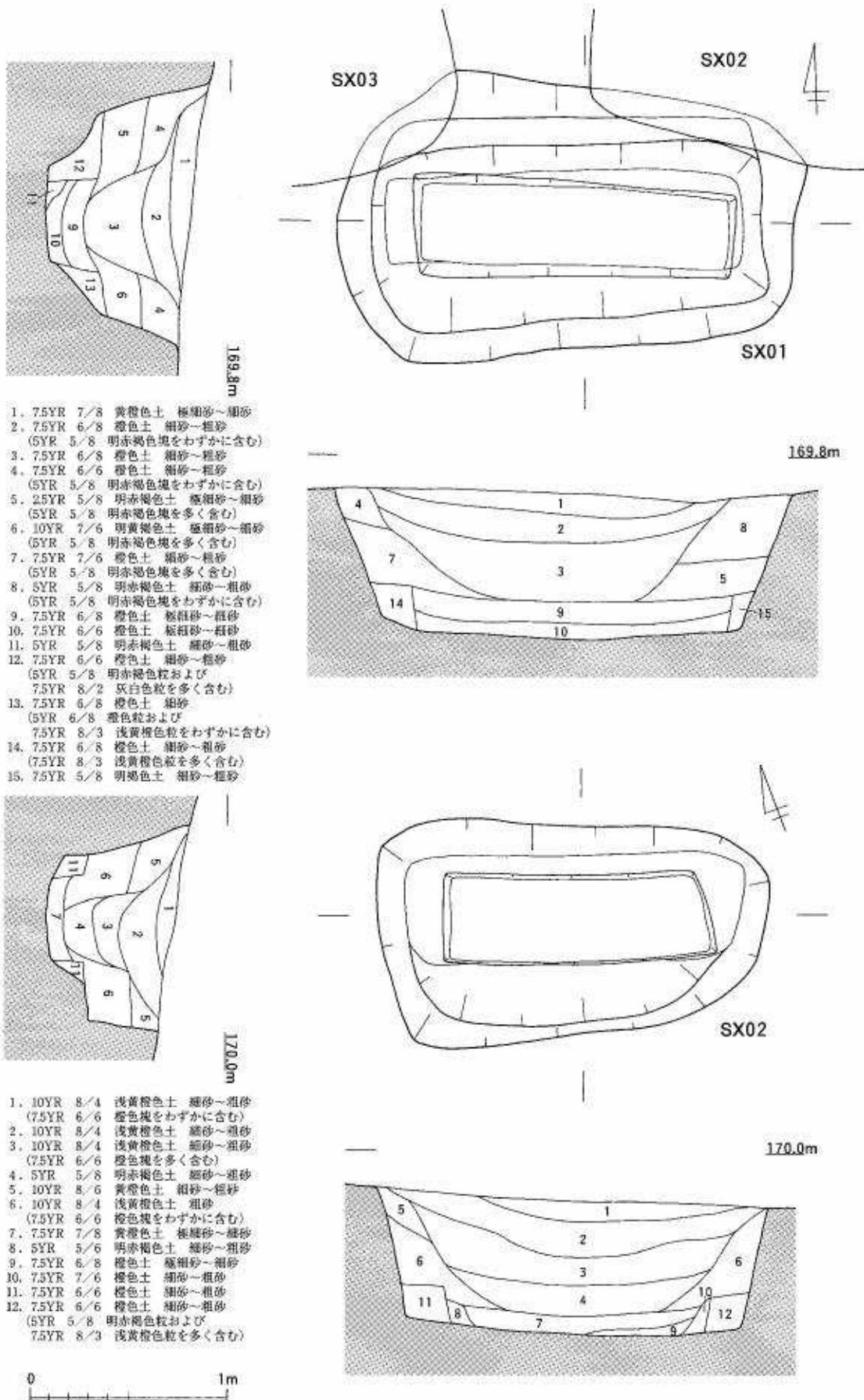
(以上 平成9年度調査)

埋葬施設の断ち割りおよび墓壙の完掘調査によって、墓壙はやや内側にむかって約0.5m掘り下げられ、そこから下層へは、木棺の側板に沿った東西に長い形状にさらに掘り下げられている。この墓壙の掘り方は、床面の中央に木棺を納めるための最小範囲の掘削が行われたためであり、21号墳下層の地盤の固さに影響をうけたものと考えられる。墓壙は、検出面から深さ約0.8mを測る。

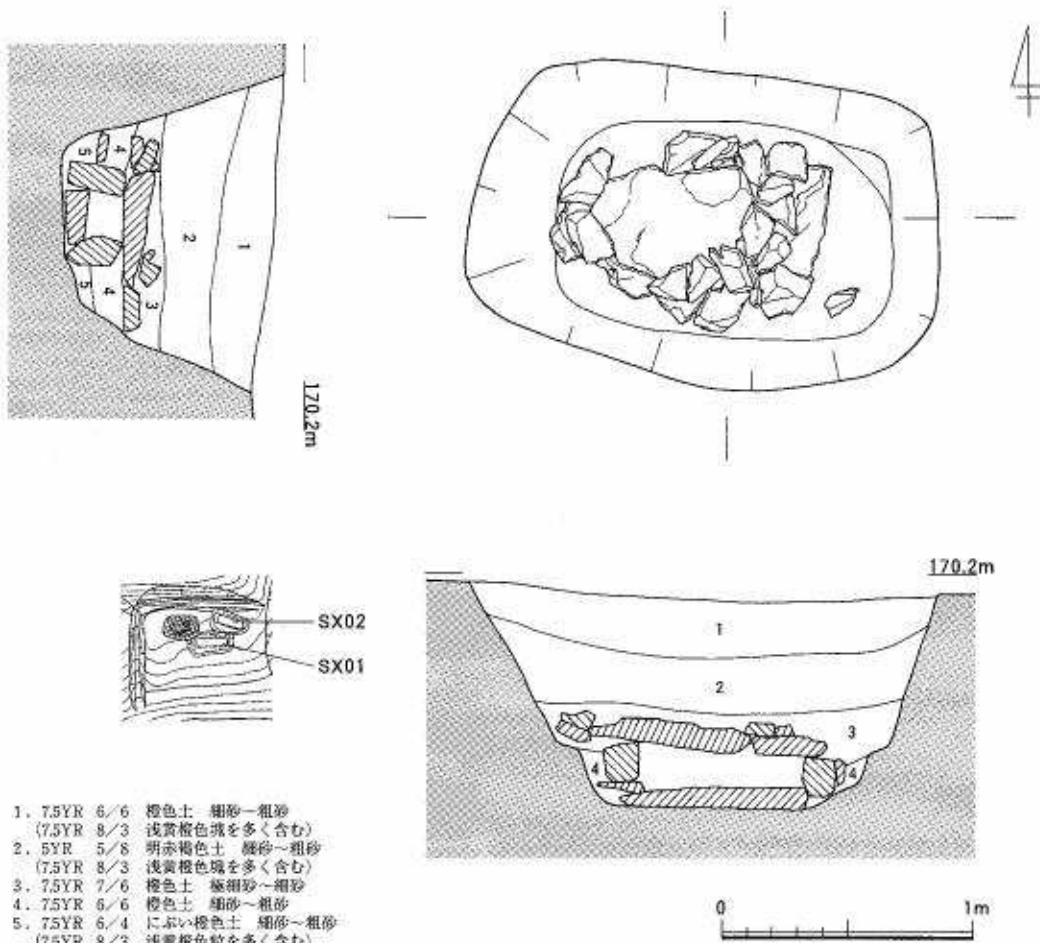
(以上 平成10年度調査)

SX02

SX01の北東に位置し、ほぼ東西方向（N112°E）を主軸とする埋葬施設が検出された。墓壙は、北側区画溝が埋没した以降に掘られており、長さ1.98m、幅1.04mを測る東側の幅がわずかに狭まる台形状を呈している。



第33図 梅田21号墳 SX01 平・断面図 (1/30) SX02 平・断面図 (1/30)



第34図 梅田21号墳 SX03 墓壙断面図 (1/30)

墓壙の中央やや北寄りには、長さ1.36m、幅0.45m、深さ0.18mを測る木棺が納められており、墓壙検出面から約0.4~0.5mの地点で確認された。

棺内および墓壙内から遺物は出土しなかった。

(以上 平成9年度調査)

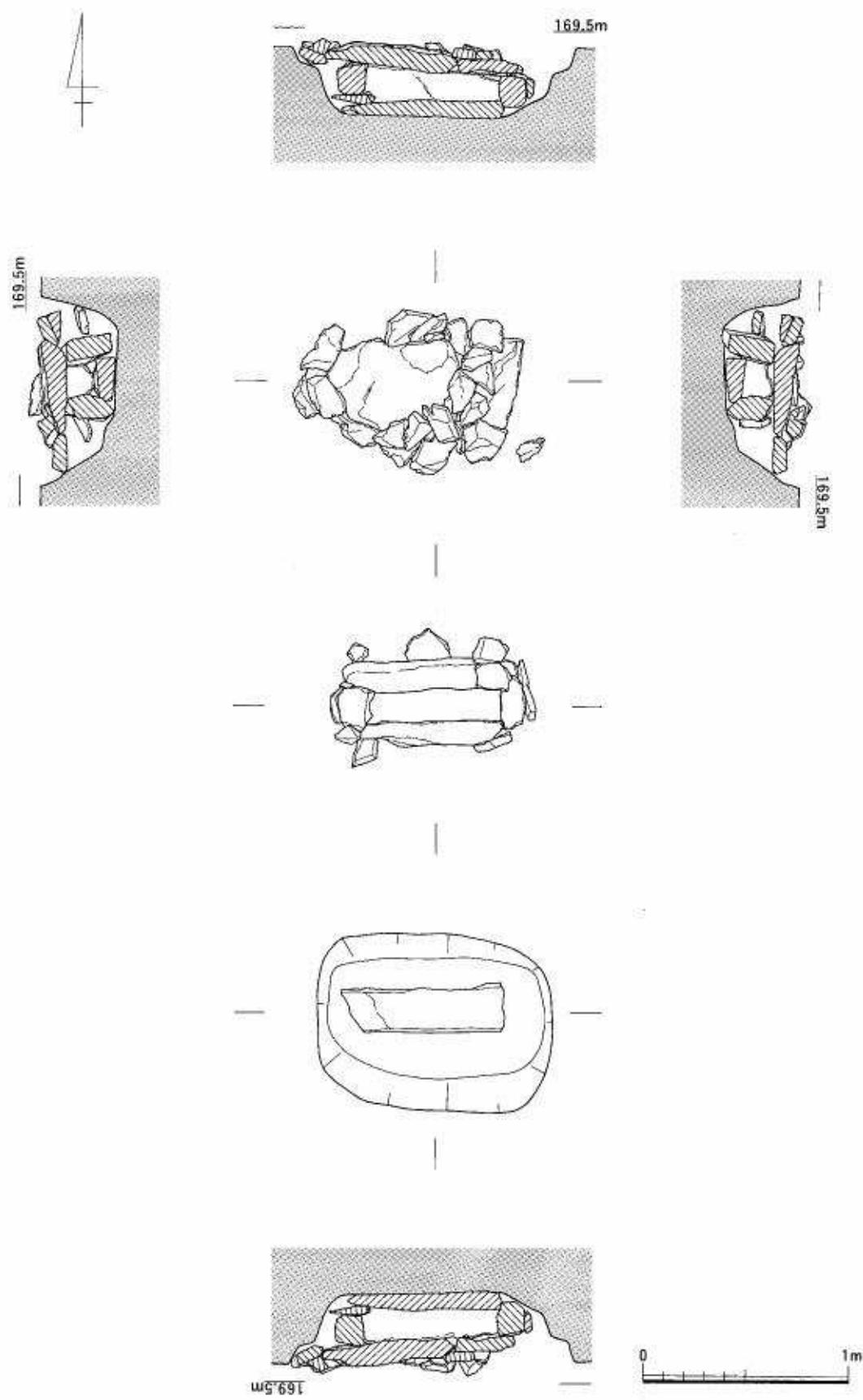
埋葬施設の断ち割りおよび墓壙の完掘調査によって、墓壙はほぼ垂直に約0.5m掘り下げられ、そこから下層へも南辺を除き、ほぼ垂直に掘り下げられている。南辺にのみ幅約0.2mの平坦面が設けられ、これにより木棺はやや北側に偏って納められている。SX01同様、墓壙掘削中に地盤の固さに影響を受けたことによるものと考えられる。

(以上 平成10年度調査)

SX03

SX01の北西に位置し、東西方向 (N89° E) を主軸とする埋葬施設が検出された。SX01とはほぼ主軸を同じにするが、SX01より約0.2m上層で検出され、またその北西部を切り込んで構築されている。墓壙は長さ1.88m、幅1.26mを測り、平面形は長方形を呈している。墓壙上面から約0.5m掘り下げた地点で2石の蓋石と約15~30cmの角礫数石が検出された。角礫は蓋石の合わせ目と周囲を覆うように置かれていた。

蓋石を取り上げた石棺内部には、土砂が充填されていたが、遺物は出土しなかった。石棺は、長さ0.66m、幅0.16mを測る小型のものであり、床面には平坦な面をもつ1石が底石として使われていた。



第35図 梅田21号墳 SX03 平・断面図 (1/30)

西小口では高さ0.19m、東小口では高さ0.12mを測り、長辺約0.8m、短辺約0.5mを測る蓋石は東小口側にわずかに傾斜して架構されていた。

(以上 平成9年度調査)

埋葬施設の断ち割りおよび墓壙の完掘調査によって、石棺は東小口では箱状の、両側壁では板状の1石をそれぞれ立てて壁面とし、西小口では薄い扁平な石の上にさらに箱状の石を積んで構築されていた。墓壙底には、長さ約0.8m、幅約0.2mを測る板状の石を1石据え、それを挟み込むように両側壁に石を立て、側壁の両端を塞ぐように両小口に石が配されていた。また、東小口では背後に扁平な1石が、北側壁では等間隔に3石が、南側壁でも両端に2石の控え石が墓壙との間に詰め、埋められている。石棺および控え石をすべて取り除いた墓壙の床面は、長さ1.07m、幅0.59mを測り、深さは検出面から約0.8mを測る。

(以上 平成10年度調査)

出土遺物

墳丘および3基の埋葬施設から遺物は出土しなかった。

梅田22号墳

(第12、36図・写真図版44、53、54)

立地および墳丘

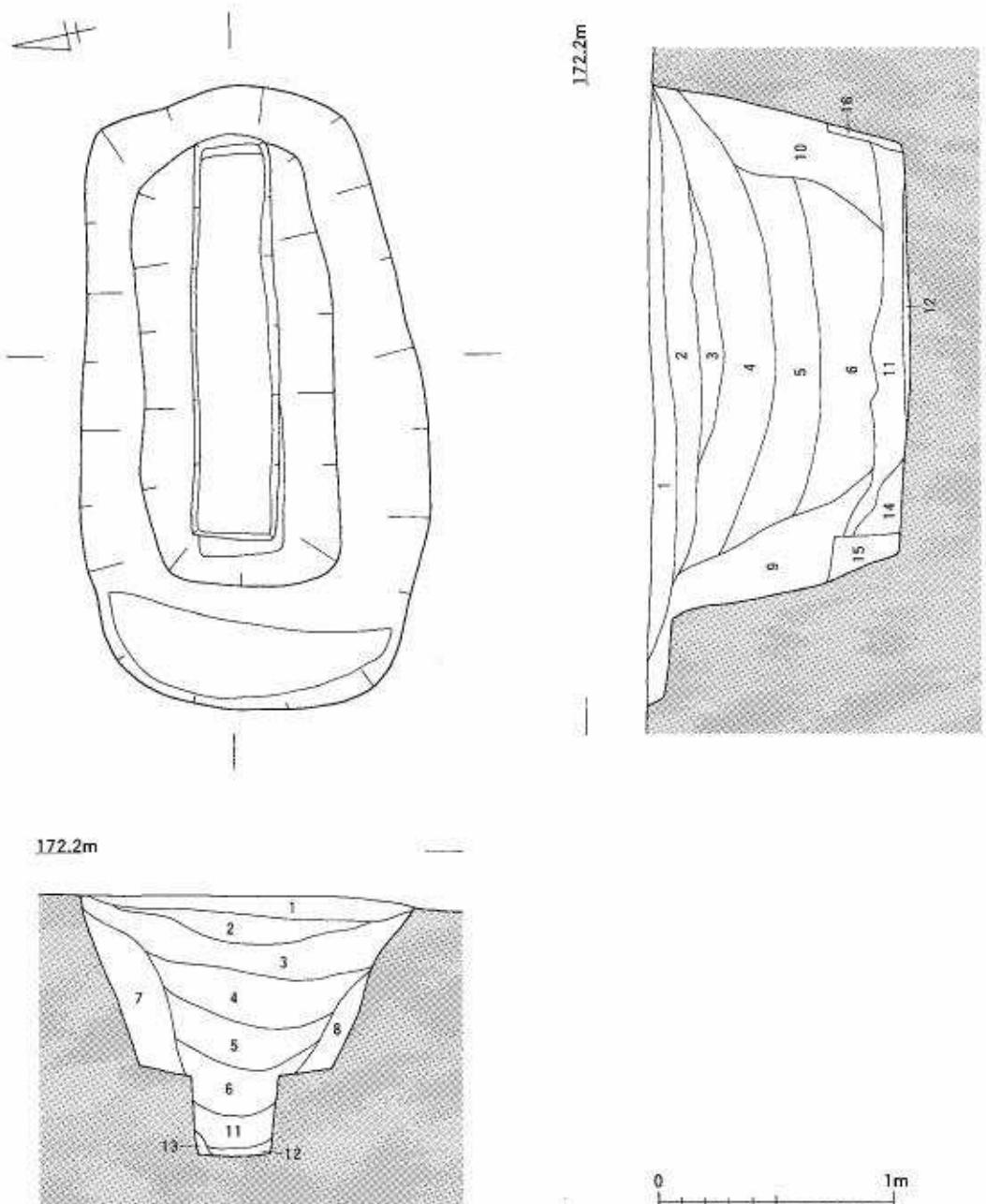
22号墳は16号墳の南側裾部に広がる平坦地の西半部に築造された古墳である。平坦地の東半部には北および西側を「L」字形に巡る溝によって区画された21号墳が存在しており、平坦地を二分する南北方向の溝（21号墳の西側区画溝）は、22号墳の東側区画溝としての機能も併せていたと考えられる。16号墳の墳丘南側裾部は、21号墳のような明確な区画溝は掘られておらず、また、墳頂部から緩やかに傾斜している南側でも溝は確認されなかった。このため、墳丘は東側区画溝を東辺、16号墳の西側区画溝の延長を西辺、16号墳の墳丘南裾を北辺とする東西5.4m、南北5.5mを測る正方形を呈する方墳である。

埋葬施設

墳頂部の平坦地西寄りから、ほぼ東西方向（N102°E）を主軸とする木棺直葬の埋葬施設が1基検出された。墓壙は長さ2.64m、幅1.42mを測り、平面形は全体的に丸みをもった梢円形状を呈している。墓壙検出面から約0.1m掘り下げた地点で西壁に、幅約0.3mの平坦面がつくられており、さらに約0.7mやや内側にむかって掘り下げた地点で木棺の痕跡と南北両側に幅約0.25mの地山の平坦面が確認された。

墓壙の中央に納められた木棺は、長さ1.71m、幅0.37m、深さは0.34mを測る。木棺検出面では、同時に地山の平坦面が確認されており、木棺の掘り込みは、木棺幅の規格にあわせて側板に沿った東西に長い形状に掘り下げられ、両小口にのみわずかに埋めもどしが行われている。墓壙は検出面から最も深いところで約1.1mを測る。

棺内および墓壙内から遺物は出土しなかった。



- 1. 5YR 5/6 明赤褐色土 細砂～粗砂
- 2. 25YR 6/8 橙色土 細砂～粗砂 (2.5YR 5/8 明赤褐色塊をわずかに含む)
- 3. 5YR 5/8 明赤褐色土 細砂～粗砂 (2.5YR 5/8 明赤褐色塊をわずかに含む)
- 4. 25YR 5/8 明赤褐色土 細砂～粗砂 (5YR 5/8 赤褐色塊をわずかに含む)
- 5. 5YR 4/6 赤褐色土 細砂～粗砂 (2.5YR 5/8 明赤褐色塊をわずかに含む)
- 6. 5YR 5/8 明赤褐色土 細砂～粗砂 (2.5YR 5/8 明赤褐色塊を多く含む)
- 7. 25YR 5/6 明赤褐色土 細砂～粗砂 (2.5YR 5/8 赤褐色塊を多く含む)
- 8. 25YR 5/8 明赤褐色土 細砂～粗砂 (5YR 5/8 赤褐色塊をわずかに含む)
- 9. 25YR 6/8 橙色土 細砂～粗砂 (2.5YR 5/8 明赤褐色塊をわずかに含む)
- 10. 7.5YR 5/8 橙色土 細砂～粗砂 (2.5YR 5/8 明赤褐色塊をわずかに含む)
- 11. 5YR 5/8 明赤褐色土 細砂～粗砂 (2.5YR 5/8 明赤褐色塊を多く含む)
- 12. 5YR 5/6 明赤褐色土 細砂～粗砂
- 13. 5YR 6/6 橙色土 細砂～粗砂
- 14. 7.5YR 6/8 橙色土 細砂～粗砂
- 15. 5YR 5/8 明赤褐色土 細砂～粗砂
- 16. 7.5YR 6/6 橙色土 細砂～粗砂

第36図 梅田22号墳 埋葬施設 平・断面図 (1/30)

出土遺物

墳丘および埋葬施設から遺物は出土しなかった。



写真3 北東方向を望む
(手前は梅田1号墳)



写真4 現在の向山・市条寺両古墳群



写真5 建設中の道路と南方向を望む

第3節 梅田18~20号墳

梅田18号墳

(第37~39図・写真図版55~59)

立地および墳丘

主尾根平坦地の西端から西へは、地形は緩やかに傾斜し（以下、西緩斜面）、安井谷と呼ばれる山間の裾部へと続いている。I群として分類した主尾根上には、平坦地および南側裾部に築造された古墳の一群と、西緩斜面に築造された古墳の一群とに大別することができる。この西緩斜面には、尾根筋に5基の古墳が並び、さらに中央に位置する古墳の周囲にも区画溝あるいは造成によってつくられた2基の古墳が存在する。また、石蓋土壙と呼称した埋葬施設や炭を多く含んだ土壙（SK04）なども検出されている。このうち、最も低位置に立地し、墳丘の大部分が路線範囲外に存在する8号墳と呼称した1基を除くすべての古墳を調査し、上方から梅田18・20・19号墳、少し離れて6号墳、さらに19号墳の墳丘南側裾部を削って築造された古墳を23号墳、尾根筋からはずれた19号墳の西斜面に立地する古墳を24号墳とそれぞれ呼称している。西緩斜面の最も高位置に立地する18号墳は標高約166.5m、中央に位置する19号墳は約161.8m、最も低位置の8号墳は約148mの地点に築造されている。西緩斜面からは、かつて向山および市条寺両古墳群が点在し、現在、県立北部農業技術センターが広がる西方向と、安井川が流れる南の平地部への眺望が開けている。

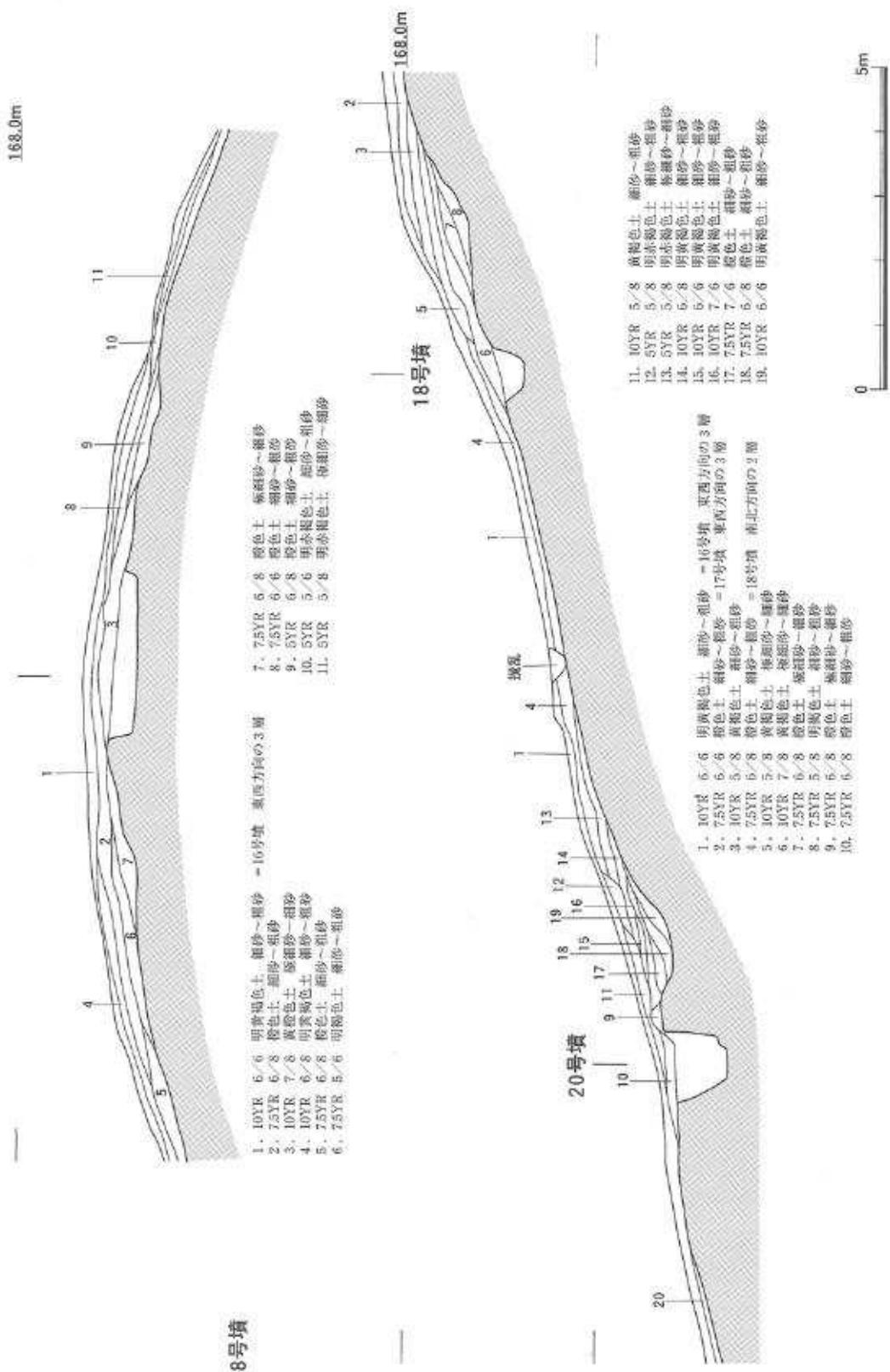
18号墳は、主尾根平坦地から緩やかに傾斜する地形が若干急になる傾斜変換点のすぐ下方に立地しており、調査前の地形観察では明瞭にその存在を確認することはできなかった。

古墳は、斜面上方側（以下、墳丘背後）をほぼ南北方向に削り、削った残土を斜面下方側に盛土として積み上げたものと考えられる。しかし、古墳周辺は、後世に墳頂部および斜面下方側を削平され、また、墳丘背後には約1mの高さの盛土が行われ、著しい地形の改変をうけている。このため、確認された墳丘背後の掘削範囲は狭く、掘削面の上端と墳頂部との比高差は1mにも満たないものであり、掘削面と墳丘との間には半円状の区画溝が巡っているが、区画溝は幅・深さとも明確にとられることはできない状態であった。

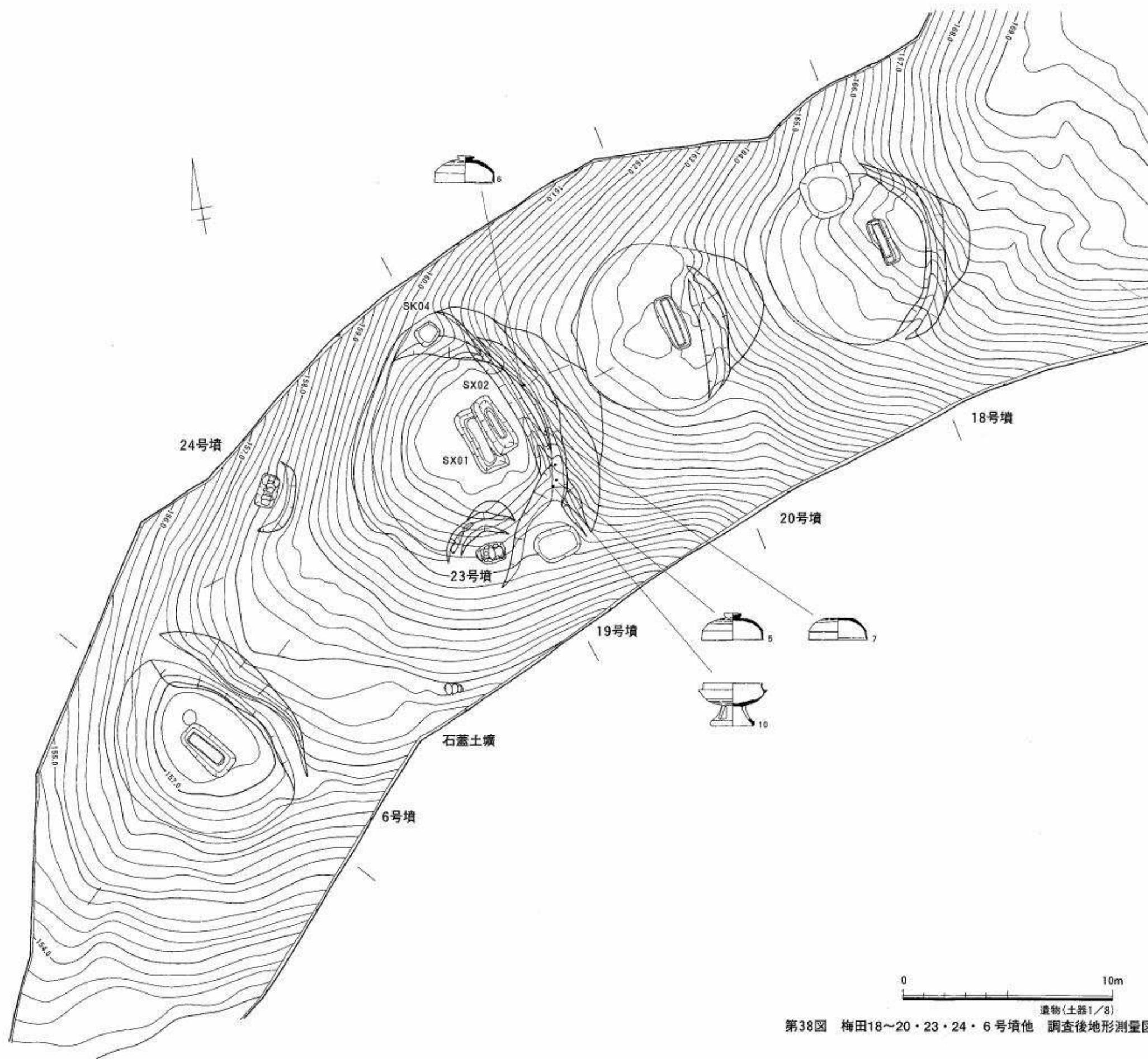
墳丘は、後世の地形改変によって墳形および規模とともに不明な点が多いが、検出された区画溝の形状などから、直径約8mを測る円墳であったと考えられる。墳丘北側裾部に約2.5m四方の土壙状の掘り



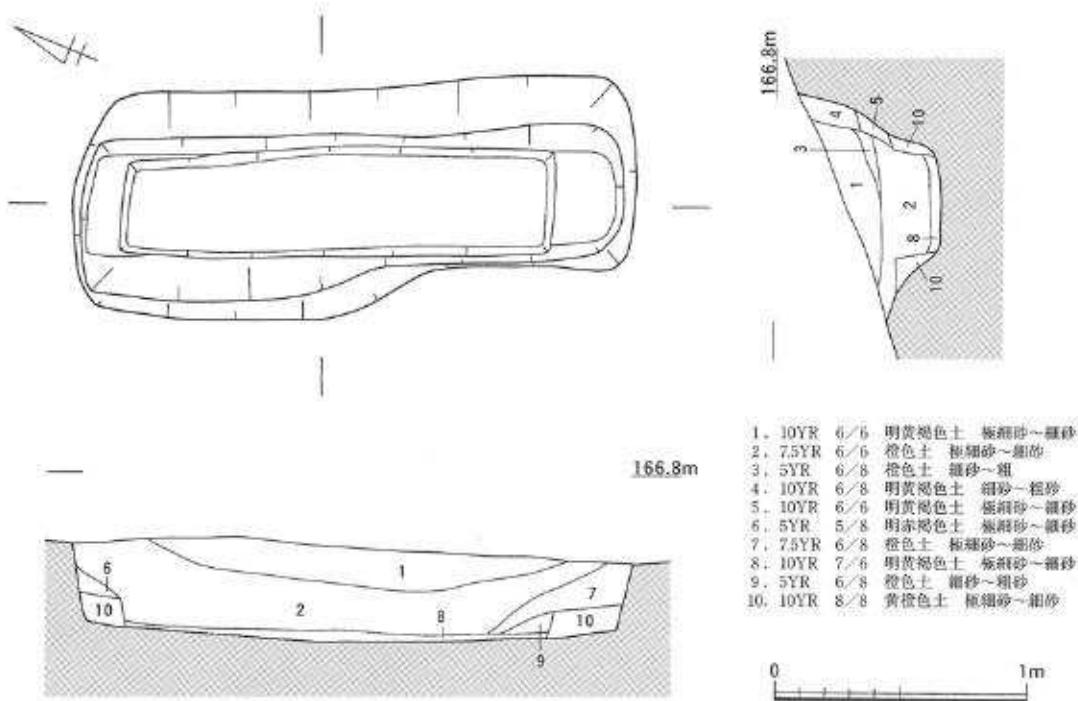
写真6 調査状況



第37図 梅田18・20号墻 墙丘断面図 (1/100)



第38図 梅田18~20・23・24・6号墳他 調査後地形測量図 (1/200)



第39図 梅田18号墳 埋葬施設 平・断面図 (1/30)

込みが確認されたが、詳細は不明である。

埋葬施設

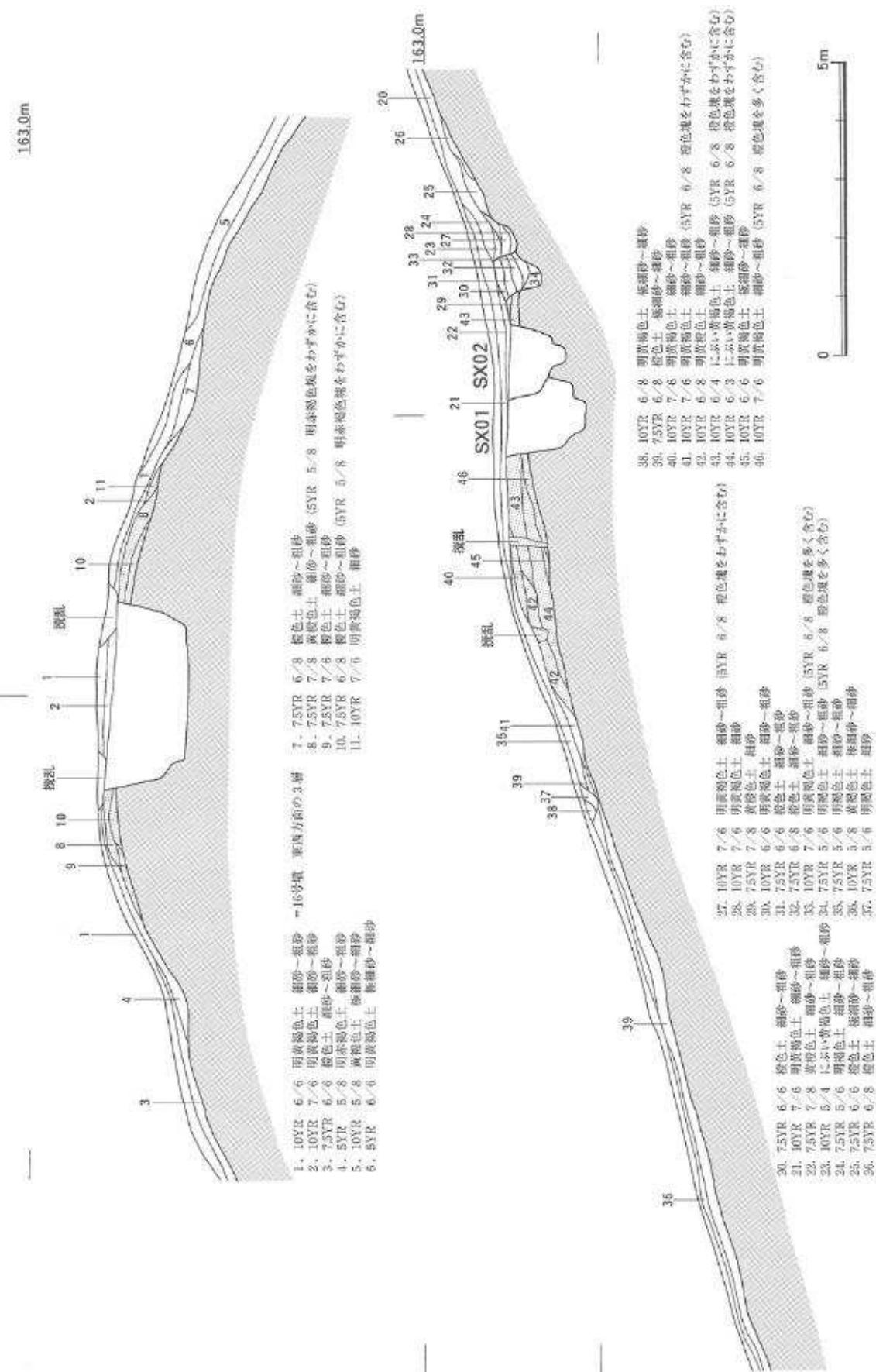
墳頂部には約 3.5×4.5 mの平坦地がつくられ、そのほぼ中央から北西—南東方向 (N159° E) を主軸とする木棺直葬の埋葬施設が1基検出された。墓壙は長さ2.24m、幅0.89mを測るが、平面形は南角部が拉げた不整形な形状を呈している。墓壙の斜面下方側の立ち上がりは低く、およそ0.2m程削平されている。

墓壙の中央には、長さ1.73m、幅0.43m、深さ0.16mを測る木棺が納められており、墓壙検出面から約0.2m掘り下げた地点で確認された。

墓壙上層から須恵器の甕の破片が出土した。

出土遺物

墓壙上層から出土した須恵器の甕は、体部の多数の破片であったため、図化することはできなかった。また、埋葬施設から遺物は出土しなかった。



第40図 梅田19号墳 墳丘断面図 (1/100)

梅田19号墳

(第38、40~42図・写真図版60~63)

立地および墳丘

19号墳は、18号墳の西方約21m、標高で約5m（両古墳の埋葬施設を基準）下がった地点に位置し、調査前の地形観察で明瞭にその存在が確認されていた古墳である。後述する23号墳は、19号墳の墳丘南側裾部を削って築造されており、また、約10m下方の西斜面には24号墳が立地している。

古墳は、斜面上方側（以下、墳丘背後）をほぼ南北方向に削り、削った残土は斜面下方側に盛土として積み上げている。墳丘背後の掘削範囲は広く、掘削面の上端と墳頂部との比高差は約1.5mである。掘削面と墳丘との間には、半円形を呈するものと直線的な2条の区画溝（以下、前者を半円区画溝、後者を直線区画溝と仮称）がつくられている。この2条の区画溝は、土層断面の観察から、下方に位置する直線区画溝が埋まったのち、斜面上方にそれを切り込んで新たに半円区画溝が設けられていることが判明した。また、墳頂部からは、2基の埋葬施設が切りあって検出されており、墳丘および区画溝はそれぞれの埋葬施設とともに築造されたものと考えられる。このため、直線区画溝とともに旧い埋葬施設と墳丘をSX01、それらを切り込んで新たにつくられたものをSX02とそれぞれ呼称している。

SX01

新しく掘られた半円区画溝によってSX01とともに直線区画溝は部分的に削平されているが、全体的に深く掘り込まれていたことや2条の溝の重なりが少ないため、その多くは残存しており、北端部では半円区画溝の下層からも溝の立ち上がりが確認されている。直線区画溝は幅0.8m、深さ0.6mを測り、両端は、立ち上がりがなくなり、斜面に同化するように収束している。

墳丘は約8.9×12.0mを測る楕円形を呈していたものと考えられる。墳丘の盛土は、旧表土を残したまま行われており、墳頂部では0.2~0.4m、斜面下方側では最も厚いところで約0.7mに積み上げられている。

墳丘上から須恵器の杯蓋（4）・杯身（8）・高杯（9）の3点が出土した。

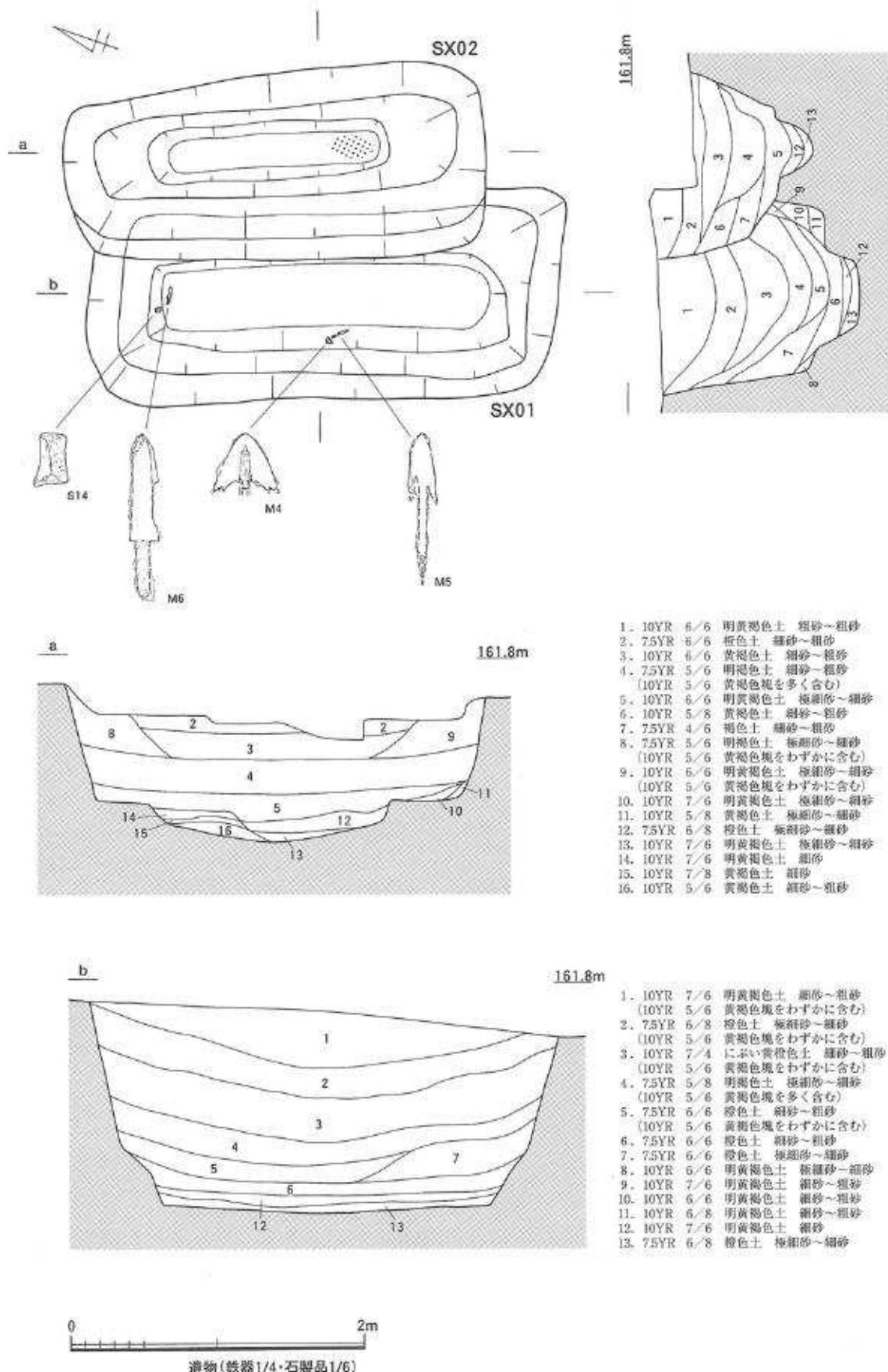
SX02

SX02は、SX01の埋葬施設および区画溝とともに東側（山側）に切り込んで築造されている。新たに掘られた区画溝の墳丘背後は非常に狭い範囲であるが、墳丘側は半円形に広く掘り込まれ、墳丘を形づくっている。区画溝は幅0.9m、深さ0.4mを測り、両端は立ち上がりがなくなり、斜面に同化するよう収束している。

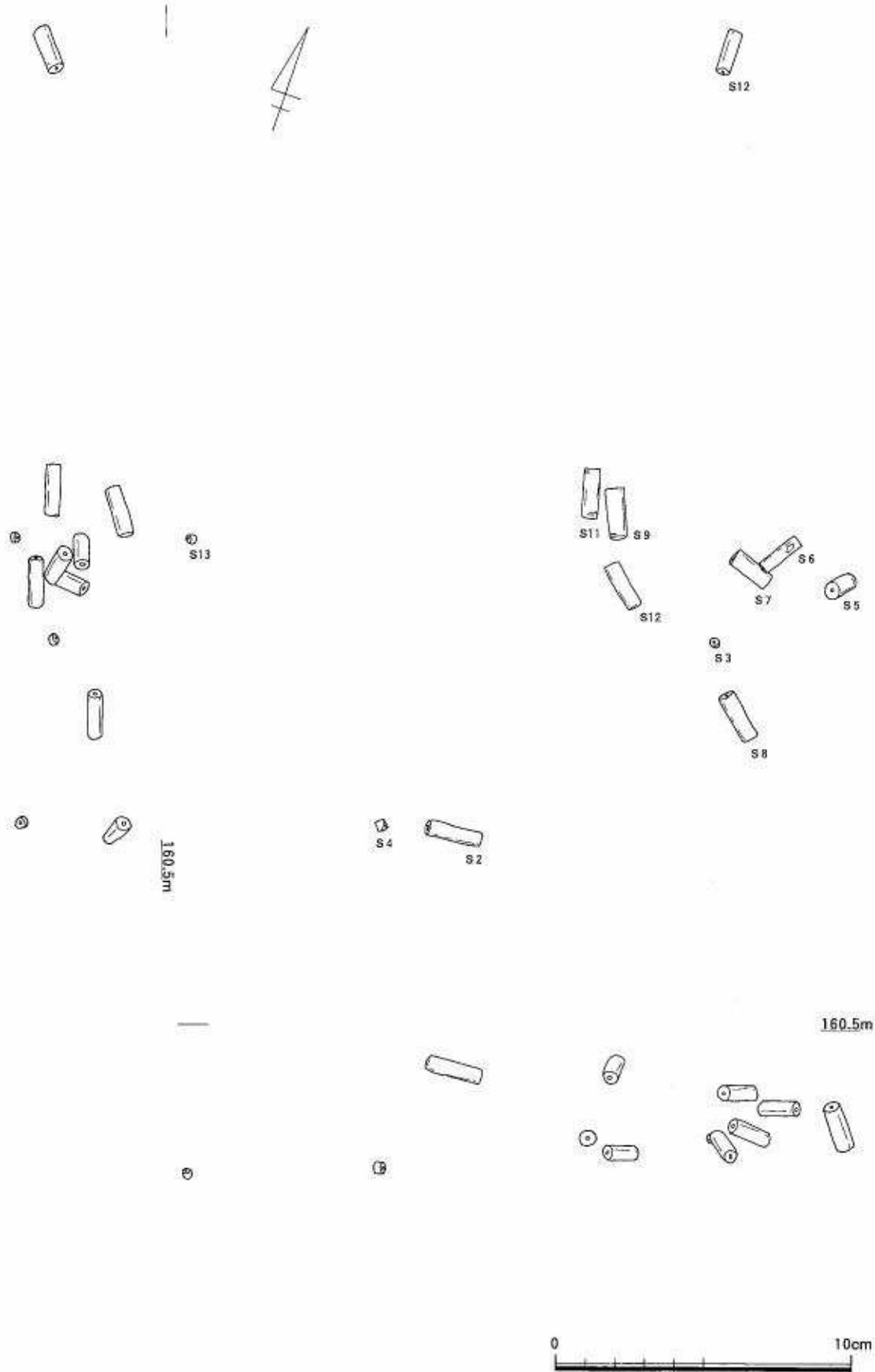
墳丘は、斜面下方側をSX01同様に盛土の裾、区画溝側を墳丘側法裾とし、直交する埋葬施設の主軸方向を区画溝の両端とすると、9.6×12.0mを測る楕円形を呈するものと考えられる。

半円区画溝の南端から須恵器の杯蓋（5~7）・高杯（10）の4点が出土した。

また、墳丘南側裾部では、長辺1.1m、短辺0.7mを測る長方形の土壙状の掘り込みが、墳丘北側裾部の区画溝北端に位置する地点には、長辺0.52m、短辺0.42mを測る方形の土壙（SK04）がそれぞれ検出された。このうち、SK04は斜面下方側を除く三辺の壁面は焼土化しており、内部には炭が充填されていた。しかし、ともに遺物は出土しておらず、詳細は不明である。



第41図 梅田19号墳 SX01・02 平・断面図 (1/40)



第42図 梅田19号墳 SX02 出土遺物 平・断面図 (1/2)

埋葬施設

墳頂部には約4.5×5.5mの長方形の平坦地がつくられ、その中央および東側から切りあい関係をもつた2基の埋葬施設が検出された。

SX01

墳頂部の中央に位置し、ほぼ南北方向（N161°E）を主軸とする木棺直葬の埋葬施設である。墓壙は長さ3.20m、幅は後述するSX02に北東から東辺の大半が切り込まれており、不明であるが約1.5mを測る長方形を呈していたものと考えられる。墓壙はほぼ垂直に約1.1m掘り下げて平坦面をつくり、さらに深く掘り下げており、最も深いところで約1.4mを測る。

墓壙の中央には、長さ2.42m、幅0.65m、深さ0.28mを測る木棺が納められており、墓壙検出面から約1.1m掘り下げた地点で確認された。木棺は、比較的深くに納められていたことに加え、SX02の墓壙掘り方による掘削の影響が東辺上層に限られていたため、完存していた。

棺内北端から刀子（M6）・砥石（S14）が、棺検出面の棺外の中央付近から鉄鎌2点（M4・M5）がそれぞれ出土した。

SX02

SX01の東に位置し、北西一南東方向（N156°E）を主軸とする木棺直葬の埋葬施設である。墓壙は長さ2.88m、幅1.26mを測る平面形は長方形を呈している。

墓壙の中央には、長さ1.64m、幅0.40mを測る長楕円形を呈する棺の痕跡が検出された。棺の壁面は内側に傾斜し、床面も緩やかな曲線を描いていることから、舟形の木棺が納められていたものと考えられる。

棺内床面からガラス小玉3点（S2～S4）・碧玉製管玉9点（S5～S13）がまとまって出土した。

出土遺物（第50～52図・巻首図版7・写真図版121、122、124）

墳丘および半円区画溝から須恵器7点（4～10）が出土し、SX01から鉄鎌2点（M4・M5）・刀子（M6）・砥石（S14）が、SX02からガラス小玉3点（S2～S4）・碧玉製管玉9点（S5～S13）がそれぞれ出土している。

4～6は天井部の中央に扁平な中くぼみのつまみをもつ、口径11.5cm前後、器高約5cmを測る杯蓋である。いずれも口縁部には内傾する明瞭な段を有するが、天井部と口縁部を画する稜は鈍く丸みをもつもの（4・6）と突出し鋭いもの（5）にわかれる。7は天井部が比較的平坦な面をもつ杯蓋であり、稜はやや突出し鋭く、口縁部には内傾する段をもつ。8はたちあがりがやや長くわずかに内傾する杯身で、口縁端部には内傾する段をもつ。底部から体部へは丸くたちあがり、短く上方に向にのびる受部に至る。9・10はたちあがりが比較的短く内傾し、口縁部が丸い端部を有する高杯である。10はほぼ完存し、脚部は3方に長方形透かしが穿たれ、脚端部は内側へ屈曲する。

M4は平根系の無茎式である。M4は重抉（二段逆刺）三角鎌で逆刺をわずかに欠損するが、全長4.0cm、幅3.8cmになる。鎌身に開けられた径0.4cmの透かし孔に、幅0.2cmの帯状のもので固定された状態で、矢柄が残る。逆刺の先端にも木質が付着する。M5は尖根系短頸尖根式の腸抉柳葉式で、茎の一部を欠損する。現存長9.7cm、鎌身長4.8cm、鎌身幅1.5cm、頸部長4.3cm。鎌身と茎に木質がわずかに残る。逆刺の長さが異なるようである。

M6は刀子である。完形で全長11.0cm、刀身長7.2cm、幅1.3cm、厚0.4cm。反りはなく、両刃である。

鋒に巻きつけられたように布痕があり、研ぎ減りによって刃の一部を欠損する。茎は長4.0cm、幅0.9cm、厚0.5cmで栗尻である。両面に木質が付着するが、目釘孔はない。

S2～S4はガラス小玉である。S2・S4は縁がかった青である。S3は三つに割れていたため実測していないが、コバルト色をしている。

S5～S13は碧玉製の管玉である。長さは18mm、直径7mm弱のやや太短いタイプで、法量のばらつきは少ない。暗緑灰色の硬質な素材を使用しており、穿孔はいずれも片面から行っている。

S14は断面台形のやや小型の砥石で、各面ともよく使用している。朱らしい赤色顔料が付着している。

梅田20号墳

(第38、43図・写真図版64～66)

立地および墳丘

20号墳は、18号墳と19号墳との間に立地する古墳であるが、調査前の地形観察では比較的緩やかな斜面と平坦地が広い範囲に確認されていた。調査の結果、斜面上方側（以下、墳丘背後）を南北方向に削った掘削面および墳丘との間に設けられた区画溝が検出された。しかし、後世に行われたと考えられる古墳周辺の地形改変によって、墳丘背後の掘削面や区画溝の大半は削平されており、わずかな部分が残存しているに過ぎない状態であった。残存する区画溝は幅1.3m、深さ約0.15mを測る弧状を描くものである。また、斜面下方側では盛土は確認されず、地山の平坦面が広がっている。このため、墳形および墳丘規模とともに不明な点が多いが、わずかに残った区画溝が弧状を呈することから、約6.5×8mを測る楕円形を呈していたものと考えられる。

墳丘の北側裾部から須恵器の杯身（12）が、区画溝内から須恵器の杯蓋（11）の破片が出土した。

埋葬施設

墳頂部に広がる平坦地の東側から南北方向（N172°E）を主軸とする木棺直葬の埋葬施設が1基検出された。墓壙は長さ2.60m、幅1.07mを測る角部が曲線を描く長方形を呈している。墓壙はほぼ垂直に約0.7m掘り下げられ、そこから下層へも東辺を除き、ほぼ垂直に掘り下げられており、深さは約0.8mを測る。

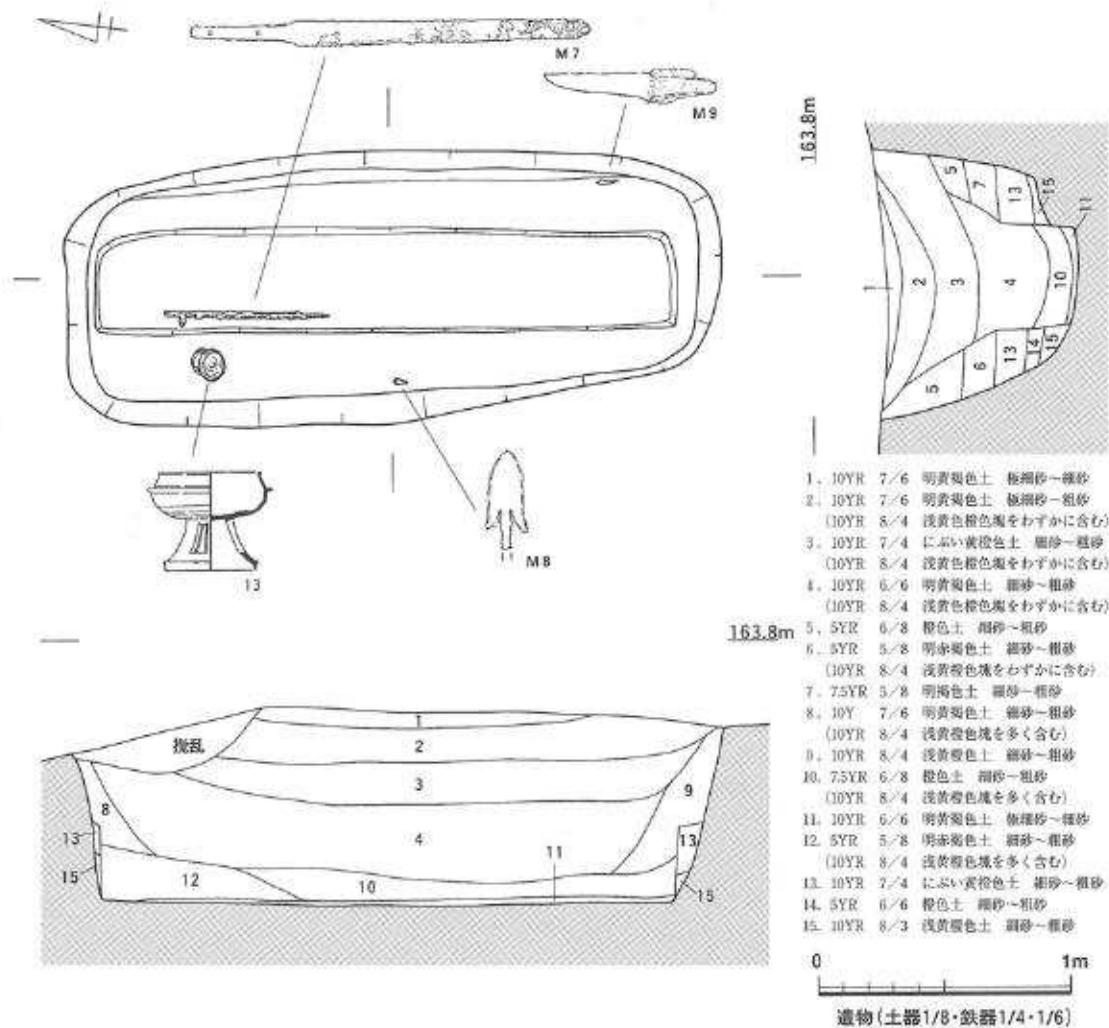
墓壙の中央には、長さ2.31m、幅0.42m、深さ0.30mを測る木棺が納められており、墓壙検出面から約0.5m掘り下げた地点で確認された。

棺内北寄りの西側辺に沿った位置には、鉄剣（M7）が副葬されており、棺検出面の棺外に位置する地点から、須恵器の高杯（13）・鉄鎌（M8）・刀子（M9）がそれぞれ出土した。

出土遺物（第50、51図・写真図版122、125）

墳丘および区画溝から須恵器2点（11・12）が出土し、埋葬施設内から須恵器1点（13）と鉄剣（M7）・鉄鎌（M8）・刀子（M9）がそれぞれ出土している。

11の杯蓋は口縁部のわずかな破片であるが、口径10.9cm、器高4.4cmに復元されるものである。天井部は丸みをもち、口径に対して器高が比較的高い。12はたちあがりがやや長くわずかに内傾する杯身で、口縁端部は外側につまみだされている。底部から体部へは丸くたちあがり、受部はほぼ水平にのびる。



第43図 梅田20号墳 埋葬施設 平・断面図 (1/30)

13はわずかに内傾し口縁部が外側につまみだされる杯部に、3方に長方形透かしが穿たれた脚部をもつ完形の高杯である。

M 7 は全長63.4cmのほぼ完形の長剣である。刀身長46.7cm、幅3.2cm、厚0.6cm。関はナデに近い斜角である。鉾付近には鞘木の一部が付着し、刀身と鞘木の間には隙間があった。茎は長16.7cm、幅2.0cm、厚0.4cmで、茎尻をわずかに欠損する。茎尻にかけて細くなる中細茎とみられる。径0.6cmの目釘孔が2つあり、目釘孔間は7.6cmで目釘はない。柄間に糸巻きの痕跡がわずかにみられる。柄の糸巻きと鞘木の痕跡から、副葬当時は刀剣装具を伴っていたことがわかる。

M 8 は尖根系短頭尖根式の腸抉柳葉式である。鎌身部のみ残存し、現存長5.2cm、鎌身長4.4cm、鎌身幅2.2cmになる。

M 9 は刀子である。完形で全長9.1cm、刀身長5.5cm、幅1.0cm、厚0.3cm。反りはなく、両関である。茎は長3.6cm、幅1.0cm、厚0.3cmで栗尻、目釘孔はない。柄の木質がよく残り、柄縁付近の断面はやや杏仁形で幅1.8cm、厚1.3cm。刀身の状態が非常に良好なことから、未使用のまま副葬された可能性がある。

第4節 梅田23号墳 石蓋土壙 梅田24号墳

梅田23号墳

(第38、44、45図・写真図版68~71)

立地および墳丘

23号墳は、19号墳の墳丘南側裾部を一部削ってつくられた古墳であり、標高約160.5mを測る。

古墳は、斜面上方側（以下、墳丘背後）を北西から北東にかけて三日月状に削り、墳丘との間に区画溝を設けている。墳丘背後の掘削面はわずかであり、掘削面の上端と墳頂部との比高差は約0.6mである。区画溝は幅0.85m、深さ0.14mを測り、両端は立ち上がりがなくなり斜面に同化するように収束している。区画溝の北西には、長さ約60cmの板状の河原石が3石並んで置かれていた。

墳丘は2.5×4.0mの楕円形を呈するものであるが、斜面下方側に盛土は確認されなかった。

埋葬施設

墳頂部の中央から、東西方向（N83°E）を主軸とする埋葬施設が1基検出された。墓壙は長さ1.34m、幅0.96mを測り、平面形は西側が曲線を描く馬蹄形を呈している。墓壙上面から約0.1m掘り下げた地点で4石の蓋石とそれらの合わせ目と墓壙との間を覆うようにして置かれた約10~30cmの河原石が多数検出された。

蓋石を取り上げた石棺内部には土砂が充填されていたが、遺物は出土しなかった。石棺は長さ0.76m、幅0.36mを測り、東西両小口では板状の河原石を1石立て、両側壁では2石を並べて構築されていた。側壁上面には約10~30cmの河原石が数石置かれ、墓壙との間にも河原石は詰められていた。また、墓壙はほぼ垂直に掘り下げられ、最も深いところで0.63mを測る。墓壙床面の壁際からは、小口石および基底石を据えるために掘られた据えつけ穴の痕跡が確認された。

出土遺物

墳丘および埋葬施設から遺物は出土しなかった。

石蓋土壙

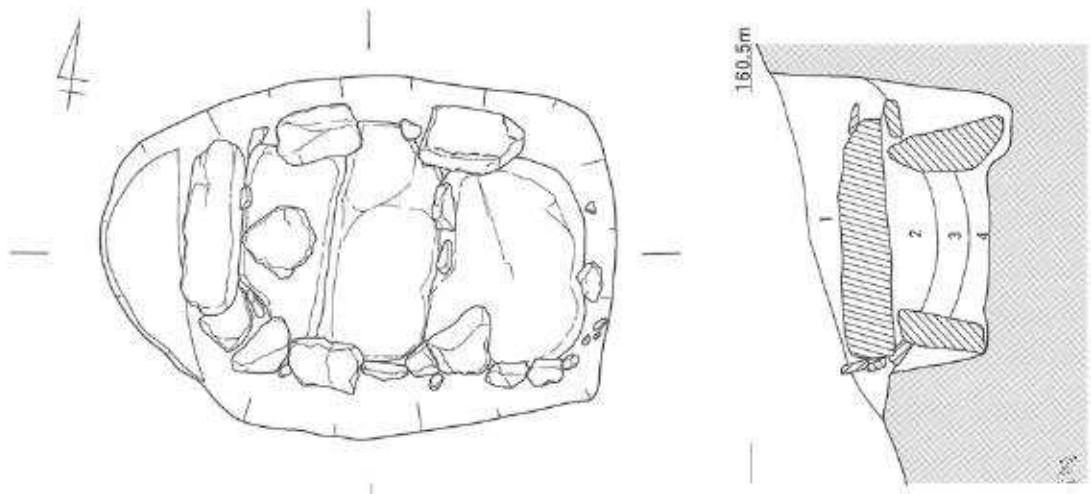
(第38、44図・写真図版67)

立地および埋葬施設

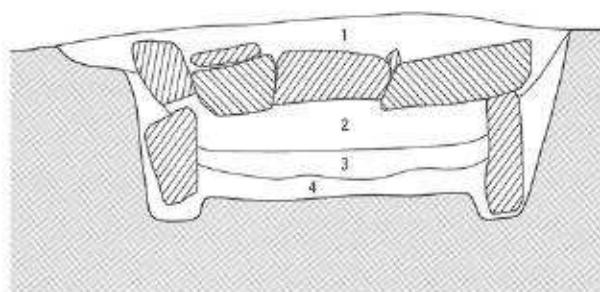
石蓋土壙は、19号墳の南方約12m、標高で約3.5m（両埋葬施設を基準）下がった地点に位置し、周囲には区画溝や地山整形された痕跡は確認されなかった。

土壙は長さ0.84m、幅0.50mを測り、上面に約30~50cmの河原石3石が並んだ状態で検出された。河原石を取り上げると、そのほぼ中央から長さ0.57m、幅0.24m、深さ0.19mを測る小規模な土壙が確認された。この下段の土壙は、規模は小さいものの垂直に掘り下げられ、河原石の蓋石が架構されていたことから、埋葬施設と考えられる。

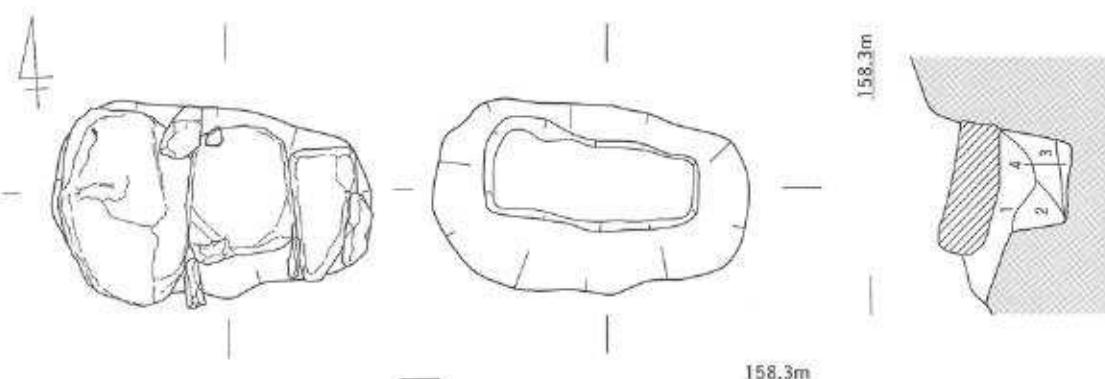
土壙および周辺から遺物は出土しなかった。



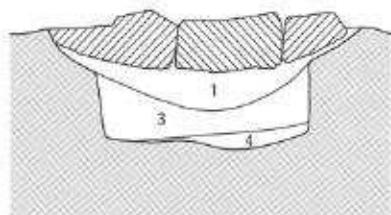
160.5m



1. 10YR 7/6 明黄褐色土 粗砂～粗沙
(7.5YR 6/8 棕色塊をわずかに含む)
2. 7.5YR 7/8 黄褐色土 粗砂～粗沙
3. 7.5YR 6/8 橙色土 極粗砂～粗砂
4. 7.5YR 6/6 橙色土 極粗砂



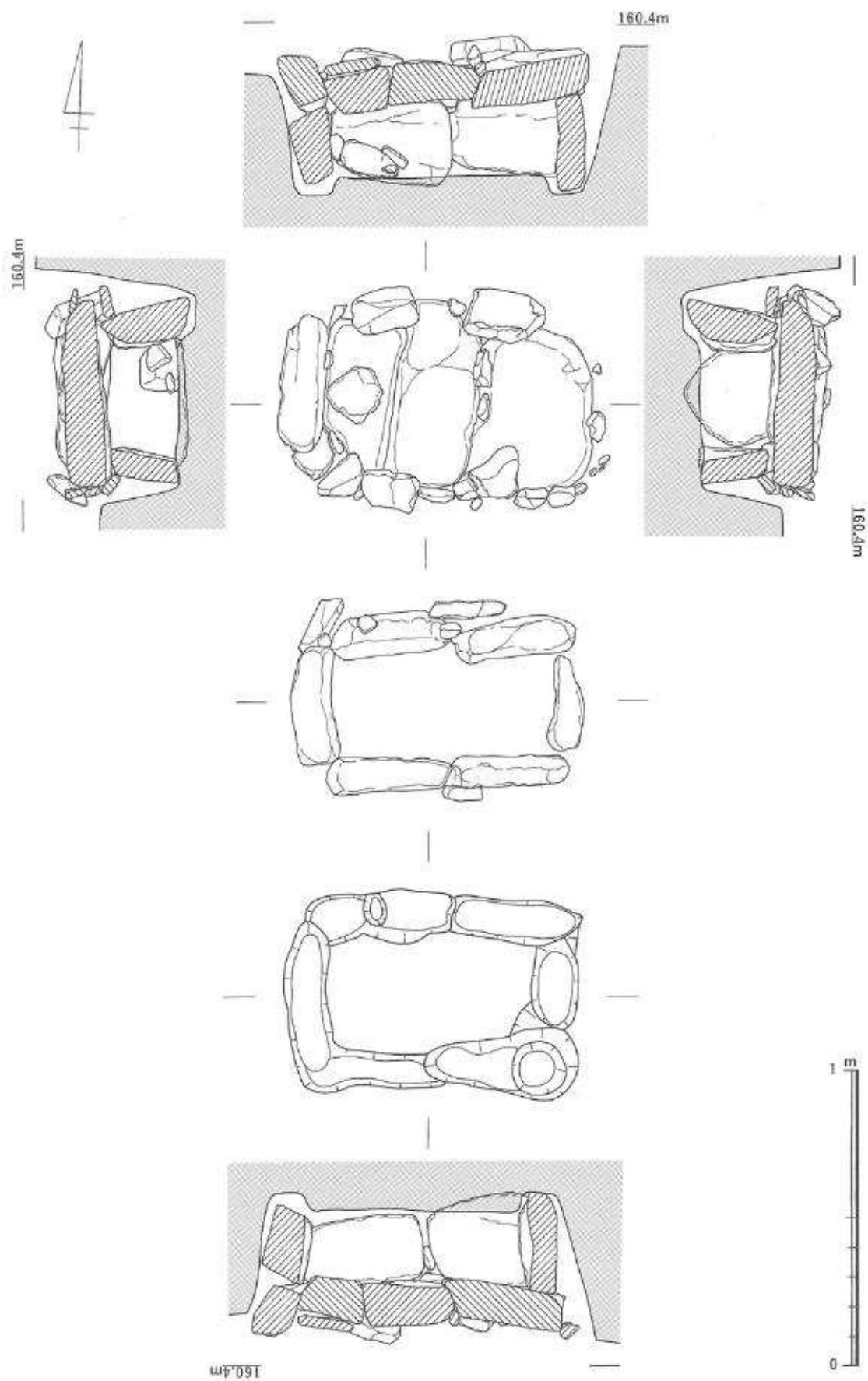
158.3m



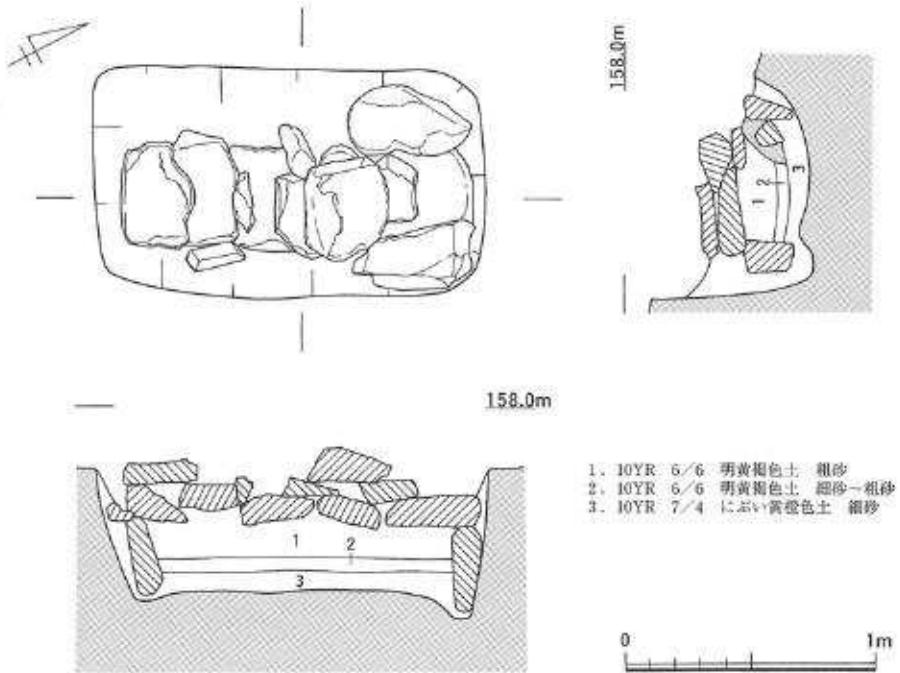
1. 10YR 6/6 明黄褐色土 極粗砂～粗砂
2. 10YR 6/8 明黄褐色土 極細砂～粗砂
3. 7.5YR 6/8 橙色土 極細砂～粗砂
4. 10YR 6/8 明黄褐色土 極粗砂～粗砂



第44図 梅田23号墳 墓壇および石棺内断面図 (1/20) 石蓋土壤 平・断面図 (1/20)



第45図 梅田23号墳 埋葬施設 平・断面図 (1/20)



第46図 梅田24号墳 埋葬施設 石棺内断面図 (1/20)

梅田24号墳

(第38、46、47図・写真図版72、73)

立地および墳丘

24号墳は、19号墳の西方約10m、標高で約4m（両古墳の埋葬施設を基準）下がった地点に位置し、斜面上方側（以下、墳丘背後）を「L」字状にわずかに削り周囲と区画している。墳丘は検出されなかったが、埋葬施設が平坦面の端に位置することから、本来盛土があったと推定され、 $2 \times 3.5m$ の楕円形を呈していたものと考えられる。

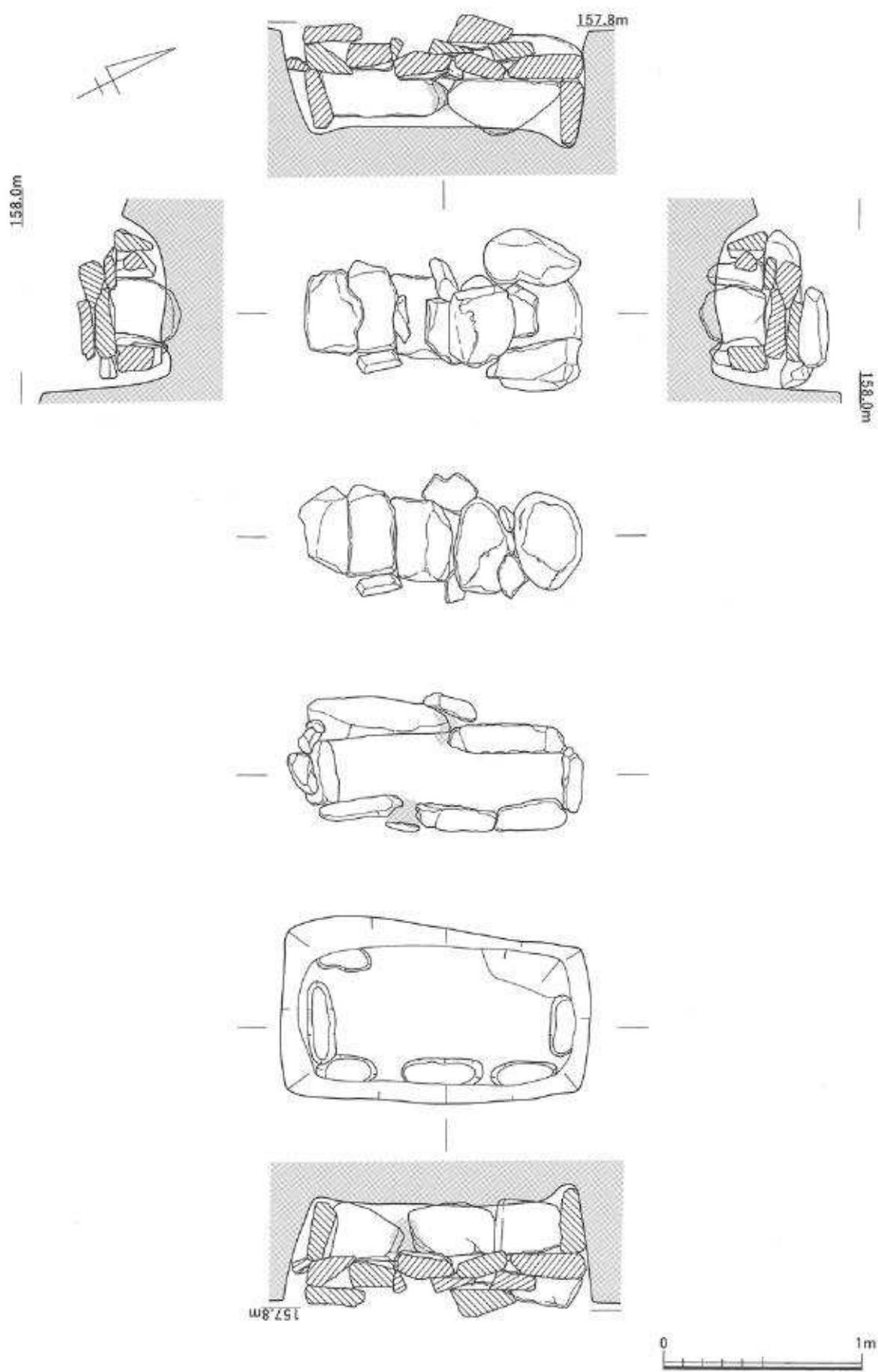
埋葬施設

墳丘背後を削ってつくられたわずかな平坦面に、北東—南西方向 ($N28^\circ E$) を主軸とする埋葬施設が1基検出された。墓壙は長さ1.56m、幅0.88mを測り、平面形は長方形を呈している。墓壙上面からは、5石の蓋石とそれらの合わせ目を覆うようにして置かれた約10~20cmの小河原石3石とさらにその上に架構された約40cmの河原石2石が検出された。

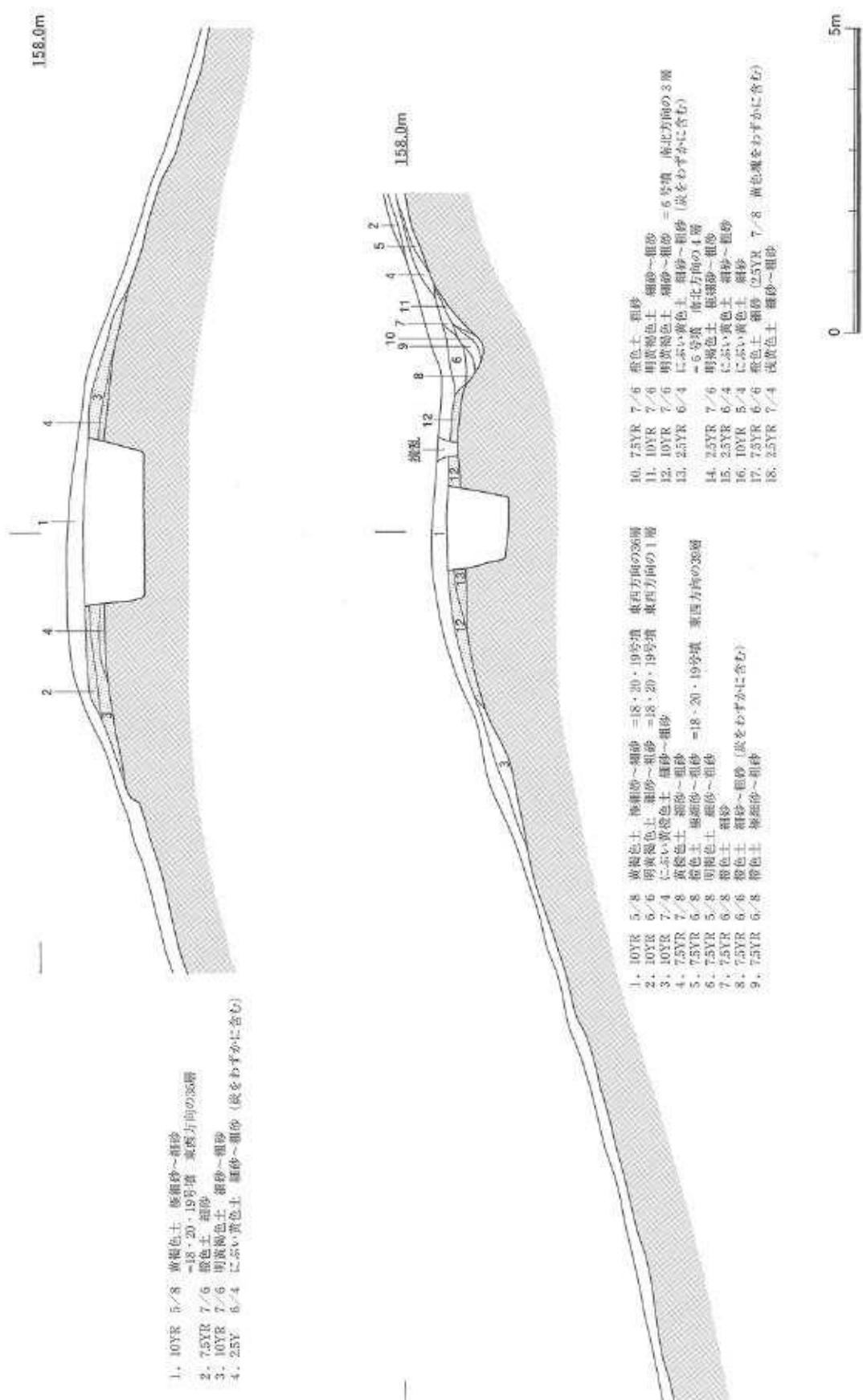
蓋石を取り上げた石棺内部には土砂が充填されていたが、遺物は出土しなかった。石棺は長さ1.14m、幅0.37mを測り、両小口では板状の河原石を1石立て、両側壁では2石ないしは3石を並べて構築されていた。側壁の基底石の接合部は、石の形状による隙間がみられ、一部に粘土が詰められている。墓壙はほぼ垂直に掘り下げられ、最も深いところで0.65mを測る。墓壙床面の壁際には、小口石および基底石を据えるために掘られた据えつけ穴が6ヶ所確認された。

出土遺物

埋葬施設内およびその周辺から遺物は出土しなかった。



第47図 梅田24号墳 埋葬施設 平・断面図 (1/30)



第48図 梅田6号墳 墳丘断面図 (1/100)

第5節 梅田6・8号墳

梅田6号墳

(第38、48、49図・写真図版74~77)

立地および墳丘

6号墳は、19号墳の南西約20m、標高で約4m（両古墳の埋葬施設を基準）下がった地点に位置しており、調査前の地形観察でその存在が明瞭に確認されていた古墳である。

古墳は、斜面上方側（以下、墳丘背後）を北西から南東方向に削り、削った残土を斜面下方側に盛土として積み上げ、平坦地をつくりだしている。墳丘背後の掘削面の上端と墳頂部との比高差は約1.2mを測り、掘削面と墳丘との間には、緩い弧状の区画溝が設けられている。区画溝は幅1.3m、深さ0.5mを測り、両端は立ち上がりがなくなり、斜面に同化するように収束している。

墳丘は6.8×9.0mを測る楕円形を呈しており、盛土は旧表土を残したまま行われ、約0.2~0.4m程が残存している。

墳丘上および墳丘裾部から須恵器の杯蓋・高杯・短頸壺など5点（18~22）が出土した。

埋葬施設

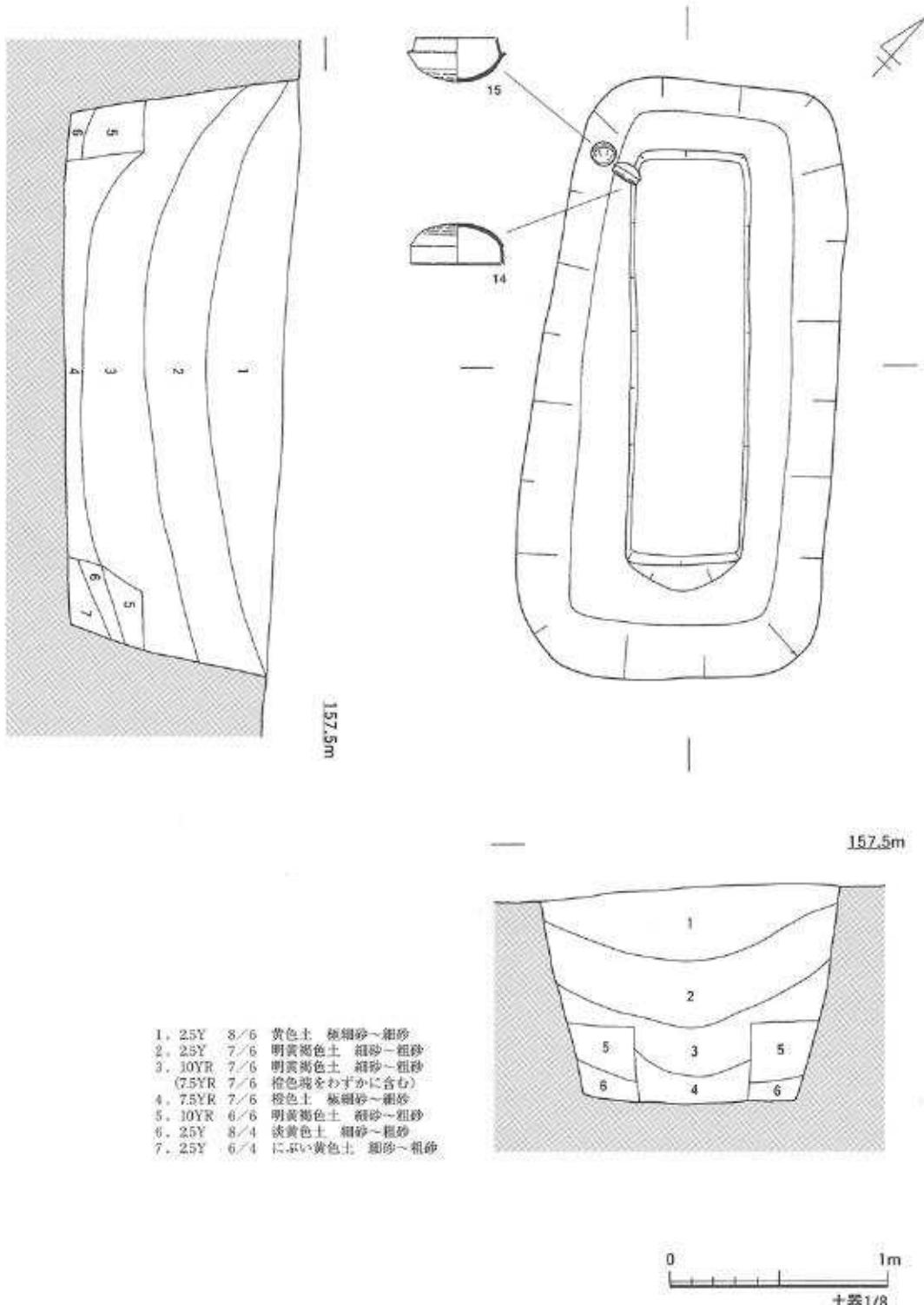
墳頂部には約4×5mの楕円形の平坦地がつくられ、そのほぼ中央から北西—南東方向（N139°E）を主軸とする木棺直葬の埋葬施設が1基検出された。墓壙は長さ2.73m、幅1.37mを測り、平面形は角部が曲線を描くほぼ長方形を呈している。ほぼ垂直に掘り下げられた墓壙は、最も深いところで1.06mを測る。

墓壙の中央には、長さ2.01m、幅0.53m、深さ0.36mを測る木棺が納められており、墓壙検出面から約0.6m掘り下げた地点で確認された。

棺内から遺物は出土しなかったが、棺検出面の棺外に位置する地点から、須恵器の杯蓋と杯身（14・15）がセットで出土した。ともに完形品で、杯身は口縁部がわずかに棺側に傾き、杯蓋は小口板と側板が接する位置に立った状態で出土している。また、確認調査時（第1次 H8-1トレーニチ）にも墓壙内の棺上に位置する地点から、須恵器の杯蓋と杯身（16・17）のセットが出土している。



写真7 調査状況



第49図 梅田6号墳 埋葬施設 平・断面図 (1/30)

出土遺物（第50図・写真図版123）

埋葬施設内から須恵器4点（14～17）、墳丘の周辺から須恵器5点（18～22）が出土している。

棺外に副葬された杯蓋と杯身の2セット（14、15・16、17）のうち、杯蓋は天井部と口縁部を画する稜の突出は鋭く、口縁部に内傾する明瞭な段をもつ。杯身はたちあがりがわずかに内傾し、口縁端部には内傾する段をもつ。底部から体部へは丸くたちあがり、短く水平にのびる受部に至る。18の杯蓋は口径に対して器高が低く、稜は形骸化している。19の杯蓋は、口縁部のわずかのみであるが、天井部は平坦で口縁部との境界は段をなし、口縁端部は下方へ短く屈曲する。20は口縁端部が丸く、内湾しながら短くたちあがる皿である。21はたちあがりが比較的短く内傾し、口縁端部にはわずかに内傾する段がつく高杯である。脚部には3方に長方形透かしが穿たれ、脚端部は内側へ屈曲する。22は丸みをもった体部から屈曲して肩部に至り、短くたちあがる頸部をもつ短頸壺である。頸部から肩部に灰かぶりがみられ、底部には×状に線刻されたヘラ記号がある。

梅田8号墳

（第38図・写真図版74、75）

立地および墳丘

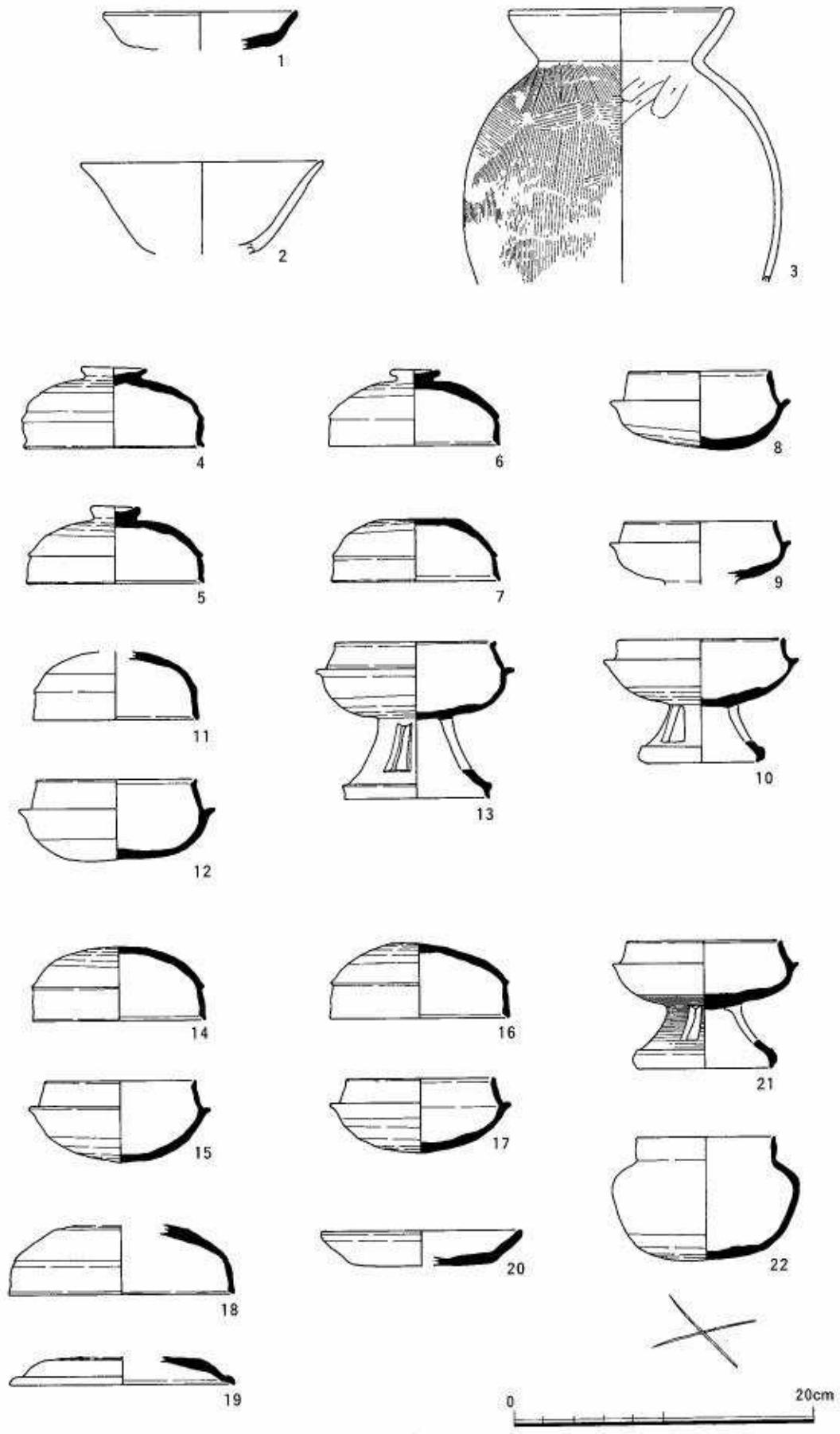
8号墳は、6号墳の南西約28m、標高で約10m（両古墳の埋葬施設を基準）下がった地点に位置している。墳丘の大半が路線範囲外に立地するため、調査は墳丘南端の一部分のみであり、埋葬施設は検出されなかった。調査区壁面の断面観察では、区画溝の一部と斜面上方側を削り、斜面下方側に盛土として積み上げ平坦地をつくりだしている状況が認められた。墳丘は、現状から約10×13mを測る楕円形を呈しているものと考えられる。周辺から遺物は出土しなかった。

また、調査前の地形観察で、6号墳の裾から傾斜した地形が平坦になった地点に古墳が存在する可能性が考えられ、7号墳として調査を実施した。しかし、表土直下で地山（岩盤）が検出され、埋葬施設および盛土、地山整形痕などは認められなかったため、自然地形と判断し、7号墳は抹消した。

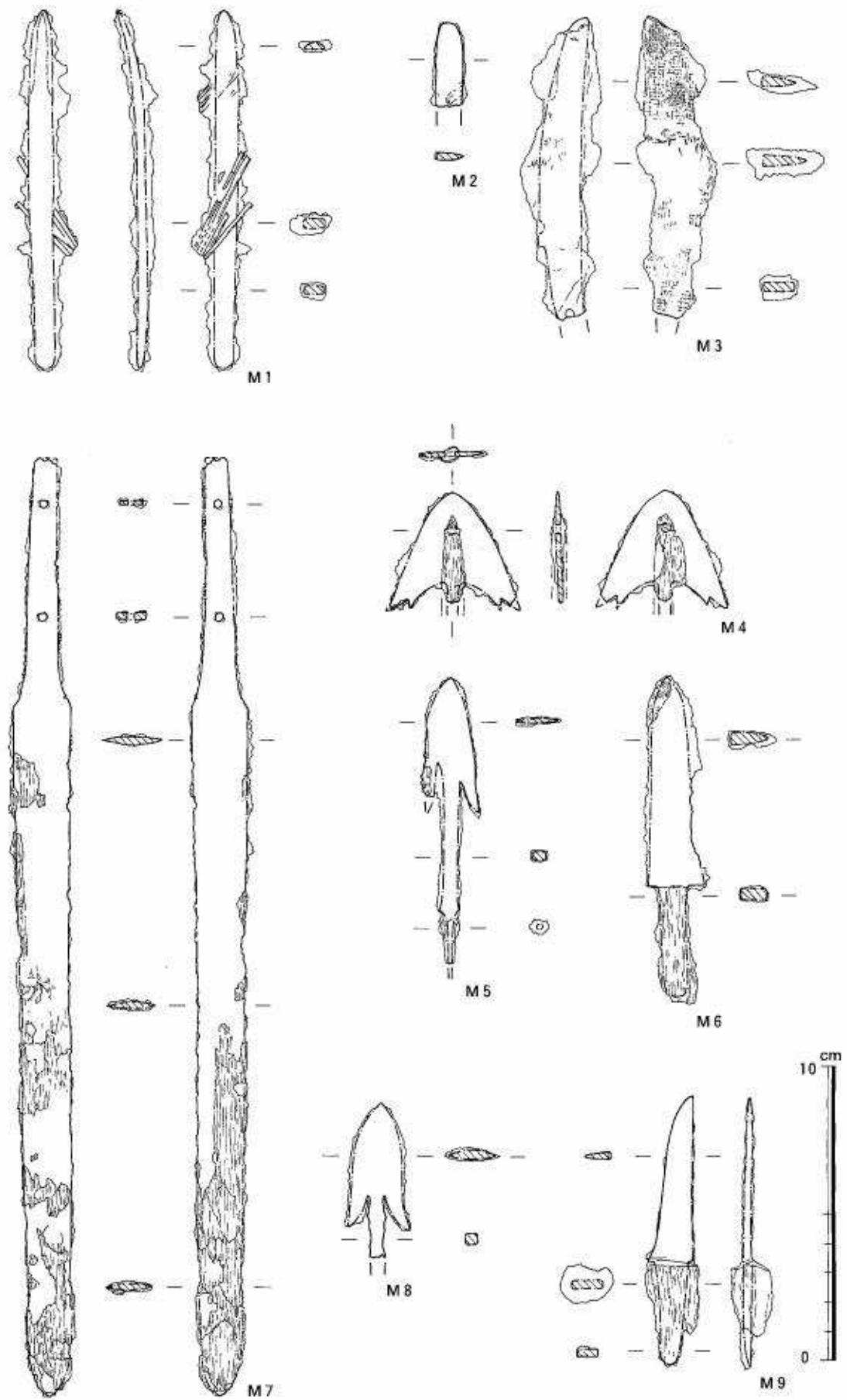
第6節 その他の遺構

梅田古墳群Ⅱに関わる平成9・10年度の調査では、古墳の他にいくつかの土壙が検出された。このうち、埋葬施設と考えられる3基（SK02・03・石蓋土壙）については上述し、各古墳の墳丘裾部から検出されたものについてもその都度、記述している。これらの他に、15号墳および27号墳の墳丘北側裾部に位置する地点から2基の土壙が発見されており、SK01・05と呼称している。

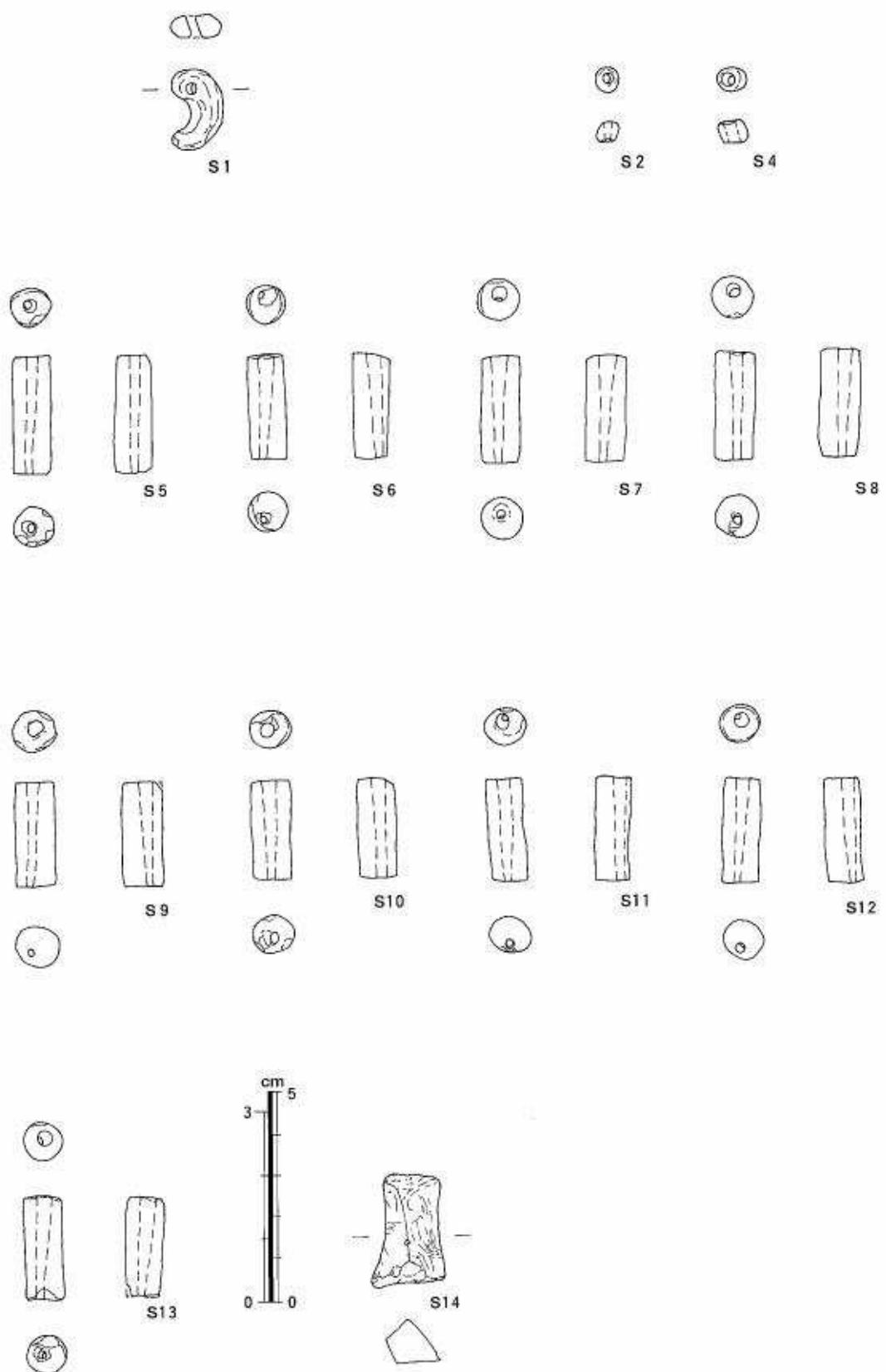
SK01・05ともに平面形は直径1.2mの円形を呈している。SK01は断面が逆台形を呈し、検出面から約1.2mの深さで長辺約1.1m、短辺約0.8mを測る三角形状を呈する底部が検出され、中央に直径約0.2m、深さ約0.3mを測る杭痕と考えられる穴が確認された。また、SK05は断面が長方形を呈し、検出面から約1.4mの深さで直径約0.8mを測る円形の底部が検出され、中央に直径約0.25m、深さ0.35mを測る同様の穴が確認された。これらのことから、2基の土壙は落とし穴と考えられるが、遺物は出土しておらず、時期など詳細は不明である。



第50図 I群 出土遺物 土器



第51図 I群 出土遺物 金属器



第52図 I群 出土遺物 玉類

第4章 II群／支尾根の古墳の調査（1）

第1節 梅田10・11号墳

梅田10号墳

（第53～55図・写真図版79～82）

立地および墳丘

10号墳は、1号墳の裾に位置する三角形の平坦面（旧9号墳）のさらに下の北側に位置する古墳である。下方側の墳丘裾部が不明確であるため、形状・規模ははっきりしないが、およそその径は約5×8mの橈円形を呈する円形と思われる。尾根上方側をカットし、その土を斜面下方側に盛って墳丘を形成し、カット部と墳丘の間には弧状に溝が設けられていた。

周溝内から須恵器の杯蓋（23）と杯身（24）が出土している。

埋葬施設

主体部は長さ2.72m、幅1.27mの幕壙に、長さ1.96m、幅0.56mの木棺を納めたもので、検出面からの深さは0.69m。主軸方向は尾根方向にはば直交し、N62°Eである。

棺内には副葬品は認められなかったが、棺外の北小口部に棺に平行して置かれた刀子（M15）があり、西側板の北端から鉄鎌が数本まとまって（M10～M14）出土した。

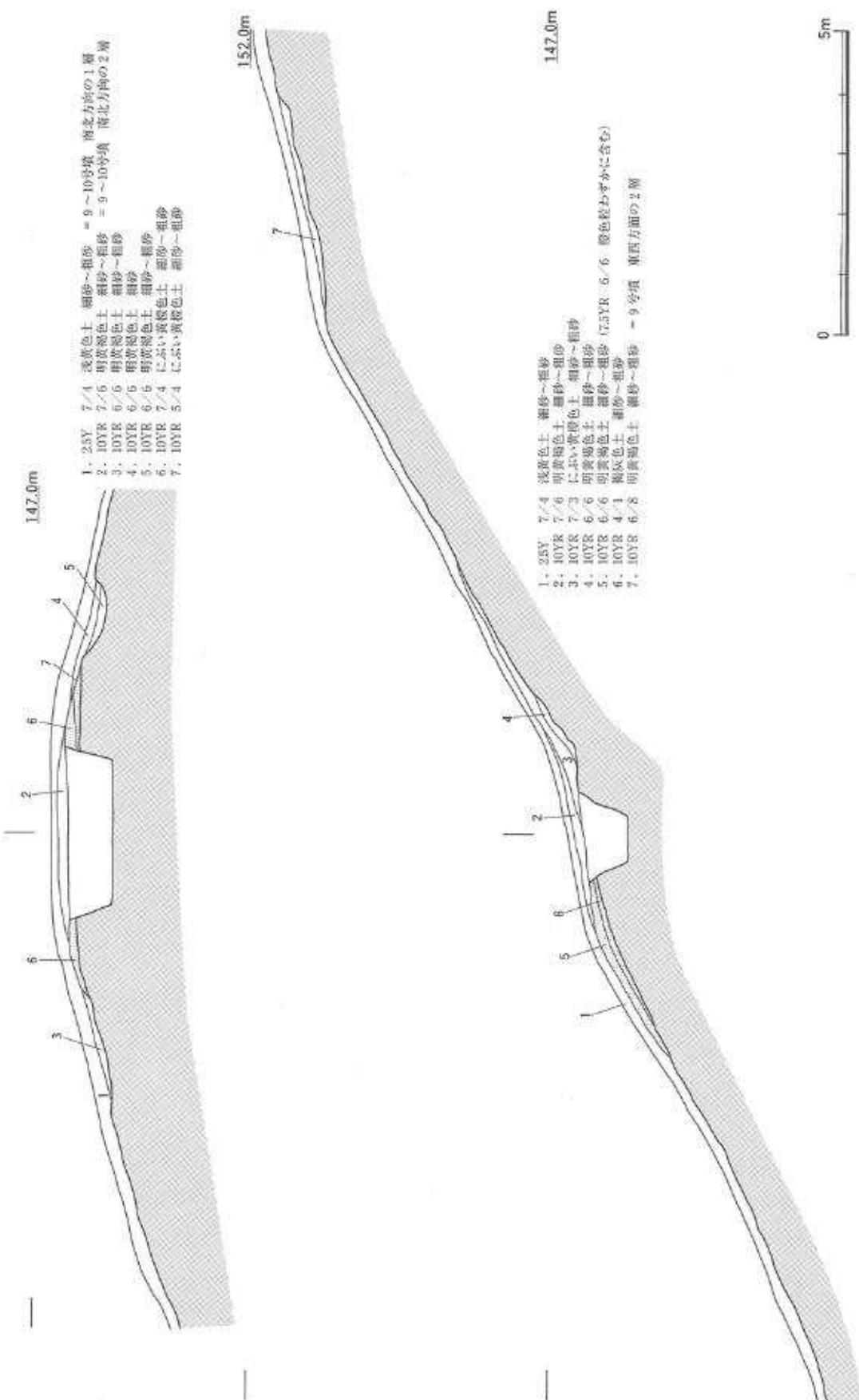
出土遺物（第67、68図・写真図版126～128）

周溝内から須恵器2点（23・24）が出土し、主体部から鉄鎌（M10～M14）・刀子（M15）が出土している。

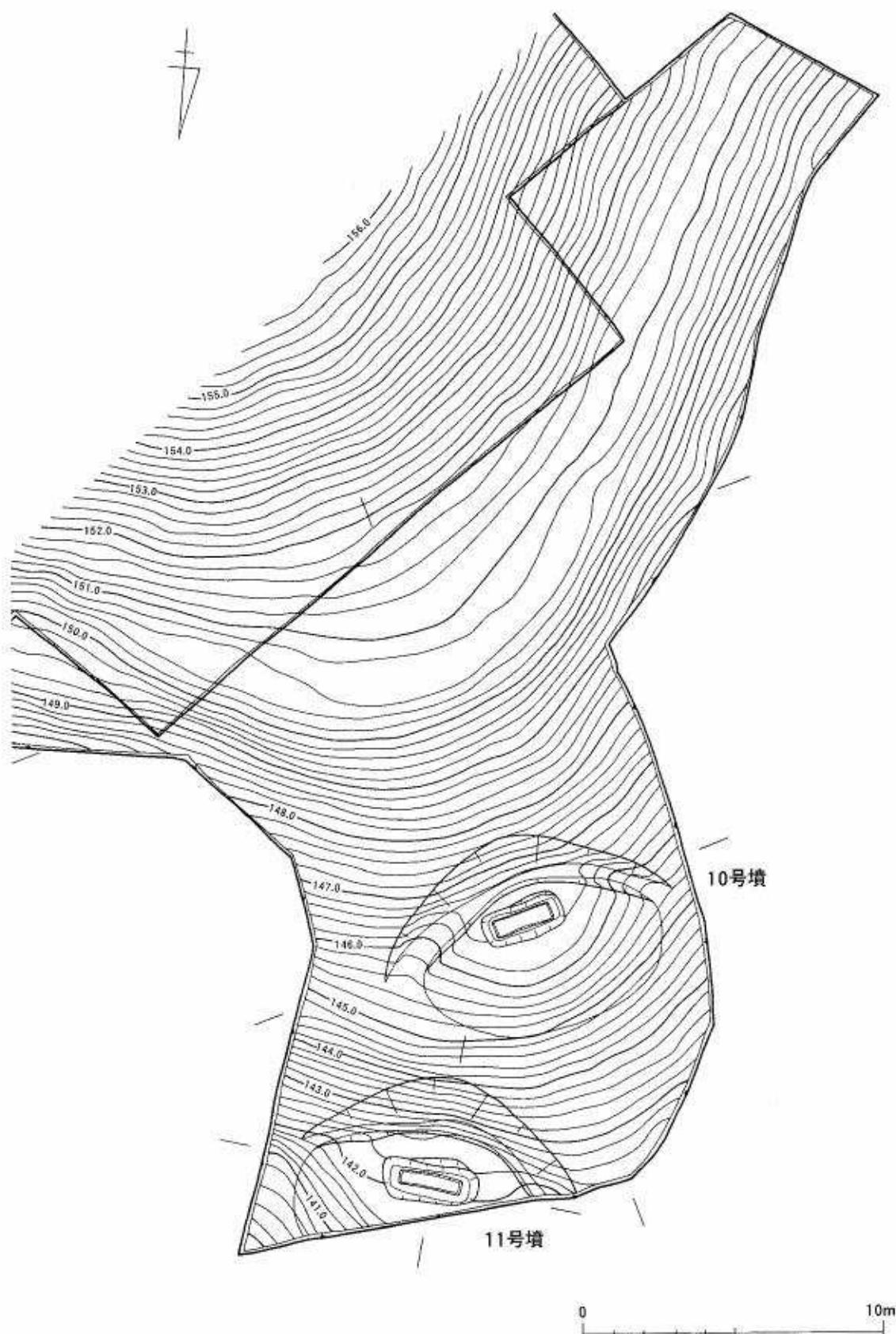
23の杯蓋は口径に対して器高が低く、天井部と口縁部を画する稜はほとんどみられず、丸くおさめられている。24は口縁部のわずかが残存し、口径10.7cmを測る杯身である。たちあがりはわずかに内傾し、口縁部には内傾する段をもつ。

M10は平根系の腸抉柳葉式であるが、頸部以下を欠損しているため、無茎式の可能性もある。現存長3.6cm、鎌身幅2.6cm。M11～14は尖根系長頸式である。M11とM12は腸抉柳葉式で、M11は頸部と茎部の大部分を欠損し、現存長6.3+1.9cm、鎌身長3.1cm、鎌身幅1.4cmになる。茎は先端だけで、矢柄の木質が付着する。M12は全長12.4cm、鎌身長4.3cm、鎌身幅1.3cm、頸部長5.5cmになる。逆刺は左右やや不均等である。茎には矢柄の木質と、間に矢柄を止めた糸が残る。M13とM14は片刃箭式で、全長16.0cm、鎌身長3.2cm、鎌身幅1.0cmである。頸部は平均10.0cm。M13、M14とも茎に矢柄の木質と間に矢柄を止めた糸が残る。

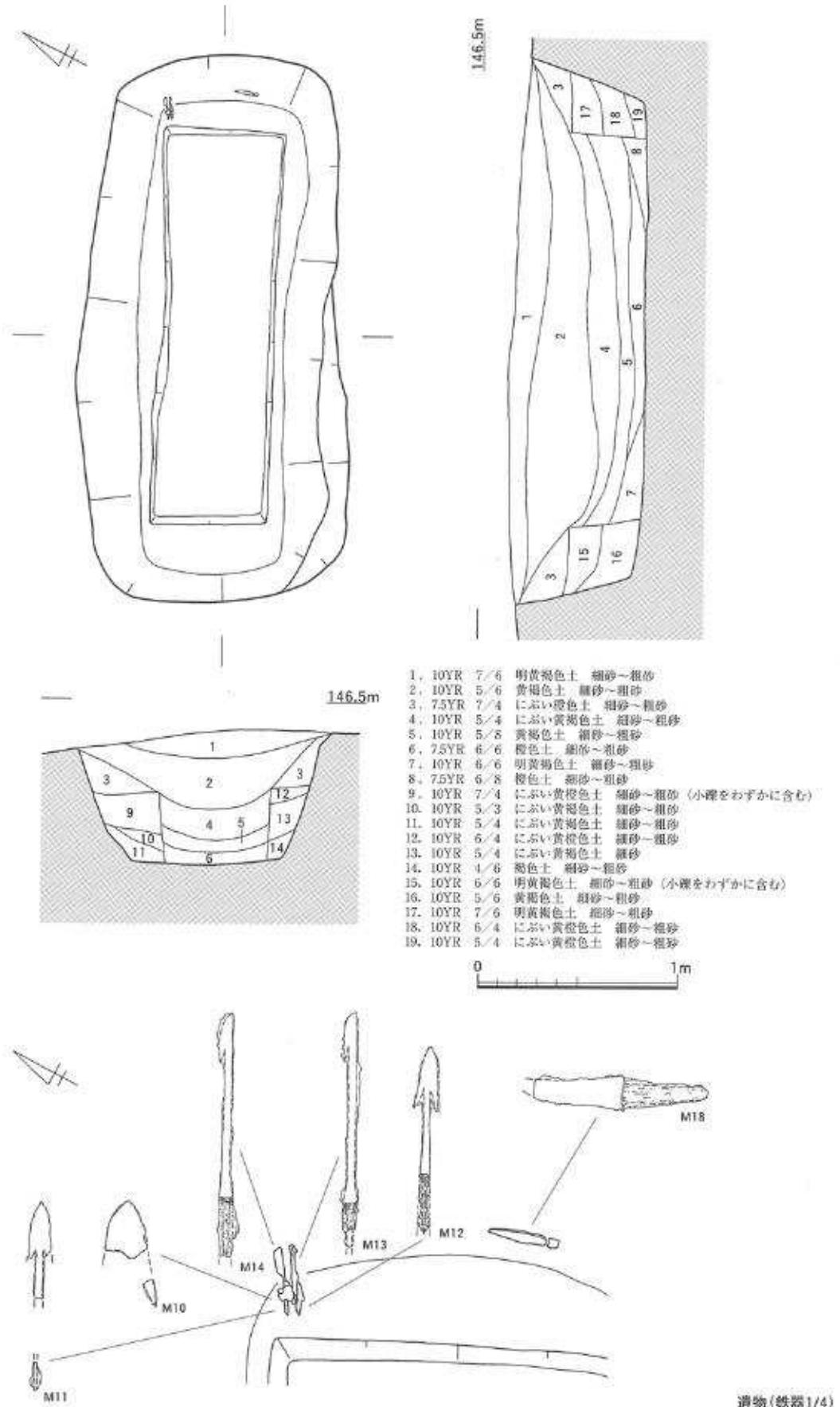
M15は刀子である。鋒を欠損し、現存長11.5cm。刀身は現存長6.0cm、幅1.5cm、厚0.3cm。反りは緩やかで両側である。茎は長5.5cm、幅1.2cm、厚0.3cm、栗尻で目釘孔はない。全体的に木質が付着し、柄縁付近では杏仁形の断面がみられる。幅1.85cm、厚1.1cm（ともに現存値）になる。



第53図 梅田10号墳 墳丘断面図 (1/100)



第54図 梅田10・11号墳 調査後地形測量図 (1/200)



第55図 梅田10号墳 埋葬施設 平・断面図 (1/30) 出土遺物 平面図 (1/10)

梅田11号墳

(第54、56、57図・写真図版79、83、84)

立地および墳丘

11号墳は、10号墳の北側、尾根頂部から下がった斜面に位置する古墳で、墳丘の半分が道路予定地外にあるため調査区外となり、カット面・周溝・墳丘平坦面が調査対象となった。そこで、掘削前に許可を得て、調査区外の墳丘周辺の立木を伐採し、調査区外も含めた墳丘の測量を行った。

その結果、墳丘は 6×9 mの規模で、楕円形を呈する円墳と判明した。斜面上方側をカットし、斜面下方側に盛り土して墳丘を構築し、墳丘とカット面の間には弧状に周溝が設けられていた。

周溝は中央部が浅く、その両側に向かって深くなっている。

墳丘は調査区内での土層観察では、旧表土を残した上に約20cmの盛土をして構築されていた。

埋葬施設

埋葬施設は1基で、長さ3.20m、幅1.46mの墓壙に長さ2.05m、幅0.51mの木棺を納めた木棺直葬の主体部である。主軸は尾根に直交し、N82°Wで、ほぼ東西方向である。

棺内中央部の南側板付近から鉄鏃1点(M16)が出土している。棺外からは鉄鏃(M17)・刀子(M18)・曲刃鎌(M19)が出土した。また棺上の棺検出面から須恵器の杯蓋・杯身の2セット(25、26、27、28)が出土している。



写真8 調査状況

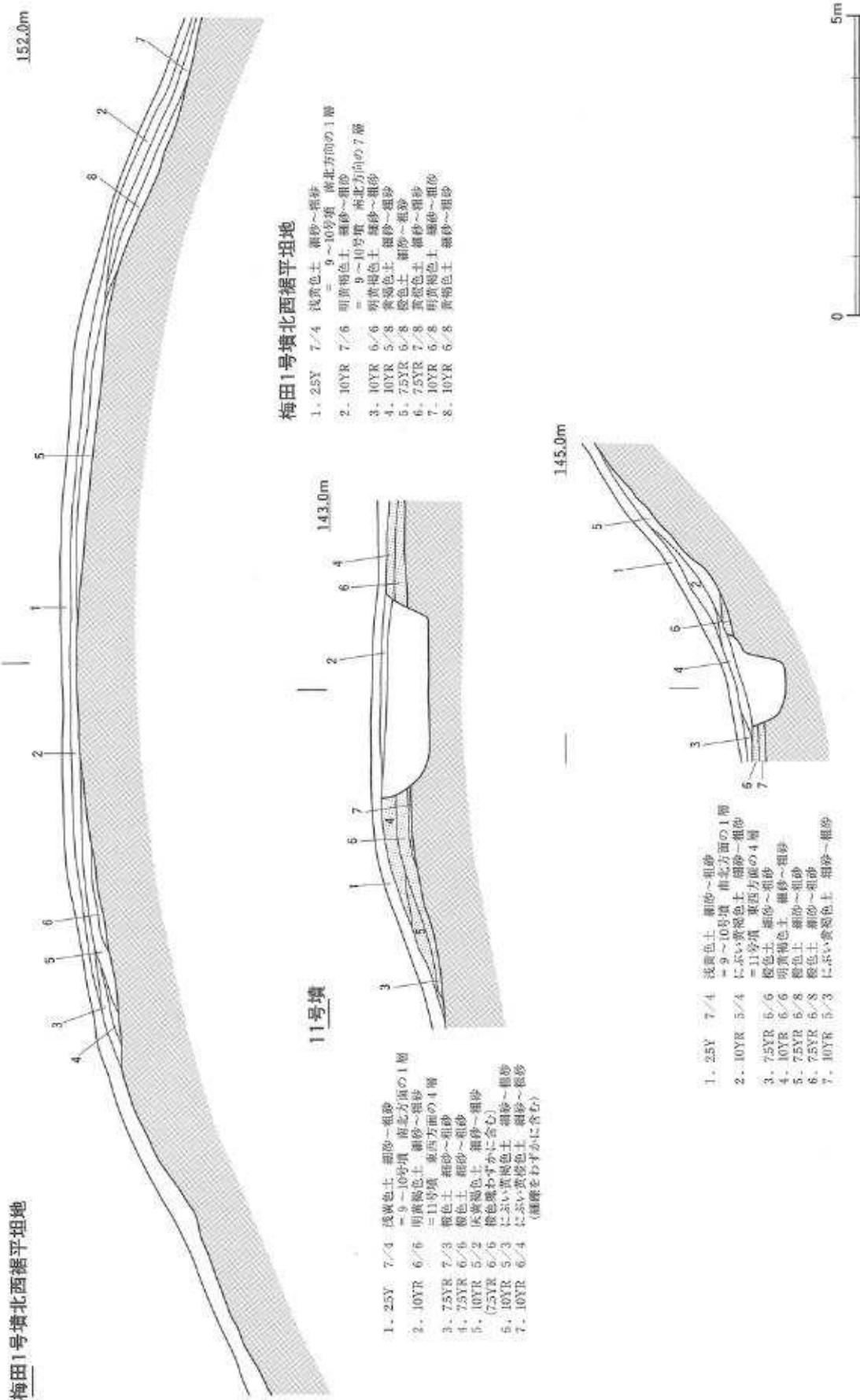
出土遺物 (第67、68図・巻首図版6・写真図版126、129)

棺上から須恵器4点(25~28)が出土し、棺内から鉄鏃(M16)が、棺外から鉄鏃(M17)・刀子(M18)・曲刃鎌(M19)が出土している。

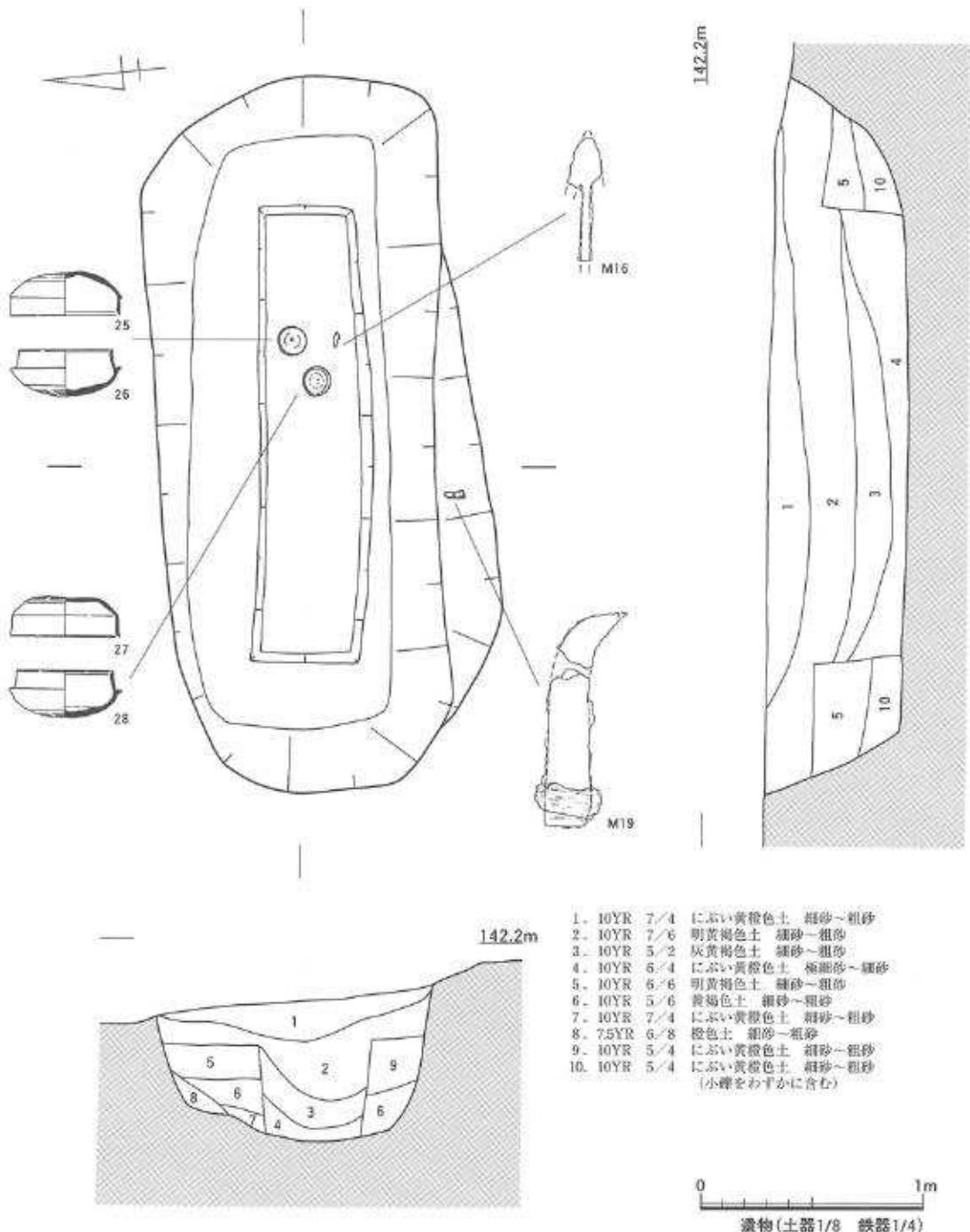
棺上に副葬された杯蓋と杯身の2セット(25、26・27、28)のうち、杯身はともにたちあがりがわずかに内傾し、口縁端部には内傾する段をもつ。杯蓋は口縁部に内傾する明瞭な段をもつが、天井部と口縁部を画する稜はわずかに突出するもの(25)とほとんど形骸化したもの(27)に分けられる。また、25の内面の一部には微妙に、26の内面全体には明瞭に、それぞれ赤色顔料がみられる。

M16は尖根系短頸尖根式の腸抉柳葉式で鏃身と頭部の一部、茎を欠損する。現存長7.3cm、鏃身幅1.8

梅田1号墳北西裾平坦地



第56図 梅田1号墳 北西裾平坦地断面図 (1/100) 梅田11号墳 墓丘断面図 (1/100)



第57図 梅田11号墳 埋葬施設 平・断面図 (1/30)

cm。M17は茎から尖根系長頸式ともとれるが、頸部と鐵身と欠損しているため、形式は不明である。現存長7.0cm、茎3.9cm。茎部は先端を欠損するが、矢柄が残る。M16と同一個体の可能性もあるが、別個体として扱った。

M18は刀子である。2分割になった茎の復元が難しいため、現存長9.2+2.0cmとした。刀身は鋒を欠損するため、現存長6.4cm、幅1.3cm、厚0.4cmで、反りではなく、両刃である。刃を研ぎ減りによって欠損する。茎は2.8+2.0cm、幅1.2cm、厚0.3cm、栗尻で目釘孔はない。良好な状態で柄の木質が付着する。

M19は曲刃鎌である。長12.9cm、幅2.8cmで、中型の鎌である。柄の木質が残存しており、柄に対して、鎌が鈍角の角度になるよう使われていたことが想像できる。柄の内部にあたる部分は端部に向かってわずかに幅が狭くなっている。刃の先端は尖り、湾曲の度合いも強い。



写真9 調査状況



写真10 調査状況

第2節 梅田12・13・33号墳

梅田12号墳

(第58~60図・写真図版85~90)

立地および墳丘

12号墳は、枝尾根の急斜面に築造された古墳で、尾根上側をカットし、下方側に盛土して墳丘を構築し、墳丘とカット面の間には弧状に周溝が設けられていた。墳丘は7×10.5mの規模で、梢円形を呈している。墳丘の土層断面の観察によれば、旧表土を残したまま盛土し、構築している。周溝は中央部で浅く、そこから両側に下がるにつれ深くなり、斜面に同化するよう終わる。

埋葬施設

埋葬施設は1基で、長さ3.38m、幅1.12mの墓壙に、長さ2.18m、幅0.49mの木棺を納める木棺直葬の主体部であった。主軸は尾根に直交する方向でN66°Eである。

棺内から遺物は出土していないが、棺上から須恵器の杯身(M22)、墓壙内棺外から鉄鎌(M22・M23)・刀子(M24)が出土している。また、墳頂部から破碎された須恵器の甕(M25)、墳丘裾より銅鏡(M25)が出土している。

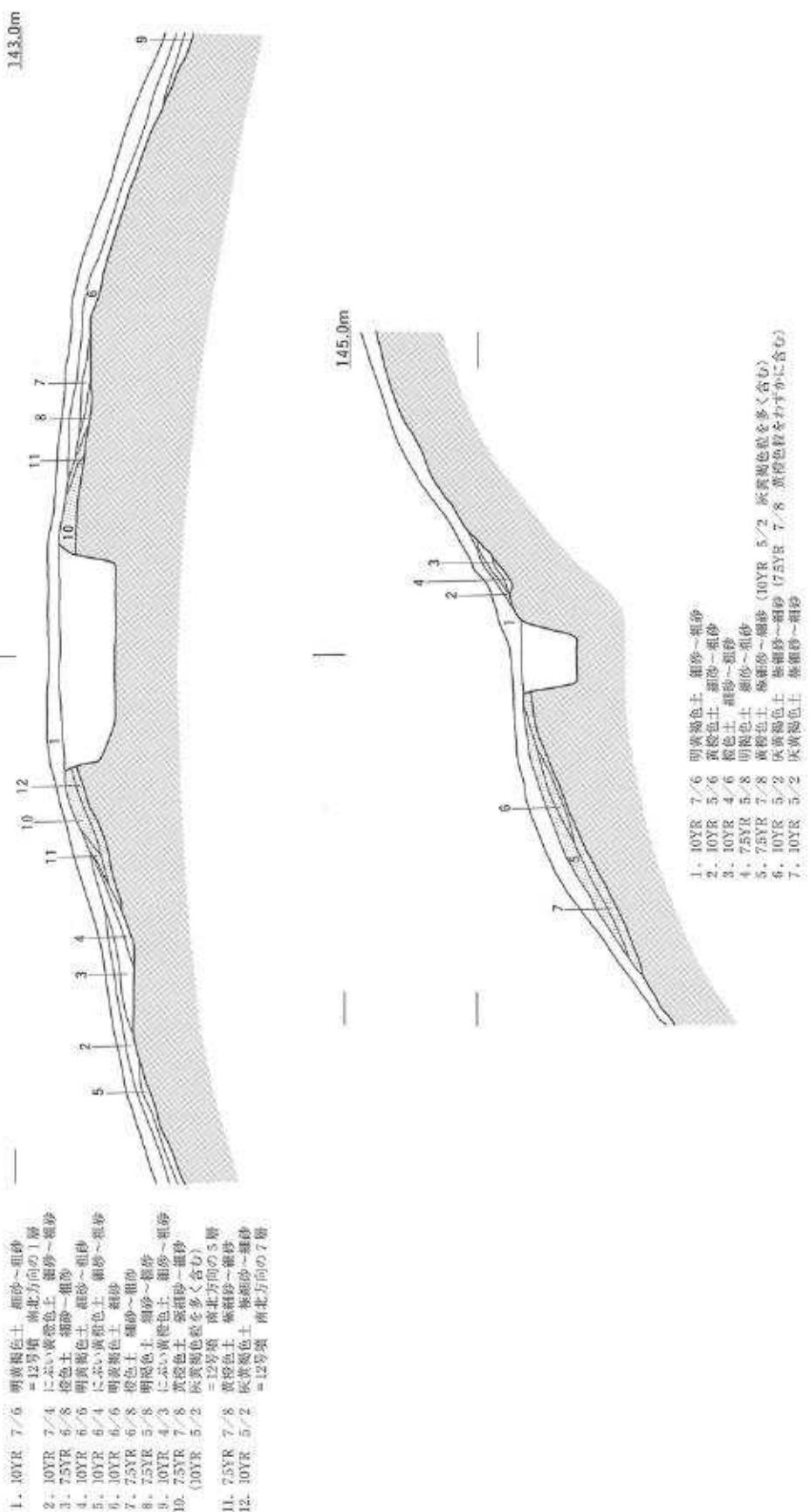
出土遺物(第67、69図・写真図版127、130)

棺上および墳頂部から須恵器2点(M22・M23)が出土し、墓壙内棺外から鉄鎌(M22・M23)・刀子(M24)が、墳丘裾より銅鏡(M25)が出土している。

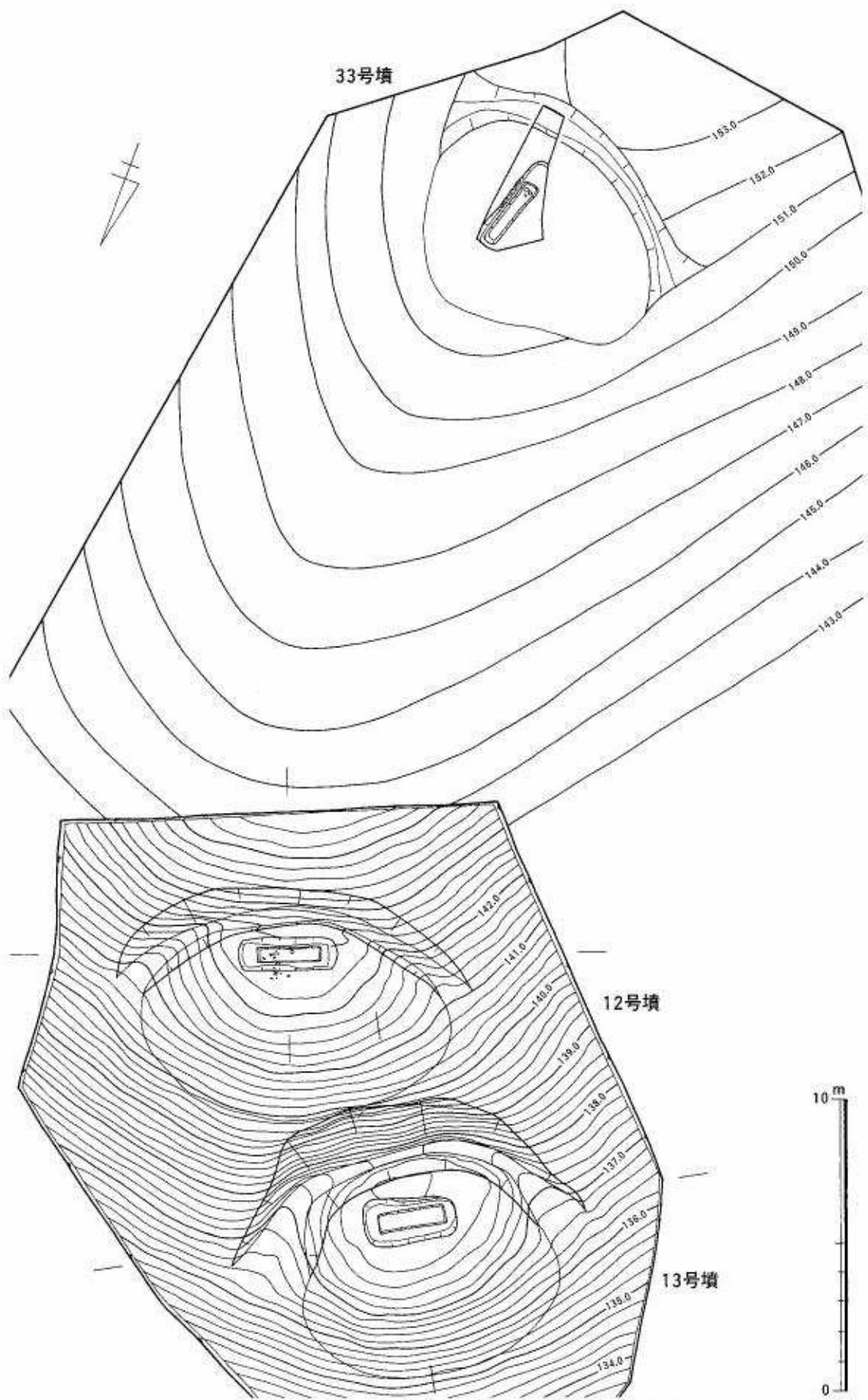
M22は口径10.0cmを測る小型の杯身である。M23は口縁部から体部上方のおよそ1/4が残存する甕であり、口径20.0cm、腹径24.5cmに復元される。体部内面には同心円文状のタタキ痕が残り、外面は平行タタキのちカキ目調整が施されるが、摩滅によってともに不明瞭である。

M24は刀子である。鋒を欠損し、現存長11.0cm。刀身は現存長6.3cm、幅1.5cm、厚0.4cm。反りは緩やかで両刃である。刃を研ぎ減りによって欠損する。茎は長4.7cm、幅1.0cm、厚0.4cm。角尻で目釘孔はない。柄の木質が付着する。幅1.4cm、厚1.1cm。

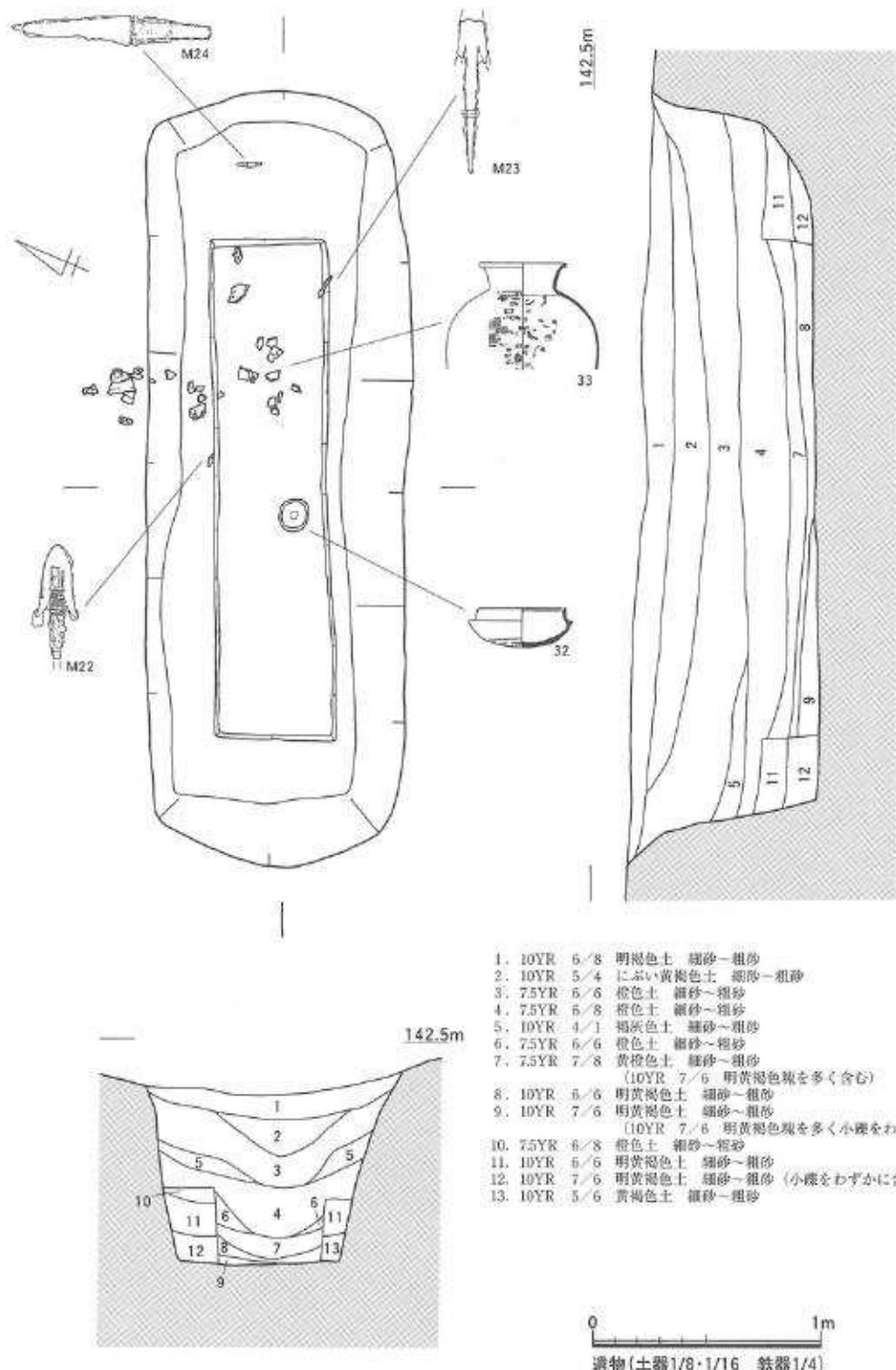
M25は銅製品の寛永通宝である。墳丘裾で表採した。



第58図 梅田12号墳 墳丘断面図 (1/100)



第59図 梅田12・13・33号墳 調査後地形測量図 (1/200)



第60図 梅田12号墳 埋葬施設 平・断面図 (1/30)

梅田13号墳

(第59、61~63図・写真図版85~87、91~93)

立地および墳丘

13号墳は、枝尾根の急斜面に築造された古墳で、12号墳の北西に隣接し、この尾根では最も標高の低い位置にある。尾根上側をカットし、下方側に盛土して墳丘を構築し、墳丘とカット面の間に弧状に周溝を設けている。墳丘は7.5×9.5mの規模で、橢円形を呈し、旧表土を残したまま、約1mの盛土を行って構築されていた。

周溝の断面形は逆台形で、両端は小さな平坦面となっている。周溝内から須恵器の杯蓋（34）が出土している。

埋葬施設

埋葬施設は1基で、長さ3.17m、幅1.50mの墓壙に、長さ2.28m、幅0.64mの木棺を納める木棺直葬の主体部であった。主軸は尾根に直交する方向で、N48.5°Eである。

棺内から碧玉製管玉とガラス小玉・勾玉（S15~S28）・耳環（M26）が副葬品として出土している。また、墳頂部から須恵器の壺（35）が出土している。

出土遺物（第67、69図・巻首図版7・写真図版130）

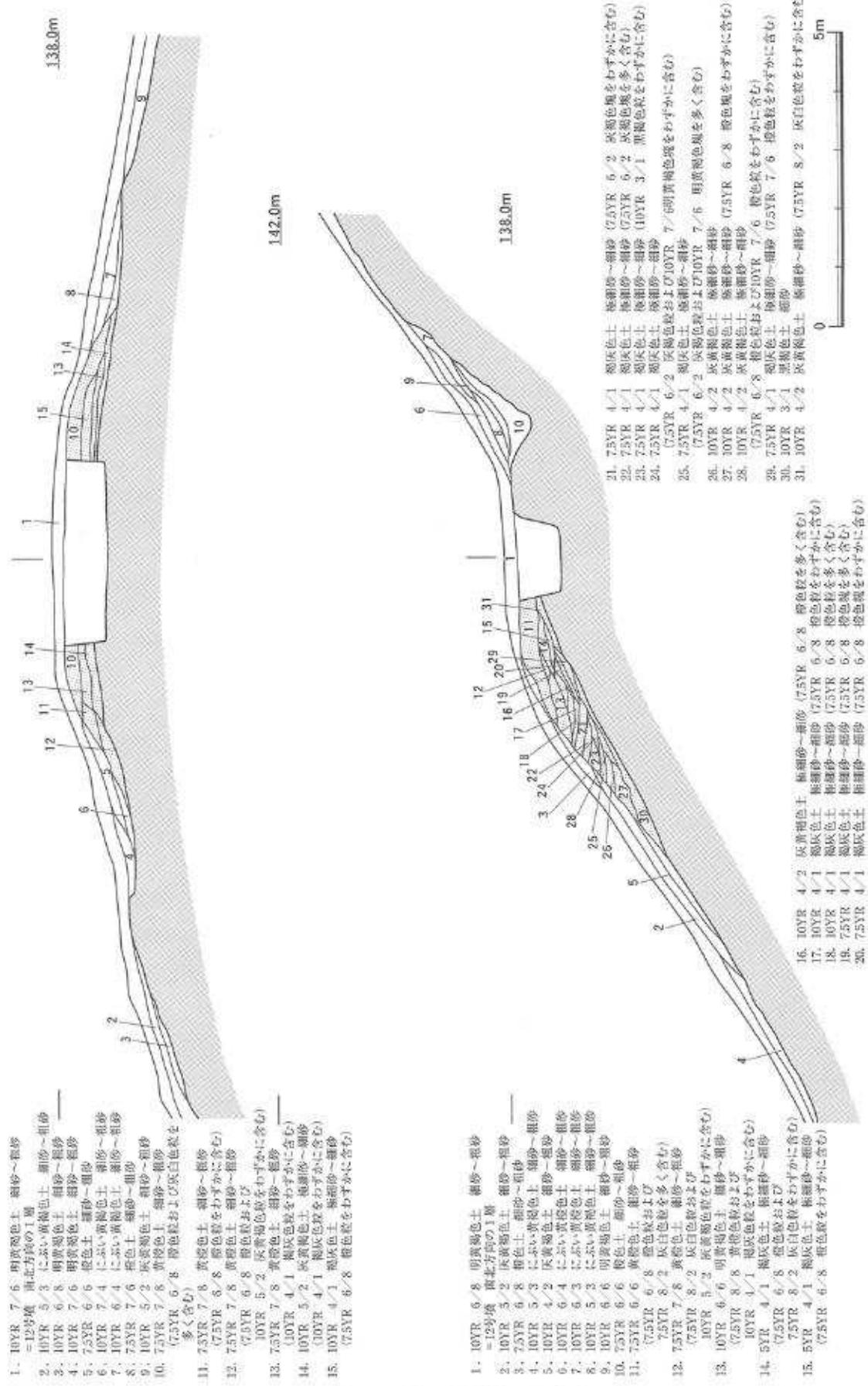
周溝内および墳頂部から須恵器2点（34・35）が、棺内から玉類（S15~S28）・耳環（M26）が出土している。

34の杯蓋は口径に対して器高が低く、天井部と口縁部を画する稜はほとんどみられず、丸くおさめられている。35は口径10.6cm、器高16.5cmを測る丸底の壺である。体部外面には櫛描き状の調整痕が巡り、自然釉と別個体の小破片が付着する。内面底部には工具痕とハケ調整の痕跡が残る。

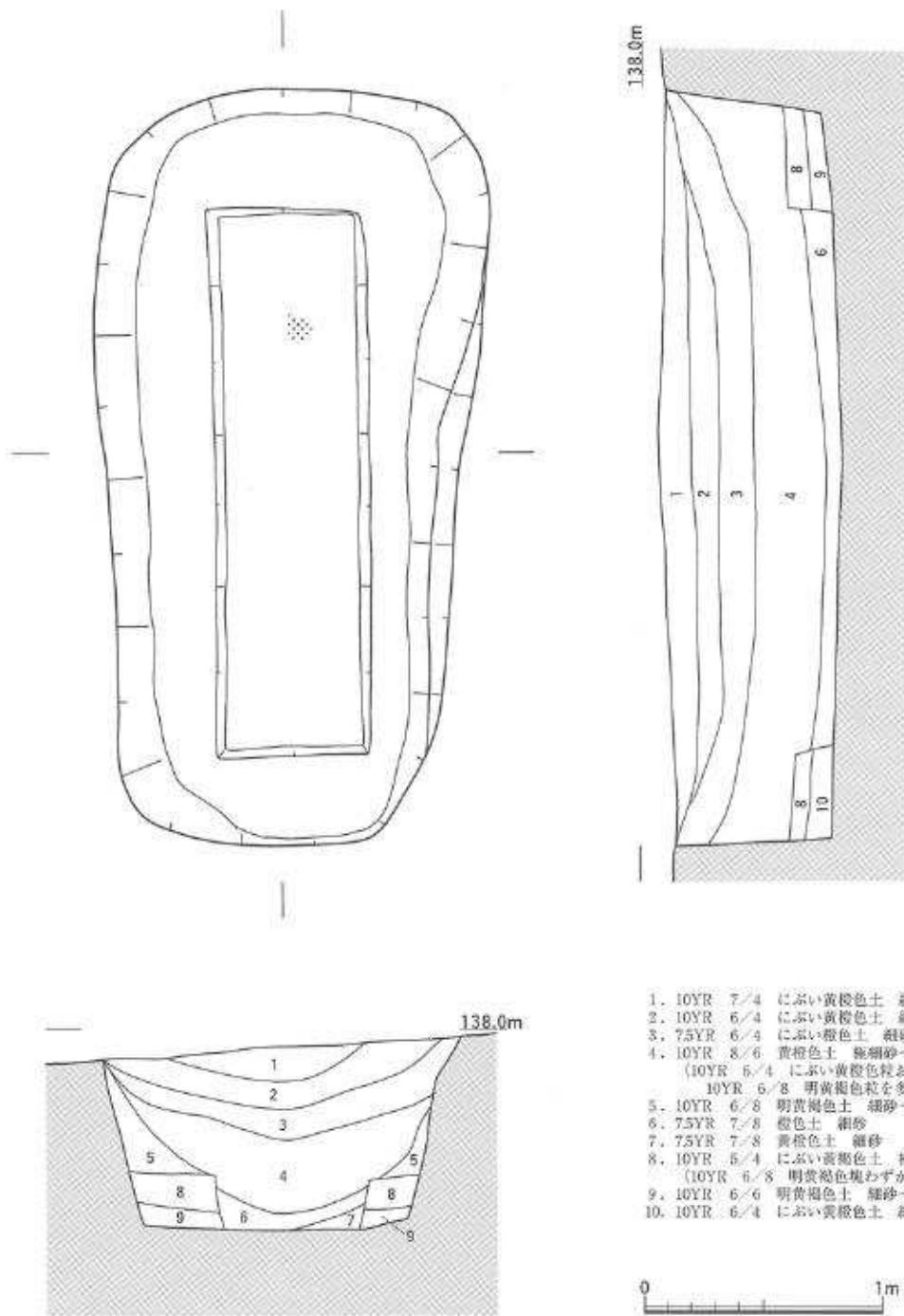
S15はガラス製の勾玉の頭部で、色はコバルトブルーである。S17はガラス小玉で、にぶい褐色である。

S16・18~28は管玉である。S20・23が硬質の碧玉である以外は軟質のグリーンタフ製である。破損が著しいため、全長のわかるものは少ないが、20~25mm、直径6~7mm前後のもののが多かったようである。S20は黒色、S23は暗緑灰色で暗めの色であるが、それ以外は明緑灰色・緑灰色・灰オリーブ色のやや白っぽい色調である。

M26は、もとは表面に鍍金されたものであろうが、その痕跡は全く残っていない。銅製の環の一部で、おそらく耳環と思われる。太さは1mm、残存長は1.5cmである。

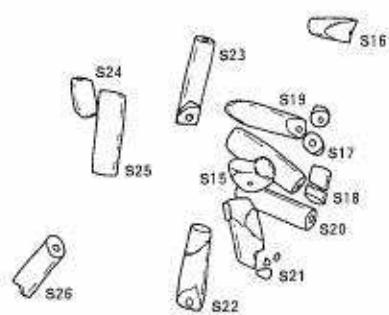


第61図 梅田13号墳 墓丘断面図 (1/100)



第62図 梅田13号墳 埋葬施設 平・断面図 (1/30)

M26



第63図 梅田13号墳 出土遺物 平・断面図 (1/2)

梅田33号墳（旧 H8-11トレンチ）

（第59、64図・写真図版85、93）

立地および墳丘

33号墳は、平成8年度確認調査時にトレンチ11で調査を行った古墳である。その後の路線変更により、本調査は行っていない。この確認調査によって、周溝を持つ古墳であり、地山を掘りこんだ墓壙内に木棺直葬の主体部をもつことが明らかになった。12・13号墳の南西にあたり、12号墳とは主体部間の距離で25m離れているが、その間に古墳の存在は確認されていない。

埋葬施設

確認された主体部は1基で、主軸の方向は尾根方向と一致し、N17°Eで、ほぼ南北方向である。

墓壙の規模は確認されていないが、長さ3.6m以上、幅1m以上。調査者は墓壙が木棺痕跡よりかなり大きいため、別の埋葬施設が存在する可能性を考えている。墓壙の肩には、地山掘削時の工具痕が一部に残っていた。

木棺の長さは2.48m、幅0.50m。方向はおおよそ南北方向である。木棺内の南端近くに、須恵器の杯身（31）、杯蓋（30）を伏せて置いた土器枕があり、その周辺で、人間の歯とともに銅製の小型の耳環（M21）が1点出土している。足もとにあたる位置からは、木質の付着した刀子（M20）が出土している。他に盛土内より須恵器の杯蓋（29）が出土している。

棺底は緩やかに湾曲しており、調査者は、いわゆる割竹形ないし船形の木棺を納めていた可能性を考えている。

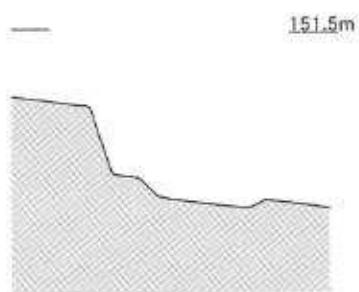
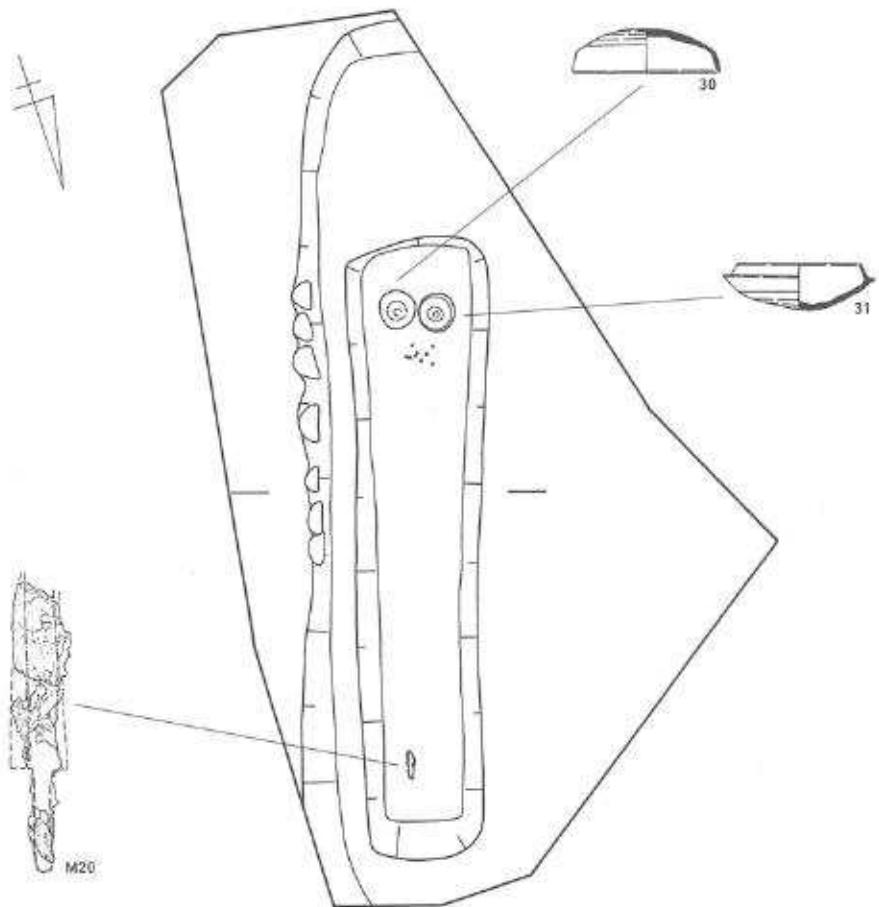
出土遺物（第67図・写真図版122、127、130）

棺内から須恵器2点（30、31）と刀子（M20）・耳環（M21）、また、盛土内から須恵器1点（29）が出土している。

29・30は天井部と口縁部を画する稜がほとんど失われた杯蓋である。29の口縁端部は比較的丸くおさめられているが、30は内傾して段をもつ。31は口径に対して器高は比較的低い杯身である。たちあがりは低く内傾し、口縁端部は丸くおさめられている。

M20は鞘に納められた状態で副葬された刀子である。鞘とともに刀身の大半も失われて、現存長15.1cm。鞘の背側に鞘木の合わせ目がみられないことから、一本を削り抜いて作られたことがわかる。また、刀身と鞘の間には「遊び」とみられる隙間があった。断面倒卵形で幅2.3cm、厚1.3cm。刀子は現存長9.7cm、幅1.7cm、厚0.5cm。反りではなく、両刃である。茎は長5.4cm、幅1.0cm、厚0.4cmで栗尻、目釘孔は不明である。一部、木質が付着するため、本来は柄も装着されていたようである。

M21は銅製の耳環である。両端は摩滅しているが、残存部分の差し渡しは1.9cm×1.4cmで、太さは0.2cmである。もとは鍍金されていたものであろうが、その痕跡は全く残っていない。



0 1m
遺物(土器1/8 鉄器1/4)

第64図 梅田33号墳 埋葬施設 平・断面図 (1/30)

第3節 梅田14号墳

梅田14号墳

(第65、66図・写真図版85~87、94)

立地および墳丘

14号墳は、主尾根から北に延びる尾根状に並ぶ約8基の古墳群のうち、最も裾に位置している。直径およそ7mの円墳で、尾根の斜面上方側をカットし、下方側に約30cm程度盛土して墳丘を構築している。カット面のほとんどは調査区外になっているが、周溝の一部が確認されており、墳丘とカット面の間に弧状の周溝が設けられているものと推測できる。

埋葬施設

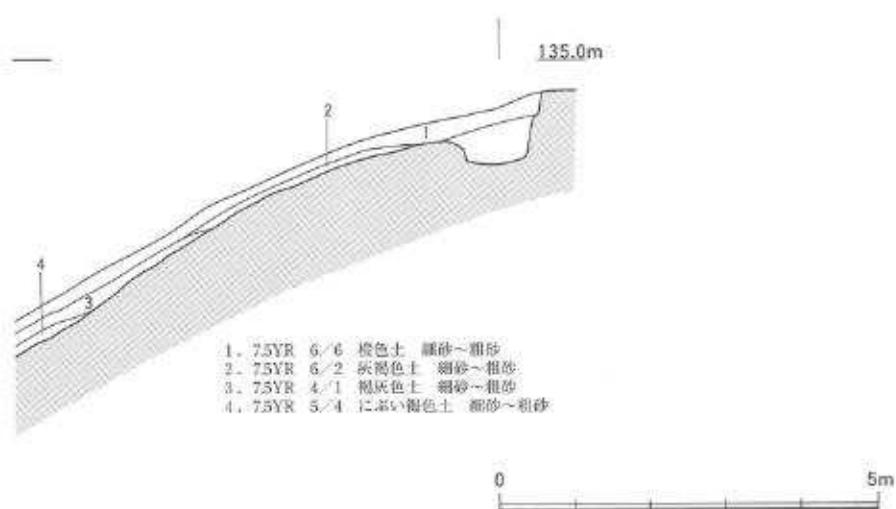
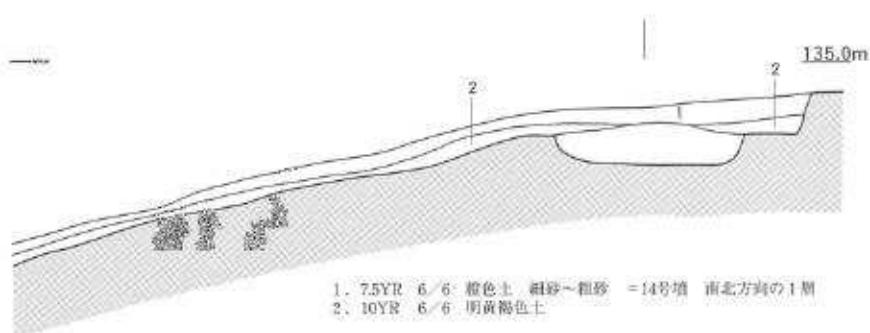
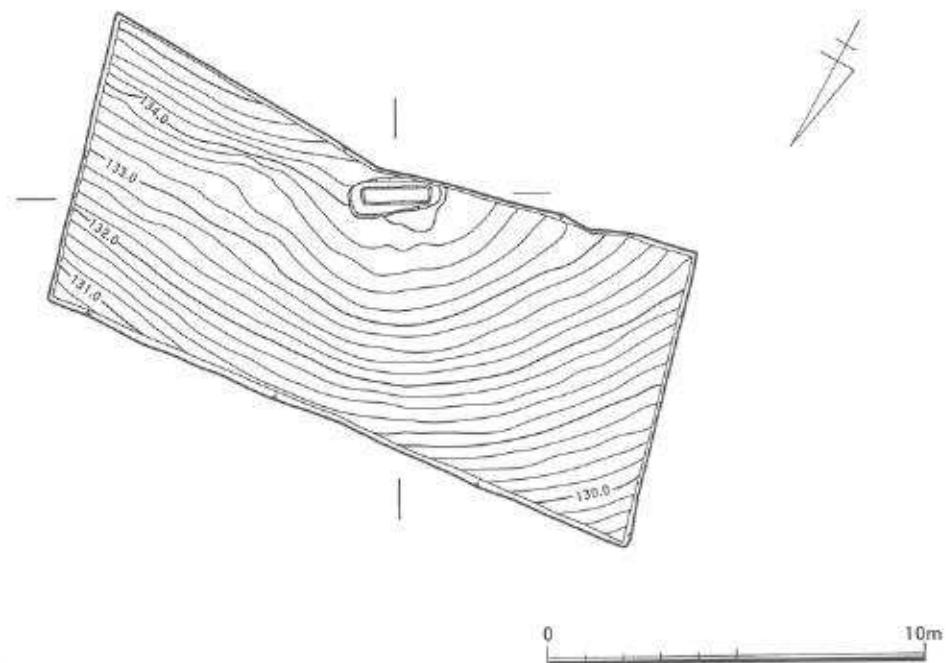
埋葬施設は1基で、長さ2.51m、幅0.91mの墓壙に、長さ1.80m、幅0.43mの木棺を納めたものである。

主軸は尾根に直交する方向で、N53°Eである。

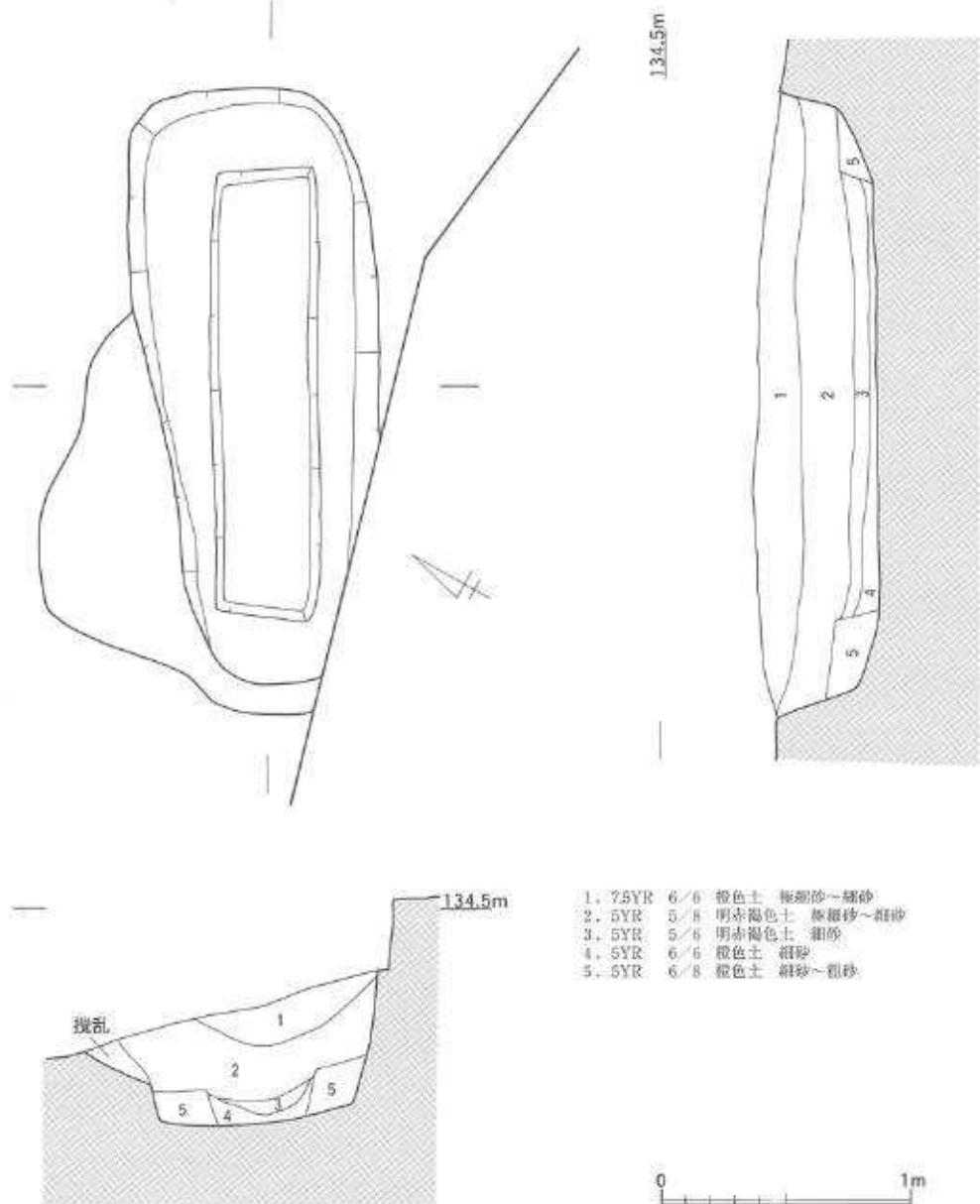
棺の内外とも遺物が出土しておらず、築造の時期を決める資料はない。

出土遺物

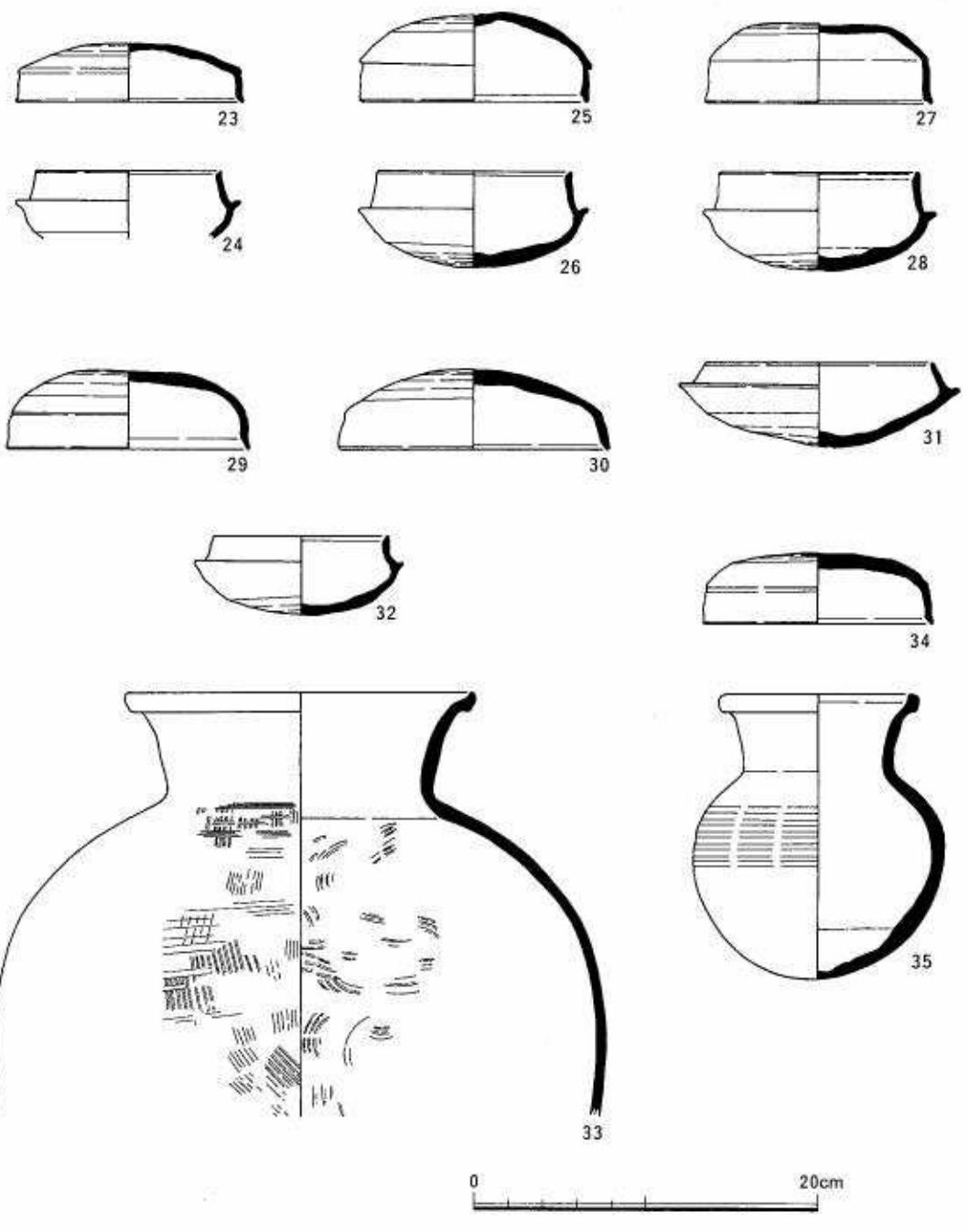
墳丘および埋葬施設から遺物は出土しなかった。



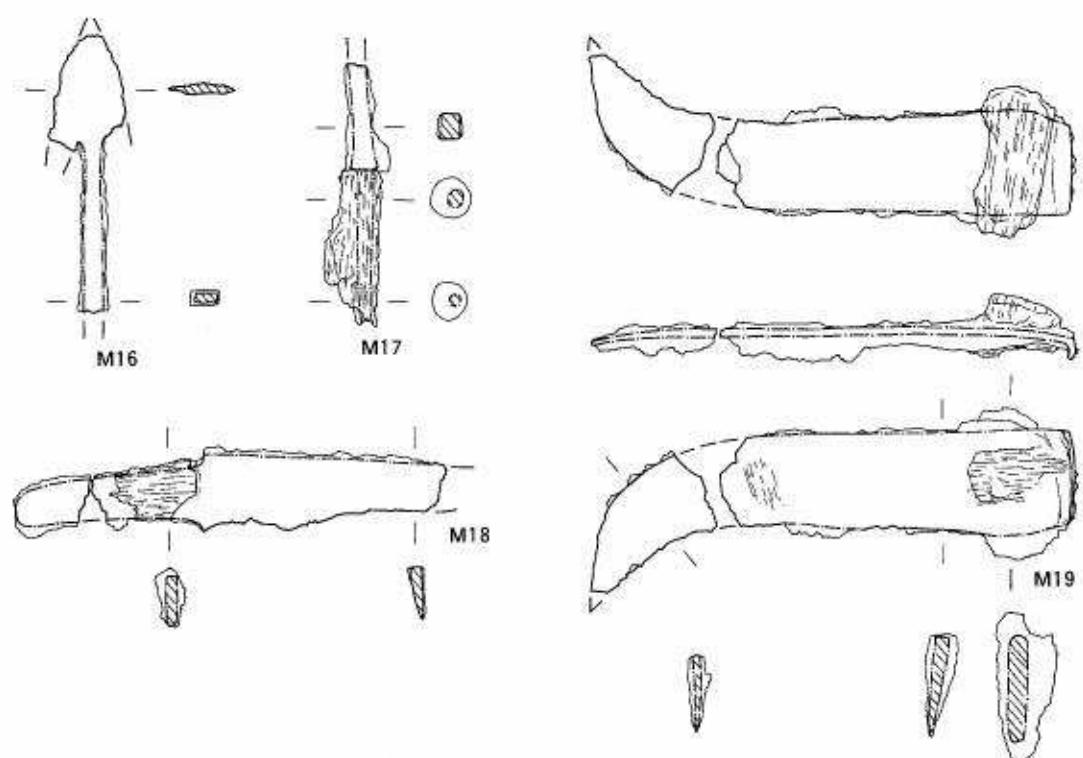
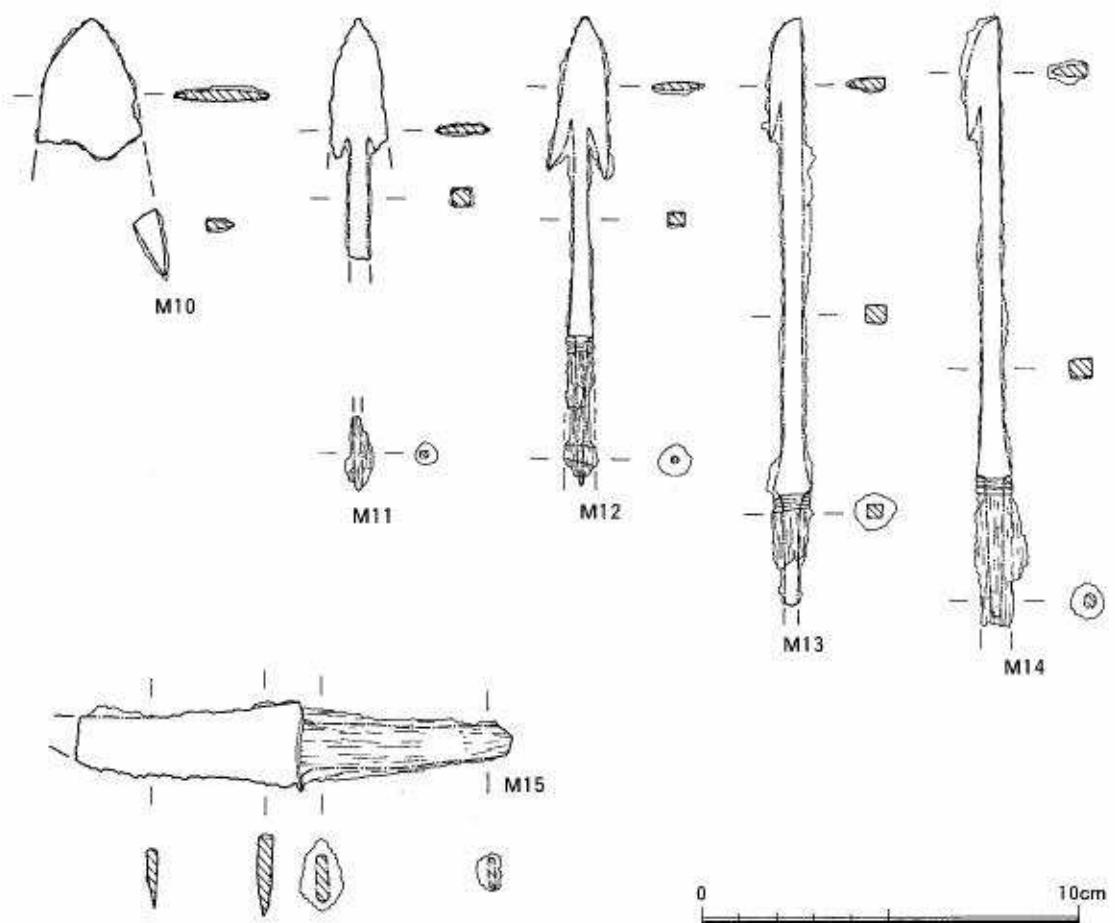
第65図 梅田14号墳 調査後地形測量図 (1/200) 墓丘断面図 (1/100)



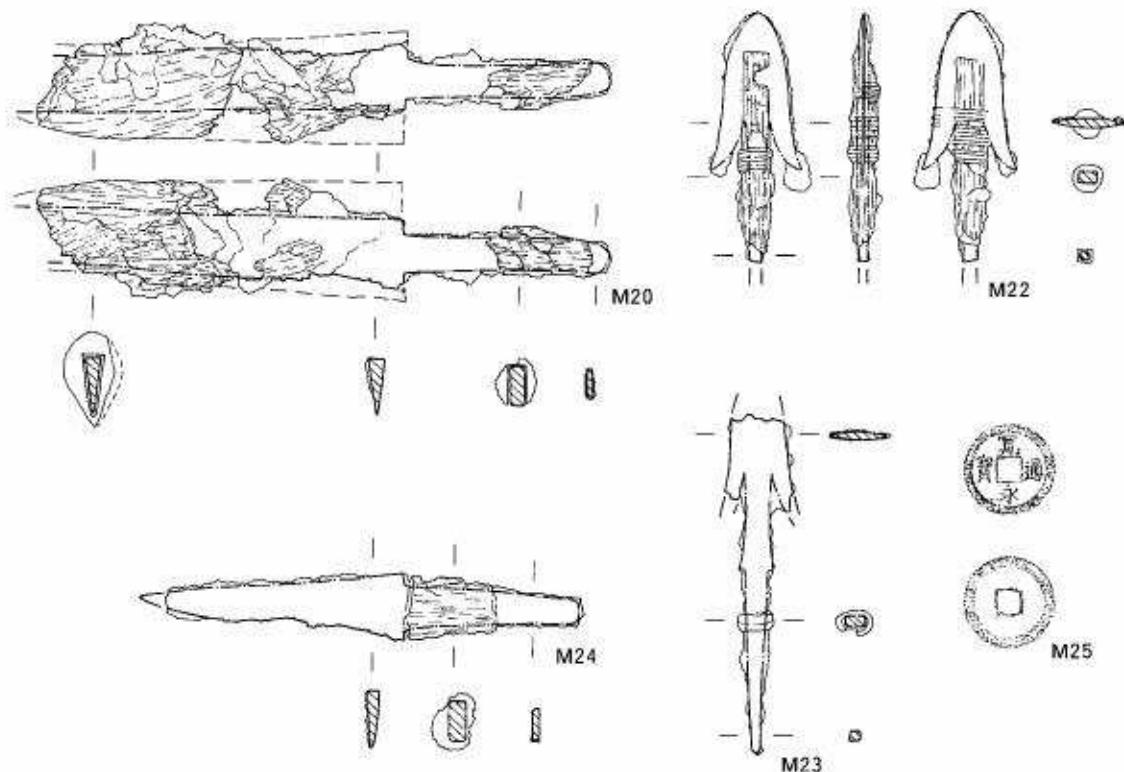
第66図 梅田14号墳 埋葬施設 平・断面図 (1/30)



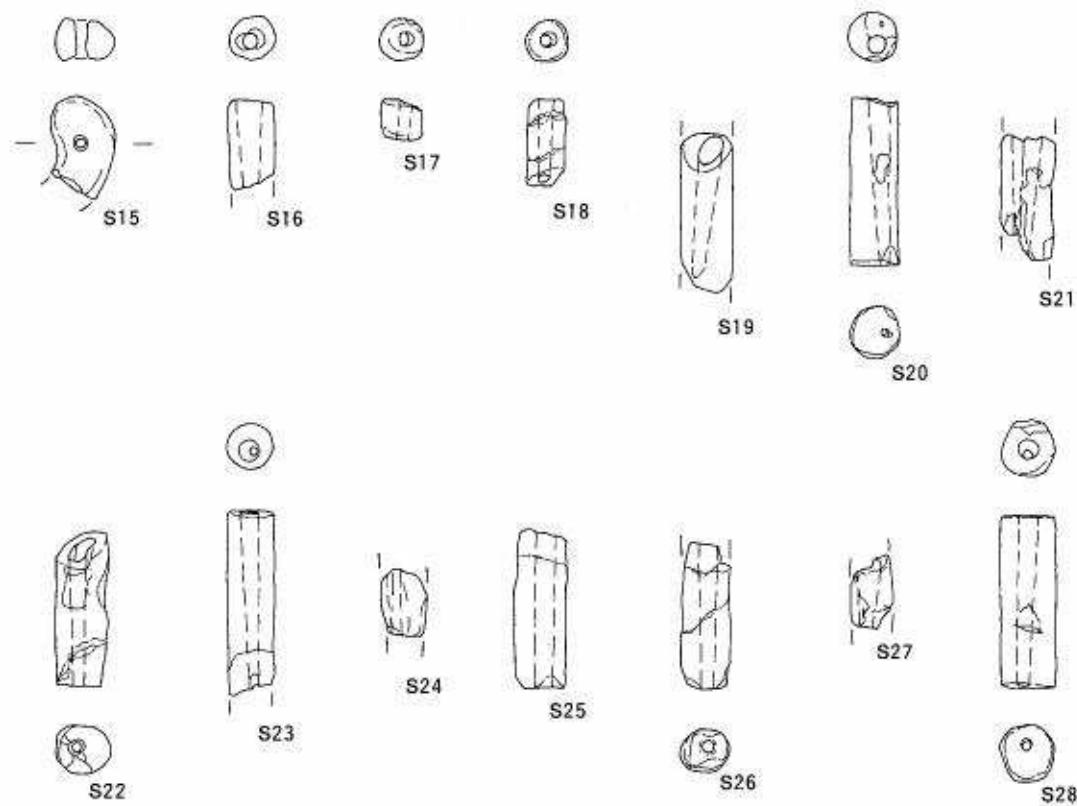
第67図 II群 出土遺物 土器



第68図 II群 出土遺物 金属器



0 10cm



第69図 II群 出土遺物 金属器・玉類

第5章 III群／支尾根の古墳の調査（2）

第1節 梅田25・31号墳

梅田25号墳

（第70～73図・写真図版95～100）

立地および墳丘

25号墳は主尾根から北に派生する西端の支尾根の西に立地している。地形的には東側にのみ浅い谷が入り込み、わずかに尾根状に張り出しており、その地形を利用して比較的急な斜面地に古墳がつくられている。後述する31号墳は、25号墳の下層から検出された古墳である。

古墳は斜面上方側（以下、墳丘背後）を北東から南西方向に削り、削った残土は斜面下方側に盛土として積み上げている。急斜面地に造成されているため、墳丘背後の掘削範囲は広く、掘削面の上端と墳頂部との比高差は約3mにもおよんでいる。掘削面と墳丘との間には、半円状の区画溝が設けられており、幅1.8m、深さ0.32mを測る。区画溝の両端は、立ち上がりがなくなり、斜面に同化するように収束している。

墳丘は、9.5×10.6mのほぼ円形を呈している。墳丘の築造にあたっては、31号墳の区画溝から墳頂部を埋め一定の傾斜地を形成し、その後、水平方向に盛土を行っていることが土層の断面観察によって判明した。盛土は、最も厚いところで約1mを測り、墳丘背後を削って発生した大量の残土を幾層にも積み重ねている。梅田3号墳や13・27号墳でも同程度のものがみられるが、他の古墳あるいは周辺の古墳と比較しても盛土の規模は大きいものである。

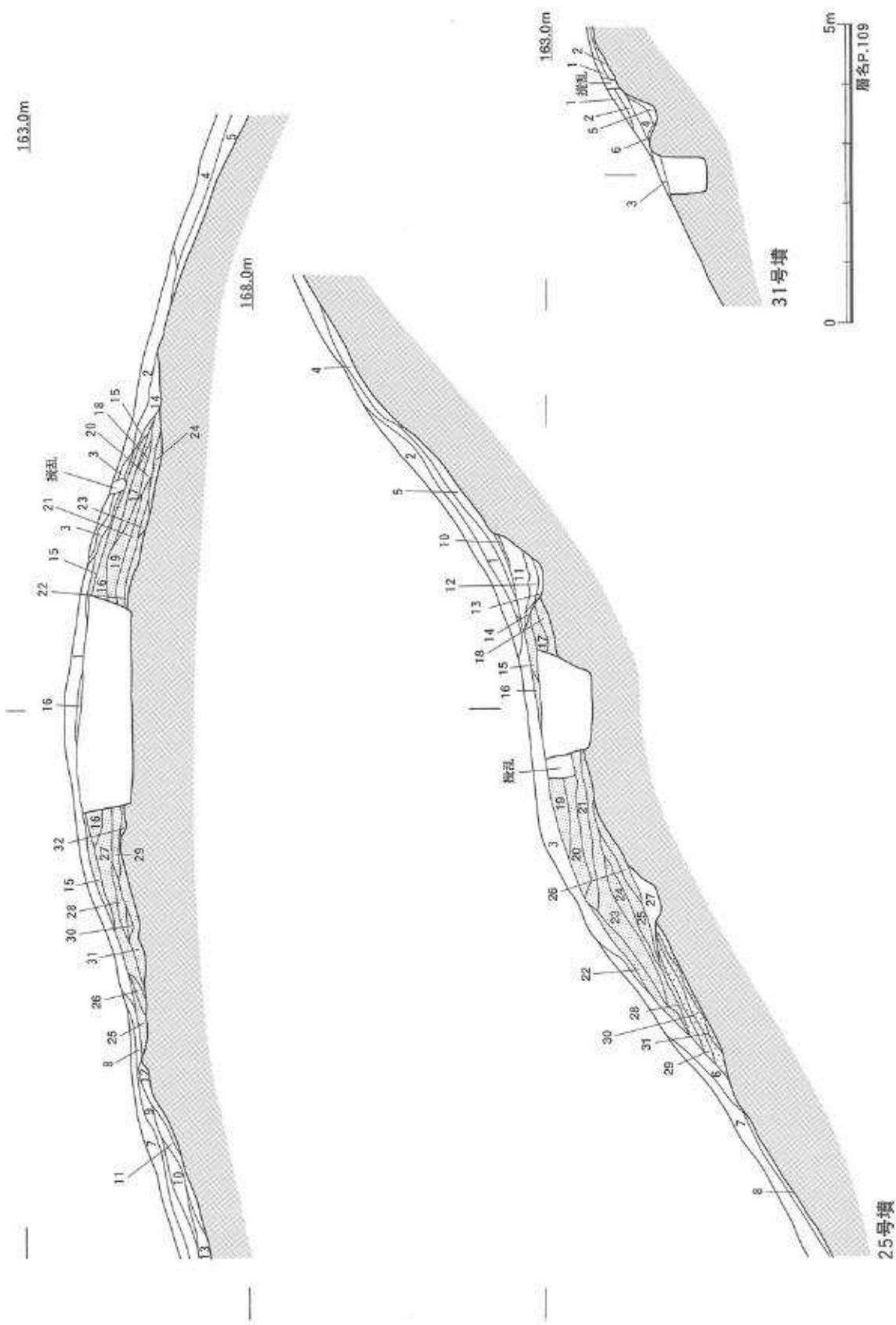
墳丘上から散乱した状態で須恵器の甕（41）が出土した。

埋葬施設

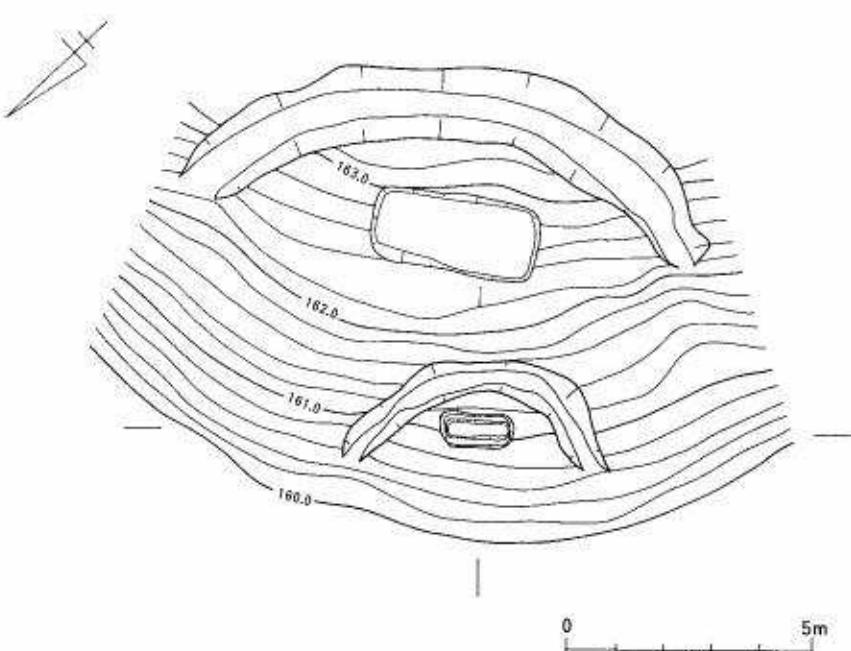
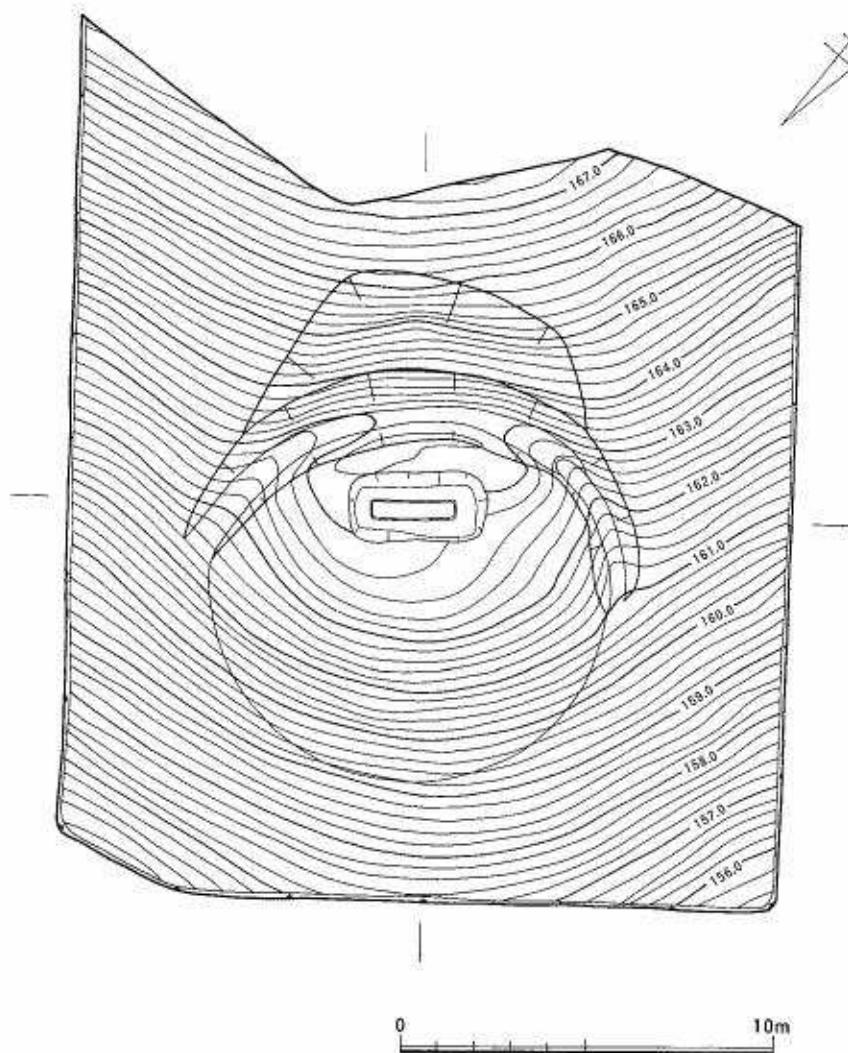
墳頂部には約4.5×6mの梢円形の平坦地がつくられ、そのほぼ中央から北東—南西方向（N57°E）を主軸とする木棺直葬の埋葬施設が1基検出された。墓壙は長さ3.64m、幅1.82mを測り、平面形はほぼ長方形を呈するものの、角部はいずれも曲線を描いている。墓壙はほぼ垂直に掘り下げられ、最も深いところで0.86mを測る。

墓壙の中央には、長さ2.24m、幅0.54m、深さ0.28mを測る木棺が納められており、墓壙検出面から約0.6m掘り下げた地点で確認された。

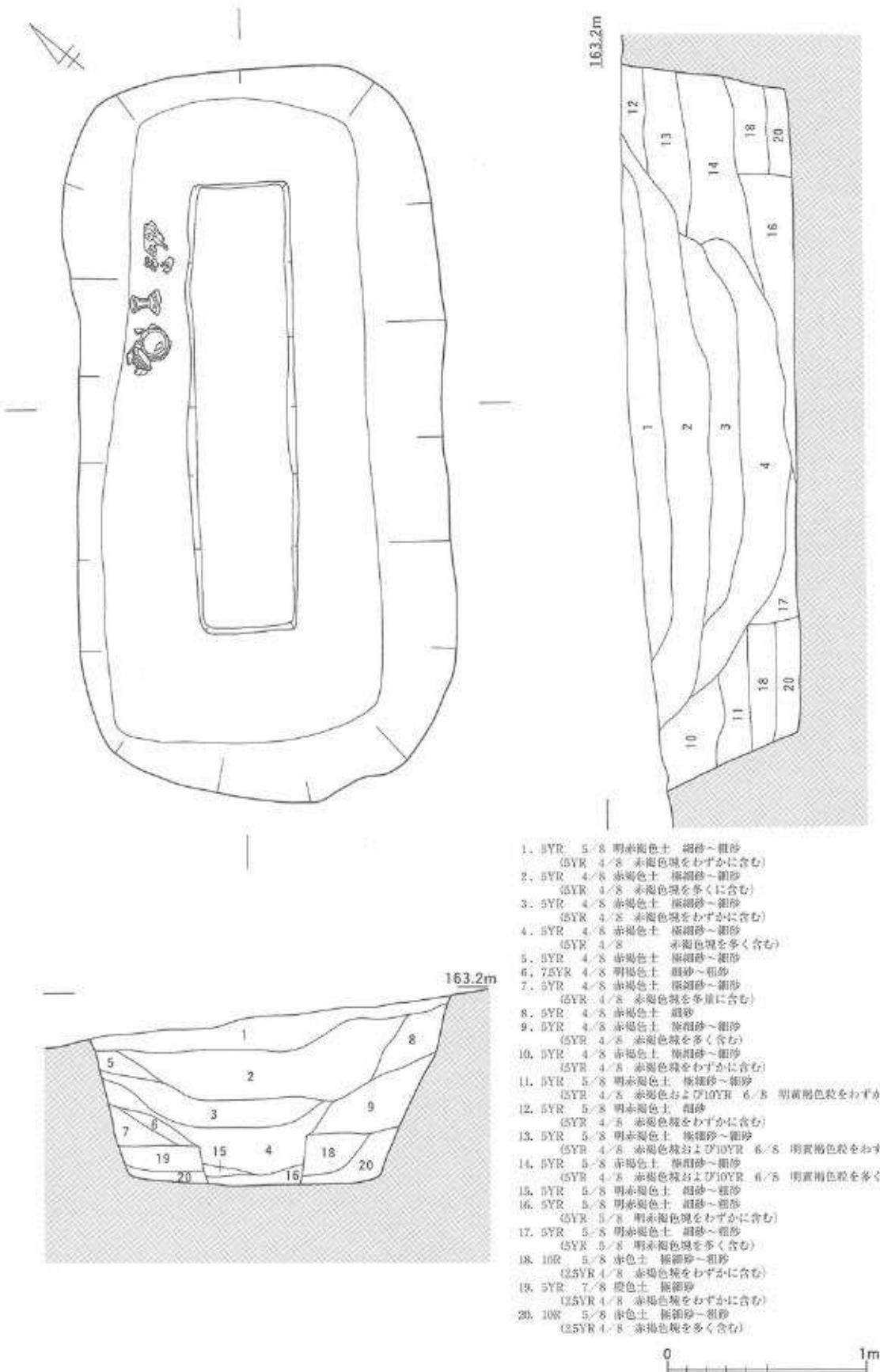
棺内から遺物は出土しなかったが、棺検出面の北側の壁際から、須恵器の杯蓋と杯身がそれぞれ2点（36、38・37、39）・高杯（40）・馬具（M27～M29）が一群となって出土した。出土した地点は棺外に位置しているが、他の支尾根に立地する古墳の埋葬状況から頭部側にあたるものと考えられる。杯蓋と杯身は、逆位の杯蓋（38）の上には完形の杯身（39）が重なり、口縁部を棺側にむけて立った状態の杯身（37）とその背後に杯蓋（36）が重なってそれぞれ出土した。また、高杯は杯部を棺側に横に倒れた状態で出土し、馬具は鏽が著しく、からうじてその形状をとらえることができる状態であった。



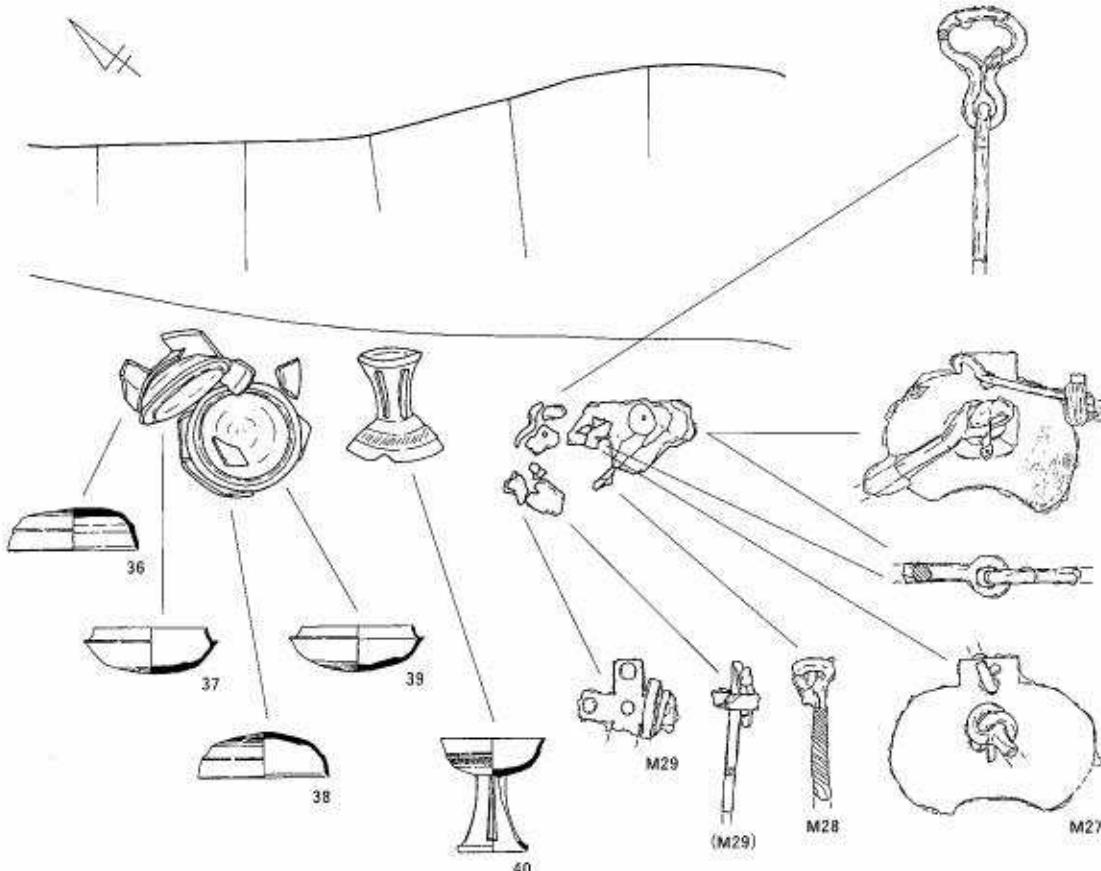
第70図 梅田25・31号墳 墳丘断面図 (1/100)



第71図 梅田25号墳 調査後地形測量図 (1/200) 梅田31号墳 調査後地形測量図 (1/150)



第72図 梅田25号墳 埋葬施設 平・断面図 (1/30)



遺構1/5・遺物 (土器1/8 鉄器1/4)

第73図 梅田25号墳 出土遺物 平面図 (1/10)

25・31号墳 墳丘土層断面 (東西方向)

1. 7SYR 5 / 8 明褐色土 粗砂～粗砂 = 南北方向の3層
2. 10YR 5 / 6 黄褐色土 粗砂～粗砂
3. 5 YR 5 / 8 明赤褐色土 粗砂～粗砂
4. 10YR 5 / 6 黄褐色土 粗砂～粗砂
5. 10YR 5 / 6 黄褐色土 粗砂～粗砂
6. 5 YR 5 / 8 明赤褐色土 粗砂～粗砂 = 南北方向の16層
7. 10YR 5 / 6 黄褐色土 粗砂～粗砂
8. 7SYR 5 / 6 明褐色土 粗砂～粗砂
9. 7SYR 4 / 6 黄褐色土 粗砂～粗砂
10. 10YR 5 / 8 黄褐色土 粗砂～粗砂
11. 10YR 5 / 8 黄褐色土 粗砂～粗砂
(5 YR 4 / 8 赤褐色色斑および塊をわずかに含む)
12. 7SYR 5 / 8 明褐色土 粗砂～粗砂
(5 YR 4 / 8 赤褐色色斑および塊をわずかに含む)
13. 10YR 6 / 8 明黄褐色土 粗砂～粗砂
14. 7SYR 5 / 8 明褐色土 粗砂～粗砂
(5 YR 4 / 8 赤褐色色斑および塊をわずかに含む)
15. 5 YR 6 / 8 明褐色土 粗砂
16. 5 YR 6 / 8 黄褐色土 粗砂
(5 YR 5 / 8 明赤褐色色斑および7SYR 5 / 6 浅黄褐色色斑を多く含む)
17. 7SYR 5 / 8 明褐色土 粗砂
18. 5 YR 5 / 8 明赤褐色土 粗砂
19. 5 YR 5 / 8 明赤褐色土 粗砂 (5 YR 5 / 8 明赤褐色色斑を多く含む)
20. 7SYR 5 / 8 明褐色土 粗砂～粗砂
(5 YR 5 / 8 明赤褐色色斑および10YR 7 / 8 黄褐色色斑をわずかに含む)
21. 5 YR 5 / 8 明赤褐色土 粗砂
22. 7SYR 7 / 8 黄褐色色斑をわずかに、5 YR 4 / 8 赤褐色色斑を多く含む
23. 7SYR 5 / 6 明褐色土 粗砂 (10YR 6 / 8 浅黄褐色色斑を多く含む)
24. 7SYR 5 / 8 明褐色土 粗砂～粗砂
25. 7SYR 5 / 6 明褐色土 粗砂～粗砂
(5 YR 5 / 8 明赤褐色色斑をわずかに含む)
26. 5 YR 4 / 8 赤褐色土 粗砂～粗砂
27. 5 YR 5 / 8 明赤褐色土 粗砂
(10YR 7 / 8 黄褐色色斑およびSYR 5 / 8 明赤褐色色斑を多く含む)
28. 5 YR 5 / 8 明赤褐色土 粗砂～粗砂
(5 YR 5 / 8 明赤褐色色斑をわずかに含む)
29. 5 YR 4 / 8 赤褐色土 粗砂～粗砂
(5 YR 5 / 8 明赤褐色色斑および7SYR 8 / 6 浅黄褐色色斑を多く含む)
30. 5 YR 5 / 8 明赤褐色土 粗砂～粗砂
(7SYR 8 / 6 浅黄褐色色斑をわずかに含む)
31. 5 YR 4 / 8 明褐色土 粗砂～粗砂
(5 YR 5 / 8 明赤褐色色斑および5 YR 7 / 4 にぶい橙色色斑を多く含む)
32. 5 YR 4 / 8 明褐色土 粗砂～粗砂
(5 YR 5 / 8 明赤褐色色斑を多く含む)

25・31号墳 墳丘土層断面 (南北方向)

1. 10YR 5 / 8 黄褐色土 粗砂～粗砂
2. 10YR 5 / 8 黄褐色土 粗砂～粗砂
3. 7SYR 5 / 8 明褐色土 粗砂～粗砂
4. 7SYR 5 / 8 明褐色土 粗砂～粗砂 (1～3mの小礫を多く含む)
5. 7SYR 5 / 6 明褐色土 粗砂～粗砂
- (6. 5 YR 5 / 8 明赤褐色土 粗砂～粗砂)
7. 7SYR 5 / 8 明褐色土 粗砂～粗砂
8. 7SYR 5 / 8 明褐色土 粗砂
9. 7SYR 5 / 8 明褐色土 粗砂～粗砂
10. 5 YR 5 / 8 明赤褐色土 (7SYR 5 / 8 明褐色色斑を多量に含む)
11. 7SYR 5 / 8 明褐色土 粗砂 (2～4cmの軟質の地山岩をわずかに含む)
12. 7SYR 5 / 8 明褐色土 粗砂～粗砂
13. 5 YR 4 / 8 赤褐色土 粗砂 (2～4cmの軟質の地山岩を含む)
14. 5 YR 4 / 8 赤褐色土 粗砂～粗砂 (2～4cmの軟質の地山岩を含む)
15. 5 YR 4 / 8 赤褐色土 粗砂～粗砂
16. 5 YR 5 / 8 明赤褐色土 粗砂～粗砂
17. 5 YR 4 / 8 赤褐色土 粗砂
18. 5 YR 4 / 8 赤褐色土 粗砂
- (10YR 5 / 8 明赤褐色色斑および5 YR 5 / 8 明赤褐色色斑を多く含む)
19. 5 YR 5 / 6 明赤褐色土 粗砂～粗砂
20. 5 YR 5 / 8 明赤褐色土 粗砂～粗砂
(5 YR 5 / 8 明赤褐色色斑を多く含む)
21. 5 YR 4 / 8 赤褐色土 粗砂～粗砂
(5 YR 5 / 8 明赤褐色色斑および5 YR 4 / 6 橙色色斑を多く含む)
22. 5 YR 4 / 8 赤褐色土 粗砂～粗砂
23. 5 YR 5 / 8 明褐色土 粗砂～粗砂
(5 YR 5 / 8 明赤褐色色斑および5 YR 4 / 6 橙色色斑をわずかに含む)
24. 5 YR 5 / 6 明褐色土 粗砂
(5 YR 5 / 8 明赤褐色色斑および7SYR 8 / 6 浅黄褐色色斑を多量に含む)
25. 5 YR 5 / 8 明褐色土 粗砂～粗砂
(5 YR 5 / 8 明赤褐色色斑をわずかに7SYR 8 / 6 橙色色斑を多く含む)
26. 5 YR 5 / 6 明褐色土 粗砂～粗砂
(5 YR 5 / 8 明赤褐色色斑をわずかに含む)
27. 7SYR 5 / 6 明褐色土 粗砂 (5 YR 5 / 8 明赤褐色色斑をわずかに含む)
28. 5 YR 5 / 6 明褐色土 粗砂
29. 7SYR 5 / 8 明褐色土 粗砂～粗砂
(7SYR 8 / 6 浅黄褐色色斑をわずかに含む)
30. 7SYR 5 / 8 明褐色土 粗砂
31. 7SYR 5 / 8 明褐色土 粗砂～粗砂

出土遺物（第95、97、98図・巻首図版8・写真図版131、134、135）

墳丘上から須恵器1点（41）が出土し、埋葬施設内から須恵器5点（36～40）と馬具（M27～M29）がそれぞれ出土している。

棺外に副葬された杯蓋と杯身（36、37・38、39）のうち、杯蓋は口縁部に内傾する明瞭な段をもつが、36は天井部と口縁部を画する稜の突出がほとんど失われ、天井部は平坦であり、38は後に替わって凹線が巡り、天井部は丸みをもっている。37・39の杯身は比較的扁平な底部からたちあがり、先端が丸くおさめられた受部に至る。口縁部はたちあがりが短く内傾し、口縁端部も受部先端と同様に丸くおさめられている。40の高杯は杯部が小型で口縁部は外上方へ開き、内面には深緑色の自然釉がみられる。口縁部と底部との間には稜がつき、稜の下方には獣描列点文が巡っている。脚部は細く長く、4方に長方形透かしが穿たれている。41は全体のおよそ1／5が残存し、口径20.8cm、器高35.3cm、腹径33.4cmに復元される丸底の甕である。口頸部は外上方にのび、口縁端部にはわずかに内傾する段をもつ。体部内面には同心円文状のタタキがみられ、外面は平行タタキののちカキ目調整が施されている。

M27は鉄製楕円形鏡板付轡である。鏡板は、楕円形の下縁を弧状に削り欠いたそらまめのような形で、横長の長方形の立聞がつく。このタイプの轡は全て、立聞孔を持つ方形の立聞で、鈎金具、兵庫鎖の取り付けられる例が多いという。また、衡と引手の結合は鏡板の外側で行われる例がほとんどで、この轡もそうである。引手の先には引手壺がつながる。一方の引手（M28）のみ掘られており、こちらに取り付けられた引手壺にも掘りがみられる。立聞から面繫につながる部分も鉄製であり、十字型の辻金具（M29）にコイル状の鉄で止められている。辻金具には銅が用いられている。



写真11 調査状況

梅田31号墳

（第71、74図・写真図版101、102）

立地および墳丘

31号墳は、25号墳の墳丘北西裾部に位置している。しかし、墳丘は25号墳によって完全に埋められており、25号墳の墳丘断ち割り過程で発見されたものである。

新たに検出されたこの古墳の墳丘背後には、墳頂部と約0.6mの比高差のある掘削面があり、掘削面と墳丘との間には、25号墳の区画溝にはほぼ平行する三日月状の区画溝が設けられている。区画溝は、幅

0.58m、深さ0.12mを測り、両端は立ち上がりがなくなり、斜面に同化するように収束している。

墳丘は、 3.5×4.5 mのほぼ円形を呈する小規模なものである。墳丘の築造は、谷側の断ち割り断面の観察から、墳丘背後を削って発生した残土を幾層にも積み重ね、厚いところでは約0.5mの盛土が行われている。

墳丘上から須恵器の短頸壺（44）と鉄製鍬先（M30）が出土した。

埋葬施設

三日月形を描く溝に区画されたわずかな墳頂平坦部から北東—南西方向（N23°E）を主軸とする木棺直葬の埋葬施設が1基検出された。墓壙は長さ1.45m、幅0.66mを測り、平面形は若干歪な長方形を呈している。墓壙はほぼ垂直に掘り下げされ、最も深いところで0.74mを測る。

墓壙の中央には、長さ1.26m、幅0.38m、深さ0.21mを測る木棺が納められており、墓壙検出面から約0.5m掘り下げた地点で確認された。

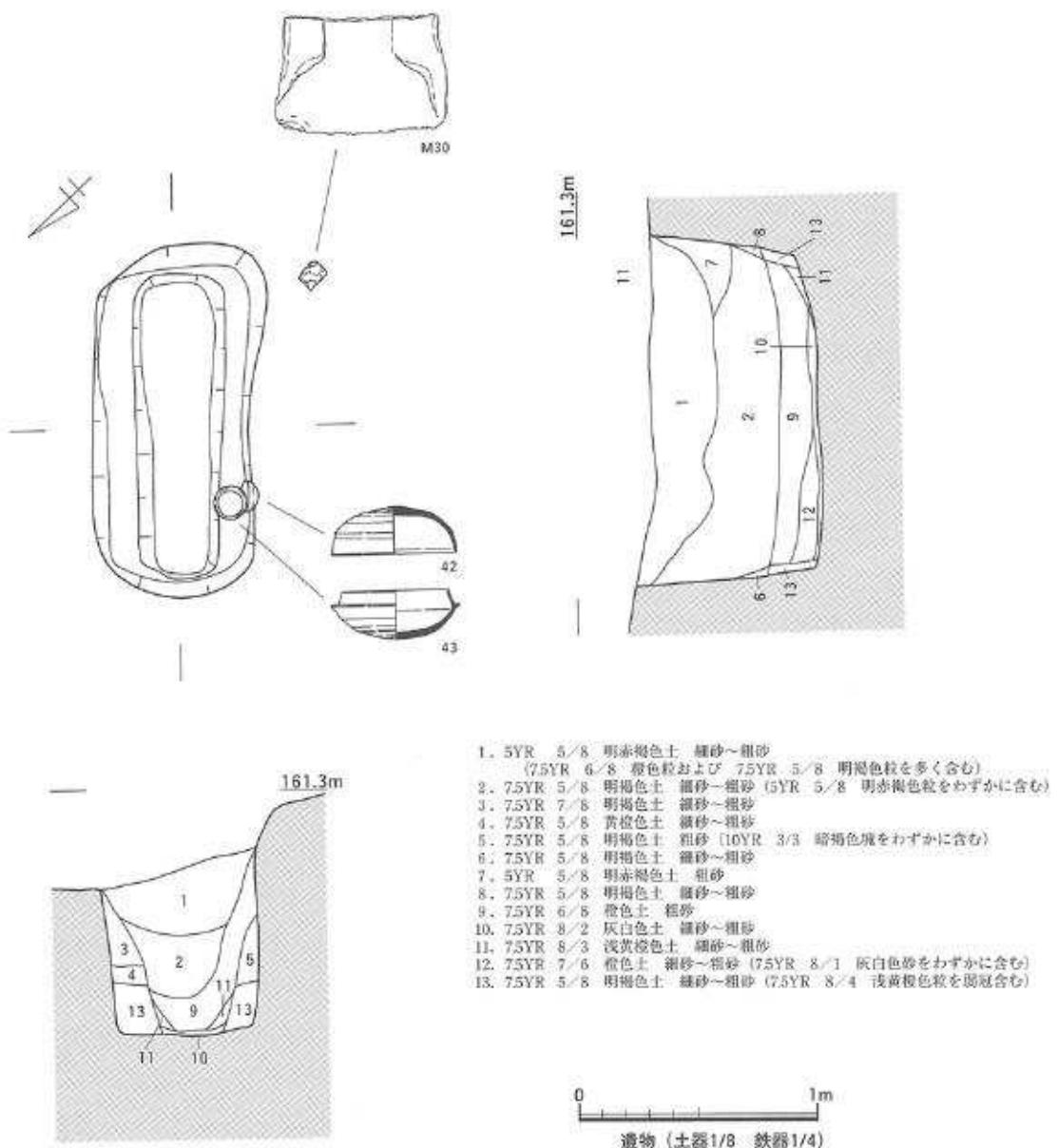
棺内から遺物は出土しなかったが、棺検出面の南側の壁際から、須恵器の杯蓋と杯身（42・43）がセットで出土した。出土した地点は、棺外の足部側に位置するものと考えられる。杯身は口縁部がわずかに小口板側に傾き、杯蓋は口縁部を棺側にむけて壁際に立った状態で出土した。

出土遺物（第95、98図・写真図版131）

墳丘上から須恵器1点（44）と鉄鍬（M30）が出土し、埋葬施設内から須恵器2点（42・43）が出土している。

42の杯蓋は天井部と口縁部を画する稜は鈍く、突出はほとんどみられないもので、天井部はやや丸みをもっている。43の杯身はやや丸みをもった底部から先端が丸くおさめられた受部に至る。口縁部のたちあがりは内傾し、口縁端部は受部先端と同様に丸くおさめられている。44は口径7.5cm、器高6.7cm、腹径11.7cmを測る短頸壺である。わずかに内傾し、短く直線的にたちあがる口縁部をもつ。

M30は、方形板の両側端を折り曲げたタイプの鍬先である。このタイプの鍬先が古墳に副葬されるのは、4世紀中葉から5世紀前半代に集中し、6世紀前葉に下る例もあるというが、時期的にははるかに下るものである。全長9.1cm、幅9.8cm。方形といいながら、刃の方に裾広がりの台形である。刃部の両端はわずかに湾曲している。



第74図 梅田31号墳 埋葬施設 平・断面図 (1/30)

第2節 梅田26・27号墳

梅田26号墳

(第75~77図・写真図版95~97、103、104)

立地および墳丘

主尾根平坦地に築造された16号墳から北に派生する西端の支尾根は、尾根の裾部まで曲線を描きながら比較的緩やかに傾斜している。この支尾根上には4基の古墳が築造されており、そのうち上方に位置する2基の古墳の調査を実施した。

26号墳は、16号墳の墳丘北側裾部につくられた2基の埋葬施設（SK02・03）が立地する平坦面の直下付近に立地している。

古墳は斜面上方側（以下、墳丘背後）をほぼ東西方向に削り、削った残土は斜面下方側に盛土として積み上げている。墳丘背後の掘削は、東西に長い範囲に行われているが、掘削面の上端と墳頂部との比高差は約1.5mである。掘削面と墳丘との間には、緩い弧状の区画溝が設けられており、幅1.1m、深さ0.16mを測る。区画溝の両端は、立ち上がりがなくなり、斜面に同化するように収束している。

墳丘は、北西部が崩壊し、一部等高線が乱れているが、 $7 \times 8.5\text{m}$ の橢円形を呈していたものと考えられる。墳丘の盛土は、旧表土を残したまま行われ、0.3~0.4m程度が残存している。また、墳丘東側裾部では、長辺2.1m、短辺1.4mを測る瓢箪形を呈する土壙状の掘り込みが確認されたが、遺物は出土しておらず、詳細は不明である。

墳丘東側の谷部から土師器の甕（45）が出土した。

埋葬施設

墳頂部には $4 \times 4\text{ m}$ のほぼ正方形の平坦地がつくられ、その中央から東西方向（N99° E）を主軸とする木棺直葬の埋葬施設が1基検出された。墓壙は長さ2.80m、幅1.10mを測り、平面形はほぼ長方形を呈している。墓壙はほぼ垂直に掘り下げられ、最も深いところで0.90mを測る。

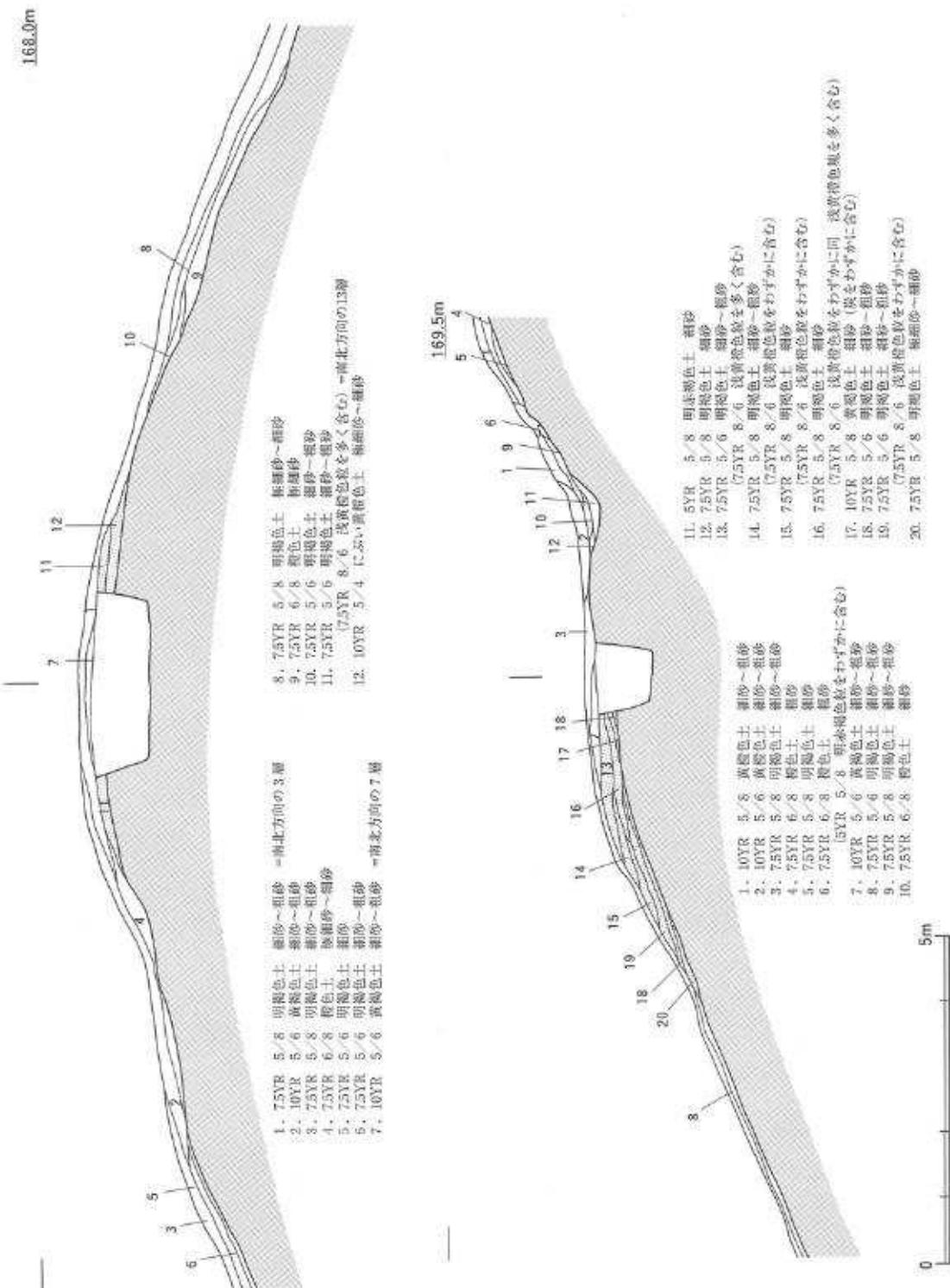
墓壙の中央には、長さ1.98m、幅0.48m、深さ0.40mを測る木棺が納められており、墓壙検出面から約0.5m掘り下げた地点で確認された。

棺内および墓壙内から遺物は出土しなかった。

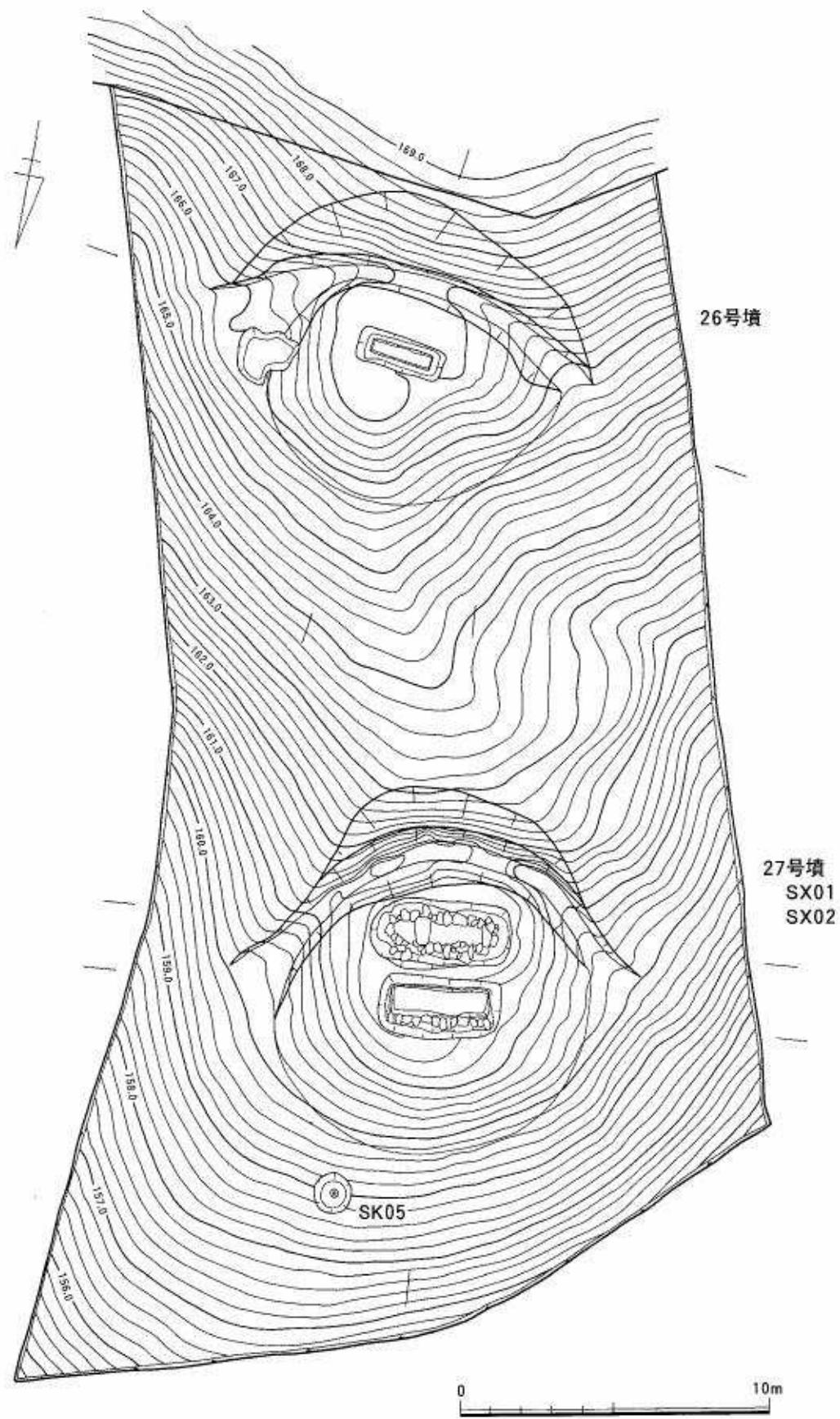
出土遺物（第96図・写真図版132）

墳丘東側の谷部から土師器1点（45）が出土している。

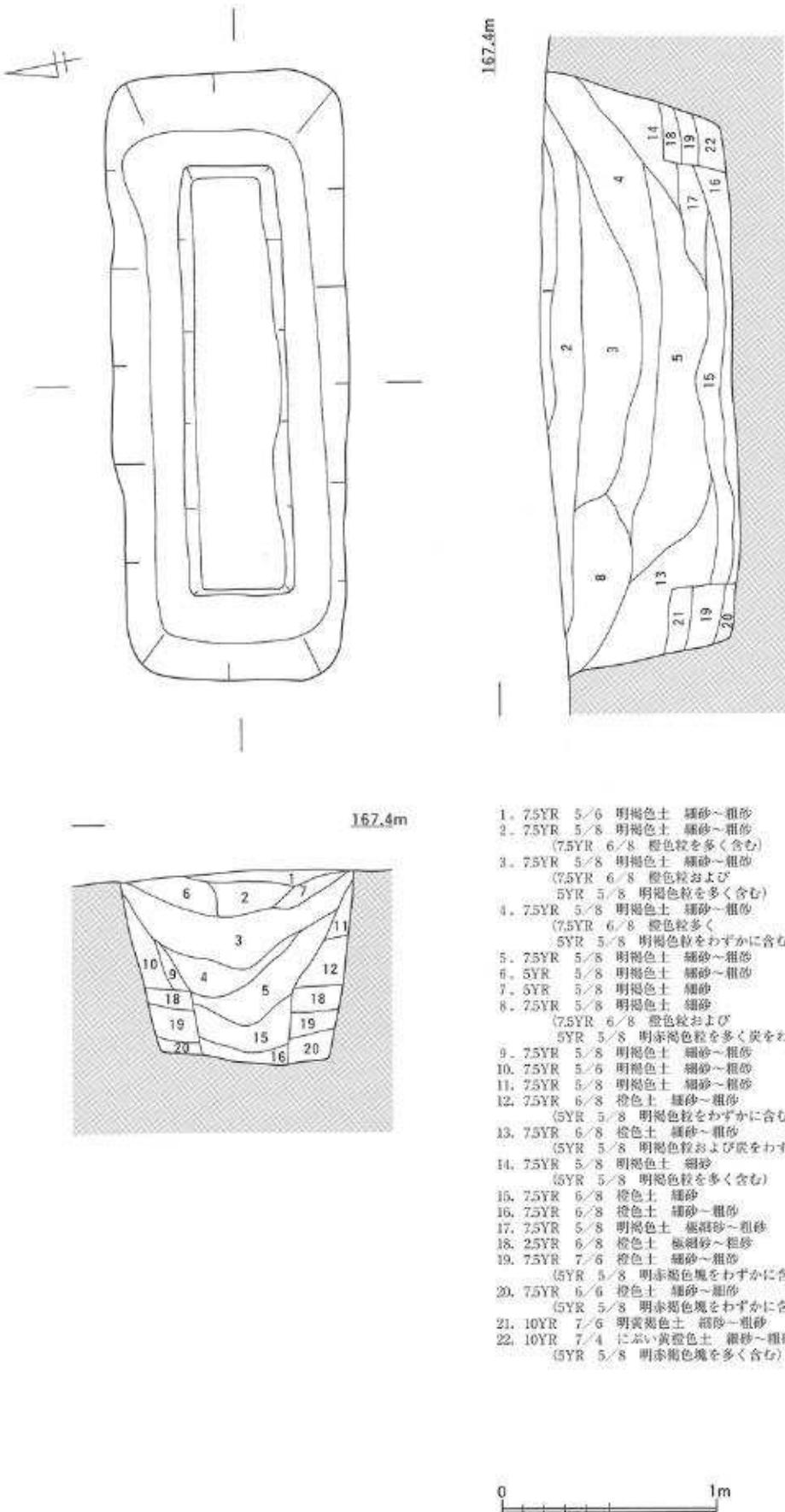
45の土師器は甕の口縁部のわずか一部分であり、口径13.6cmを測るが、全体に摩滅が著しく調整あるいは時期などは不明である。上方に立地するSK02とともに遺物が流出した可能性が考えられる。



第75図 梅田26号墳 墳丘断面図 (1/100)



第76図 梅田26・27号墳 調査後地形測量図 (1/200)



第77図 梅田26号墳 埋葬施設 平・断面図 (1/30)

梅田27号墳

(第76、78~85図・巻首図版5・写真図版95~97、105~114)

立地および墳丘

27号墳は、26号墳の北方約20m、標高で約7m（両古墳の埋葬施設を基準）下がった地点に位置し、この古墳を起点にして尾根筋はほぼ真北に方向を変えて下降していく。下方には道路工法の変更によって現状保存されることとなった2基の古墳が存在している。

27号墳と呼称された地点は、調査前の地形観察で比較的明瞭にその存在を確認することができ、墳頂部には広い平坦地が開けていた。平坦地の中央から山側に偏った位置には石材が露頭しており、石室の存在が想定された。また、露頭した石材の北側にもさらに平坦地が広がることから、石室の他にもまた別の埋葬施設が存在する可能性が高いと考えられた。

調査を進めていくに従い、墳頂平坦地からは、竪穴式石室と木棺直葬の2基の埋葬施設が検出され、墳丘および区画溝もそれぞれの埋葬施設とともに築造されていることが判明した。このため、27号墳は旧い古墳を拡張するように新しい古墳が築造されており、竪穴式石室を埋葬施設にもつ新しい古墳をSX01、木棺直葬を埋葬施設とする古い古墳をSX02とそれぞれ呼称している。

SX01

古墳は、斜面上方側（以下、墳丘背後）をほぼ東西に削り、削った残土は斜面下方側に盛土として積み上げている。墳丘背後の掘削範囲は比較的狭く、掘削面の上端と墳頂部との比高差は約1.2mである。掘削面と墳丘との間には、半円形の区画溝がつくられており、幅1.9m、深さ0.76mを測る。区画溝は部分的に深いところがあり、その部分にはシルト層と砂層が相互に堆積していることが確認された。溝の両端は、若干幅広になりながら立ち上がりがなくなり、斜面に同化するように収束している。

区画溝の最下層から須恵器の杯蓋の小破片（53~55）と杯身（56）が出土した。

墳丘は、9.5×10mのほぼ円形を呈している。斜面下方側には後述するSX02の埋葬施設の上に新たに約0.2mの盛土を行い、墳丘を築造している。約6m四方の墳頂平坦地には、2基の埋葬施設が並列しているが、SX01は墳丘背後に区画溝を深く設け、SX02の埋葬施設を埋めた広い範囲一帯を含め墳丘として形づくっていたものと考えられる。

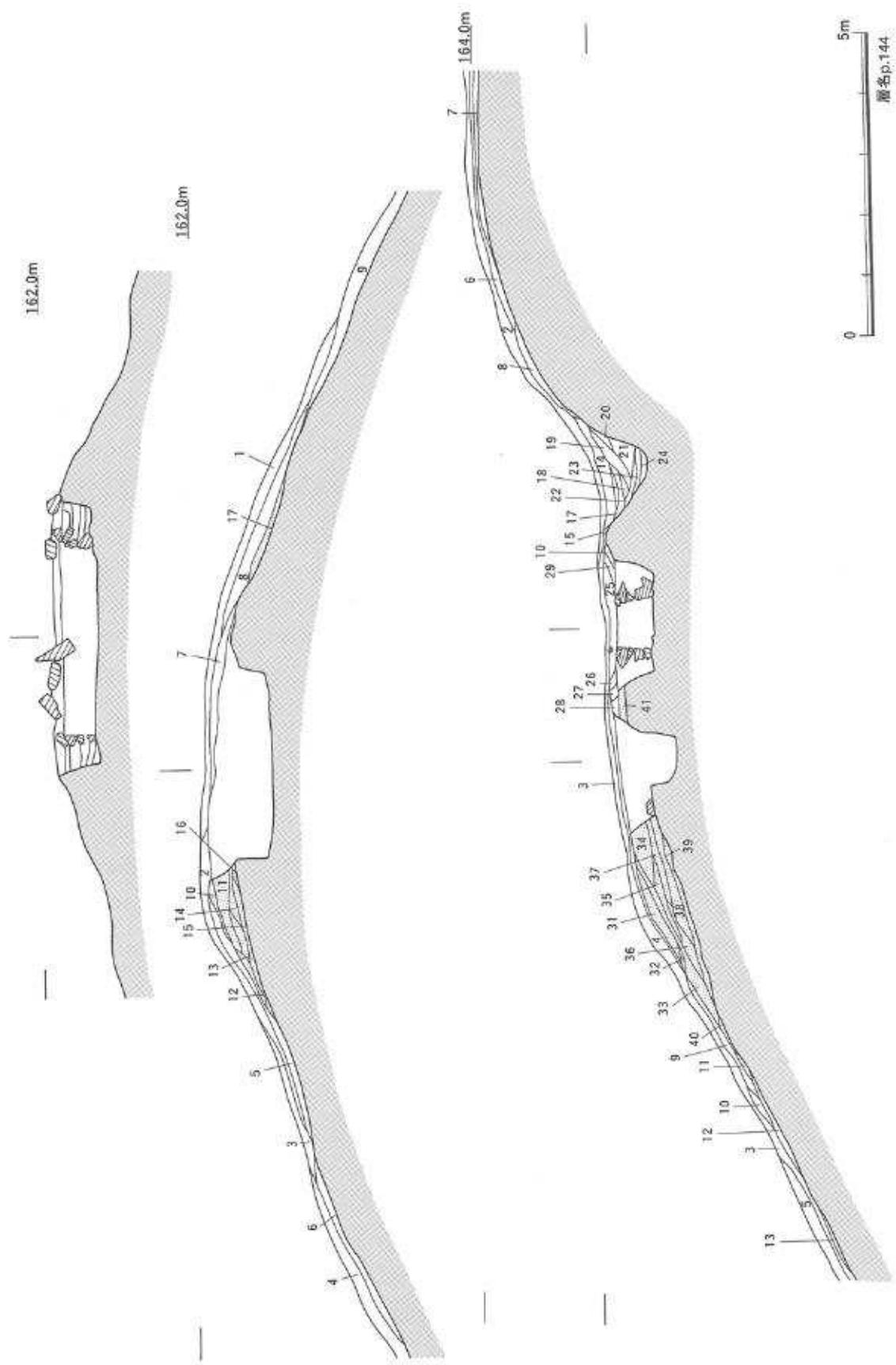
墳丘上および墳丘西側裾部から須恵器の杯蓋（57・58）が出土した。

SX02

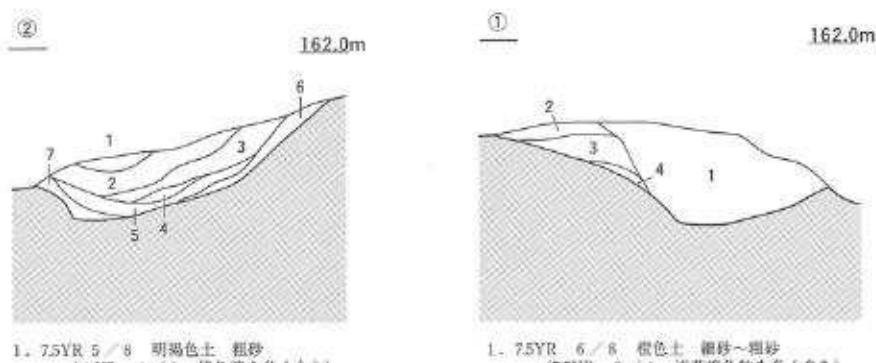
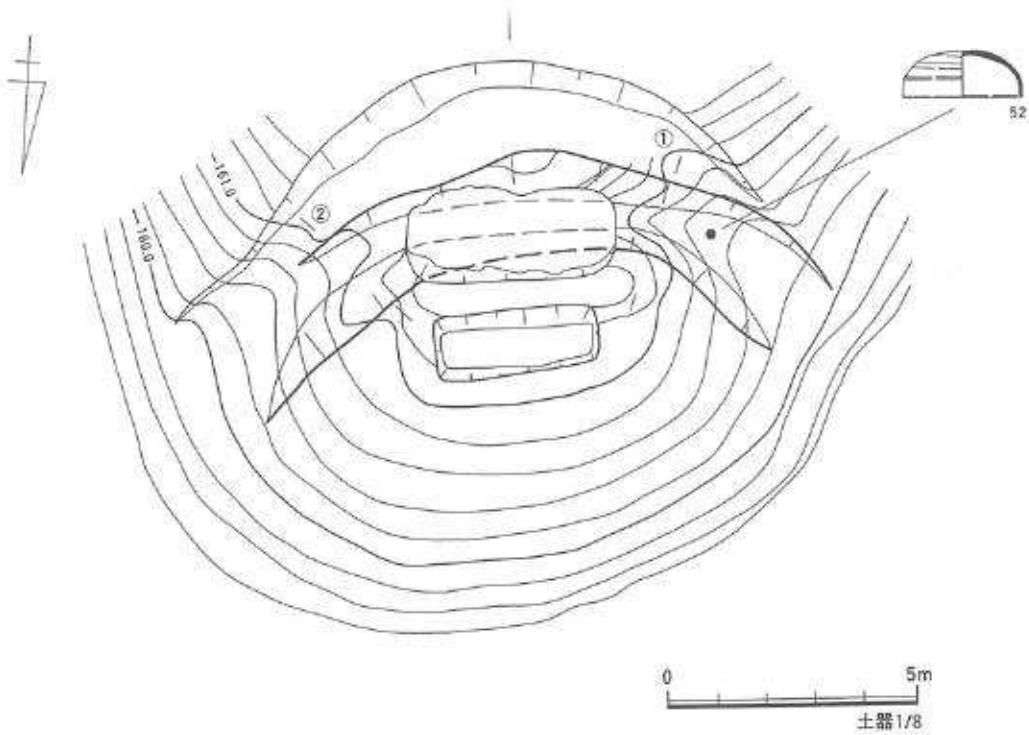
新しく築造されたSX01の墳丘および区画溝によって、SX02の墳丘背後の掘削面は多くが失われていた。しかし、SX01の竪穴式石室を解体し、墓壙を完掘した周囲からは、SX02とともに区画溝が検出された。区画溝の中央部は石室の構築によって削平されていたが、石室構築時に埋められた部分は残存しており、全体の形状は三日月状を呈していたものと考えられる。区画溝は幅1.5mを測り、深さ0.2~0.4mが残存しており、両端は立ち上がりがなくなり、斜面に同化するように収束している。

墳丘は、約7.5×10mの梢円形を呈していたものと考えられる。墳丘の築造は、旧表土を残したまま行われており、斜面下方側は地形に平行して斜めに積み上げ、一度水平にした状態でさらに盛土を重ねて墳丘を形づくっていることが土層の断面観察によって判明した。盛土は、最も厚いところで約1mを測る。

区画溝の最下層から須恵器の杯蓋（52）が出土した。

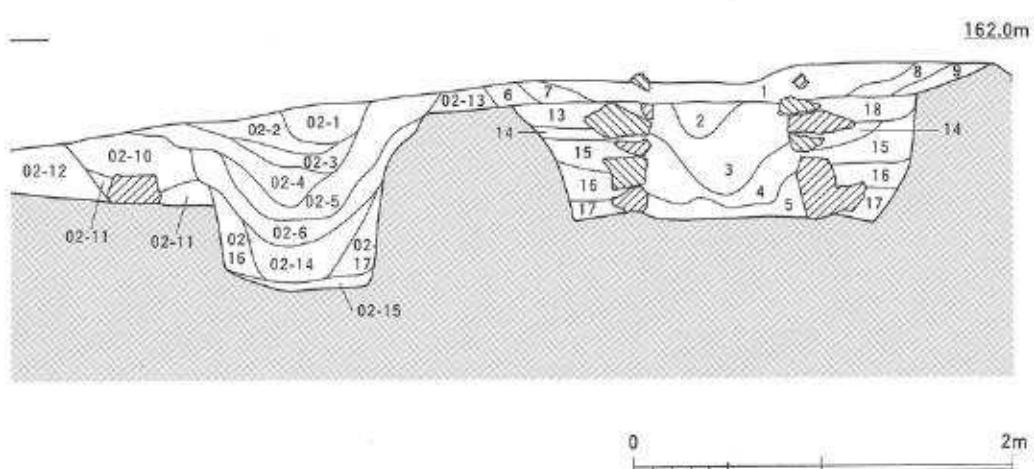
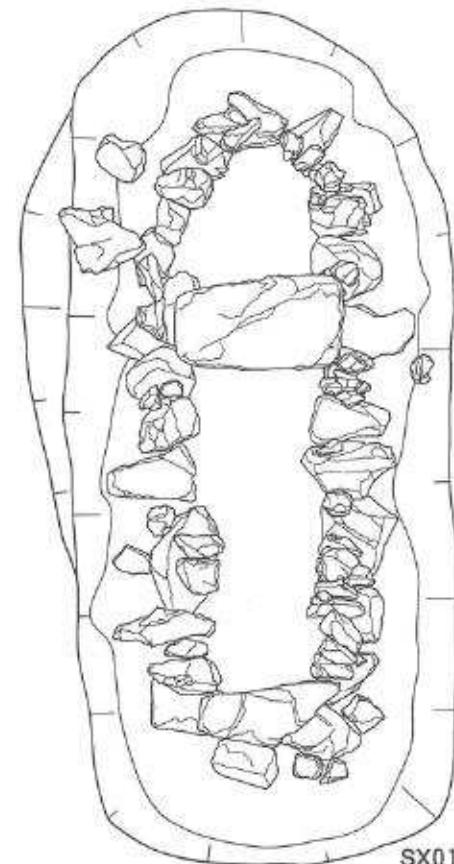
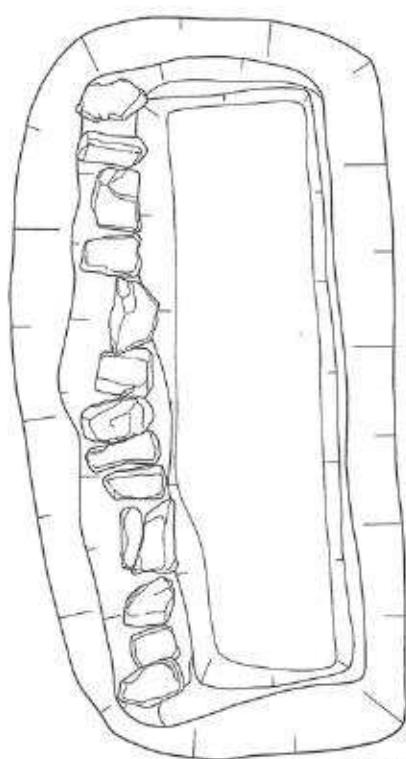


第78図 梅田27号墳 墓丘断面図 (1/100)

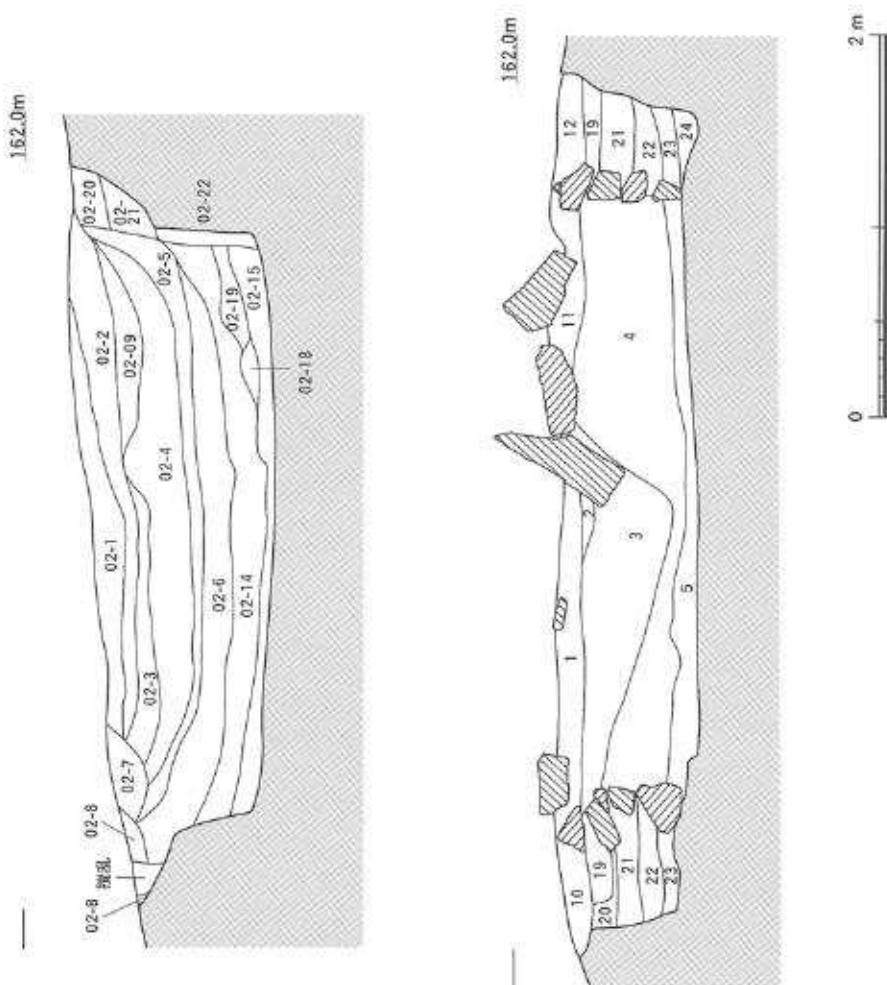


- | | |
|--|--|
| 1. 7SYR 5 / 8 明褐色土 粗砂
(5YR 6 / 8 棕色塊を多く含む) | 1. 7SYR 6 / 8 棕色土 細砂～粗砂
(7.5YR 8 / 4 浅黃褐色粒を多く含む) |
| 2. 7SYR 5 / 6 明褐色土 細砂
(5YR 6 / 8 棕色塊を多く含む) | 2. 7SYR 5 / 8 明褐色土 細砂
(5YR 6 / 8 棕色塊をわずかに含む) |
| 3. 7SYR 6 / 8 棕色土 細砂～粗砂
(7.5YR 8 / 4 浅黃褐色粒を多く含む) | 3. 5YR 5 / 8 明赤褐色土 細砂～粗砂
(10YR 8 / 6 黄褐色粒をわずかに含む) |
| 4. 7SYR 5 / 6 明褐色土 細砂
(5YR 6 / 8 棕色塊をわずかに含む) | 4. 7SYR 5 / 8 明褐色土 細砂～粗砂
(10YR 8 / 6 黄褐色粒をわずかに含む) |
| 5. 7SYR 4 / 6 褐色土 細砂～粗砂
(5YR 6 / 8 棕色塊をわずかに含む) | |
| 6. 7SYR 5 / 8 明褐色土 細砂～粗砂
(5YR 6 / 8 棕色塊および
7.5YR 8 / 4 浅黃褐色粒を多く含む) | |
| 7. 7SYR 5 / 8 明褐色土 細砂～粗砂
(5YR 6 / 8 棕色塊を多く含む) | |

第79図 梅田27号墳 SX02 調査後地形測量図 (1/150) 区画溝断面図 (1/50)

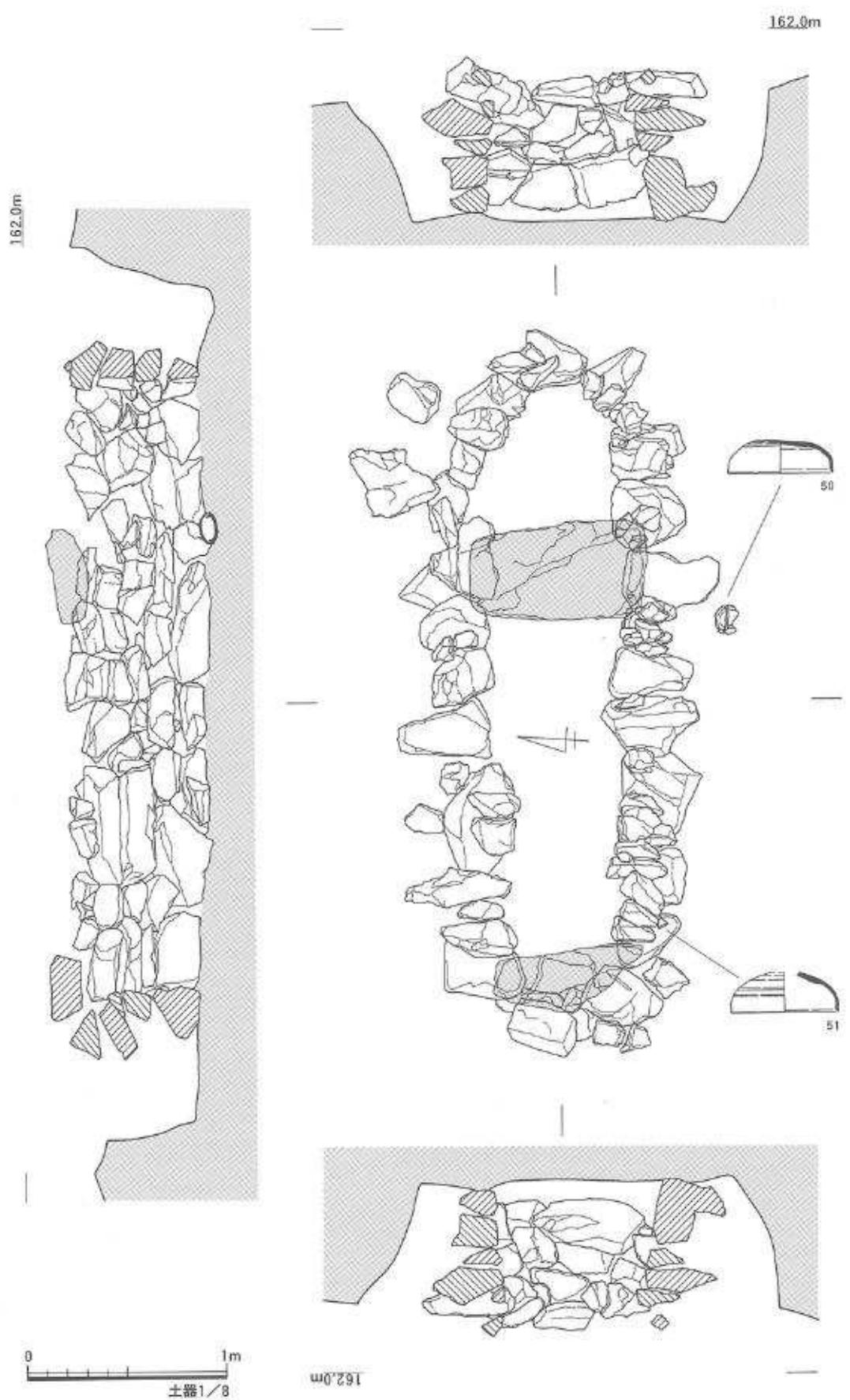


第80図 梅田27号墳 SX01・02 平・断面図 (1/40) (1)

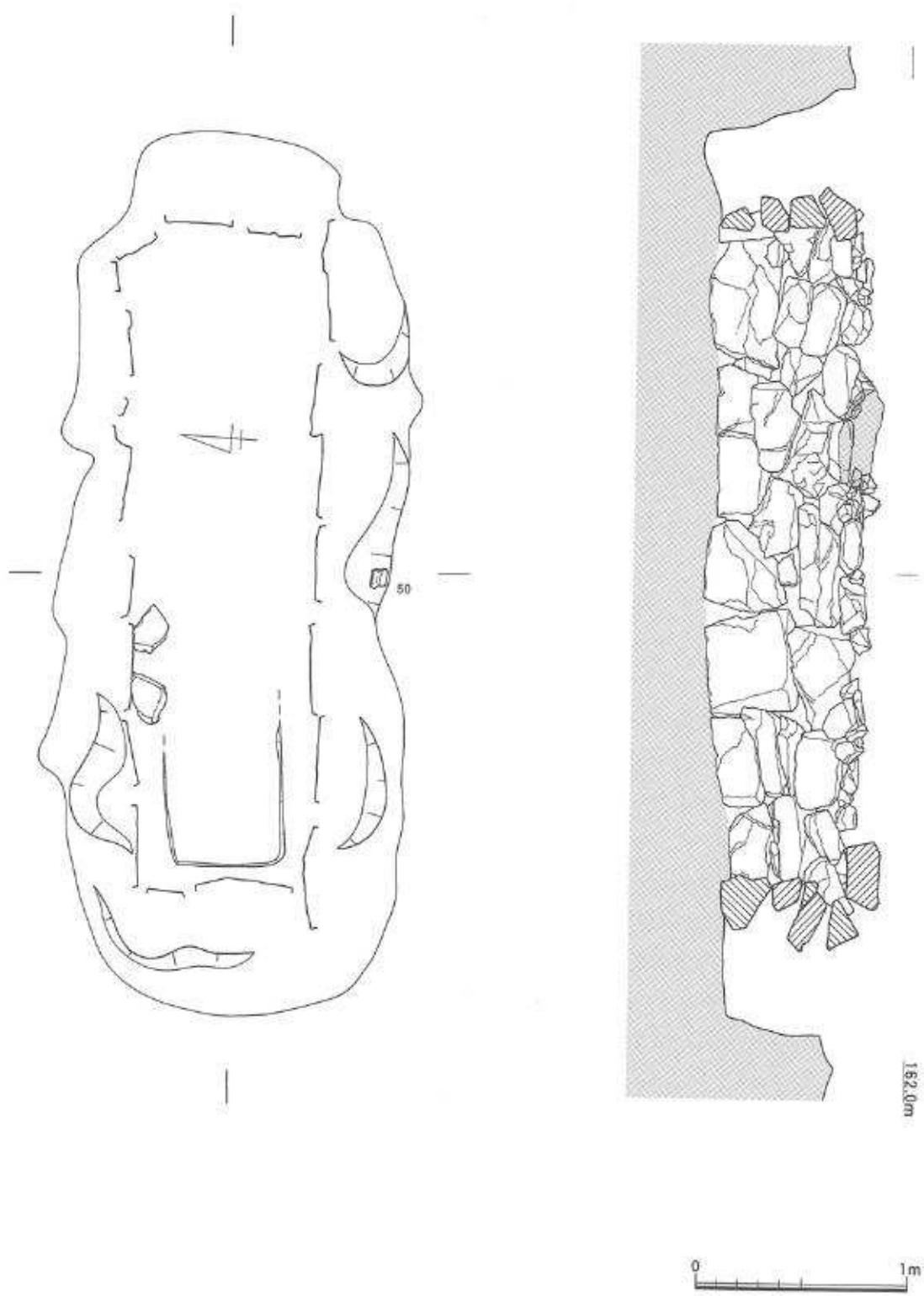


- 27号墳 SX01-
 1. 10YR 5 / 8 黄褐色土 細砂～粗砂
 (5 YR 5 / 8 明赤褐色塊をわずか含む)
 2. 7.5YR 5 / 8 明褐色土 細砂～粗砂
 (5 YR 5 / 8 明赤褐色塊をわずか含む)
 3. 7.5YR 6 / 8 棕色土 細砂～粗砂
 (5 YR 5 / 8 明赤褐色塊をわずか含む)
 4. 7.5YR 5 / 6 明褐色土 細砂
 (5 YR 5 / 8 明赤褐色塊をわずか含む)
 5. 7.5YR 6 / 8 棕色土 細砂～粗砂
 (10YR 7 / 8 黃褐色粒を多く含む)
 6. 7.5YR 6 / 8 棕色土 細砂～粗砂
 7. 7.5YR 5 / 8 明褐色土 細砂
 (5 YR 5 / 8 明赤褐色塊を多く含む)
 8. 7.5YR 5 / 8 明褐色土 細砂～粗砂
 (5 YR 5 / 8 明赤褐色塊をわずか含む)
 9. 10YR 6 / 8 明黃褐色土 細砂～粗砂
 (5 YR 5 / 8 明赤褐色塊をわずか含む)
 10. 7.5YR 6 / 8 棕色土 細砂～粗砂
 (5 YR 5 / 8 明赤褐色塊をわずか含む)
 11. 7.5YR 5 / 8 明褐色土 細砂～粗砂
 (5 YR 5 / 8 明赤褐色塊をわずかに含む)
 12. 10YR 5 / 8 黄褐色土 細砂～粗砂
 (5 YR 5 / 8 明赤褐色塊をわずか含む 増丘盛上)
 13. 5 YR 5 / 8 明赤褐色土 細砂～粗砂
 14. 7.5YR 5 / 8 明褐色土 細砂～粗砂
 (5 YR 5 / 8 明赤褐色塊をわずかに含む)
 15. 7.5YR 6 / 8 棕色土 細砂～粗砂
 16. 7.5YR 6 / 8 棕色土 細砂～粗砂
 17. 7.5YR 6 / 8 棕色土 細砂～粗砂
 (5 YR 5 / 8 明赤褐色塊をわずかに含む)
 18. 10YR 5 / 6 黄褐色土 細砂～粗砂
 19. 7.5YR 6 / 8 棕色土 細砂
 20. 7.5YR 5 / 6 明褐色土 細砂
 21. 7.5YR 5 / 8 明褐色土 細砂～粗砂
 (5 YR 5 / 8 明赤褐色粒を多く含む)
 22. 7.5YR 5 / 8 明褐色土 細砂～粗砂
 27号墳 SX01-
 1. 7.5YR 5 / 6 明褐色土 細砂
 (5 YR 5 / 8 明赤褐色塊をわずか含む)
 2. 7.5YR 4 / 6 黄褐色土 細砂～粗砂
 3. 7.5YR 5 / 8 明褐色土 細砂～粗砂
 (5 YR 5 / 8 明赤褐色塊をわずか含む)
 4. 10YR 5 / 5 黄褐色土 細砂～粗砂
 5. 7.5YR 5 / 8 明褐色土 細砂
 6. 7.5YR 5 / 8 明褐色土 細砂～粗砂
 7. 7.5YR 4 / 6 黄褐色土 細砂
 (5 YR 5 / 8 明赤褐色塊をわずか含む)
 8. 7.5YR 5 / 8 明褐色土 細砂～粗砂
 9. 5 YR 5 / 8 明赤褐色土 細砂～粗砂
 10. 7.5YR 5 / 8 明褐色土 細砂～粗砂
 11. 10YR 4 / 6 黄褐色土 細砂～粗砂
 12. 7.5YR 5 / 6 明褐色土 細砂
 (5 YR 5 / 8 明赤褐色塊を多く含む)
 13. 7.5YR 5 / 8 明褐色土 細砂～粗砂
 14. 7.5YR 5 / 6 明褐色土 細砂
 15. 7.5YR 6 / 8 棕色土 細砂
 (5 YR 6 / 8 棕色塊および
 7.5YR 8 / 6 浅黄褐色粒を多く含む)
 16. 7.5YR 6 / 6 棕色土 細砂
 (5 YR 6 / 8 棕色塊および
 7.5YR 8 / 6 浅黄褐色粒を多く含む)
 17. 5 YR 5 / 8 明赤褐色土 細砂～粗砂
 (7.5YR 8 / 6 浅黄褐色粒を多く含む)
 18. 5 YR 5 / 8 明赤褐色土 細砂～粗砂
 (5 YR 6 / 8 棕色塊をわずかに含み
 5 YR 8 / 4 浅棕色粒を多く含む)
 19. 7.5YR 6 / 8 棕色土 細砂～粗砂
 20. 7.5YR 6 / 8 棕色土 細砂～粗砂
 (7.5YR 8 / 4 浅黄褐色粒および
 10YR 7 / 8 黄褐色塊をわずかに含む)
 21. 7.5YR 5 / 8 明褐色土 細砂
 (5 YR 5 / 8 明赤褐色塊および
 7.5YR 8 / 4 浅黄褐色粒をわずかに含む)
 22. 7.5YR 4 / 6 黄褐色土 細砂～粗砂
 (5 YR 5 / 8 明赤褐色塊をわずか含む)
 23. 7.5YR 5 / 8 明褐色土 細砂～粗砂
 (5 YR 5 / 8 明赤褐色塊をわずか含む)
 24. 7.5YR 5 / 8 明褐色土 細砂

第81図 梅田27号墳 SX01・02 断面図 (1/40) (2)



第82図 梅田27号墳 SX01 平・断面図 (1/30) (1)



第83図 梅田27号墳 SX01 平・断面図 (1/30) (2)

埋葬施設

墳頂部には約6m四方の平坦地がつくられ、豎穴式石室（SX01）と木棺直葬（SX02）の2基の埋葬施設が並列して検出された。

SX01

墳頂平坦地の南に偏った地点にはほぼ東西方向（N85°E）を主軸とする豎穴式石室が検出された。石材の一部は調査前から露頭しており、表土および堆積土を除去していくと、西小口部と中央やや東側の位置に2石の天井石が遺存し、この他にも原位置から石室内の上層に落ち込んだ2石の天井石が残存していた。石室内部は、天井石が除去されあるいは落ち込んだために土砂が充填されていた。

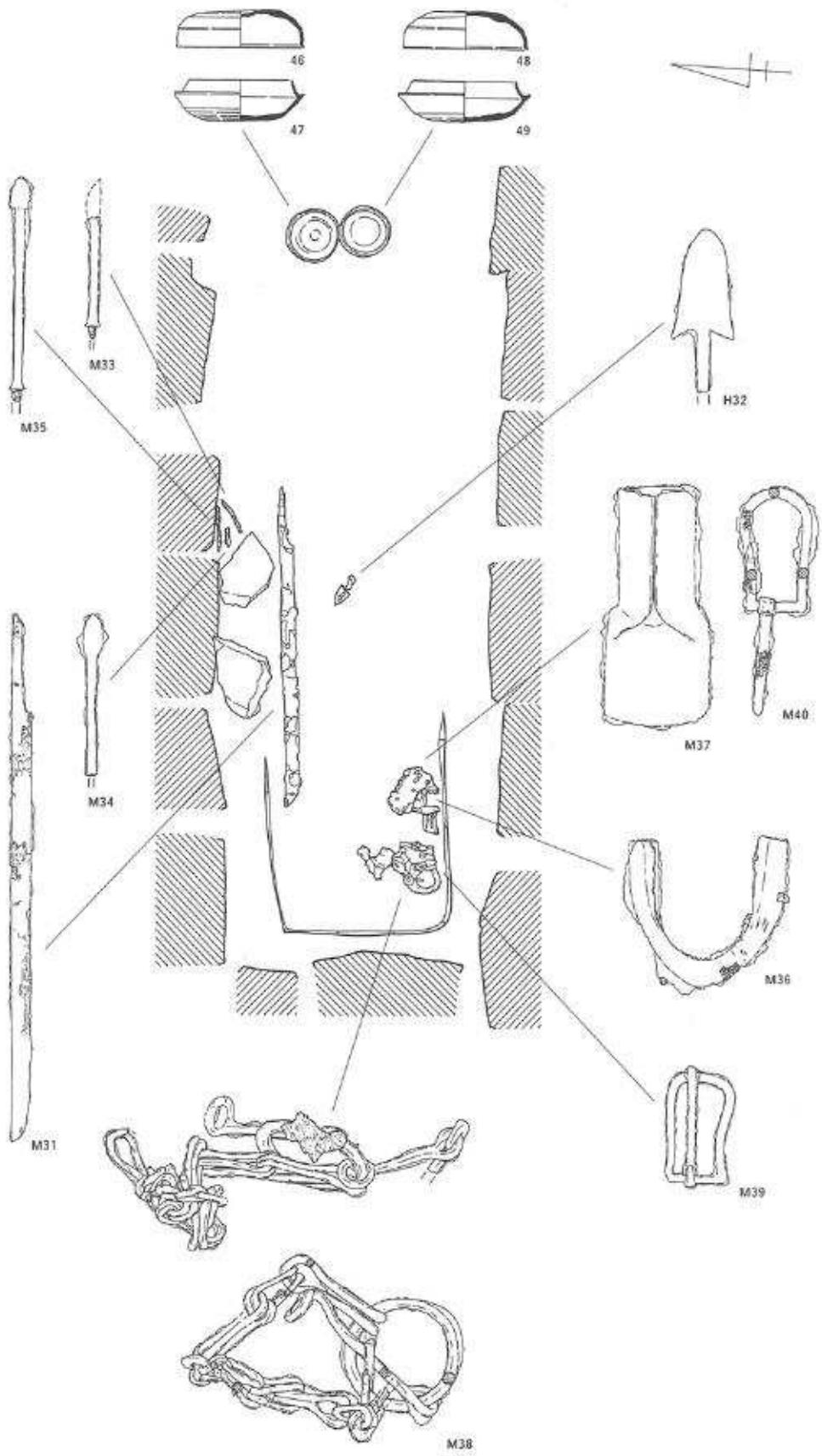
石室は、長さ3.09m、幅0.87m（長短両軸の内寸）を測り、北側壁では床面から0.67m上面に中央やや東側の天井石が架構されており、石室内はほぼ0.6mの高さ（空間）があったと考えられる。石室の四方の壁面は持ち送りに構築されているが、いずれの壁面も乱雑で規則的に石材を積み上げているとはいえない状況である。

石室内の西端では、一部木棺の痕跡が確認され、その内部には、大刀（M31）・鉄鎌（M32）・鉄鍔（M36）・鉄斧（M37）・馬具（M38～M40）が副葬されていた。石室中央の棺と石室北壁の隙間からも3点の鉄鎌（M33～M35）が出土し、石室の東半部では、木棺の痕跡は確認されなかつたが、須恵器の杯蓋と杯身の2セット（46、47・48、49）が並べて置かれた状態で出土した。これらの遺物は、出土した位置から東に頭部をむけて横たえられ、杯蓋と杯身は土器枕あるいは頭部上の副葬品と考えられる。また、体部右側に並行して大刀が置かれ、足元に鉄鎌・鉄鍔・鉄斧・馬具の一群が副葬されたものと考えられる。

石室はその後、解体作業を行い、墓壙の完掘を実施した。墓壙は長さ4.46m、幅2.06m、深さ0.75mを測る東側が弧状を描く馬蹄形を呈している。石室の解体にともない、構築過程を復元すると、墓壙底部のはば中央に基底石が据え付けられる。基底石は、東壁では3石、西壁では2石、北壁では8石、南壁では7石が据え付けられているが、使用している石材は大きさ、形状とも不均一で各石材の高さは不揃いである。基底石と墓壙との間を埋め、その後さらに石材を積み上げていく。石室の構築は、この工程が繰り返し行われており、長短両軸の断面では、石材はいずれも4段に積み上げられている。しかし、壁面の石の積み上げは、全体に統一されておらず、比較的大きな石が2段に積み上げられた地点も存在する。使用されている石材は、0.2～0.6m程度の人ひとりが持ち運び可能な大きさのものである。天井部では幅が約0.3m縮小し、遺存していた2石の天井石の他に、5石ないしは6石が架構されていたものと考えられる。



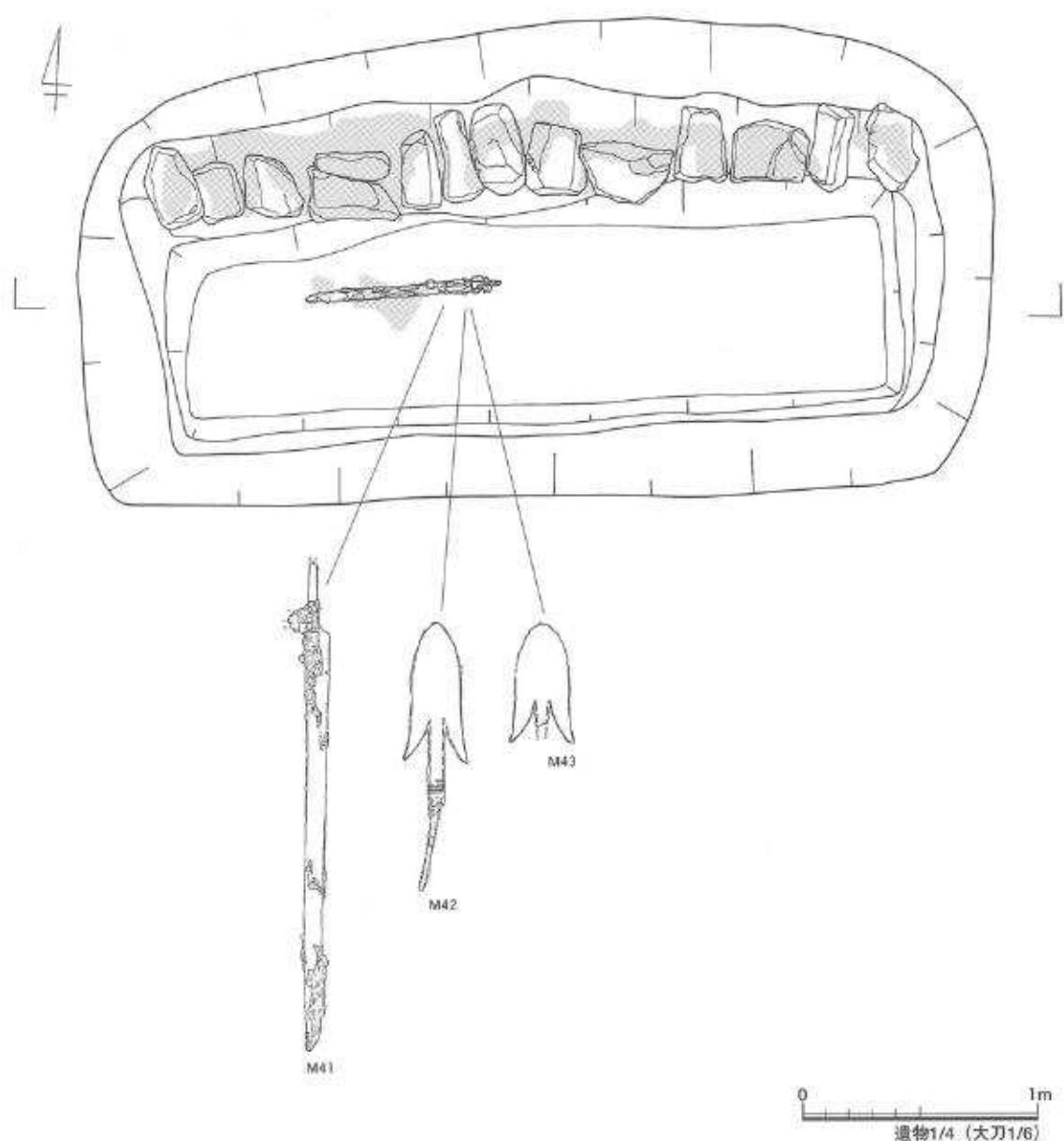
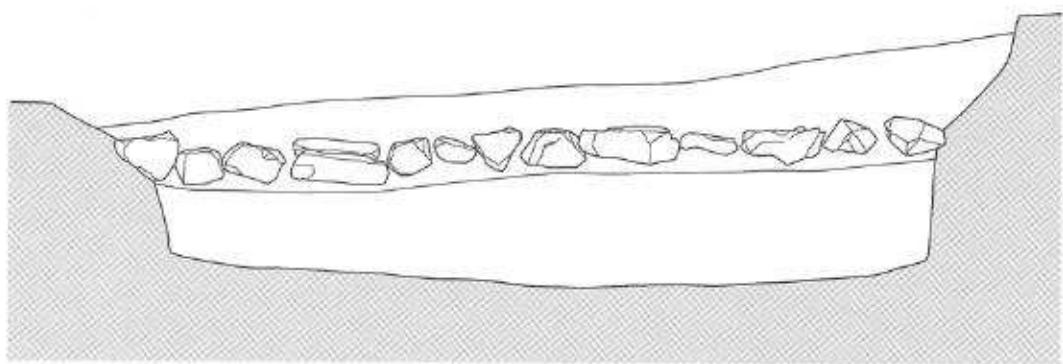
写真12 調査状況



遺物 (土器 1/8・鉄器 1/4・大刀 1/6)

第84図 梅田27号墳 SX01 出土遺物 平面図 (1/20)

162.0m



第85図 梅田27号墳 SX02 平・断面図 (1/30)

SX02

竪穴式石室の北側にはほぼ平行して主軸を東西方向にむけた（N87°E）木棺直葬の埋葬施設が検出された。墓壙は長さ3.88m、幅2.01mを測り、平面形はほぼ長方形を呈するものである。墓壙は、東西および南壁では検出面から0.2~0.45m（壙底から約0.5m）掘り下げた地点で一度、幅0.1m程度のコ字状の段がつくられている。残る北壁では、検出面から約0.4m掘り下げた地点（東西および南壁の段とはほぼ同一の高さ）に0.5~0.6mの平坦面がつくられ、棺と平行して14石の河原石が並べられているのが確認された。河原石の上面は黄褐色の粘質土で被覆されていたが、この平坦面を設け、河原石の並べられた目的は不明である。

四方の壁に設けられた平坦面および段によって墓壙の中央南側には、長さ3.15m、幅0.92m、深さ0.55mを測る木棺が納められていた。棺内西寄りの北側辺に沿った位置からは、一部に黄褐色の粘質土で被覆された大刀（M41）が出土し、その下層からは鉄鎌が2点（M42・43）が発見された。大刀の出土位置はSX01と類似しており、東に頭をむけて横たえられ、体部右側に並行して大刀が副葬されたものと考えられる。

出土遺物（第96、99~103図・巻首図版5、8・写真図版132、136~140）

27号墳からは、須恵器・鉄製品とも各13点（46~54・M31~M43）が出土している。それらはすべてSX01あるいはSX02のいずれかから出土したことが判明しているため、SX01・SX02に分けて記述する。

SX01

棺内から須恵器4点（46~49）と大刀（M31）・鉄鎌（M32~M35）・鉄鋤（M36）・鉄斧（M37）・馬具（M38~M40）が出土している。墳丘上および墳丘西側裾部から須恵器2点（57・58）が、区画溝から須恵器4点（53~56）がそれぞれ出土し、この他、石室周辺から出土した須恵器2点（50・51）のうち、1点（50）は墓壙底部から出土した破片と同一個体であった。

棺内に副葬された2セットの杯蓋と杯身（46、47・48、49）のうち、杯蓋は口径に対して器高が低く、天井部は平坦である。天井部と口縁部を画する稜の突出はほとんどみられず、口縁部には内傾する段が残る。47・49の杯身は扁平な底部から短くたちあがり、先端が丸くおさめられた受部に至る。口縁部はたちあがりが短く内傾し、口縁端部も受部先端と同様に丸くおさめられている。この他、50の杯蓋は天井部と口縁部を画する稜は不明瞭で、56は47・49の杯身よりも器高が低く、より扁平な形状を呈する杯身である。

M31は完形の大刀である。全長98.0cm。刀身長79.7cm、幅3.6cm、1.3cm。反りはなく、鋒はフクラ付きである。両面に鞘木の一部が付着する。背側に鞘木の合わせ目と端部が良い状態で残っている。関は直角の片関で緩やかに内彎しながら茎に続く。抉りはない。茎は長18.3cm、幅1.1cm。断面台形で厚0.6cmと0.4cmになる。茎尻にかけて中細になり、茎尻は隅抉尻である。目釘孔は佩表径0.3cmと佩裏径0.5cmになる目釘孔が2つある。この違いは穿孔時によるものか。目釘孔間は9.8cm、目釘はみられなかった。また、佩表の茎には柄間には糸巻きが良く残っていた。幅2.2cm、厚1.6cmで断面倒卵形で、茎を柄木に挟み込んだ後、径0.1cmの糸で巻き止めている。裏は柄木のみである。柄の糸巻きと鞘木の痕跡から、刀装具を伴っていたことがわかる。

M32は平根系の腸抉柳葉式である。頸部の一部と茎を欠損するため、現存長10.0cm、鎌身幅3.3cmになる。M33~35は尖根系長頸式である。M33は片刃箭式で、鎌身の大半を欠損しているが、断面が三角形

になることから片刃箭式とした。茎の大半も欠損し、現存長7.5cm、頸部長1.9cmになる。茎には木質が付着する。

M34とM35は柳葉式であるが、多少規格が異なる。M34は茎を欠損し、現存長10.0cm、鎌身長2.5cm、鎌身幅1.0cm、頸部長7.5cmになる。M35は茎の大半を欠損し、現存長13.8cm、鎌身長1.8cm、鎌身幅1.3cm、頸部長11.2cmになる。茎には木質が付着する。

M36は鉄製鍔先で、U字形で全長9.1cm、幅9.8cmのやや小型のものである。刃部は大きく曲線を描く。木製の柄につながる台を受ける溝が切られており、断面はY字状を呈する。刃に二重以上の布が付着している。

M37は有袋鉄斧で、袋部の断面は楕円形を呈する。全長15.2cm、幅6.5cmで、わずかに肩の段がみとめられるものの、細身の斧である。肩部などに布が付着している。刃部はゆるやかな曲線を描いて外湾する。

M38～M40は馬具である。M38は素環鏡板付轡である。わずかに楕円形の環状の鏡板に、銜と引手と各単位が長い兵庫鎖とがからむ。鏡板には木質が付着していた。

M39・M40の2点はほぼ同型同大の鞍具で、セットで馬具の一部となるものと思われる。M40にはやや粗い布が比較的広範囲に付着している。

SX02

棺内から鉄鎌（M42・43）・大刀（M41）が出土している。また、区画溝から出土した須恵器の杯蓋（52）は、墓壙内から出土した破片と同一個体であった。

52の杯蓋は口径に対して器高が高く、天井部と口縁部を画する稜の突出はほとんど失われている。

M41は刀装具を伴う大刀である。茎尻を欠損するため、現存長81.4cmになる。刀身長70.0cm、幅3.3cm、厚1.0cm。鋒付近は緩やかに内彎するようだが、ほとんど反りはない。フクラ付きである。関は撫角の片関。茎は現存長11.4cm、幅1.4cm、厚0.6cmと0.3cmの断面台形になる。径0.5cmのやや楕円の目釘孔が2つあり、目釘孔間は6.9cm。目釘はない。柄間にには糸巻きのわずかな痕跡と柄木の木質がみられる。刀装具は柄縁装具、鞘口装具と鞘が残っていた。柄縁装具は鹿角製で、鹿角装I類の特徴である突起の一部を含む1/3ほどのみである。表面も腐蝕しており、文様の有無は不明である。断面杏仁形で、柄木は厚0.3cmほどであったとみられる。内部は茎尻側の現存する点から3.0cmほどから、関にあわせるように幅が広くなる。鞘口装具は鞘木に付着した鹿角の一部のみである。鞘口から2.5cmほどのところまで、わずかであるが一段高くなっていることから、鞘口装具と鞘木を一本で作り、鞘口装具を柄代わりにして、鹿角製の装具をはめ込んだようである。鞘木は刀身全体にみられ、関周辺と鋒付近に鞘の端部が残っているが、合わせ目は不明瞭である。鋒付近では刀身と鞘木の間に隙間がみられる。

M42・M43は平根系の腹抉柳葉式である。M42は茎が歪むため、現存長14.9cm、鎌身長7.7cm、鎌身幅2.8cm、頸部長4.4cmになる。茎には矢柄の木質と矢柄を止めるための糸が残るが、関を越えて頭部にまで及んでいる。M43は頭部以下を欠損し、現存長6.6cm、幅2.8cmである。

第3節 梅田28～30・32号墳

梅田28号墳

(第86～89図・写真図版95～97、115・116)

立地および墳丘

主尾根平坦地の中央部から北に派生する西側の支尾根は、比較的緩やかに傾斜し、約10m下がった地点で北東および北西方向に二股に分かれしていく。分岐した北東の尾根筋は緩やかに下降し、北西の枝尾根は比較的急な傾斜となってそれぞれ山裾に至っている。支尾根の先端、分岐地点に28号墳は立地し、北東の枝尾根には2基、北西の枝尾根には3基のあわせて6基の古墳が西側の支尾根上に築造されている。このうち、支尾根先端から北西の枝尾根上方、28号墳の西半部から29号墳の西半部におよぶ広い範囲は、後世の削平をうけており、旧状は完全に失われていた。

古墳は、後世の削平によって西半部の墳丘および区画溝は大きく失われていたが、東端部のわずかな範囲は削平をまぬがれ、一部はその形状をとどめていた。残された部分では、後述する埋葬施設の東側に平坦地が、南側には尾根に直交するほぼ東西方向の浅い溝状の窪みが認められた。これらから、他の古墳と同様に、斜面上方側を東西に削り、削った残土を下方側に盛土し、掘削面と墳丘との間に区画溝を設けて墳丘を築造していたものと推定される。墳丘は復元径約8.5mの円形を呈していたものと考えられるが、調査では埋葬施設を中心にして広い範囲に平坦面が確認された。

墳丘東斜面からは、底部に糸切り痕のある碗2点(64・65)と大刀(M49)・刀子(M50)・鑿(M50)・不明鉄製品(M52・M53)が出土した。

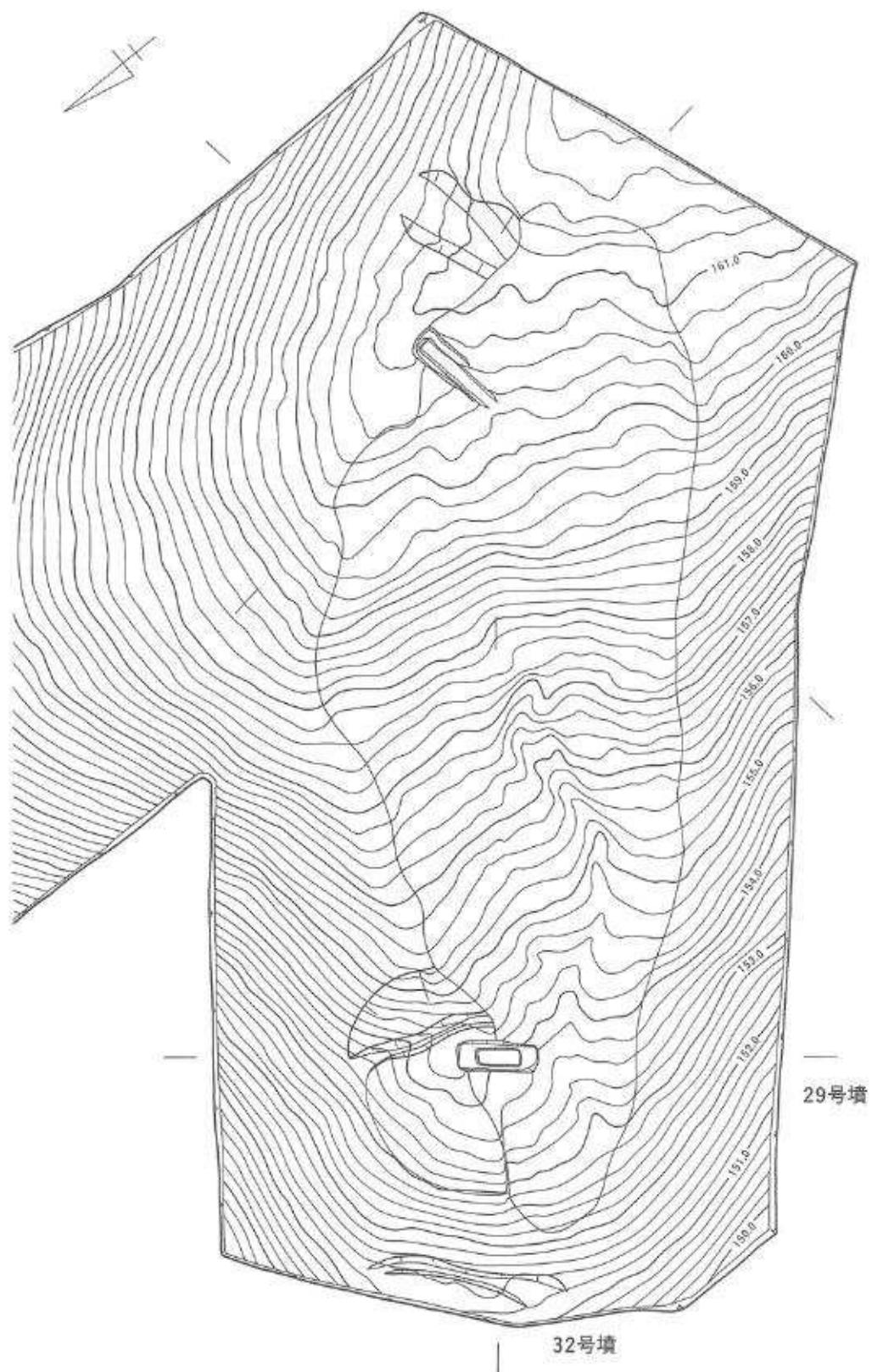
埋葬施設

墳頂平坦部の中央付近に、ほぼ東西方向(N80°E)を主軸とする木棺直葬の埋葬施設が1基検出された。墓壙の東半部は深さ約0.5mが残存していたが、西半部については削平によって上方および小口部は失われ、床面のわずかな部分のみが残存している状態であった。このため、墓壙は幅0.93m、深さ0.5mを測るが、長さはおよそ3.5m程(残存長3.18m)であったと考えられる。残存している墓壙の南北および東壁には検出面から約0.15m掘り下げた地点で、南壁では幅約0.2mの平坦面を、北および東壁ではわずかな段をつくりだしている。

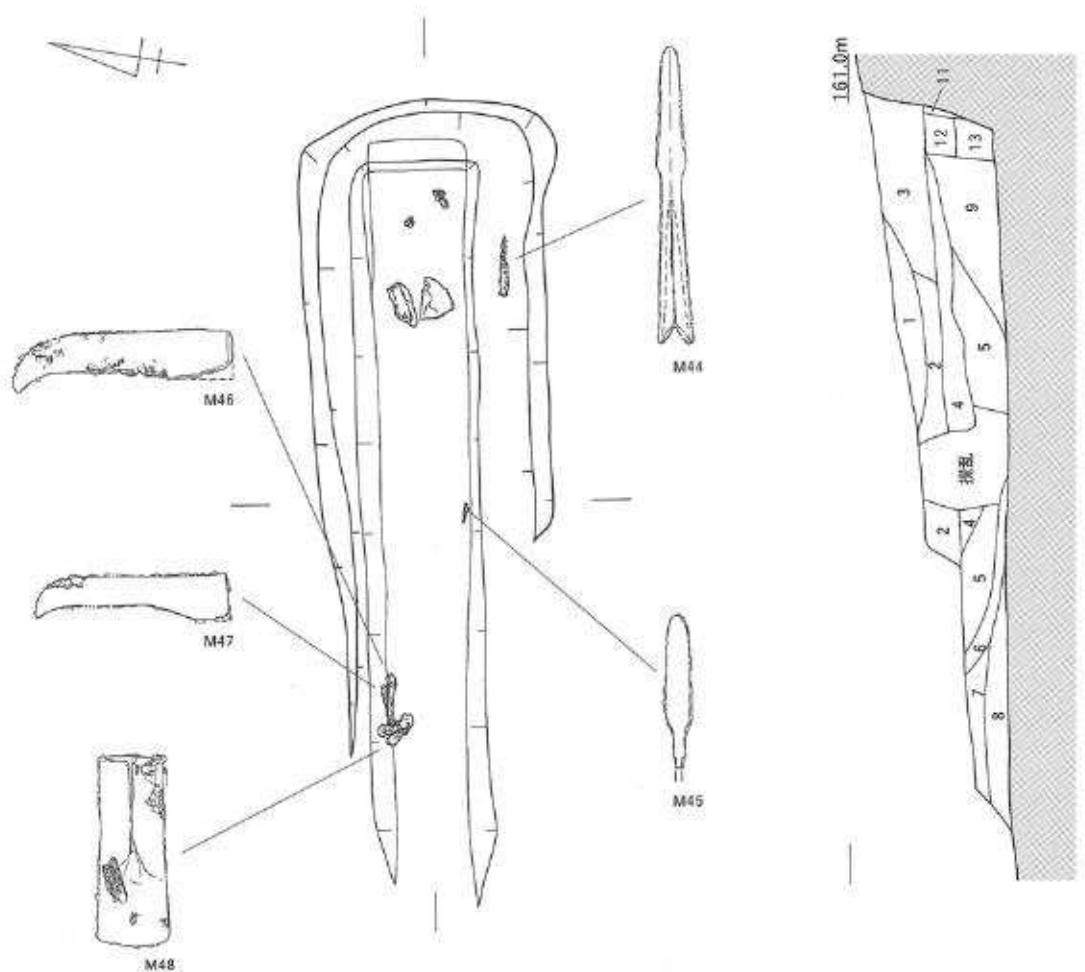
南壁に設けられた平坦面によって墓壙の北側に偏った位置に、幅0.50m、深さ0.28m、長さ2.96m以上の木棺が納められていた。棺内には東小口から約0.4m中央に寄った位置に棺と直交する方向に2石の割石が並べて置かれており、平坦な面を上にしていることから、石枕であったと考えられる。この石枕と東小口の間、頭部上方には百を超える白玉(S29～S46、S47～S147)・豎櫛3本(W1～W4)が副葬されていた。この他、中央南側板に沿って鉄鎌(M45)が、足元付近と思われる棺西端の北側板に接する位置に鉄鎌(M46・M47)・鉄斧(M48)がそれぞれ副葬されていた。さらに、棺検出面の南壁平坦面、棺外の頭部付近に位置する地点から鉄鋸(M44)が出土した。また、墳丘東斜面から出土した大刀(M49)・鑿(M51)など複数の鉄製品が棺内あるいは棺外に副葬されていたものと考えると、埋葬施設はさらにひとまわり大きなものであった可能性が考慮される。



第86図 梅田28号墳 墓丘断面図 (1/100)



第87図 梅田28・29・32号墳 調査後地形測量図 (1/200)



1. 10YR 6 / 8 明黄褐色土・細粗砂～粗砂
 2. 75YR 7 / 8 黄褐色土・粗砂～粗砂
 3. 75YR 6 / 8 棕色土・粗細砂～細砂
 4. 10YR 6 / 8 明黄褐色土・極細砂～粗砂
 5. 75YR 7 / 8 黄褐色土・極細砂～細砂
 6. 75YR 8 / 2 灰白色土・粗砂～粗砂
 7. 10YR 7 / 4 に近い黄褐色土・細砂～粗砂
 8. 10YR 6 / 8 明黄褐色土・細砂～粗砂
 9. 75YR 7 / 8 黄褐色土・極細砂～細砂
 10. 10R 6 / 8 赤褐色土・極細砂～細砂
 11. 75YR 6 / 6 棕色土・細砂 (75YR 8 / 4 (浅黄褐色粒を多く含む))
 12. 75YR 6 / 8 棕色土・細砂 (75YR 8 / 4 (浅黄褐色粒をわずかに含む))
 13. 75YR 5 / 8 明褐色土・粗砂
 (75YR 8 / 4 浅黄褐色粒および10YR 7 / 6 明黄褐色粒をわずかに含む)

0 1m
遺物1/6 (鉄鎌1/4)

第88図 梅田28号墳 埋葬施設 平・断面図 (1 / 30)

出土遺物（第96、104～106図・巻首図版7、8・写真図版133、141、142）

棺内から鉄鎌（M45）・鉄鎌（M46・M47）・鉄斧（M48）・小玉122個（S29～S46、S47～S147）・豊櫛3本（W1～W4）が、棺外から鉄鉢（M44）が出土している。また、墳丘東斜面からは、須恵器および土師質の碗2点（64・65）と大刀（M49）・刀子（M50）・鑿（M51）・不明鉄製品（M52・M53）が出土している。

64・65はともに底部に糸切り痕のある口径14～15cm、器高6cmを測る碗である。64は土師質で底部は完存するが、口縁部および体部のわずかが残るのみである。65はほぼ完形で、高台は64より低い。

M44はほぼ完形の鎌式鉄鉢である。全長23.4cm、身長9.5cm、袋部長13.9cmである。身部は幅1.5cm、厚1.0cmの断面菱形の鎌式で、関の端部を一部欠損しているが、両関である。袋部は円筒袋式で径2.6cm、合わせ目は閉じている。袋部内部は長さ11.3cmを測り、端部より3.9cmの辺りまで木質が残ることから、柄を装着した状態で副葬されたようである。ただし、柄本体の痕跡は棺外で確認できなかった。袋端部は径2.7cmの山形抉り式で、袋端部から1.5cmのところに径0.4cmの目釘孔が両側に、やや位置をずらして開けられている。目釘は残存しない。

M45は尖根系短頭尖根式の柳葉式である。茎を欠損し、現存長8.0cm、鎌身長5.7cm、鎌身幅1.2cm、頭部長1.6cmになる。

M46・47は鉄製の曲刃鎌である。いずれも布が付着しているものの柄の木質は残っておらず、柄をはずして刃のみ布にくるみ、副葬された可能性がある。M46の方がM47より一回り大型である。M47は刃部がゆるやかによく曲線を描いており、研ぎ減りの結果摩滅したものとすれば、儀器ではなく実用品を副葬したことになる。

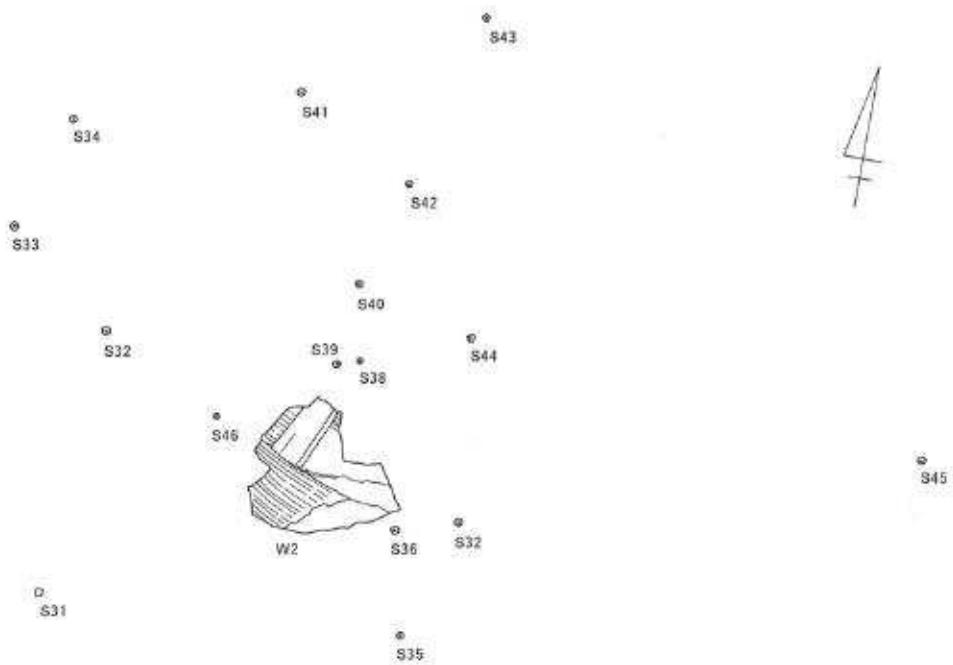
M48は鉄斧である。有袋で、肩のないタイプの斧で、袋部の幅と刃先の幅がほぼ同じである。全長9.1cm、幅4.6cmで、小型のタイプである。袋部の断面の形状は楕円形で、厚みは2.5cmである。袋部を中心には布が付着している。

M49は大刀の鋒のみである。現存長23.1cm、幅3.4cm、厚0.5cm。鋒は2.0cmほど折れ曲がっているが、フクラ付きであることがわかる。刀身に、かなり不明瞭であるが、布痕がみられることから、抜身を布で包んだ状態で副葬されたようである。身幅から、27号墳のM31程度の大刀であったと推定できる。

M50は刀子である。主に4個体に破碎しているが、復元すれば、梅田12号墳のM24のようになるであろう。刀身は2個体あり、鋒に近い部分の現存長2.0cm、幅0.6cm、厚0.3cm、中程に当たる部分の現存長2.3cm、幅1.4cm、厚0.4cmである。茎は現存長3.3cm、幅0.8cm、厚0.3cmで木質が付着する。栗尻で目釘孔はない。関は残っていない。装具の一部とみられる部分は現存長2.0cm、幅1.3cm、厚0.1cmである。片面しか残っていないが、やや杏仁形の断面と極薄の厚みから柄縁装具とした。梅田3号墳第1主体のM76・77と酷似する。

M51は鑿である。先端を欠損しているらしく、現存長24.3cm、幅1.4cm、厚0.7cmの断面長方形である。袋部は円筒袋式で径2.2cm、合わせ目は痛みによってやや開きぎみである。袋内部は長さ8.5cmを測り、全体に木質が残る。袋端部は大半を欠損するが、現存径3.0cmである。また、端部を0.6cmほど緩く折り曲げた痕跡がある。袋端部から1.8cmほどのところに目釘孔があるようだが、不明瞭である。

M52は弧状の板鉄に筒状の金具がはめ込まれている。何かの製品の一部と思われるが、痛みが激しく不明である。現存長3.9cm、幅0.9cm、厚0.1cm。M53は板状の製品と筒状または折り曲げられた製品が組み合わさっている。こちらも何かの製品の一部と思われるが、不明である。板状の方は現存長2.7cm、



第89図 梅田28号墳 出土遺物 平面図 (1 / 2)

幅1.3cm、厚0.4cm、筒状の方は現存長1.7cm、幅1.0cm、厚0.1×2cmになる。

S29～46は滑石製の白玉で、出土状況図に位置を記載して取り上げたもののみ18点を図化している。直径はおよそ3mm程度で、厚さは2mm前後。他に、水洗いによって100点ほど出土しており、これらは観察表にのみ掲載している。

S148は直径7.4～7.9cm、厚さ4.3cmの拳にすっぽりおさまるサイズの丸石で、叩き石として用いられたものか。石材は不明であるが、雲母などを含む多孔質のやや重い石で、色調は黒～緑灰、オリーブ灰色である。

W1～4は漆塗りの堅櫛である。4点出土しているが、W1は小片である。W2のみ、突起をもつタイプである。欠損は著しいが、突起部を除いた棟部の高さ4.1cm、幅3.75cmで、W3・4よりやや小振りである。W3は頂部を欠損しており、全長は不明であるが、幅は4.65cmである。W4はもっとも保存状況が良好で、かつ大きめのものである。幅4.95cm、高さ4.2cm。梅田1号墳のW2・4とはほぼ同じサイズの中型の櫛である。

梅田29号墳

(第90、91図・写真図版95～97、117・118)

立地および墳丘

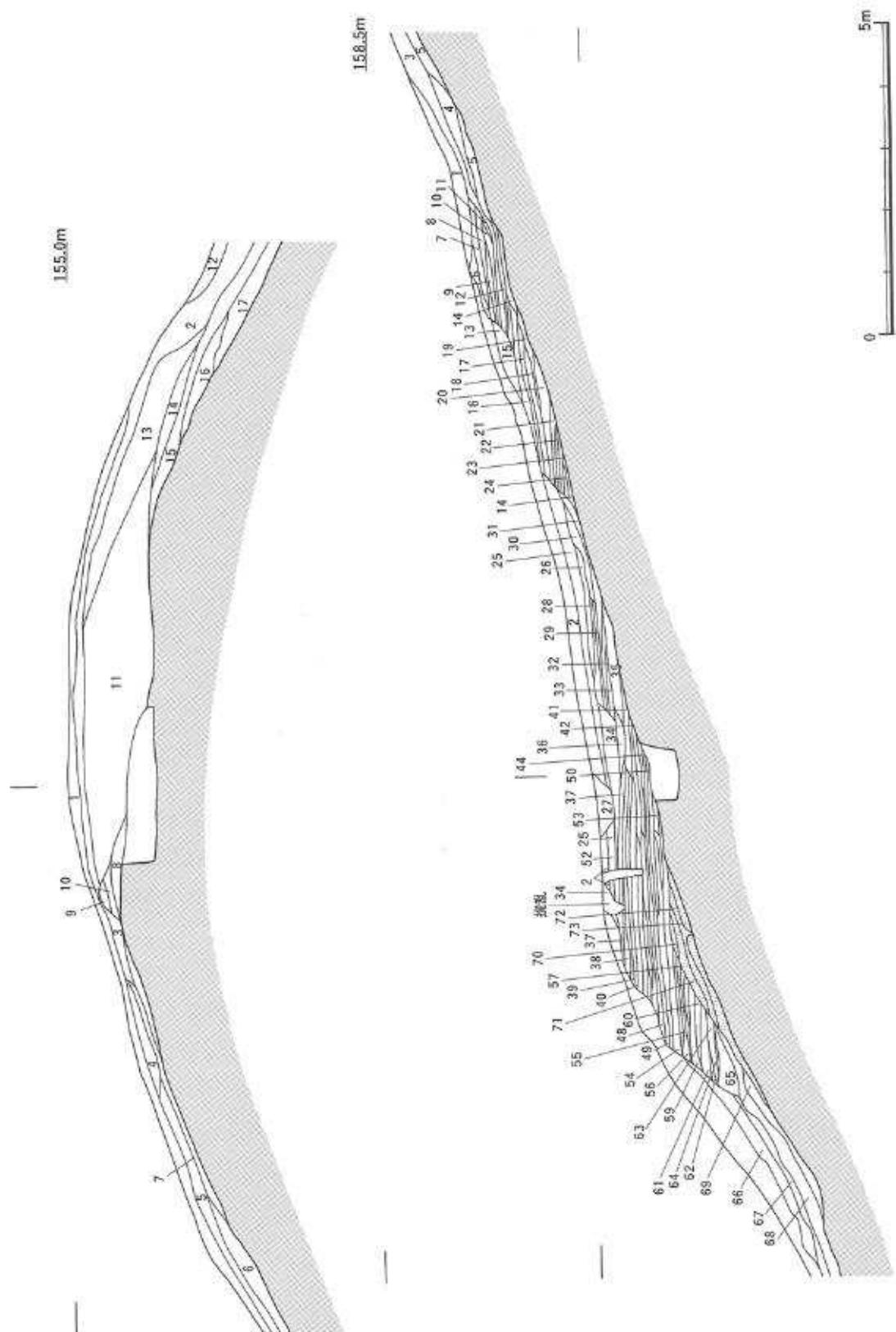
29号墳は、28号墳の北西約22m、標高で約7m（両古墳の埋葬施設を比較）下がった地点に位置しているが、28号墳の西半部が破壊された後世の削平は29号墳を含む範囲にまでおよんでいる。しかし、削平された29号墳のほぼ西半部を占める範囲およびその斜面上方には、最も厚いところで1.3m、およそ0.5～1m程度の盛土が行われている。この盛土の断面を観察すると、大きく何度も分かれているが、明褐色あるいは明赤褐色・黄褐色・橙色などの土がほぼ水平に細かく幾層にも積み上げられている。これらは、特定の意図をもって行われたものと考えられるが、遺物は出土せず、行われた時期および目的などは不明である。

古墳の西半部は、後世の削平と盛土によって当時の形状をとどめていないが、東半部では斜面上方側（以下、墳丘背後）を北東から南西方向に削った掘削面および墳丘との間に区画溝が確認された。掘削面の上端と墳頂部との比高差は約1.2mを測り、区画溝は幅約0.5m、緩い弧状を描く形状を呈しているが立ち上がりはほとんど認められなかった。

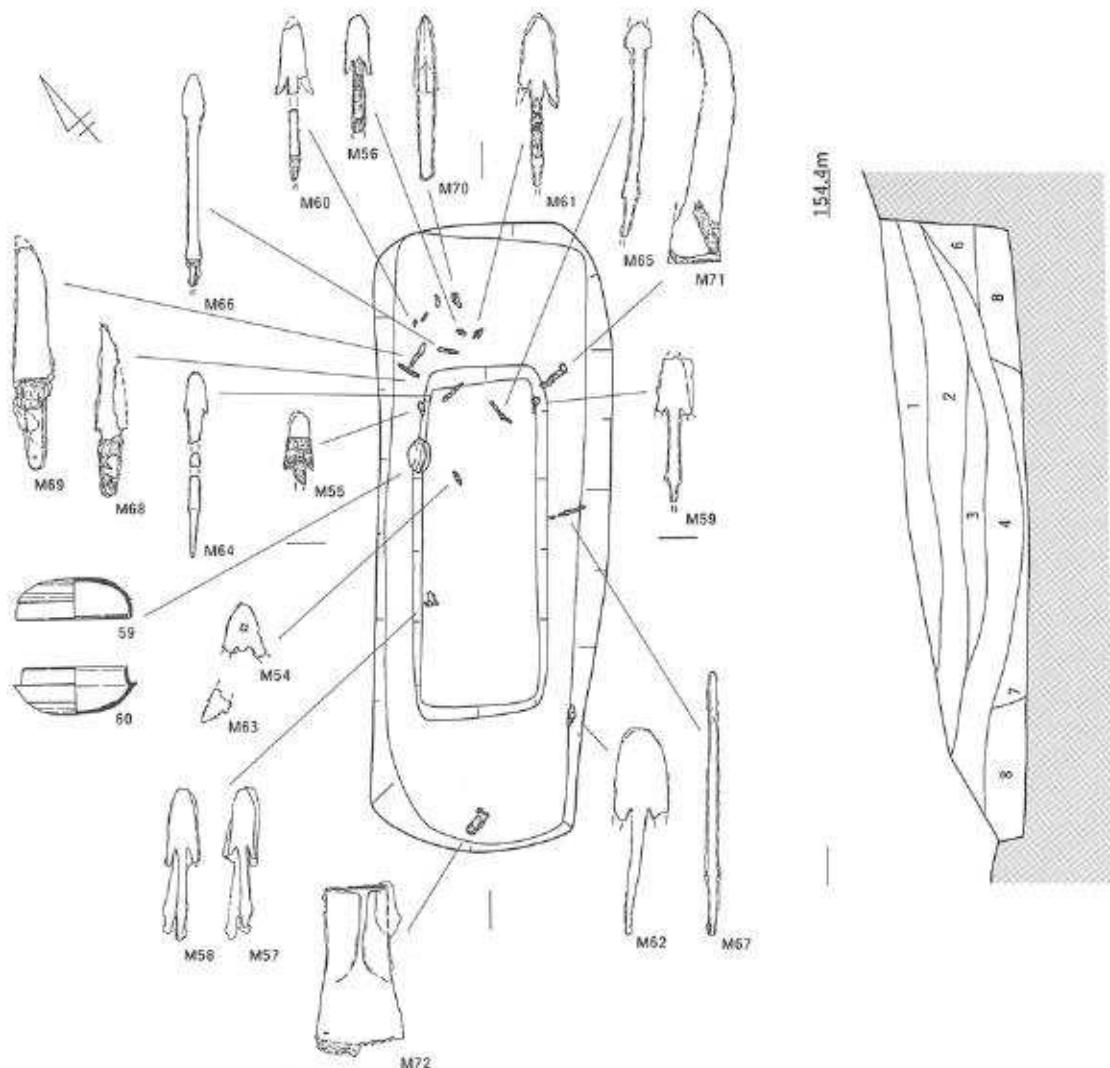
墳丘は東半部の状況から、他の古墳と同様の工程で築造されたものと考えられ、約5.5×8mの梢円形を呈していたものと推定される。斜面下方側は、のちに築造されたと思われる直下に位置する32号墳によって、削平された可能性が考えられるが、墳丘背後を削った残土で最も厚いところは約0.4mの盛土が行なわれているのが断面の観察によって認められた。

埋葬施設

墳頂部には約3.5×5.5mの平坦面がつくられ、そのほぼ中央に北東一南西方向（N38°E）を主軸とする木棺直葬の埋葬施設が1基検出された。墓壙の一部は後世の削平によって削られていたが、長さ2.50m、幅0.94mを測り、平面形はほぼ長方形を呈するものである。墓壙は垂直に掘り下げられ、最も深い



第90図 梅田29号墳 墳丘断面図 (1/100)



1. 10YR 7/4 にぶい黄褐色土 壱粗砂～細砂 (10YR 6/8 明黄褐色塊をわずかに含む)
 2. 10YR 7/4 にぶい黄褐色土 壱粗砂～細砂
 3. 2.5Y 7/4 浅黃色土 壱粗砂～細砂
 4. 10YR 6/4 にぶい黄褐色土 壱粗砂～細砂
 (10YR 5/2 灰黄褐色粒および10YR 7/6 明黄褐色塊をわずかに含む)
 5. 7.5YR 6/6 暗色土 壱粗砂
 6. 10YR 6/4 にぶい黄褐色土 壱粗砂～細砂
 7. 10YR 7/6 明黄褐色土 壱粗砂～細砂
 8. 2.5Y 7/4 浅黃色土 壱粗砂～細砂
 9. 10YR 8/6 黄褐色土 衛砂 (10YR 6/8 明黄褐色塊をわずかに含む)

0 1m
遺物(土器1/8・鉄器1/4)

第91図 梅田29号墳 埋葬施設 平・断面図 (1/30)

ところで0.54mを測る。

墓壙の中央には、長さ1.40m、幅0.54m、深さ0.14mを測る木棺が納められていたと考えられる。しかし、これらは墓壙の土層断面の立ち上がりから判断したもので、平面では棺の痕跡を明確に検出することはできなかった。

墓壙内部からは、須恵器の杯蓋・杯身のセット（59・60）と多量の鉄製品（M54～72）が出土した。それぞれの出土位置をみてみると、棺内に含まれるものは、頭部側と考えられる北側から鉄鎌4点（M54・M59・M64・M65）が出土し、この他にも中央から足部側に近い位置から鉄鎌2点（M57・M58）が出土している。また、棺外では杯蓋・杯身（59・60）が合わさって立った状態で出土し、北側からは刀子2点（M68・M69）・鉄鎌4点（M56・M60・M61・M66）・ヤリガンナ（M70）・鉄鎌（M71）がまとまって、さらに棺外の東・南・南西からそれぞれ鉄鎌（M67・M62）・鉄斧（M72）が出土している。

これら多量の鉄製品は、すべてが散乱したような状態で出土しており、また棺底から浮いた状態で出土しているものも数点（鉄鎌M60、M67・鉄鎌M71など）認められる。墓壙あるいは棺上に置かれた副葬品の可能性を考えられるが詳細は不明である。



写真13 調査状況

出土遺物（第96、107、108図・写真図版133、143～145）

棺内および棺外から、須恵器2点（59・60）と多量の鉄製品（M54～72）が出土している。

59の杯蓋は天井部と口縁部を画する稜は突出し、口縁部は内傾する段をもち凹線が巡る。60の杯身はたちあがりがわずかに内傾し、口縁端部に内傾する段をもつ。

M54は平根系の無茎式である。逆刺の先端を欠損する。全長3.0cm、幅1.6cm、鎌身に径0.3cmの透かし孔がある。M55～M61は尖根系尖根式の腸抉柳葉式である。M55は頭部を欠損し、現存長3.8cm、鎌身長3.0cm、鎌身幅1.2cmとなる。鎌身に装着した状態で矢柄の木質が残る。矢柄は幅0.1cmほどの植物繊維質の帯によって、鎌身に固定している。M56は茎欠損のため、現存長6.2cm、鎌身長3.1cm、鎌身幅1.2cm、頭部長3.1cmになる。頭部には矢柄と糸が良い状態で残る。矢柄は先端を尖らせた板状の木材2枚で、頭部を挟み込み、糸で固定している。糸の一部は逆刺まで達していた。糸巻きは鎌身寄りに密になる。M57・M59・M60は鎌身長は3.8cm、身幅1.2cm、頭部長4.0cm以下になる。M60は薄くて軽く、茎に木質が付着する。M58は鎌身長4.2cm、鎌身幅1.5cm、頭部長4.7cmと少し大きい。どれも茎を欠損する。M61は鎌身の一部と茎を欠損するため、現存長8.9cm、鎌身幅1.7cm、頭部長4.5cmとなる。M56と同じく、

頸部に矢柄と糸巻きが残る。M62は平根系の腸抉柳葉式である。頸部が歪み、逆刺と関を欠損するため、現存長10.9cm、鎌身幅2.8cmである。M63は重抉（二段逆刺）の逆刺のみである。幅が1.9cm。無茎式であろう。M64～67は尖根系長頭式である。M64は腸抉柳葉式で、頸部の一部を欠損するため、現存長3.8 + 0.7 + 4.3cm、鎌身長2.2cm、鎌身幅1.1cmになる。茎には木質が付着する。鎌身は薄くて軽い。M65・M66は柳葉式である。M65は鎌身の半分と茎を欠損するため、現存長11.3cm、鎌身幅1.3cmになる。M66は茎欠損のため、現存長11.4cm、鎌身長2.2cm、鎌身幅1.2cmになる。茎には矢柄の木質がわずかに残り、関付近に糸の痕跡がみられる。M67は類鑿箭式で全長13.8cm、鎌身幅0.4cmになる。茎にわずかに木質が付着する。

M68・M69は刀子である。M68は鋒の先端と刃を大きく欠損し、現存長9.0cmになる。刀身は現存長5.4cm、幅0.5cm、厚0.3cmで、背に強い反りがある。関は背側にのみ残っており、片関の可能性もあるが、反りとの関係から両関とした。茎は長3.6cm、幅0.8cm、厚0.3cm、栗尻で目釘孔はない。木質が付着する。M69は鋒を欠損し、現存長11.7cmとなる。刀身は現存長7.0cm、幅2.0cm、厚0.6cm。反りはない。不均等の両関で、刃側が撫角になる。刃の一部を研ぎ減りによって欠損する。茎は長4.7cm、幅0.8cmで、厚0.3cm、栗尻で径0.2cmの目釘孔が1つあるが、目釘はみられない。木質が付着する。

M70はヤリガンナである。15号墳出土のM1と同様、刃部と茎部の幅がほぼ同じ柳葉形に属し、長さ8.7cm、幅1.1cmとさらに小型のものである。刃先には鏽が明瞭にみられ、刃の長さは3cm程である。

M71は鉄製の曲刃鎌であるが、刃の先端は摩滅もしくは欠損している。全長13.3cm、刃の部分の幅は1.9cmで、ほぼ同じ長さの11号墳から出土した鎌が長さ12.7cm、刃の部分の幅2.5cmあるのに対してかなり細身である。これは、刃部が曲線をえがくように研ぎ減りしているためであり、これも実用品であったと考えられる。片面に木質が付着しているが、木目の方向が刃の方向に対して鋭角であり、柄の方向を示すものとは思われない。

M72は鉄斧である。有袋で肩のないタイプであるが、袋部の幅に比べ、刃の幅が少し広くなっている。平面形は台形である。刃先は直線ではなく、ゆるやかなカーブを描いている。刃先に木質が付着しているが、袋部には柄は残っていないので、柄をはずして副葬したものであろう。全長9.1cm、刃先の幅4.6cmとやや小型である。

梅田30号墳

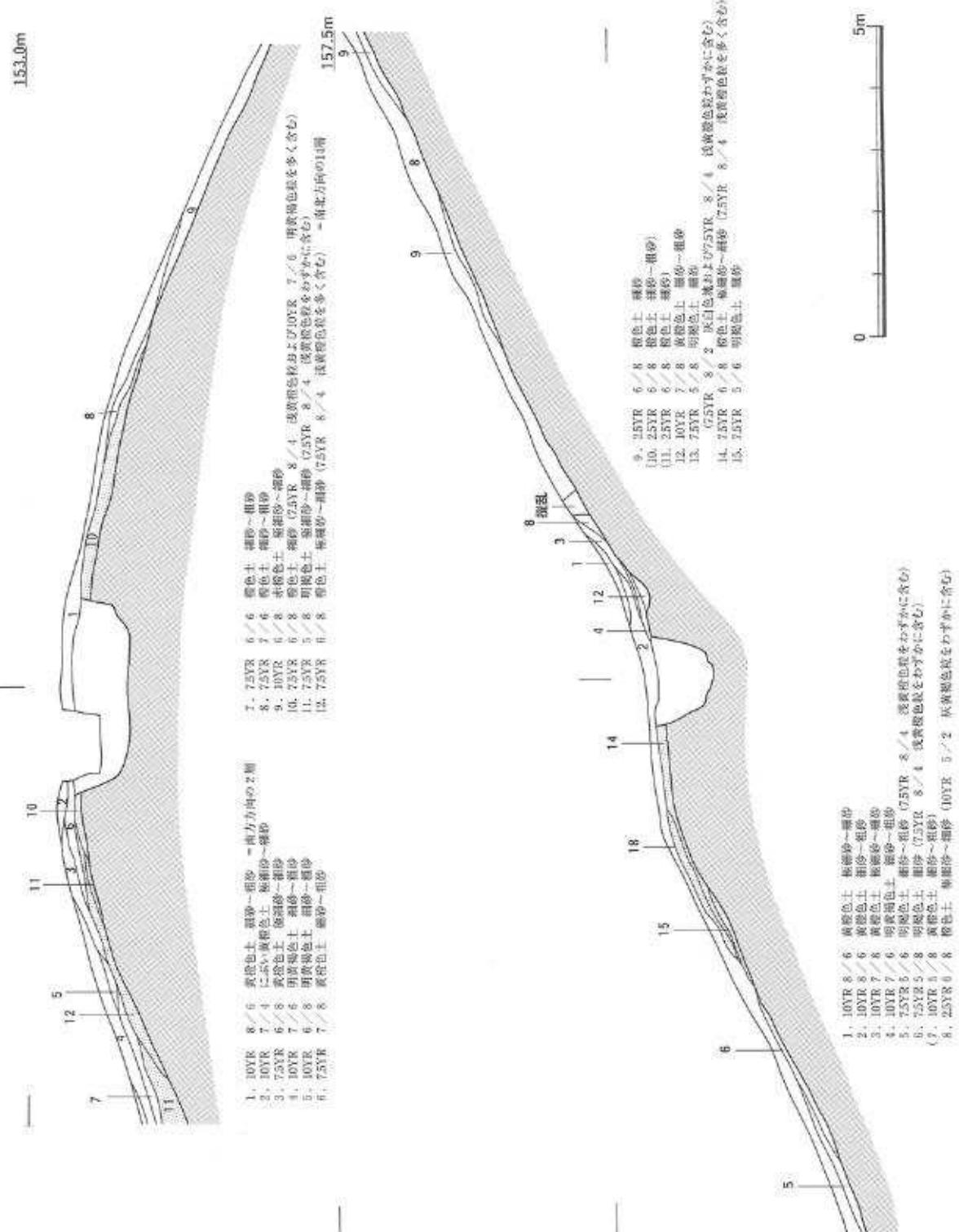
（第92～94図、写真図版95、119・120）

立地および墳丘

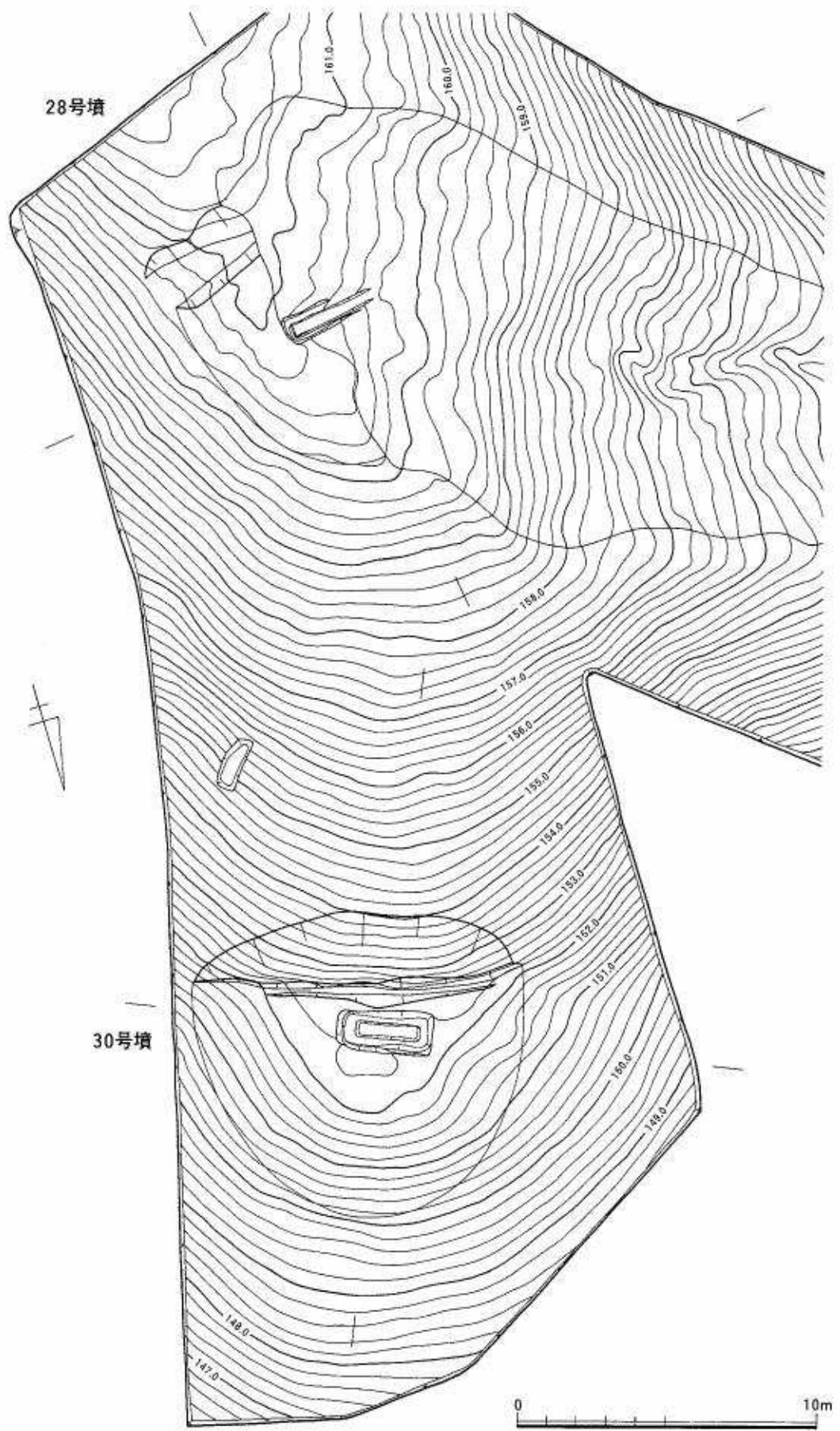
28号墳を起点にして尾根筋はV字形（北東および北西方向）に分岐しており、北東の枝尾根には2基の古墳が立地している。30号墳は、28号墳の北方約24m、標高で約8.5m（両古墳の埋葬施設を基準）下がった地点に位置し、さらに下方には現状保存された古墳1基が存在している。

古墳は斜面上方側（以下、墳丘背後）をほぼ東西方向に削り、削った残土は斜面下方側に盛土として積み上げている。墳丘背後の掘削は、東西に長い範囲に行われているが、掘削面の上端と墳頂部との比高差は約1.5mである。掘削面と墳丘との間には、ほぼ東西方向の直線的な区画溝がつくられており、幅約0.9m、深さ約0.06mを測る。

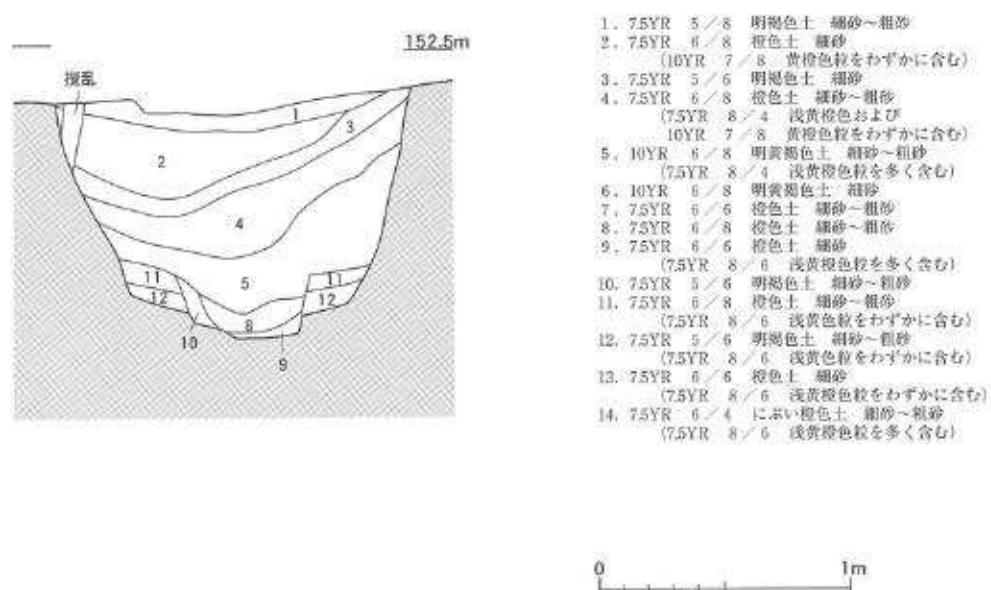
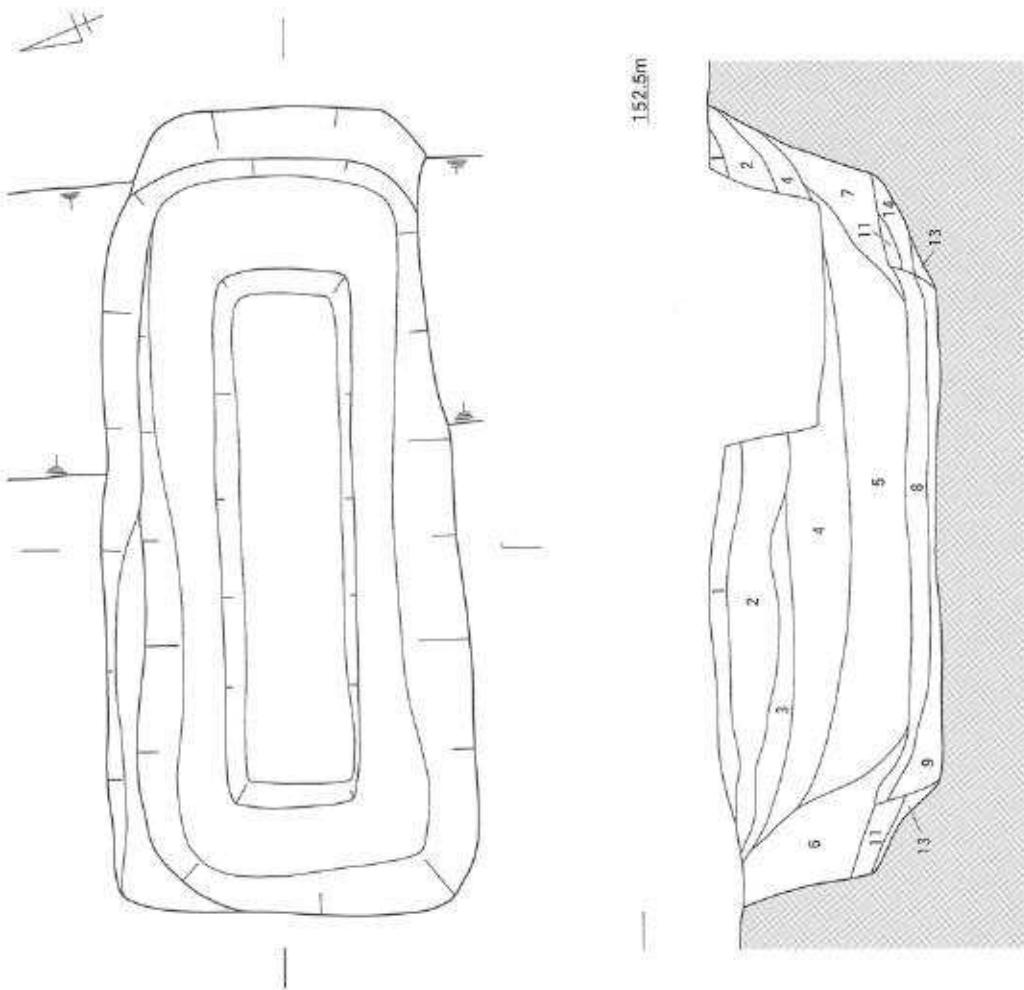
墳丘は、西側がわずかに崩れ、一部等高線が乱れているが、約7.5×11mの半円形を呈していたもの



第92図 梅田30号墳 墳丘断面図 (1/100)



第93図 梅田28・30号墳 調査後地形測量図 (1/200)



第94図 梅田30号墳 埋葬施設 平・断面図 (1/30)

と考えられる。墳丘の盛土は、旧表土を残したまま行われており、0.2~0.3m程度が残存している。

埋葬施設

墳頂部には 4×6 mの半円形の平坦面がつくられ、そのほぼ中央に南東一北西方向(N113°E)を主軸とする木棺直葬の埋葬施設が1基検出された。墓壙は長さ3.20m、幅1.42mを測り、平面形はほぼ長方形を呈するものである。墓壙は若干内側にむけて掘り下げられ、最も深いところで0.92mを測る。

墓壙の中央には、長さ2.14m、幅0.54m、深さ0.3mを測る木棺が納められており、墓壙検出面から約0.6m掘り下げた地点で確認された。墓壙の断ち割り調査によって、棺の小口側は棺上面から底部まで斜めに掘り下げ、側壁側は墓壙の床面をさらに0.1m程深く掘り下げて納めていることが判明した。

墓壙上層から須恵器の杯蓋2点(61・62)が出土した。また、確認調査時(第1次 H8-7トレチ)には墓壙上面から、趣(63)が出土している。

出土遺物(第96図・写真図版133)

墓壙上層および上面から須恵器3点(61~63)が出土している。

61・62は天井部の中央に扁平なつまみをもつ、口径12cm前後、器高約5.5cmを測る有蓋高杯の蓋である。ともに天井部と口縁部を画する稜は短く突出するが、口縁部は内傾する明瞭な段をもつもの(61)と端部に面をもつもの(62)に分けられる。63は外反して段をつくる口頸部から外上方にのびる口縁部をもつ趣である。頸部には11条の櫛描波状文が巡り、口縁端部は水平な面をもつ。体部は口縁部よりわずかに径が小さく、胴部の最も張り出したところに円孔が穿たれ、4~6条の波状文が巡る。

梅田32号墳

(第87図・写真図版118)

立地および墳丘

32号墳は、29号墳の直下に立地しており、道路工法の変更によって古墳の大部分は現状保存されることとなった。しかし、墳丘の一部が路線範囲内に含まれるため、32号墳として調査を実施した。

調査区の壁際からは、北東から南西方向の区画溝と墳頂部の一部が検出された。区画溝は幅0.4~0.6m、深さ約0.1mを測り、斜面上方(墳丘背後)は掘削が行われていたと考えられるが、掘削面を明確に確認することはできなかった。また、墳頂部のわずかな範囲で区画溝に平行するラインが約2.4m検出され、墓壙の南辺と考えられたが、それ以上の調査は行えなかった。

27号墳 墳丘土層断面 (東西方向)

1. 5YR 5/8 明赤褐色土 細砂 -南北方向の3層
2. 10YR 5/6 黄褐色土 細砂-粗砂 (7.5YR 6/8 橙色塊をわずかに含む)
3. 10YR 5/6 黄褐色土 粗砂-細砂 (7.5YR 6/8 橙色塊をわずかに含む)
4. 7.5YR 5/6 明褐色土 細砂-粗砂
5. 10YR 5/8 黄褐色土 細砂-細砂
6. 7.5YR 5/8 明褐色土 細砂-粗砂
7. 7.5YR 5/8 明褐色土 細砂 -南北方向の4層
8. 7.5YR 5/8 明褐色土 細砂-粗砂 (5YR 6/8 明赤褐色塊をわずかに含む)
9. 5YR 4/8 赤褐色土 細砂-粗砂
10. 7.5YR 6/8 橙色土 細砂-粗砂 (7.5YR 8/4 浅共橙色粒をわずかに含む)
11. 7.5YR 6/8 橙色土 細砂-粗砂 (5YR 6/8 橙色塊および7.5YR 8/4 浅黄橙色粒を多く含む)
12. 7.5YR 6/8 橙色土 細砂-粗砂 (7.5YR 7/8 黄橙色塊をわずかに含む)
13. 7.5YR 6/8 艶色土 細砂 (7.5YR 8/4 浅黄橙色粒をわずかに含む)
14. 7.5YR 5/8 明褐色土 細砂 (7.5YR 8/4 浅黄橙色粒を多く含む)
15. 7.5YR 6/8 橙色土 細砂 (5YR 6/8 橙色塊を多く含む)
16. 7.5YR 5/8 明褐色土 細砂 (7.5YR 8/4 浅黄橙色粒をわずかに含む)
17. 7.5YR 6/8 橙色土 細砂 (5YR 6/8 橙色塊および7.5YR 8/4 浅黄橙色粒をわずかに含む)

27号墳 墳丘土層断面 (南北方向)

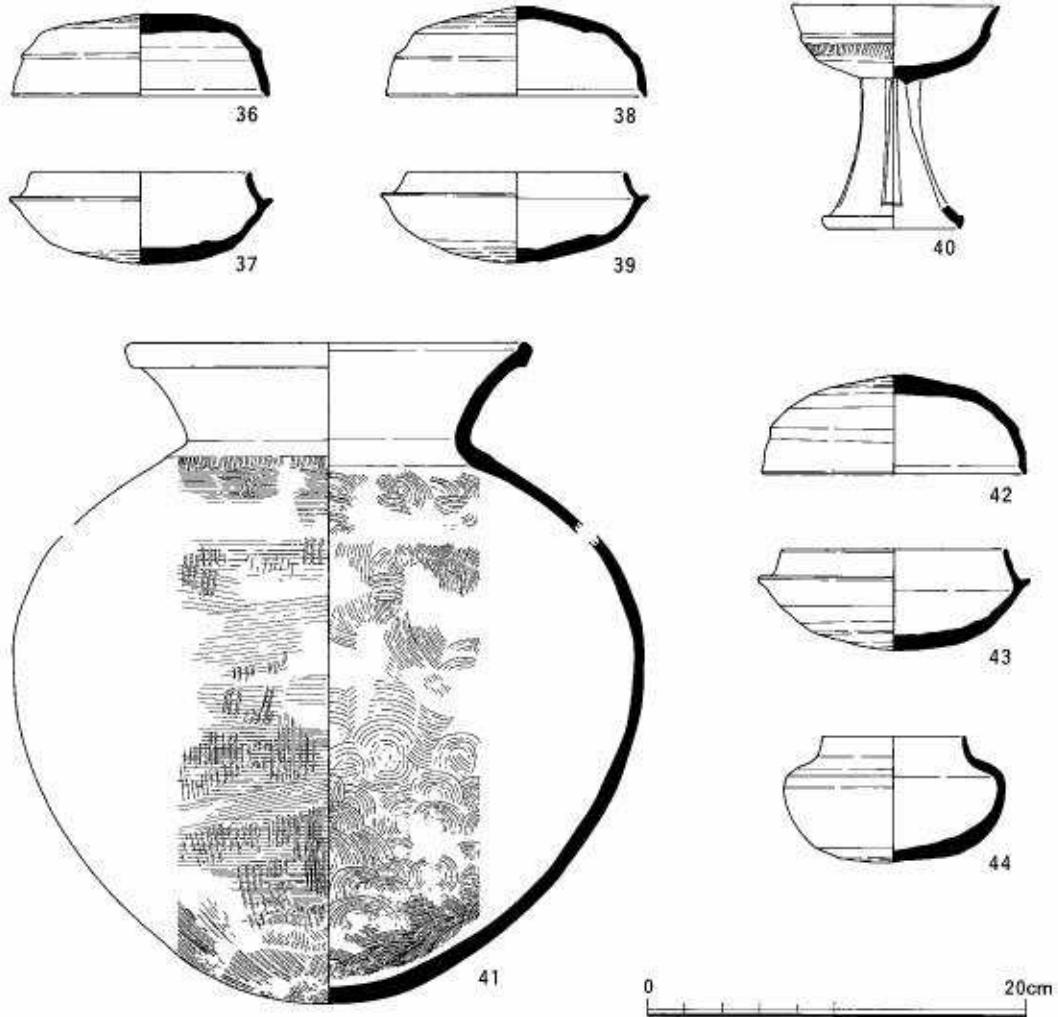
1. 10YR 5/8 黄褐色土 細砂
2. 7.5YR 6/8 橙色土 細砂
3. 5YR 5/8 明赤褐色土 細砂
4. 7.5YR 5/8 明褐色土 細砂
5. 7.5YR 5/8 明褐色土 細砂-細砂
6. 7.5YR 5/8 明褐色土 細砂
7. 7.5YR 5/6 明褐色土 細砂-粗砂
8. 10YR 5/8 黄褐色土 細砂-粗砂
9. 7.5YR 5/8 明褐色土 細砂-粗砂
10. 10YR 5/6 黄褐色土 細砂-粗砂 (5YR 5/8 明赤褐色塊をわずかに含む)
11. 7.5YR 5/8 明褐色土 細砂
12. 7.5YR 5/6 明褐色土 細砂-粗砂
13. 7.5YR 5/8 明褐色土 細砂-細砂
14. 10YR 5/6 黄褐色土 細砂-粗砂 (5YR 5/8 明赤褐色塊および炭をわずかに含む)
15. 7.5YR 5/8 明褐色土 細砂-粗砂
16. 10YR 5/8 黄褐色土 細砂-粗砂 (5YR 5/8 明赤褐色塊および炭をわずかに含む)
17. 10YR 5/6 黄褐色土 細砂 (5YR 5/8 明赤褐色粒をわずかに含む)
18. 10YR 5/8 黄褐色土 細砂 (5YR 5/8 明赤褐色粒および炭をわずかに含む)
19. 10YR 6/8 明黃褐色土 細砂-粗砂 (炭をわずかに含む)
20. 7.5YR 6/8 橙色土 細砂-粗砂
21. 7.5YR 5/8 明褐色土 細砂-粗砂
22. 7.5YR 5/6 明褐色土 細砂-粗砂 (5YR 5/8 明赤褐色粒をわずかに含む)
23. 7.5YR 5/8 明褐色土 細砂-細砂
24. 5YR 5/8 明赤褐色土 粗砂
25. 7.5YR 5/6 明褐色土 粗砂 (5YR 5/8 明赤褐色塊をわずかに含む) = 27号墳SX01-1層
26. 7.5YR 4/6 橙色土 細砂 (5YR 5/8 明赤褐色塊をわずかに含む) = 27号墳SX01-7層
27. 7.5YR 5/8 明褐色土 細砂-粗砂 = 27号墳SX01-6層
28. 5YR 5/8 明赤褐色土 細砂-粗砂 = 27号墳SX02-13層
29. 7.5YR 5/8 明褐色土 細砂-粗砂 = 27号墳SX01-8層
30. 5YR 5/8 明赤褐色土 細砂-細砂 = 27号墳SX01-9層
31. 7.5YR 5/8 明褐色土 細砂 (7.5YR 8/4 浅黄橙色粒を多く含む)
32. 7.5YR 5/8 明褐色土 粗砂 (5YR 6/8 橙色塊をわずかに含む)
33. 7.5YR 5/6 明褐色土 粗砂-粗砂 (5YR 5/8 橙色塊および7.5YR 8/4 浅黄橙色粒をわずかに含む)
34. 7.5YR 5/6 明褐色土 粗砂 (7.5YR 7/8 黄橙色塊をわずかに含む)
35. 7.5YR 6/8 橙色土 粗砂 (7.5YR 8/4 浅黄橙色粒をわずかに含む)
36. 7.5YR 5/8 明褐色土 粗砂-粗砂 (7.5YR 8/4 浅黄橙色粒をわずかに含む)
37. 7.5YR 5/8 明褐色土 粗砂 (7.5YR 7/8 黄褐色塊をわずかに含む)
38. 7.5YR 5/6 明褐色土 粗砂-粗砂 (5YR 6/8 橙色塊を多く含む)
39. 10YR 5/8 黄褐色土 粗砂 (5YR 6/8 橙色塊および7.5YR 8/4 浅黄橙色粒をわずかに含む)
40. 7.5YR 5/8 明褐色土 粗砂-粗砂 (5YR 6/8 橙色塊を多く含む)
41. 5YR 5/8 明赤褐色土 粗砂-粗砂 (5YR 6/8 橙色塊を多く含む)

29号墳 墳丘土層断面 (東西方向)

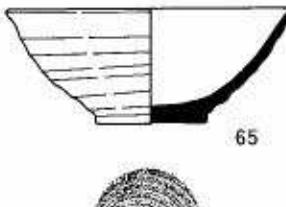
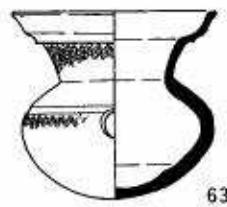
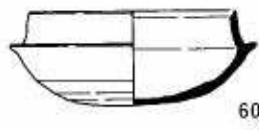
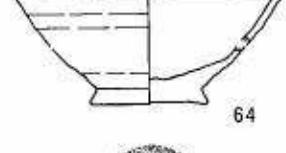
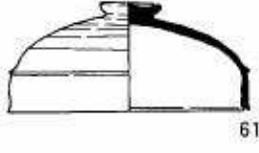
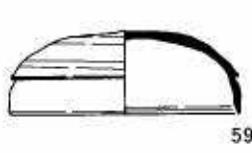
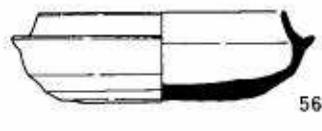
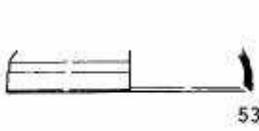
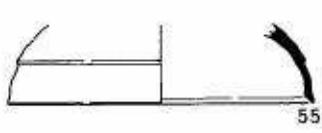
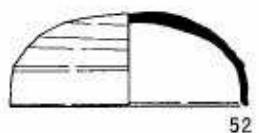
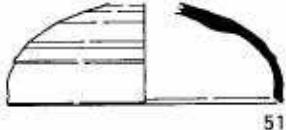
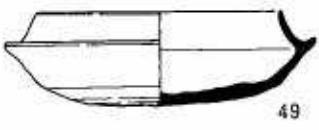
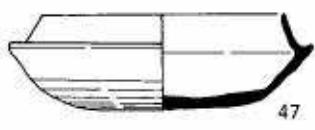
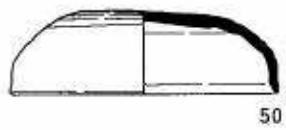
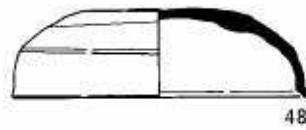
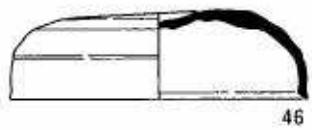
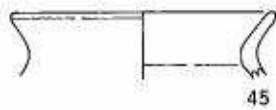
1. 7.5YR 5/6 明褐色土 細砂-粗砂 -南北方向の2層
2. 7.5YR 6/8 黄褐色土 粗砂-粗砂 -南北方向の25層
3. 10YR 5/6 黄褐色土 細砂 (小礫をわずかに含む)
4. 10YR 5/6 黄褐色土 細砂-粗砂
5. 7.5YR 5/8 明褐色土 細砂
6. 10YR 6/8 明黃褐色土 細砂-粗砂
7. 10YR 5/8 黄褐色土 細砂
8. 10YR 5/8 黄褐色土 細砂-粗砂 (10YR 8/6 黄褐色粒を多く含む)
9. 10YR 5/8 黄褐色土 細砂-粗砂
10. 10YR 5/6 黄褐色土 細砂-粗砂 (10YR 7/6 明黃褐色粒をわずかに含む)
11. -南北方向の34.35.41.42.44.48.49.50層
12. 7.5YR 5/6 明褐色土 細砂-粗砂
13. 5YR 5/8 明赤褐色土 細砂-粗砂
14. 7.5YR 5/8 明褐色土 粗砂-粗砂
15. 10YR 5/8 黄褐色土 細砂-粗砂 (炭をわずかに含む)
16. 7.5YR 5/6 明褐色土 粗砂-粗砂 (炭をわずかに含む)
17. 7.5YR 6/8 橙色土 粗砂 (10YR 7/6 明黃褐色粒をわずかに含む)

29号墳 墳丘土層断面 (南北方向)

1. 7.5YR 5/8 明褐色土 細砂-粗砂 (10YR 6/8 明黃褐色塊をわずかに含む)
2. 7.5YR 5/6 明褐色土 粗砂-粗砂
3. 7.5YR 5/8 黄褐色土 細砂-粗砂 (10YR 6/8 明黃褐色塊をわずかに含む)
4. 7.5YR 6/8 橙色土 細砂-粗砂 (5YR 5/8 明赤褐色塊をわずかに含む)
5. 7.5YR 6/6 橙色土 細砂-粗砂 (7.5YR 8/4 浅黃色粒をわずかに含む)
6. 5YR 6/8 橙色土 細砂
7. 7.5YR 5/8 明赤褐色土 細砂
8. 7.5YR 6/8 橙色土 細砂-粗砂
9. 5YR 6/8 橙色土 細砂-粗砂
10. 5YR 6/8 橙色土 細砂 (10YR 7/6 明黃褐色粒をわずかに含む)
11. 5YR 5/8 明赤褐色土 細砂-粗砂
12. 7.5YR 5/6 明褐色土 細砂
13. 7.5YR 5/8 明褐色土 粗砂
14. 10YR 6/8 明黃褐色土 細砂-粗砂 (10YR 8/6 黄褐色粒を多く含む)
15. 5YR 5/8 明赤褐色土 粗砂
16. 7.5YR 5/8 明褐色土 細砂-粗砂
17. 7.5YR 5/8 明褐色土 粗砂
18. 7.5YR 5/6 明褐色土 粗砂
19. 7.5YR 5/8 明褐色土 細砂-粗砂
20. 10YR 5/8 黄褐色土 細砂-粗砂
21. 7.5YR 5/8 明褐色土 粗砂
22. 7.5YR 6/8 橙色土 粗砂-粗砂
23. 10YR 5/8 黄褐色土 粗砂
24. 2.5YR 5/8 明褐色土 粗砂
25. 7.5YR 6/8 橙色土 粗砂-粗砂
26. 7.5YR 5/8 明褐色土 細砂-粗砂
27. 7.5YR 5/6 明褐色土 細砂-粗砂
28. 7.5YR 5/8 明褐色土 細砂-粗砂 (10YR 7/8 黄褐色粒をわずかに含む)
29. 7.5YR 5/6 明褐色土 粗砂
30. 7.5YR 5/8 明褐色土 粗砂
31. 7.5YR 6/8 橙色土 細砂
32. 7.5YR 5/8 明褐色土 細砂-粗砂
33. 7.5YR 6/8 橙色土 粗砂 (7.5YR 7/6 橙色粒を多く含む)
34. 7.5YR 5/8 明褐色土 粗砂
35. 7.5YR 5/6 明褐色土 細砂-粗砂
36. 7.5YR 6/8 橙色土 細砂-粗砂
37. 7.5YR 6/8 橙色土 粗砂
38. 7.5YR 5/8 明褐色土 細砂-粗砂
39. 7.5YR 5/8 明褐色土 細砂-粗砂
40. 10YR 5/8 黄褐色土 粗砂
41. 7.5YR 5/8 明褐色土 粗砂
42. 7.5YR 5/6 明褐色土 細砂-粗砂
43. 7.5YR 5/8 明褐色土 細砂-粗砂 (7.5YR 8/6 浅黃色粒を多く含む)
44. 10YR 6/8 明黃褐色土 粗砂-粗砂
45. 7.5YR 6/8 橙色土 細砂-粗砂
46. 5YR 5/8 明赤褐色土 粗砂
47. 7.5YR 5/8 明褐色土 細砂-粗砂
48. 7.5YR 5/8 明褐色土 細砂-粗砂
49. 10YR 6/8 明褐色土 粗砂
50. 7.5YR 5/6 明褐色土 粗砂
51. 5YR 5/8 明赤褐色土 粗砂
52. 7.5YR 5/8 明褐色土 粗砂 (7.5YR 8/6 浅黃色粒を多く含む)
53. 10YR 5/8 黄褐色土 粗砂 (7.5YR 5/8 明褐色粒を多く含む)
54. 10YR 5/8 黄褐色土 粗砂
55. 7.5YR 5/8 明褐色土 粗砂
56. 7.5YR 6/8 橙色土 粗砂
57. 10YR 5/8 黄褐色土 粗砂
58. 7.5YR 6/8 橙色土 粗砂-粗砂
59. 7.5YR 5/8 明褐色土 細砂-粗砂
60. 5YR 5/8 明赤褐色土 粗砂
61. 7.5YR 5/8 明褐色土 細砂-粗砂 (7.5YR 8/6 浅黃色粒を多く含む)
62. 7.5YR 6/8 橙色土 粗砂
63. 7.5YR 5/8 明褐色土 粗砂
64. 7.5YR 6/8 橙色土 粗砂
65. 7.5YR 5/8 明褐色土 粗砂
66. 7.5YR 5/8 明赤褐色土 細砂-粗砂
67. 7.5YR 5/8 明褐色土 細砂-粗砂
68. 10YR 5/8 黄褐色土 細砂-粗砂
69. 5YR 5/8 明赤褐色土 細砂-粗砂
70. 10YR 6/8 明褐色土 粗砂-粗砂
71. 7.5YR 6/8 橙色土 粗砂 (7.5YR 8/4 浅黃色粒および炭をわずかに含む)
72. 7.5YR 5/6 明褐色土 細砂-粗砂 (7.5YR 8/4 浅黃色粒をわずかに含む)
73. 7.5YR 5/8 明褐色土 粗砂 (7.5YR 8/4 浅黃色粒および7.5YR 7/6 橙色粒を多く含む)

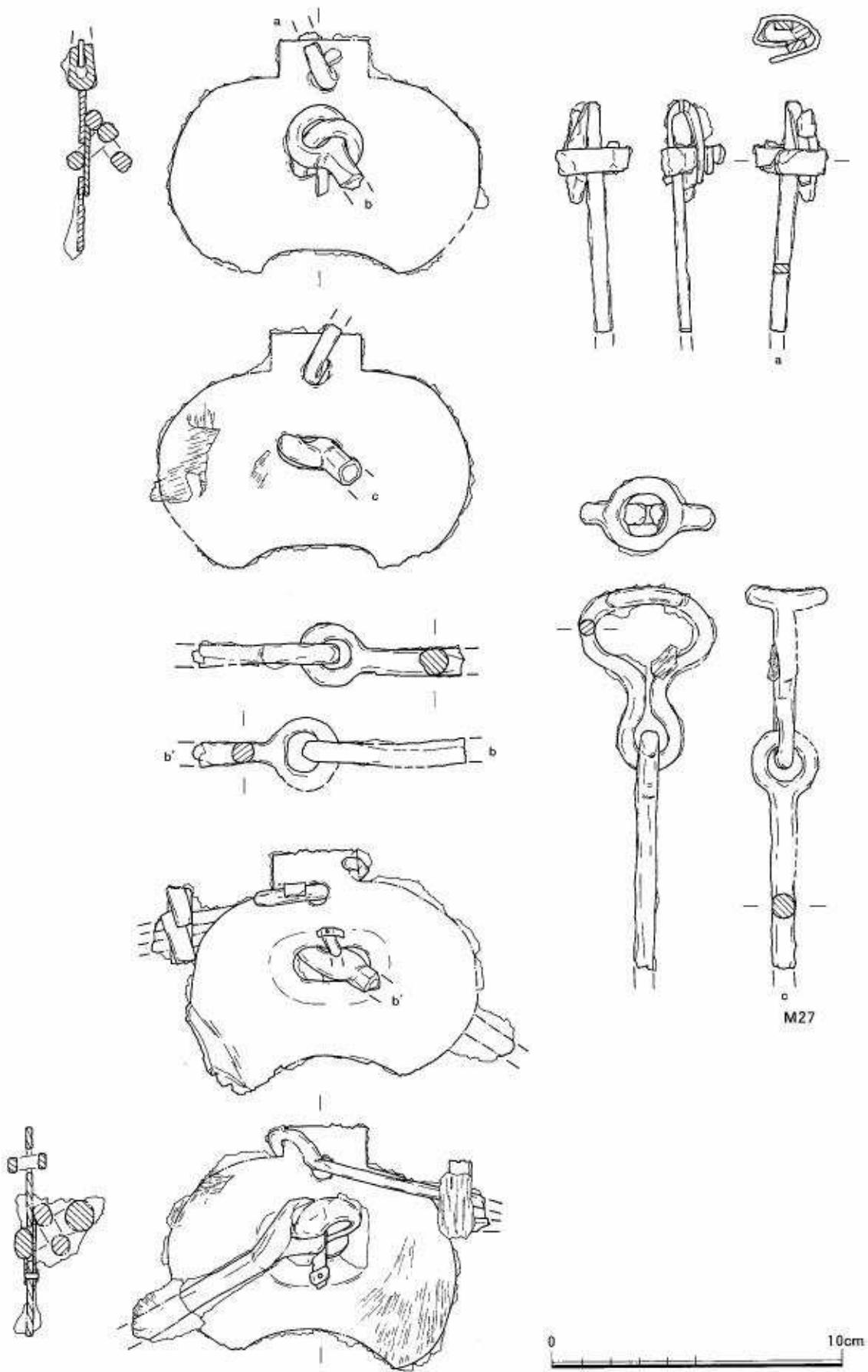


第95図 Ⅲ群 出土遺物 土器(1)

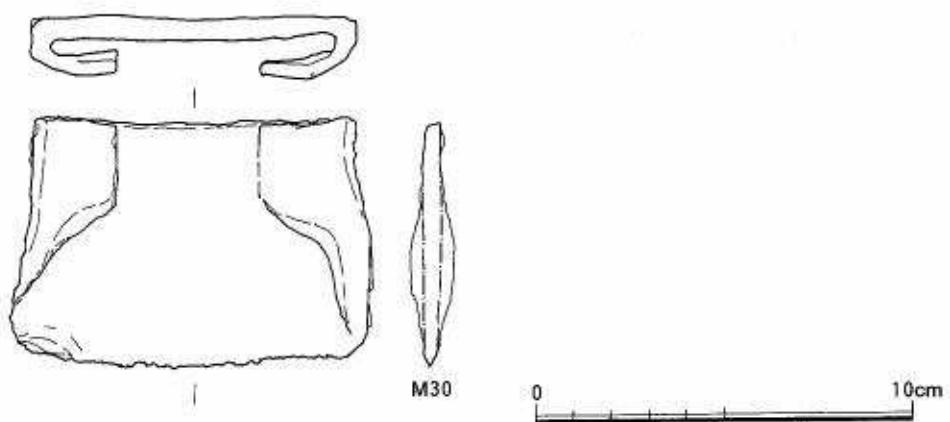
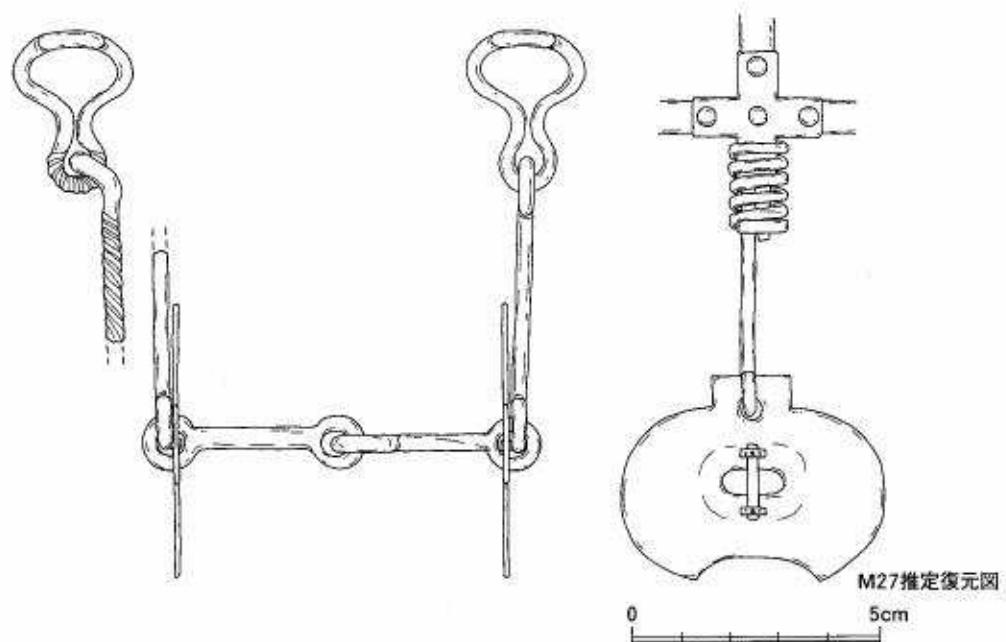
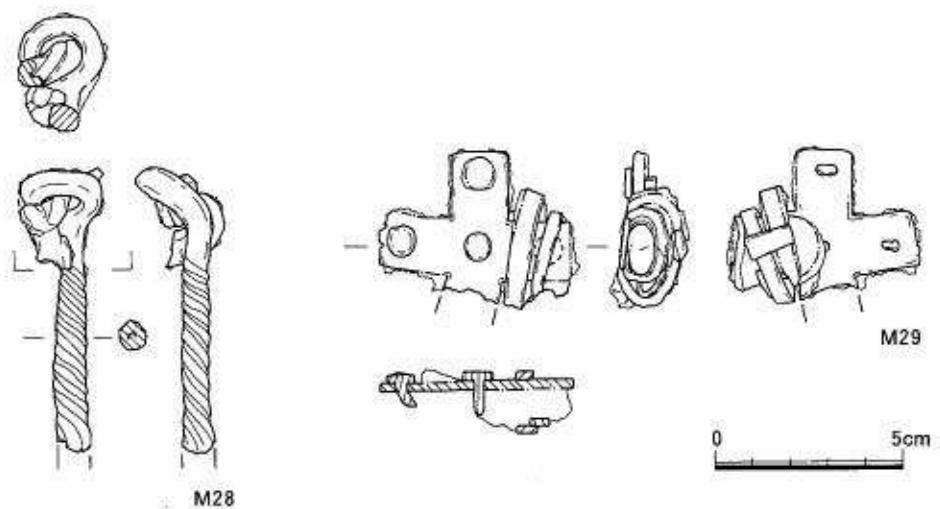


0 20cm

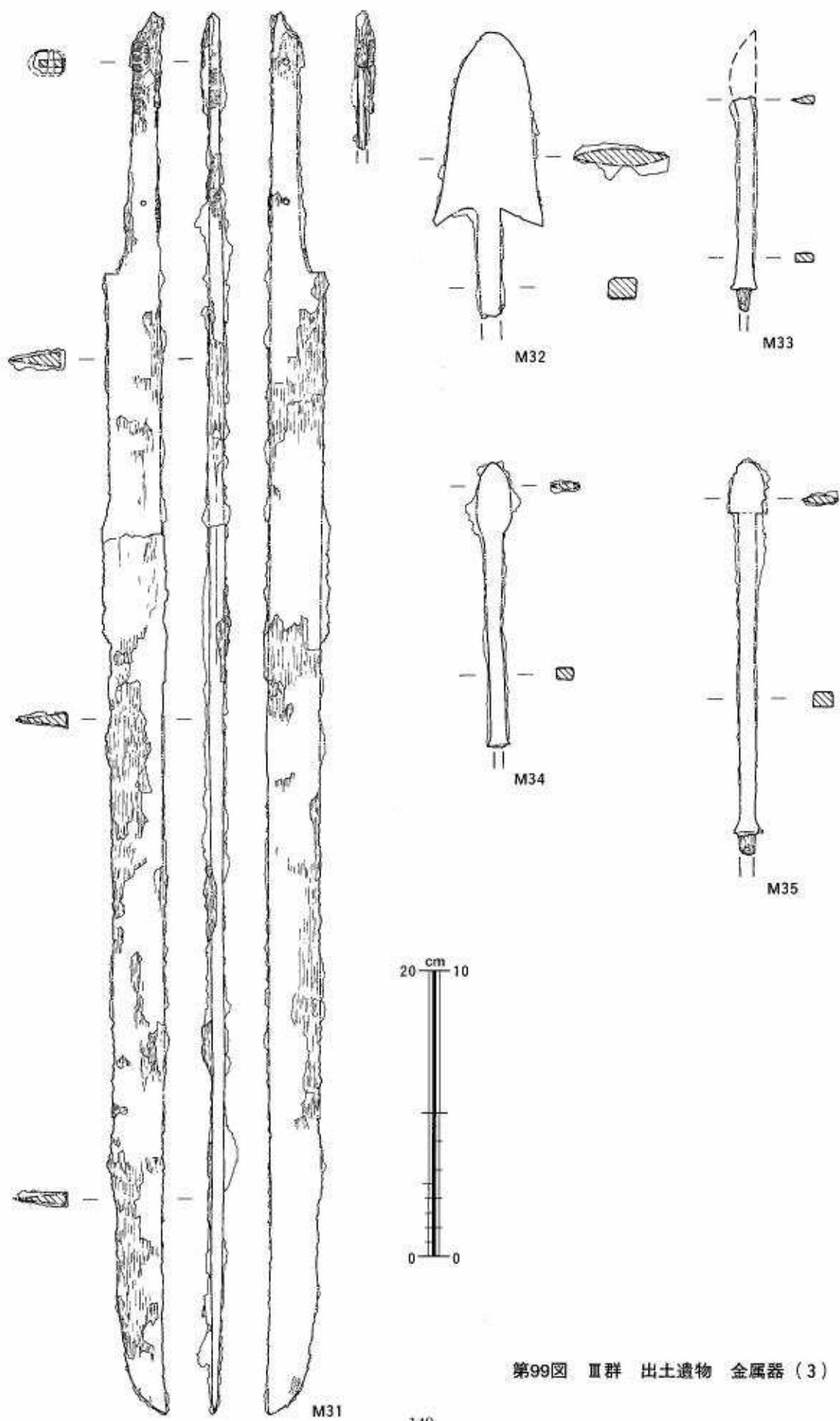
第96図 Ⅲ群 出土遺物 土器(2)



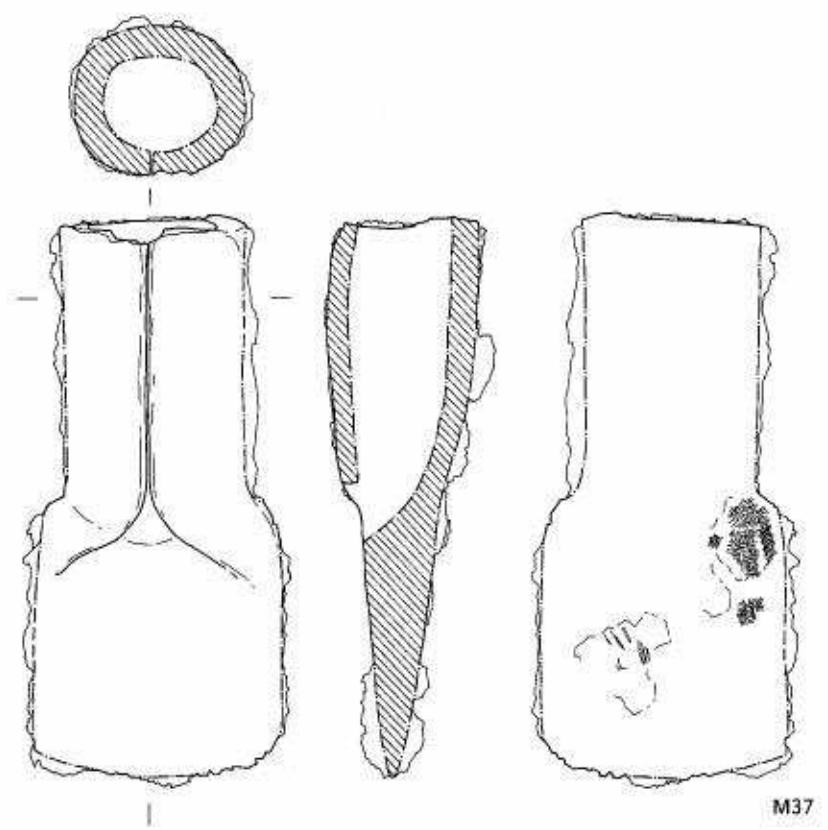
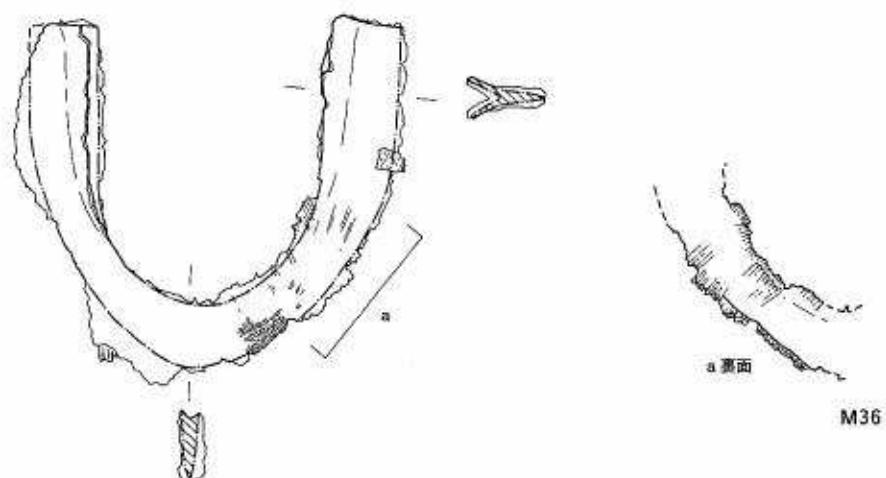
第97図 Ⅲ群 出土遺物 金属器 (1)



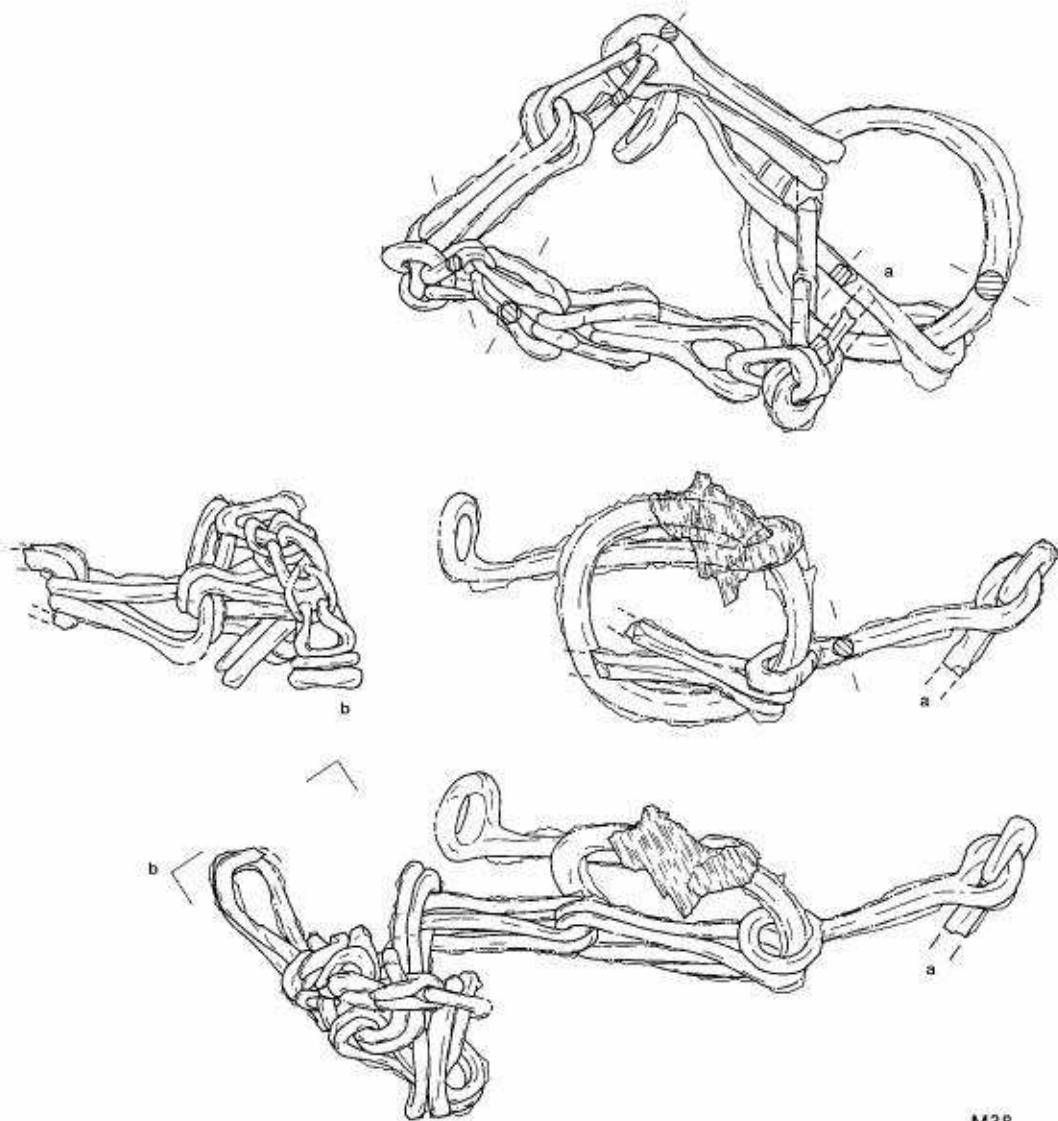
第98図 Ⅲ群 出土遺物 金属器（2）



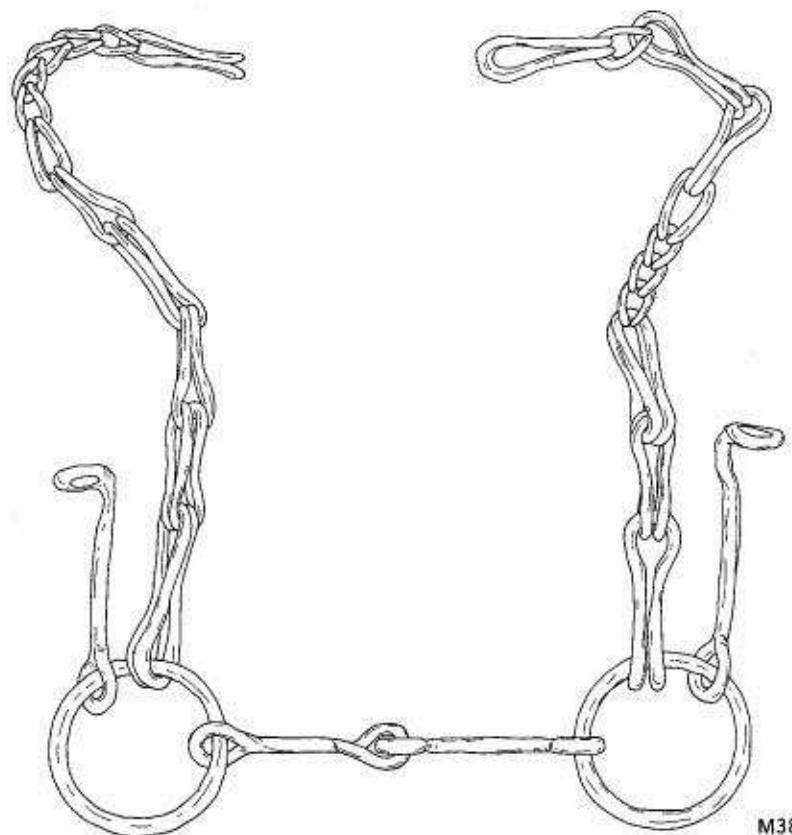
第99図 Ⅲ群 出土遺物 金属器（3）



第100図 Ⅲ群 出土遺物 金属器 (4)

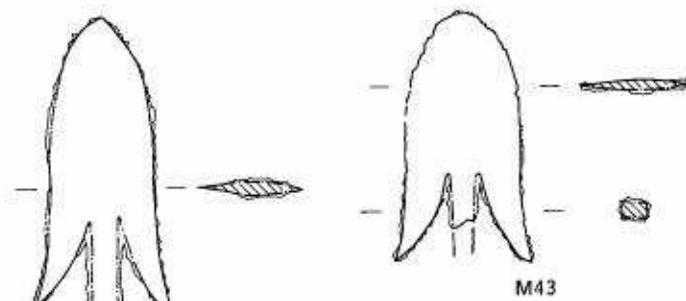


第101図 Ⅲ群 出土遺物 金属器 (5)

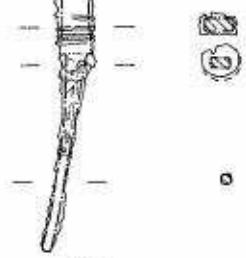


M38 推定復元図

0 5cm



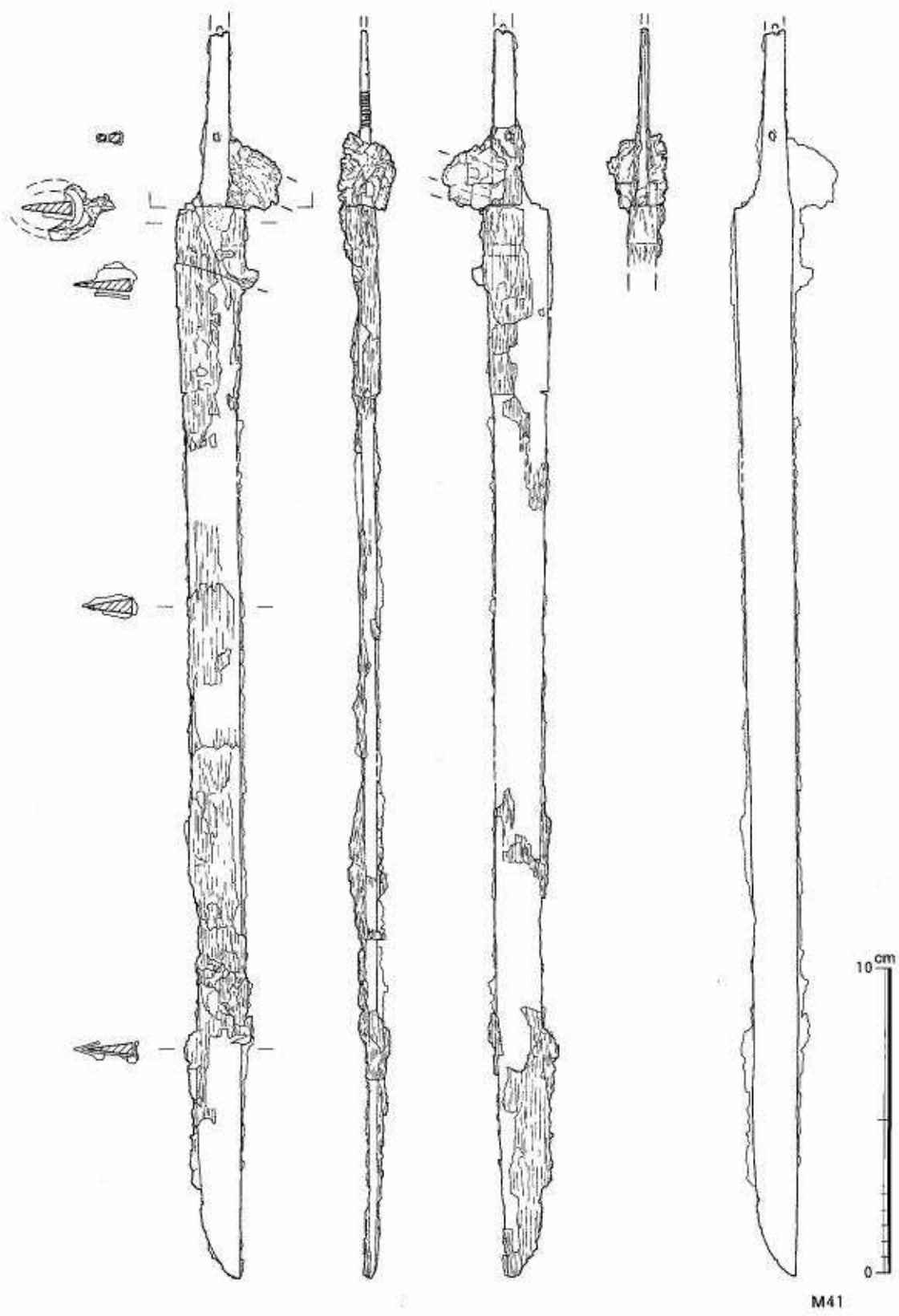
M43



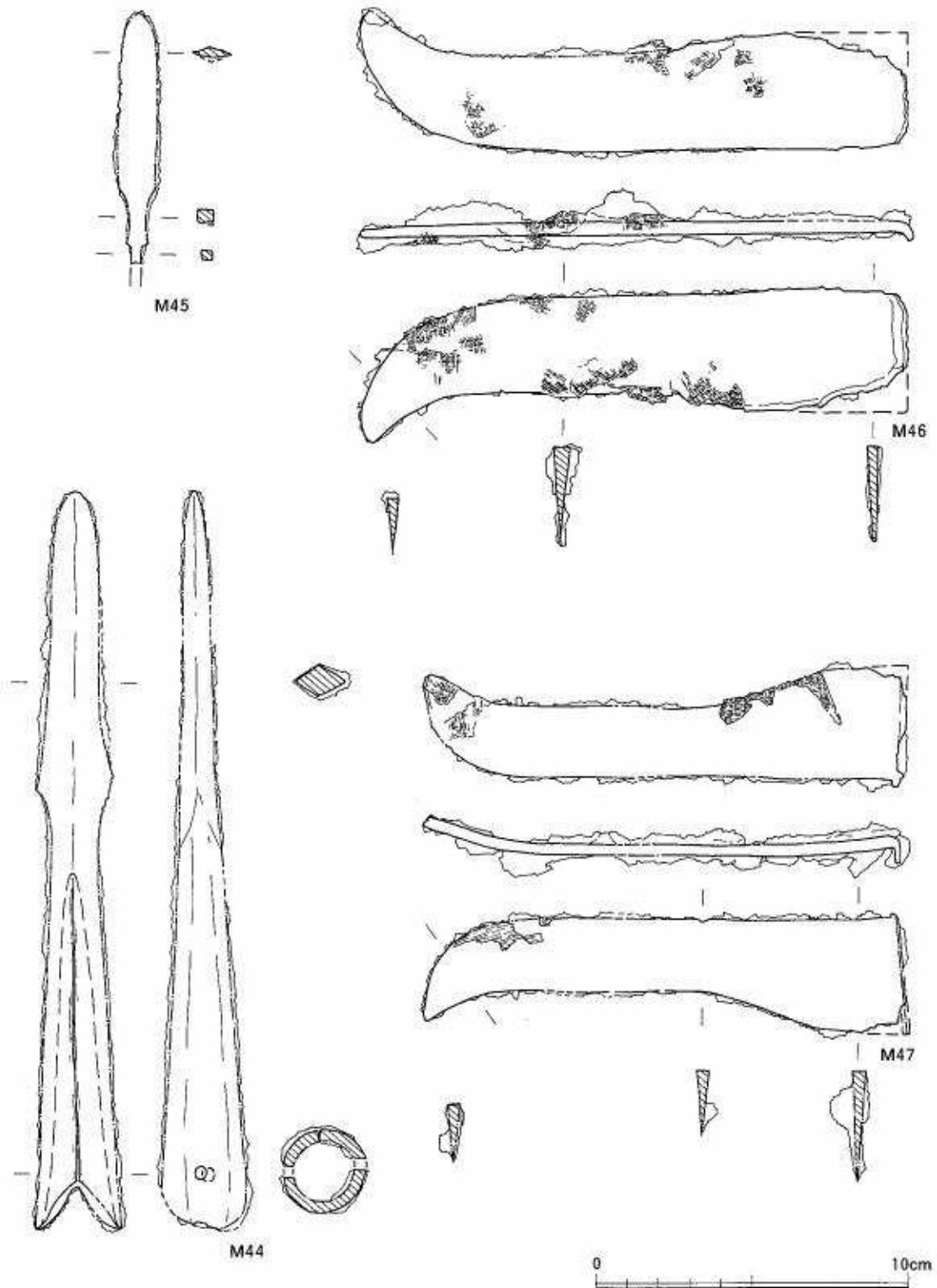
M42

0 10cm

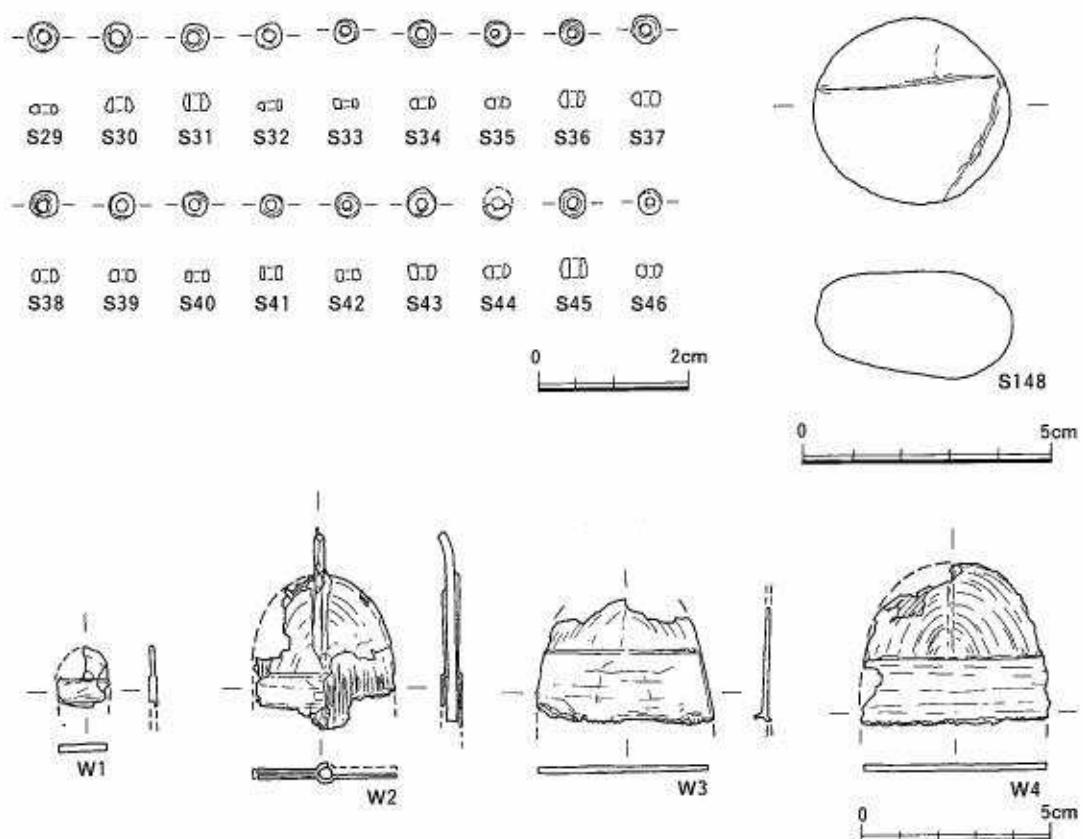
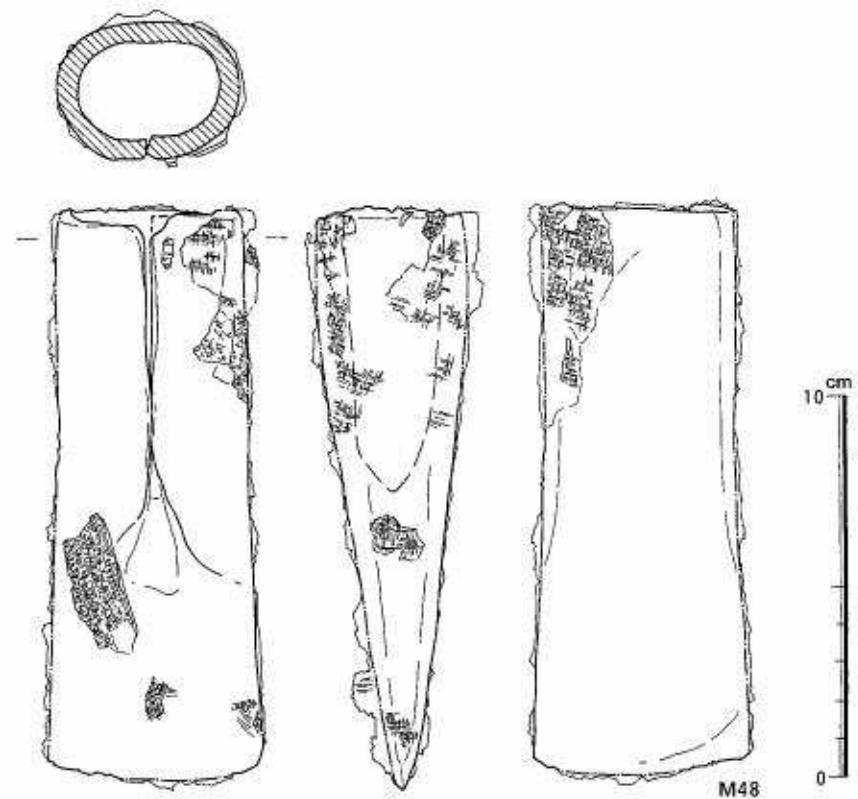
第102図 Ⅲ群 出土遺物 金属器 (6)



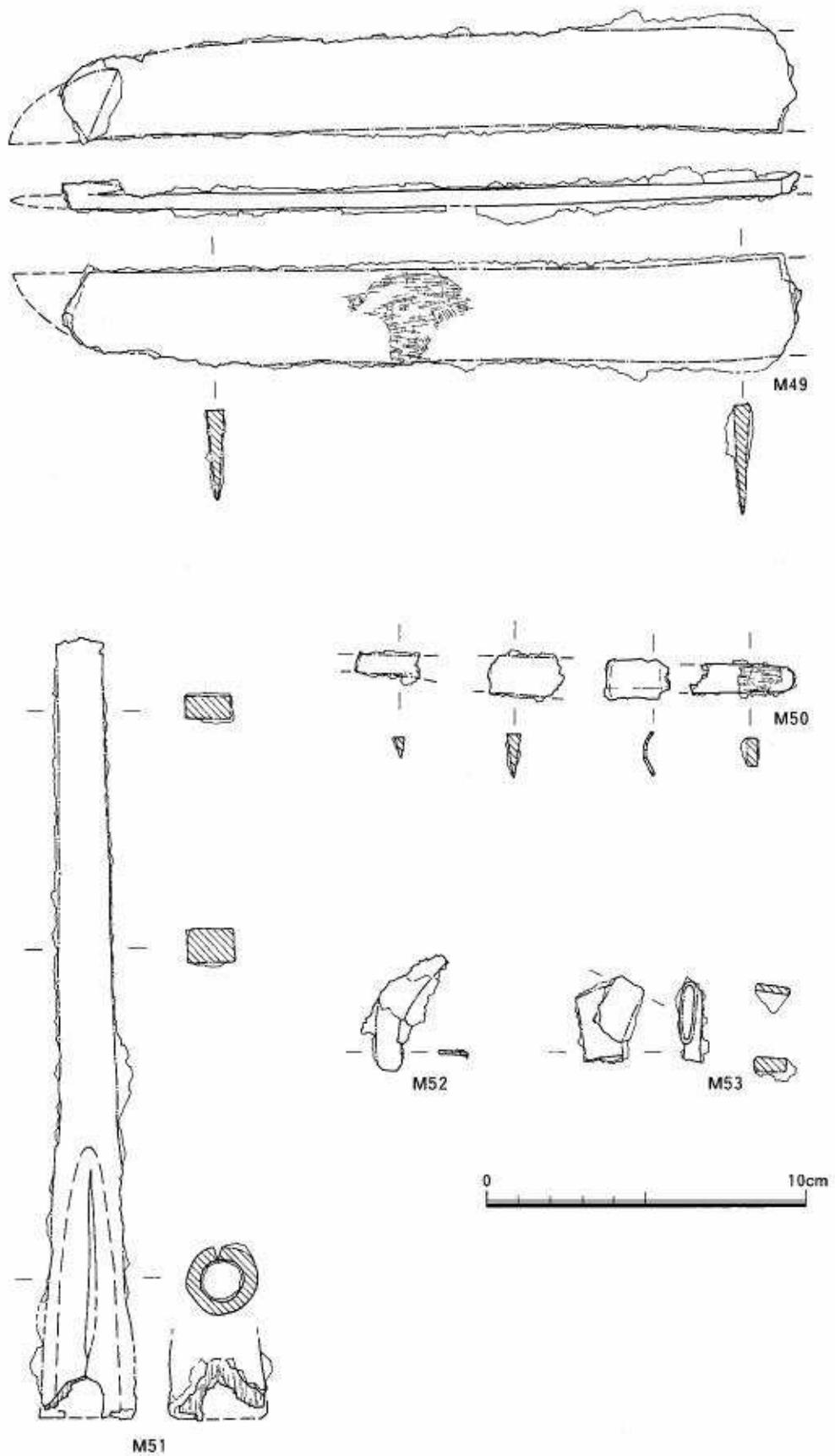
第103図 III群 出土遺物 金属器 (7)



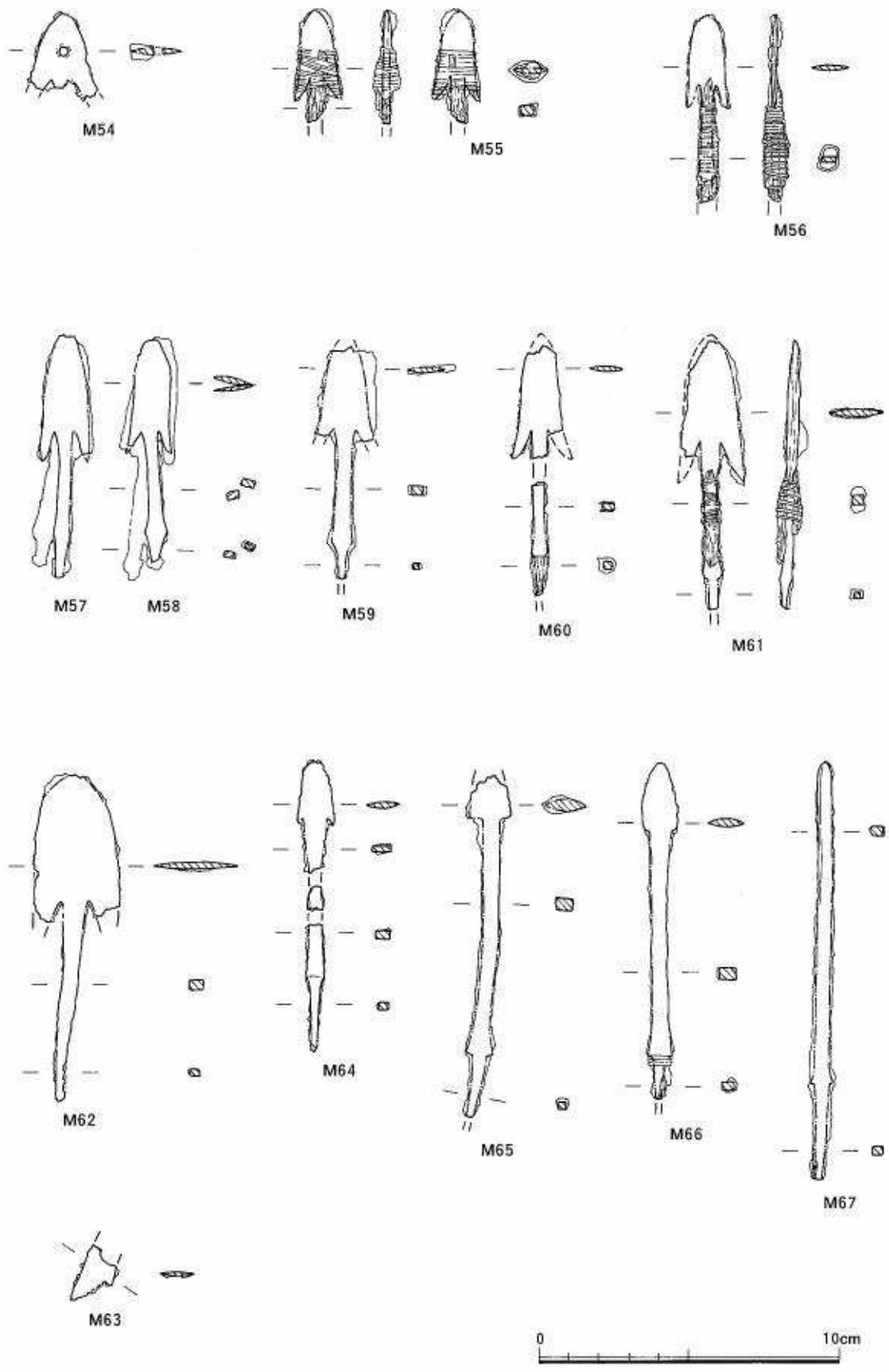
第104図 Ⅲ群 出土遺物 金属器 (8)



第105図 III群 出土遺物 金属器(9)・玉類他



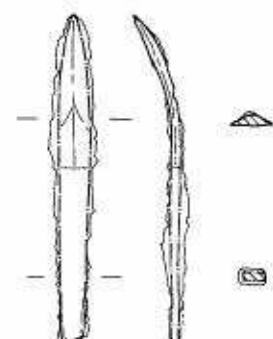
第106図 Ⅲ群 出土遺物 金属器 (10)



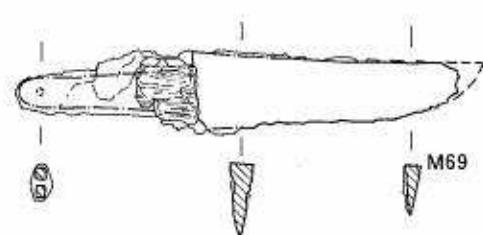
第107図 Ⅲ群 出土遺物 金属器 (11)



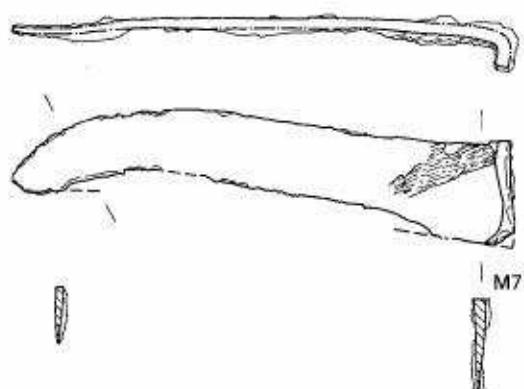
M68



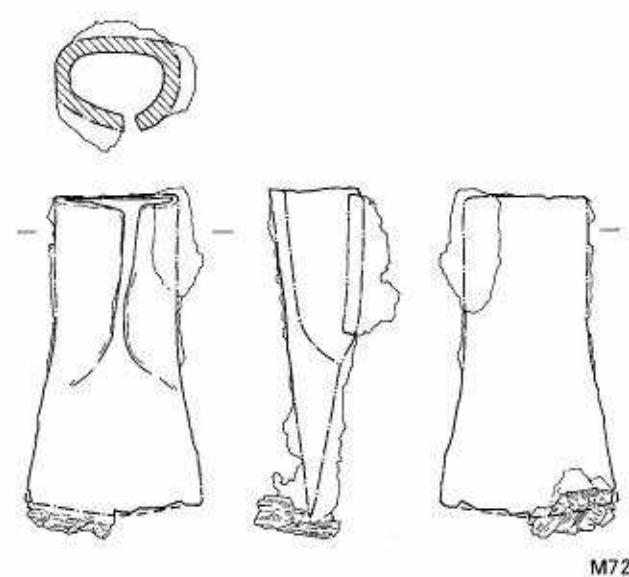
M70



M69



M71



M72



第108図 Ⅲ群 出土遺物 金属器 (12)

第2表 梅田古墳群II 墳丘および埋葬施設一覧表(1)

号 墳	墳丘		埋葬施設			副葬品		備考
	墳形	規模	番号・種類	墓壙規模	棺規模	棺内	棺外	
15	不整円	14.6×13.4	SX01~04					西側区画溝内須恵杯身出土
			石棺	3.42×2.26	1.56×0.32	刀子・蛭	なし	
			石棺	2.30×1.49	0.89×0.16	なし	なし	SX01人骨一体完存・壁面および蓋石赤色顔料
			木棺	2.75×1.46	1.90×0.57	なし	なし	
16	長方	14.4×(11)	SX01~05					南側裾部土師高杯出土
			「H」字形木棺	3.54×2.26	1.86×0.52	刀子	なし	SX01棺内西端赤色顔料
			「H」字形木棺	3.76×1.39	2.42×0.52	刀子	なし	SX02棺床面および両小口
			木棺	(1.6×0.7)	1.06×0.24	なし	なし	外側に繰敷
			舟形木棺	2.07×1.10	1.70×0.46	なし	なし	
			木棺	1.02×0.74	0.59×0.39	なし	なし	SX05小口部のみ立石
			なし	木棺(SK02)	3.68×2.52	2.61×0.39	土師甕	15・16号墳北裾に立地埋葬施設のみ
			なし	木棺(SK03)	3.06×2.04	1.96×0.38	なし	16号墳北裾に立地埋葬施設のみ
17	方か	(11×13)	割竹形木棺	4.88×2.42	4.54×0.54	なし	なし	
21	長方	7.5×5.5	SX01~03					16号墳南裾に立地
			木棺	2.32×1.32	1.63×0.48	なし	なし	一部16号墳墳丘を削る
			木棺	1.98×1.04	1.36×0.45	なし	なし	
22	方	5.4×5.5	石棺	1.88×1.26	0.66×0.16	なし	なし	
			木棺	2.64×1.42	1.71×0.37	なし	なし	16号墳南裾に立地
18	円か	(8×8)	木棺	2.24×0.89	1.73×0.43	なし	なし	墓壙上方須恵器片出土
19	楕円	8.9×12.0 9.6×12.0	SX01・02					墳頂部および区画溝内
			木棺	3.20×(1.5)	2.42×0.65	刀子・砾石	鉄鎌	須恵器蓋・杯身・高杯出土
20	楕円	(6.5×8.0)	舟形木棺	2.88×1.26	1.64×0.40	管玉・小玉	なし	
			木棺	2.60×1.07	2.31×0.42	鉄剣	須恵高杯 刀子・鉄鎌	北側裾部および区画溝内須恵器蓋・杯身出土
23	楕円	2.5×4.0	石棺	1.34×0.96	0.76×0.36	なし	なし	一部19号墳墳丘を削る
24	楕円	(2×3.5)	石棺	1.56×0.88	1.14×0.37	なし	なし	19号墳西斜面に立地
なし			石蓋土壙	0.84×0.50	0.57×0.24	なし	なし	19号墳南斜面に立地
6	楕円	6.8×9.0	木棺	2.73×1.37	2.01×0.53	なし	須恵器蓋 ・杯身	墳頂部および区画溝内 須恵器蓋・高杯他出土
(7)	自然地形		検出されず					7号墳抹消(欠番)
8	楕円	(10×13)	検出されず(調査区外)					墳丘南端のみ調査

単位:m ()の数値は復元値

第3表 梅田古墳群Ⅱ 墳丘および埋葬施設一覧表(2)

号 墳	墳丘		埋葬施設			副葬品		備考
	墳形	規模	番号・種類	墓擴規模	棺規模	棺内	棺外	
(9)	平坦面		検出されず					1号墳に伴う施設か
10	楕円	5.0×8.0	木棺	2.72×1.27	1.96×0.56	なし	刀子・鉄鎌	区画溝内須恵杯蓋・ 杯身出土
11	楕円	6.0×9.0	木棺	3.20×1.46	2.05×0.51	鉄鎌	須恵杯蓋 ・杯身・鎌 刀子・鉄鎌	
12	楕円	7.0×10.5	木棺	3.38×1.12	2.18×0.49	なし	須恵杯身 刀子・鉄鎌	墳頂部須恵器出土
13	円	7.5×9.5	木棺	3.17×1.50	2.28×0.64	勾玉・管玉 小玉・耳環	なし	墳丘部および区画溝内 須恵杯蓋・壺出土
33	円か	未調査	木棺	(3.6×1.0)	2.48×0.50	須恵杯蓋 杯身・刀子 耳環	なし	歯遺存 H 8-11トレンチ
14	円	(6×7)	木棺	2.51×0.91	1.80×0.43	なし	なし	
25	円	9.5×10.6	木棺	3.64×1.82	2.24×0.54	なし	須恵杯蓋 杯身・高杯 馬具(轡)	31号墳上層に集造
31	円	3.5×4.5	木棺	1.45×0.66	1.26×0.38	なし	須恵杯蓋 ・杯身	25号墳下層で検出 墳丘上須恵器・銅先出土
26	楕円	7.0×8.5	木棺	2.80×1.10	1.98×0.48	なし	なし	土師甕出土
27	円	9.5×10.0	SX01・02 竪穴式石室 木棺	4.46×2.06 3.09×0.87	(2.4)×0.55	須恵杯蓋 杯身・大刀 鉄斧・鉄鎌 馬具(轡)	須恵杯蓋	室内に木棺痕跡有り 墳頂部および区画溝内 須恵杯蓋・杯身出土 区画溝の一部は石室に 切られる
	楕円	(7.5×10)	木棺	3.88×2.01		大刀・鉄鎌	なし	
28	円か	(8.5×8.5)	木棺	(3.5)×0.96	(3.2)×0.50	鉄鎌・鉄斧 鎌・白玉・ 鏡	鉄鎌	墳丘・埋葬施設半壙 墳丘東斜面須恵器・土師甕・大刀・鑿出土
29	楕円か	5.5×8.0	木棺	2.50×0.94	1.40×0.54	なし	須恵杯蓋 ・杯身・鎌 鎌・刀子 刀子・鉄鎌	墳丘半壙
30	半円	7.5×11.0	木棺	3.20×1.42	2.14×0.54	なし	須恵杯蓋・ 鏡	
32	調査区外		検出されず(調査区外)					区画溝一部のみ調査

単位:m / ()の数値は復元値

第4表 梅田古墳群Ⅱ 出土土器観察表

単位:cm ()は現存値

No.	器種	出土古墳	出土位置	口径	器高	残存	色調	技法	備考
1	杯身	15号墳	西側区画溝上層	(12.7)	(2.5)	口縁部1/18	内外面灰色	底部ナナ子調整 他は回転ナナ子調整	
2	高杯	16号墳	埴丘裾部	16.1		口縁部1/3	内外面褐色 嘴斑有り	内面積力由のヘラミガキ 他はナナ子調整	土器絵
3	中型甌		SK02上層	(14.6)		口縁部5/6 体部若干	内外面黄褐色	外面ハケメ調整 内は一部ヘラ削り	土器絵
4	杯蓋	19号墳	埴丘上	(11.85)	5.4	口縁部1/3 体部3/4	内外面灰白色	天井部ヘラ削り 他は回転ナナ子調整	
5	杯蓋	19号墳	半円区画溝	11.7	5.1	ほぼ完形	内外面灰色	天井部ヘラ削り 他は回転ナナ子調整	
6	杯蓋	19号墳	半円区画溝	11.3	5.1	ほぼ完形	内外面灰色	天井部ヘラ削り 他は回転ナナ子調整	
7	杯蓋	19号墳	半円区画溝	11.1	4.2	ほぼ完形	内外面暗灰色	天井部ヘラ削り 他は回転ナナ子調整	
8	杯身	19号墳	埴丘上	(9.4)	5.3	口縁部1/3 体部1/2	内外面灰白色	底部ヘラ削り 他は回転ナナ子調整	
9	高杯	19号墳	埴丘上	10.1		口縁部1/4 脚部欠損	内外面暗青灰色	回転ナナ子調整	
10	高杯	19号墳	半円区画溝	(11.0)	8.15	口縁体部1/2欠損	内外面灰色	杯部ヘラ削り 他は回転ナナ子調整	
11	杯蓋	20号墳	区画溝	(10.9)	4.4	口縁部1/18	内外面灰色	小破片のため調整不明	
12	杯身	20号墳	埴丘裾部	10.5	5.4	ほぼ完形	内外面灰色	底部ヘラ削り 他は回転ナナ子調整	
13	高杯	20号墳	墓壙内棺外	10.6	10.3	ほぼ完形	内外面暗灰色	杯部ヘラ削り 他は回転ナナ子調整	
14	杯蓋	6号墳	墓壙内棺外	11.38	4.9	ほぼ完形	内外面灰色	天井部ヘラ削り 他は回転ナナ子調整	15とセット
15	杯身	6号墳	墓壙内棺外	9.9	5.35	ほぼ完形	内外面灰白色	底盤ヘラ削り 他は回転ナナ子調整	14とセット
16	杯蓋	6号墳	墓壙内棺外	11.9	5.1	ほぼ完形	内外面灰白色	天井部ヘラ削り 他は回転ナナ子調整	17とセット
17	杯身	6号墳	墓壙内棺外	9.7	4.9	ほぼ完形	内外面暗灰色	底部ヘラ削り 他は回転ナナ子調整	16とセット
18	杯蓋	6号墳	埴丘上	(14.0)	4.45	口縁部1/4	内外面灰白色	天井部ヘラ削り 他は回転ナナ子調整	
19	杯蓋	6号墳	埴丘裾部	(14.7)	(1.85)	口縁部1/9	内外面灰色	回転ナナ子調整 天井部ヘラ起こし状	
20	皿	6号墳	埴丘上	(13.25)	2.25	口縁部1/2	内外面灰白色	底盤削りのちナナ子 他は回転ナナ子調整	
21	高杯	6号墳	埴丘上	10.25	8.45	ほぼ完形	内外面灰色	舞部カナ子調整 他は回転ナナ子調整	
22	短頸甌	6号墳	埴丘上	(9.1)	8.05	口縁体部1/2	内外面灰白色	底盤ヘラ削り 他は回転ナナ子調整	
23	杯蓋	10号墳	区画溝	(13.2)	3.35	口縁部1/18	内外面灰色	天井部ヘラ削り 他は回転ナナ子調整	
24	杯身	10号墳	区画溝	(10.7)	3.95	口縁部1/18	内外面灰色	底盤ヘラ削り 他は回転ナナ子調整	
25	杯蓋	11号墳	墓壙内棺外	13.1	5.1	ほぼ完形	内外面灰色	天井部ヘラ削り 他は回転ナナ子調整	赤色顔料付着
26	杯身	11号墳	墓壙内棺外	11.2	5.5	ほぼ完形	内外面暗灰色	底盤ヘラ削り 他は回転ナナ子調整	赤色顔料付着
27	杯蓋	11号墳	墓壙内棺外	13.1	4.6	ほぼ完形	内外面灰色	天井部ヘラ削り 他は回転ナナ子調整	28とセット
28	杯身	11号墳	墓壙内棺外	11.4	5.65	ほぼ完形	内外面暗灰色	底盤ヘラ削り 他は回転ナナ子調整	27とセット
29	杯蓋	33号墳	盛土内	(13.9)	4.58	口縁体部1/3	内外面灰白色	天井部ヘラ削り 他は回転ナナ子調整	
30	杯蓋	33号墳	棺内	15.35	4.6	ほぼ完形	内外面灰色	天井部ヘラ削り 他は回転ナナ子調整	土器絵
31	杯身	33号墳	棺内	13.1	4.9	ほぼ完形	内外面灰色	底盤ヘラ削り 他は回転ナナ子調整	土器絵
32	杯身	12号墳	墓壙内棺外	10.1	4.55	ほぼ完形	内外面灰色	底盤ヘラ削り 他は回転ナナ子調整	
33	甌	12号墳	埴丘上	(20.0)		口縁体部4/9	内外面暗灰色	内面タタキ 外面タタキのちカキ目	
34	杯蓋	13号墳	区画溝	13.18	4.1	ほぼ完形	内外面暗灰色	天井部ヘラ削り 他は回転ナナ子調整	
35	甌	13号墳	埴丘上	(10.6)	16.5	口縁部1/6 体部2/3	内外面暗オリーブ色	外面部描き状調整痕	
36	杯蓋	25号墳	墓壙内棺外	13.5	4.4	ほぼ完形	内外面灰色	天井部ヘラ削り 他は回転ナナ子調整	
37	杯身	25号墳	墓壙内棺外	11.6	4.87	ほぼ完形	内外面灰色	底盤ヘラ削り 他は回転ナナ子調整	
38	杯蓋	25号墳	墓壙内棺外	13.6	4.85	ほぼ完形	内外面灰色	天井部ヘラ削り 他は回転ナナ子調整	
39	杯身	25号墳	墓壙内棺外	11.5	4.8	ほぼ完形	内外面灰白色	底盤ヘラ削り 他は回転ナナ子調整	
40	高杯	25号墳	墓壙内棺外	10.9	11.88	ほぼ完形	内外面暗オリーブ色	杯部ヘラ削り 他は回転ナナ子調整	
41	甌	25号墳	埴丘上	20.8	(35.3)	口縁体部1/5	内外面暗緑色	内面タタキ 外面タタキのちカキ目	
42	杯蓋	31号墳	墓壙内棺外	13.9	5.23	ほぼ完形	内外面灰色	天井部ヘラ削り 他は回転ナナ子調整	
43	杯身	31号墳	墓壙内棺外	11.8	5.35	ほぼ完形	内外面灰色	底盤ヘラ削り 他は回転ナナ子調整	
44	短頸甌	31号墳	埴丘上	7.5	6.7	ほぼ完形	内外面灰色	底盤ヘラ削り 他は回転ナナ子調整	
45	中型甌	26号墳	埴丘裾部	(13.6)		口縁部1/18	内外面銀色	調査不明跡	土器絵
46	杯蓋	27号墳	SX01棺内	15.6	4.7	ほぼ完形	内外面灰色	天井部ヘラ削り 他は回転ナナ子調整	47とセット
47	杯身	27号墳	SX01棺内	12.75	5.1	ほぼ完形	内外面灰色	底盤ヘラ削り 他は回転ナナ子調整	46とセット
48	杯蓋	27号墳	SX01棺内	15.4	4.6	ほぼ完形	内外面灰色	天井部ヘラ削り 他は回転ナナ子調整	49とセット
49	杯身	27号墳	SX01棺内	12.8	5.1	ほぼ完形	内外面灰白色	底盤ヘラ削り 他は回転ナナ子調整	48とセット
50	杯蓋	27号墳	石室周辺・墓壙内	14.1	4.43	ほぼ完形	内外面灰白色	天井部ヘラ削り 他は回転ナナ子調整	
51	杯蓋	27号墳	石室周辺	(14.4)	(5.3)	口縁部1/6	内外面灰白色	天井部ヘラ削り 他は回転ナナ子調整	
52	杯蓋	27号墳	SX02墓壙内	12.4	5.1	ほぼ完形	内外面灰白色	天井部ヘラ削り 内面ナナ子仕上げ	
53	杯蓋	27号墳	SX01区画溝	(12.8)		口縁部1/12	内外面灰褐色	回転ナナ子調整	
54	杯蓋	27号墳	SX01区画溝	(14.4)		口縁部1/9	内外面灰白色	回転ナナ子調整	
55	杯蓋	27号墳	SX01区画溝	(16.1)		口縁部1/6	内外面灰白色	回転ナナ子調整	

No.	器種	出土古墳	出土位置	口径	器高	残存	色調	技法	備考
56	杯身	27号墳	SX01区西溝	13.1	4.68	ほぼ完形	内外面灰白色	底部ヘラ削り 他は回転ナメ調整	
57	杯蓋	27号墳	墳丘上	(13.4)		口縁部1/9	内外面灰白色	回転ナメ調整	
58	杯身	27号墳	墳丘上	(14.25)		口縁部1/9	内外面灰黄色	回転ナメ調整	
59	杯蓋	29号墳	墓壇内棺外	12.1	4.4	ほぼ完形	内外面灰白色	天井部ヘラ削り 他は回転ナメ調整	60とセット
60	杯身	29号墳	墓壇内棺外	10.8	5.1	ほぼ完形	内外面灰白色	底部ヘラ削り 他は回転ナメ調整	59とセット
61	杯蓋	30号墳	墓壇上層	12.65	5.8	ほぼ完形	内外面灰白色	天井部ヘラ削り 他は回転ナメ調整	
62	杯身	30号墳	墓壇上層	11.8	5.2	完形	内外面灰白色	天井部ヘラ削り 他は回転ナメ調整	
63	匙	30号墳	墓壇上層	10.75	9.8	ほぼ完形	内外面オリーブ緑色	底部ナメ調整 他は回転ナメ調整	
64	鏡	28号墳	墳丘東斜面	(13.1)	(5.8)	口縁部1/8 底部完存	内外面赤褐色	底部余切り 他はナメ調整	
65	鏡	28号墳	墳丘東斜面	15.2	6.1	口縁部3/5	内外面灰白色	底部余切り 他は回転ナメ調整	

第5表 梅田古墳群Ⅱ 出土金属器観察表(1)

単位:cm ()は現存値

No.	種別	種類	出土古墳	出土位置	長さ	幅	厚さ	木質	備考
M01	鉄製品	ヤリガンナ	15号墳	SX01	棺内頭部右横	12.2	2.15	0.78	櫛・ベンガラ
M02	鉄製品	刀子	16号墳	SX01	墓壇内棺外	(2.85)	1.3	0.3	
M03	鉄製品	刀子	16号墳	SX02	棺内	(10.25)	2.7	1.1	織維
M04	鉄製品	鏃	19号墳	SX01	墓壇内棺外	(4.0)	4.2	0.5	○
M05	鉄製品	鏃	19号墳	SX01	棺内	(9.7)	1.95	0.5	○
M06	鉄製品	刀子	19号墳	SX01	棺内	11.2	2.2	0.65	○
M07	鉄製品	劍	20号墳	SX01	棺内	63.4	4.3	0.6	○
M08	鉄製品	劍	20号墳	SX01	墓壇内棺外	(5.23)	2.23	0.55	
M09	鉄製品	刀子	20号墳	SX01	墓壇内棺外	9.15	1.8	1.35	○
M10	鉄製品	鏃	10号墳	埋葬施設	墓壇内棺外	(3.68+1.83)	2.8	0.4	2個体
M11	鉄製品	鏃	10号墳	埋葬施設	墓壇内棺外	(6.3+1.93)	1.45	0.5	○
M12	鉄製品	鏃	10号墳	埋葬施設	墓壇内棺外	12.38	1.75	0.8	○
M13	鉄製品	鏃	10号墳	埋葬施設	墓壇内棺外	(15.5)	1.1	0.95	○
M14	鉄製品	鏃	10号墳	埋葬施設	墓壇内棺外	(16.0)	1.45	1.18	○
M15	鉄製品	刀子	10号墳	埋葬施設	墓壇内棺外	(11.5)	2.3	1.15	○
M16	鉄製品	鏃	11号墳	埋葬施設	棺内	(7.28)	1.85	0.4	
M17	鉄製品	鏃(茎)	11号墳	埋葬施設	墓壇内棺外	(7.0)	1.48	1.08	○
M18	鉄製品	刀子	11号墳	埋葬施設	墓壇内棺外	(11.4)	3.2	0.75	○
M19	鉄製品	鏃	11号墳	埋葬施設	墓壇内棺外	(12.9)	3.95	1.6	○
M20	鉄製品	刀子	33号墳	埋葬施設	棺内	15.15	2.3	1.35	○
M21	銅製品	耳環	33号墳	埋葬施設	棺内	1.9	0.2		写真のみ
M22	鉄製品	鏃	12号墳	埋葬施設	墓壇内棺外	(6.5)	2.7	0.73	○
M23	鉄製品	鏃	12号墳	埋葬施設	墓壇内棺外	(8.9)	1.8	0.7	糸巻き
M24	鉄製品	刀子	12号墳	埋葬施設	墓壇内棺外	(11.05)	1.78	1.15	○
M25	銅製品	寛永通宝	12号墳	墳丘裾部表探		2.4	2.4		拓本のみ
M26	銅製品	耳環	13号墳	埋葬施設	棺内	1.4	0.1		写真のみ
M27	鉄製品	馬具(轡)	25号墳	埋葬施設	墓壇内棺外	(21.6)	(15.9)		○
M28	鉄製品	馬具(轡)	25号墳	埋葬施設	墓壇内棺外	(21.6)	(15.9)		
M29	鉄製品	馬具(辻金具)	25号墳	埋葬施設	墓壇内棺外	(21.6)	(15.9)		革帯
M30	鉄製品	鏃	31号墳	墳丘上		6.45	8.45	1.6	
M31	鉄製品	大刀	27号墳	SX01	棺内	98.0	4.0	1.5	○
M32	鉄製品	鏃	27号墳	SX01	棺内	(10.0)	3.3	0.6	
M33	鉄製品	鏃	27号墳	SX01	墓壇内棺外	(7.5)	0.8	0.4	○
M34	鉄製品	鏃	27号墳	SX01	墓壇内棺外	(10.0)	1.0	0.4	
M35	鉄製品	鏃	27号墳	SX01	墓壇内棺外	(13.8)	1.3	0.3	○
M36	鉄製品	鏃	27号墳	SX01	棺内	9.1	9.8	0.5	織維
M37	鉄製品	斧	27号墳	SX01	棺内	15.2	6.5/4.6	4.0	織維
M38	鉄製品	馬具(轡)	27号墳	SX01	棺内	(16.0+44.0)	(28.0)		○
M39	鉄製品	馬具(鞍具)	27号墳	SX01	棺内	7.4	4.4	0.6	2個体

No.	種別	種類	出土古墳	出土位置		長さ	幅	厚さ	木質	備考
M40	鉄製品	馬具(鞍具)	27号墳	SX01	棺内	15.0	4.5	0.6		織錐
M41	鉄製品	鹿角装大刀	27号墳	SX02	棺内	(81.4)	(6.2)	(2.5)	○	鹿角・糸巻き
M42	鉄製品	鎌	27号墳	SX02	棺内	14.9	2.8	0.4	○	糸巻き
M43	鉄製品	鎌	27号墳	SX02	棺内	(6.6)	2.8	0.7		
M44	鉄製品	鋒	28号墳	埋葬施設	墓壙内棺外	23.4	2.75	2.75	○	
M45	鉄製品	鎌	28号墳	埋葬施設	棺内	8.05	1.2	0.3		
M46	鉄製品	鎌	28号墳	埋葬施設	棺内	7.6	(3.0)	0.4	○	織錐
M47	鉄製品	鎌	28号墳	埋葬施設	棺内	12.5	3.5	0.4	○	織錐
M48	鉄製品	斧	28号墳	埋葬施設	棺内	15.35	5.0	3.6		織錐
M49	鉄製品	大刀	28号墳	墳丘東斜面		(23.1)	3.4	0.5		織錐
M50	鉄製品	刀子	28号墳	墳丘東斜面		(20+235+3.3)	1.4	0.4	○	4個体
M51	鉄製品	鑿	28号墳	墳丘東斜面		(24.3)	3.0	3.0	○	
M52	鉄製品	不明	28号墳	墳丘東斜面		(3.9)	0.9	0.1		
M53	鉄製品	不明	28号墳	墳丘東斜面		(2.7)	1.3	0.4		
M54	鉄製品	鎌	29号墳	埋葬施設	棺内	(3.0)	(2.3)	0.3		
M55	鉄製品	鎌	29号墳	埋葬施設	墓壙内棺外	(3.8)	(1.4)	0.2	○	植物性の帶
M56	鉄製品	鎌	29号墳	埋葬施設	墓壙内棺外	(6.25)	1.2	0.2	○	糸巻き
M57	鉄製品	鎌	28号墳	埋葬施設	墓壙内棺外	(8.0)	1.5	0.2		
M58	鉄製品	鎌	29号墳	埋葬施設	墓壙内棺外	(7.6)	1.2	0.1		
M59	鉄製品	鎌	29号墳	埋葬施設	墓壙内棺外	(7.7)	1.6	0.2		
M60	鉄製品	鎌	29号墳	埋葬施設	墓壙内棺外	(3.7+3.75)	1.1	0.2	○	
M61	鉄製品	鎌	29号墳	埋葬施設	墓壙内棺外	(8.9)	1.7	0.25	○	糸巻き
M62	鉄製品	鎌	29号墳	埋葬施設	墓壙内棺外	10.9	2.8	0.2		
M63	鉄製品	鎌	29号墳	埋葬施設	墓壙内棺外	(1.9)	1.1	0.1		重抜(逆刺)
M64	鉄製品	鎌	29号墳	埋葬施設	棺内	(3.8+4.3)	1.1	0.25	○	3個体
M65	鉄製品	鎌	29号墳	埋葬施設	棺内	(11.3)	(1.3)	0.3		
M66	鉄製品	鎌	29号墳	埋葬施設	墓壙内棺外	(11.1)	1.2	0.3	○	糸巻き
M67	鉄製品	鎌	29号墳	埋葬施設	墓壙内棺外	(13.85)	0.45	0.3	○	
M68	鉄製品	刀子	29号墳	埋葬施設	墓壙内棺外	9.0	1.0	0.3	○	
M69	鉄製品	刀子	29号墳	埋葬施設	墓壙内棺外	(11.7)	2.1	0.6	○	
M70	鉄製品	ヤリガンナ	29号墳	埋葬施設	墓壙内棺外	8.7	1.1	0.25		
M71	鉄製品	鎌	29号墳	埋葬施設	墓壙内棺外	13.3	2.5	0.3	○	
M72	鉄製品	斧	29号墳	埋葬施設	墓壙内棺外	9.1	3.3	2.5	○	

第6表 梅田古墳群Ⅱ 出土金属器観察表(2)

単位: cm ()は現存値

No.	形式	全長	縦身部			頭部			茎部			木質	備考
			長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ	長さ	幅	厚さ		
M04	平根	無頭式	(4.0)	3.7	4.2	0.5	—	—	—	—	—	○	孔・苔
M05	短頸尖根	腸抉柳葉式	(9.7)	4.58	1.95	0.3	4.4	0.6	0.38	(1.8)	0.3	0.2	○
M08	短頸尖根	腸抉柳葉式	(5.23)	4.4	2.23	0.45	(2.0)	0.4	0.3	—	—	—	○
M10	平根	腸抉柳葉式	(3.68+1.83)	3.68	2.8	0.4	—	—	—	—	—	—	2個体
M11	長頸	腸抉柳葉式	(6.3+1.93)	(3.6)	1.45	0.35	3.2	0.5	0.4	(1.93)	0.3	0.2	○ 2個体
M12	長頸	腸抉柳葉式	12.38	4.3	1.75	0.3	5.5	0.4	0.3	3.5	0.3	0.2	○ 糸
M13	長頸	片刃箭式	(15.5)	3.2	1.1	0.4	10.1	0.55	0.5	(3.2)	0.4	0.4	○ 糸
M14	長頸	片刃箭式	(16.0)	3.25	0.9	0.3	9.7	0.6	0.5	(4.0)	0.4	0.4	○ 糸
M16	短頸尖根	腸抉柳葉式	(7.28)	(2.9)	1.85	0.3	(4.38)	0.6	0.3	—	—	—	—
M17	長頸	—	(7.0)	—	—	—	(2.8)	0.6	0.65	(4.2)	0.4	0.5	○
M22	平根	無頭式	(6.5)	4.1	1.95	0.73	(3.7)	0.5	0.3	—	—	○	糸
M23	短頸尖根	腸抉柳葉式	(8.9)	(2.4)	1.6	0.3	(2.5)	0.7	—	4.8	0.6	0.3	糸
M32	平根	腸抉柳葉式	(10.0)	6.9	3.3	0.6	4.0	1.0	0.7	—	—	—	—
M33	長頸	片刃箭式	(7.5)	(0.5)	0.8	0.4	6.0	0.7	0.3	(0.8)	0.3	—	○
M34	長頸	柳葉式	(10.0)	2.5	1.0	0.4	7.5	0.6	0.4	—	—	—	—
M35	長頸	柳葉式	(13.8)	1.8	1.3	0.3	11.2	0.7	0.5	0.8	—	—	○
M42	平根	腸抉柳葉式	14.9	7.7	2.8	0.4	4.4	0.8	0.4	5.2	0.3	0.3	糸
M43	平根	腸抉柳葉式	(6.6)	6.6	2.8	0.7	(1.5)	0.7	0.4	—	—	—	—
M45	短頸尖根	柳葉式	8.05	5.7	1.2	0.3	1.6	0.5	0.4	(0.75)	0.3	0.3	—
M54	平根	無頭式	(3.0)	(3.0)	(2.3)	0.3	—	—	—	—	—	—	孔
M55	短頸尖根	腸抉柳葉式	(3.8)	3.0	1.2	0.2	(1.5)	0.5	0.3	—	—	—	○ 織錐質の帯
M56	短頸尖根	腸抉柳葉式	(6.25)	3.1	1.2	0.2	3.0	0.45	0.2	(0.8)	0.4	—	○ 糸
M57	短頸尖根	腸抉柳葉式	(8.0)	4.2	1.5	0.2	3.7	0.4	0.2	(1.2)	0.3	0.2	—
M58	短頸尖根	腸抉柳葉式	(7.6)	3.8	1.2	0.1	3.3	0.4	0.2	(1.0)	0.3	0.15	—
M59	短頸尖根	腸抉柳葉式	(7.7)	(3.0)	1.5	0.2	3.8	0.4	0.3	(1.2)	0.2	0.2	—
M60	短頸尖根	腸抉柳葉式	(3.7+3.75)	3.7	1.1	0.2	(0.9+2.3)	0.45	0.2	(1.3)	0.3	0.3	○ 2個体
M61	短頸尖根	腸抉柳葉式	(8.9)	4.6	1.7	0.25	4.3	0.4	0.3	(1.3)	0.2	0.2	糸
M62	平根	腸抉柳葉式	10.9	(4.8)	2.8	0.2	4.0	0.5	0.3	2.6	0.3	0.2	—
M63	平根	無頭式	(1.9)	(1.9)	1.1	0.1	—	—	—	—	—	—	重抉のみ
M64	長頸	腸抉柳葉式	(3.8+4.3)	2.2	1.1	0.25	(1.8+1.7)	0.5	0.25	2.5	0.3	0.25	3個体
M65	長頸	柳葉式	(11.3)	(1.4)	(1.3)	0.3	7.9	0.6	0.4	(2.0)	0.25	0.25	—
M66	長頸	柳葉式	(11.1)	2.2	1.2	0.3	7.5	0.6	0.4	(1.5)	0.4	0.3	○
M67	長頸	類鑿筒式	(13.85)	(10.7)	0.45	0.3	—	0.45	—	(3.15)	0.3	0.3	○

第7表 梅田古墳群Ⅱ 出土金属器観察表(3)

No.	種類	全長	茎						刀身				形態	本質	備考		
			長さ	幅	厚さ	口幅	尻幅	目釘孔径	目釘孔間	形態	長さ	幅	厚さ	元幅	開	切先	
M07	小刀	63.4	16.7	2.0	0.45	2.0	0.9	0.6	7.6	長茎広茎II	46.7	3.2	0.5	2.0	斜角	—	○ 柄糸巻き・鞘の一部
M31	大刀	98.0	18.3	1.1	2.6	3.0	0.4	0.5/0.3	9.8	側抉尻光継	79.7	2.5	0.9	3.8	撫片	フクラ	○ 柄糸巻き・鞘の一部
M41	鹿角装 大刀	(81.4)	(11.4)	1.8	0.6	2.4	—	0.5×0.3	6.9	—	70.0	3.3	1.0	2.8	撫直片	フクラ	○ 柄糸巻き・鹿角装 側抉具・鞘の一部
M49	大刀	(23.1)	—	—	—	—	—	—	—	(23.1)	2.8	0.5	—	—	フクラ	—	通幅・背・折れ目部分
M02	刀子	(2.85)	—	—	—	—	—	—	—	(2.85)	1.0	0.3	—	—	フクラ	—	—
M03	刀子	(10.25)	(2.5)	1.1	0.3	1.3	—	—	—	—	7.75	1.4	0.4	1.5	片	フクラ	背面に織維
M06	刀子	11.2	3.8	0.9	0.5	1.1	0.9	—	—	栗尻	7.2	1.3	0.4	1.9	均面	フクラ	○ 第3編解・断面比較
M09	刀子	9.15	3.6	1.1	0.3	1.2	0.6	—	—	栗尻	5.55	1.0	0.3	1.6	均面	フクラ	○
M15	刀子	(11.5)	5.5	1.2	0.3	1.43	0.9	—	—	栗尻	(6.0)	2.15	0.45	2.3	均面	フクラ	○ 大型
M18	刀子	(11.4)	28+20	1.2	0.3	1.5	1.0	—	—	栗尻	(6.4)	1.35	0.48	2.0	均面	フクラ	○ 茎2個体
M20	刀子	(15.15)	5.4	1.0	0.4	1.0	0.8	—	—	栗尻	(9.7)	1.7	0.5	(1.8)	均面	—	○ 鞘
M24	刀子	(11.05)	4.75	1.0	0.4	1.2	0.6	—	—	角尻	(6.3)	1.5	0.4	1.6	均面	—	○
M51	刀子	(20+23.5 +3.3)	(3.3)	0.85	0.3	—	0.8	—	—	栗尻	(2.0+ 2.35)	1.4	0.4	—	—	—	○ 4個体(柄縫 装具?含む)
M68	刀子	9.0	3.5	0.7	0.3	1.1	0.6	—	—	栗尻	5.4	0.8	0.3	—	—	—	○
M69	刀子	(11.7)	4.7	0.9	0.3	1.3	0.8	0.2	—	栗尻	(7.0)	2.0	0.6	2.1	不均面	—	○

第8表 梅田古墳群Ⅱ 出土櫛観察表

No.	種別	種類	出土古墳	出土位置	長さ	幅	厚さ	漆
W01	木器	堅櫛	28号墳	埋葬施設	1.5	1.4	0.2	○
W02	木器	堅櫛	28号墳	埋葬施設	5.25	3.75	0.55	○
W03	木器	堅櫛	28号墳	埋葬施設	3.3	4.65	0.15	○
W04	木器	堅櫛	28号墳	埋葬施設	4.2	4.95	0.15	○

第9表 梅田古墳群II 出土玉類 観察表

単位:mm(現存値)

No.	種類	出土古墳	出土位置	最大長	最大径・幅	最大厚	孔径1	孔径2	重量(g)	穿孔方向	色調	材質	
S1	小型勾玉	15号墳	SX01	棺内	12.90	8.00	3.60	1.90	3.00	0.50	一方向	灰色	
S2	ガラス小玉	19号墳	SX02	棺内		3.95	2.90	2.00	1.10	0.04		コバルトブルー	
S3	ガラス小玉	19号墳	SX02	棺内		(3.00)	(3.00)					ガラス	
S4	ガラス小玉	19号墳	SX02	棺内		4.70	3.55			0.05		コバルトブルー	
S5	管玉	19号墳	SX02	棺内	19.50	6.40		2.10	1.20	1.22	一方向	暗緑灰褐色	
S6	管玉	19号墳	SX02	棺内	17.30	6.30		2.80	1.40	0.91	一方向	暗緑灰褐色	
S7	管玉	19号墳	SX02	棺内	17.40	6.80		2.60	1.20	1.23	一方向	暗緑灰褐色	
S8	管玉	19号墳	SX02	棺内	18.00	6.80		2.00	1.10	1.26	一方向	暗緑灰褐色	
S9	管玉	19号墳	SX02	棺内	17.20	6.90				1.23	一方向	暗緑灰褐色	
S10	管玉	19号墳	SX02	棺内	16.20	6.30		2.20	1.30	1.04	一方向	暗緑灰褐色	
S11	管玉	19号墳	SX02	棺内	15.80	6.80		2.20	1.40	0.97	一方向	暗緑灰褐色	
S12	管玉	19号墳	SX02	棺内	17.50	6.60		2.20	1.10	1.04	一方向	暗緑灰褐色	
S13	管玉	19号墳	SX02	棺内	16.30	6.50		2.60	1.40	1.01	一方向	暗緑灰褐色	
S14	砾石	19号墳	SX01	棺内	54.00	35.70	20.05			40.71		不明	
S15	勾玉	13号墳	埋葬施設	棺内	(13.20)	7.90	5.00	1.80	2.20	0.80	一方向	暗緑灰褐色	
S16	管玉	13号墳	埋葬施設	棺内	(11.80)	6.40			3.90	(2.20)	0.32	一方向	明緑灰褐色 綠色凝灰岩
S17	ガラス小玉	13号墳	埋葬施設	棺内		5.80	5.40	2.00	2.00	0.15		にぶい褐色	
S18	管玉	13号墳	埋葬施設	棺内	(11.30)	5.35		2.20	(1.80)	0.23	一方向	緑灰褐色 綠色凝灰岩	
S19	管玉	13号墳	埋葬施設	棺内	(21.20)	6.90		(3.30)	(1.75)	0.82	一方向	灰オリーブ	
S20	管玉	13号墳	埋葬施設	棺内	21.60	6.40		2.80	1.50	1.58	一方向	碧玉	
S21	管玉	13号墳	埋葬施設	棺内	(16.80)	(7.50)		(4.10)	(2.00)	0.50	一方向	明緑灰褐色 綠色凝灰岩	
S22	管玉	13号墳	埋葬施設	棺内	(20.20)	7.20		1.60	(2.60)	0.78	一方向	明緑灰褐色 綠色凝灰岩	
S23	管玉	13号墳	埋葬施設	棺内	(24.10)	6.20		2.60	(1.30)	1.34	一方向	暗緑灰褐色	
S24	管玉	13号墳	埋葬施設	棺内	(8.70)	6.20		2.20	1.50	0.13	一方向	明緑灰褐色 綠色凝灰岩	
S25	管玉	13号墳	埋葬施設	棺内	(20.70)	7.10		(2.20)	(1.50)	0.61	一方向	明緑灰褐色 綠色凝灰岩	
S26	管玉	13号墳	埋葬施設	棺内	(19.00)	6.35		(2.80)	(2.20)	0.57	一方向	明緑灰褐色 綠色凝灰岩	
S27	管玉	13号墳	埋葬施設	棺内	(9.60)	5.60			(1.90)	0.16	一方向	明緑灰褐色 綠色凝灰岩	
S28	管玉	13号墳	埋葬施設	棺内	22.40	7.40		2.50	1.60	1.60	一方向	明緑灰褐色 綠色凝灰岩	
S29	臼玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.75	1.15	1.80	1.80	0.03	一方向	オリーブ灰褐色	
S30	臼玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.75	2.15	1.50	1.50	0.03	一方向	オリーブ灰褐色	
S31	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.35	2.45	1.35	1.35	0.03	一方向	オリーブ灰褐色	
S32	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.10	1.70	1.30	1.30	0.02	一方向	明オリーブ灰褐色	
S33	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.00	1.95	1.40	1.40	0.02	一方向	明オリーブ灰褐色	
S34	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.55	1.55	1.65	1.65	0.02	一方向	明オリーブ灰褐色	
S35	臼玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.20	1.40	1.20	1.20	0.02	一方向	オリーブ灰褐色	
S36	臼玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.45	2.50	1.60	1.60	0.03	一方向	オリーブ灰褐色	
S37	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.60	2.00	1.60	1.60	0.03	一方向	オリーブ灰褐色	
S38	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.40	2.00	1.70	1.70	0.03	一方向	オリーブ灰褐色	
S39	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.20	1.65	1.60	1.60	0.03	一方向	オリーブ灰褐色	
S40	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.00	1.85	1.60	1.60	0.03	一方向	明オリーブ灰褐色	
S41	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.00	1.85	1.50	1.50	0.02	一方向	明オリーブ灰褐色	
S42	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.00	1.75	1.60	1.60	0.02	一方向	オリーブ灰褐色	
S43	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.60	2.10	1.60	1.90	0.03	一方向	明オリーブ灰褐色	
S44	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		(2.20)	1.95			0.01	一方向	灰白色	
S45	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.45	2.95	1.60	1.60	0.04	一方向	明オリーブ灰褐色	
S46	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.00	1.95	1.30	1.30	0.02	一方向	オリーブ灰褐色	
S47	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.20	1.00	1.40	1.40	0.02	一方向		
S48	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.00	1.15	1.50	1.50	0.01	一方向		
S49	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.00	1.20	1.50	1.50	0.01	一方向		
S50	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.05	1.25	1.50	1.50	0.02	一方向		
S51	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.00	1.30	1.65	1.65	0.02	一方向		
S52	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.00	1.30	1.60	1.60	0.02	一方向		
S53	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		2.95	1.35	1.60	1.60	0.01	一方向		
S54	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.10	1.35	1.50	1.50	0.01	一方向		
S55	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.00	1.40	1.40	1.40	0.02	一方向		
S56	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.10	1.45	1.40	1.40	0.02	一方向		
S57	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.10	1.50	1.70	1.70	0.01	一方向		
S58	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.00	1.50	1.70	1.70	0.02	一方向		
S59	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.20	1.50	1.60	1.60	0.02	一方向		
S60	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.20	1.55	1.70	1.70	0.02	一方向		
S61	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.05	1.55	1.40	1.40	0.02	一方向		
S62	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.00	1.55	1.40	1.40	0.02	一方向		
S63	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.00	1.60	1.30	1.30	0.02	一方向		
S64	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.10	1.60	1.40	1.40	0.02	一方向		
S65	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.50	1.60	1.80	1.80	0.03	一方向		
S66	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.00	1.60	1.60	1.60	0.02	一方向		
S67	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.00	1.60	1.40	1.40	0.02	一方向		
S68	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.20	1.60	1.60	1.60	0.02	一方向		
S69	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.10	1.60	1.50	1.50	0.02	一方向		
S70	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.40	1.60	2.10	2.10	0.03	一方向		
S71	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.00	1.65	1.40	1.40	0.02	一方向		
S72	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.10	1.70	1.50	1.50	0.02	一方向		
S73	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		2.95	1.70	1.50	1.50	0.02	一方向		
S74	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.10	1.70	1.60	1.60	0.02	一方向		

No.	種類	出土古墳	出土位置	最大長	最大徑·幅	最大厚	孔徑1	孔徑2	重量(g)	穿孔方向	色調	材質
S75	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.40	1.70	1.80	1.80	0.03	一方向	滑石
S76	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.00	1.75	1.50	1.50	0.02	一方向	滑石
S77	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.35	1.75	1.80	1.80	0.02	一方向	滑石
S78	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.20	1.80	1.40	1.40	0.02	一方向	滑石
S79	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		2.95	1.80	1.40	1.40	0.02	一方向	滑石
S80	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.00	1.80	1.30	1.30	0.02	一方向	滑石
S81	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.00	1.80	1.40	1.40	0.02	一方向	滑石
S82	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.05	1.85	1.30	1.30	0.02	一方向	滑石
S83	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.00	1.90	1.20	1.20	0.02	一方向	滑石
S84	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.10	1.90	1.70	1.70	0.02	一方向	滑石
S85	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.25	1.90	1.50	1.50	0.03	一方向	滑石
S86	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.00	2.00	1.60	1.60	0.03	一方向	滑石
S87	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.30	2.00	1.80	1.80	0.03	一方向	滑石
S88	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.00	2.00	1.60	1.60	0.02	一方向	滑石
S89	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.25	2.05	1.50	1.50	0.03	一方向	滑石
S90	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.70	2.10	1.70	1.70	0.03	一方向	滑石
S91	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.10	2.20	1.50	1.50	0.03	一方向	滑石
S92	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.55	2.20	2.80	2.80	0.03	一方向	滑石
S93	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.55	2.35	2.00	2.00	0.03	一方向	滑石
S94	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.70	2.35	1.85	1.85	0.05	一方向	滑石
S95	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.35	2.45	2.10	2.10	0.03	一方向	滑石
S96	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.35	2.60	1.75	1.75	0.03	一方向	滑石
S97	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.35	2.70	1.60	1.60	0.04	一方向	滑石
S98	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.60	2.95	1.90	1.90	0.04	一方向	滑石
S99	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.60	2.80	2.10	2.10	0.05	一方向	滑石
S100	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.45	2.60	1.90	1.90	0.04	一方向	滑石
S101	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.40	2.55	1.80	1.80	0.03	一方向	滑石
S102	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.50	2.35	2.00	2.00	0.04	一方向	滑石
S103	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.10	2.30	1.40	1.40	0.03	一方向	滑石
S104	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.15	2.20	1.40	1.40	0.03	一方向	滑石
S105	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.10	2.10	1.70	1.70	0.02	一方向	滑石
S106	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.10	2.05	1.50	1.50	0.04	一方向	滑石
S107	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.15	2.00	1.60	1.60	0.03	一方向	滑石
S108	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.00	2.00	1.60	1.60	0.03	一方向	滑石
S109	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		2.95	2.00	1.40	1.40	0.02	一方向	滑石
S110	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.10	1.95	1.70	1.70	0.03	一方向	滑石
S111	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.00	1.95	1.40	1.40	0.03	一方向	滑石
S112	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.05	1.90	1.50	1.50	0.03	一方向	滑石
S113	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.10	1.80	1.40	1.40	0.03	一方向	滑石
S114	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.10	1.80	1.60	1.60	0.02	一方向	滑石
S115	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.05	1.80	1.40	1.40	0.03	一方向	滑石
S116	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.20	1.80	1.70	1.70	0.03	一方向	滑石
S117	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.25	1.75	1.80	1.80	0.03	一方向	滑石
S118	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.10	1.75	1.50	1.50	0.03	一方向	滑石
S119	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.05	1.70	1.50	1.50	0.03	一方向	滑石
S120	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.05	1.70	1.40	1.40	0.02	一方向	滑石
S121	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.05	1.70	1.30	1.30	0.02	一方向	滑石
S122	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		2.95	1.70	1.50	1.50	0.02	一方向	滑石
S123	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.15	1.65	1.50	1.50	0.02	一方向	滑石
S124	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.50	1.60	1.40	1.40	0.02	一方向	滑石
S125	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.05	1.60	1.40	1.40	0.02	一方向	滑石
S126	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.20	1.60	1.40	1.40	0.02	一方向	滑石
S127	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.05	1.60	1.40	1.40	0.02	一方向	滑石
S128	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.40	1.60	1.90	1.90	0.02	一方向	滑石
S129	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.10	1.60	1.55	1.55	0.02	一方向	滑石
S130	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		2.95	1.60	1.40	1.40	0.02	一方向	滑石
S131	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.10	1.55	1.40	1.40	0.02	一方向	滑石
S132	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.15	1.55	1.60	1.60	0.02	一方向	滑石
S133	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.05	1.50	1.40	1.40	0.02	一方向	滑石
S134	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.10	1.50	1.50	1.50	0.02	一方向	滑石
S135	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.00	1.50	1.40	1.40	0.02	一方向	滑石
S136	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.15	1.50	1.40	1.40	0.01	一方向	滑石
S137	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.05	1.45	1.30	1.30	0.02	一方向	滑石
S138	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.00	1.45	1.50	1.50	0.02	一方向	滑石
S139	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.00	1.35	1.55	1.55	0.01	一方向	滑石
S140	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.10	1.30	1.50	1.50	0.01	一方向	滑石
S141	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.25	1.30	1.40	1.40	0.02	一方向	滑石
S142	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		2.95	1.30	1.50	1.50	0.01	一方向	滑石
S143	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.15	1.25	1.70	1.70	0.01	一方向	滑石
S144	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.10	1.25	1.50	1.50	0.01	一方向	滑石
S145	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.10	1.20	1.65	1.65	0.01	一方向	滑石
S146	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		2.95	1.10	1.60	1.60	0.01	一方向	滑石
S147	白玉	28号墳	埋葬施設	棺内		3.20	1.10	1.50	1.50	0.01	一方向	滑石
S148	不明石製品	28号墳	墳丘出土		79.00	74.00	43.00					不明

第6章 自然科学分析の成果

第1節 梅田15号墳で出土した人骨の形態学的分析：被葬者の人物像

京都大学靈長類研究所 片山 一道

<緒言>

梅田15号墳で当の人骨が出土した際は発掘現場におもむき、骨の遺残状況や埋葬姿勢などにつき詳しく実況検分した。その際、ただ一人分だけの人骨があること、それが非常に良好な状態で残っていること、どの骨も交連状態を保ったままで整然と並んでいること、仰臥伸展の姿勢で直埋葬された人物の遺骨であることなどが確認できた。

その後、そこで取り上げられた人骨遺物は筆者の研究室に持ち込まれ、それぞれの骨につき肉眼解剖学の方法で観察することにより、あるいは骨計測学の方法により、形態学的に委細に分析した。本稿は、その分析結果のあらましを記載するとともに、それらから類推できる被葬者の人物像について素描する（写真14）。



写真14 梅田15号墳で出土した人骨の頭骨

発掘現場では骨格の全容が確認できたが、研究室に運ばれて、実際に分析に供された骨資料は非常に脆弱な状態であり、また、どの骨も多少なりとも破損する状態であった。このように出土した直後は骨格全体が非常に良好な状態で遺残するように見えて、いざ個々の骨を分析する段階になると難儀する

のは、古墳時代などの石棺墓の空洞内に残された人骨の特徴であるから仕方ない。そうした骨は、たいていは地面に面して土に埋もれたりしていた側が強く腐食している。また骨全体が粗鬆状態になっているか薄紙のような状態になっている。本人骨もその例にもれず、ひどく脆くなっている。だから、どんなにうまく扱っても、骨を取り上げるとき、袋分けするとき、運搬するとき、さらには分析作業を進めていくときなどに瓦解していくのは免れない。

まさに本人骨は、その典型例のようである。まったく有機物が残らず脱灰したような状態になっている。ことに緻密質が薄い小骨や短骨、さらには各骨の骨端部などが、たいていは潰れ、剥がれ、石灰が付着するか、粉末の状態になるなどして、多かれ少なかれ破損した状態になっている。それでも、主だった骨の多くは完形に近い今まで残っているから、かなり信頼度の高い精巧な観察が可能であった。

<各骨の残存状態>

頭蓋骨は、頭蓋底部の大部分を破損し、左の側頭部や顎面頭蓋が一部で壊れるも、ほぼ完形をとどめている。下顎骨も同様で、関節突起と下顎角の一部を破損するだけである（写真15・16・17・18・19）。

上顎の左の第1および第2大臼歯、下顎右側の第2と第3大臼歯は残っていないが、その他の合計28本の歯が釘植したまま残る。失われた歯についても、歯槽が開放したままなので、生前に脱落したのではなく、死後になって逸失したのは確かである（写真20・21）。

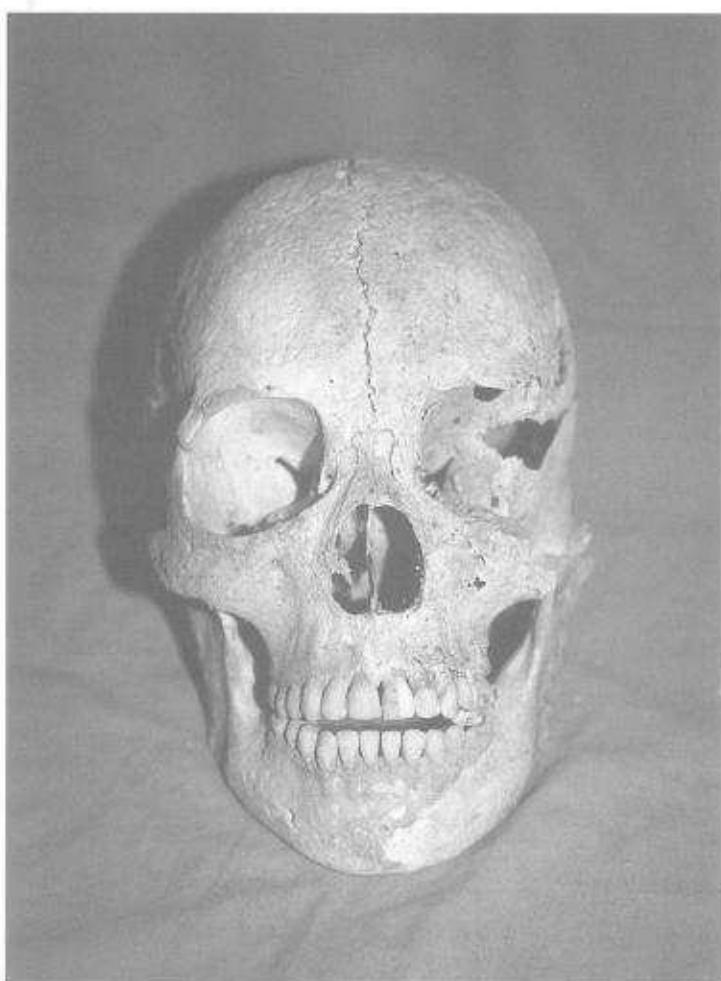


写真15 頭骨の正面観

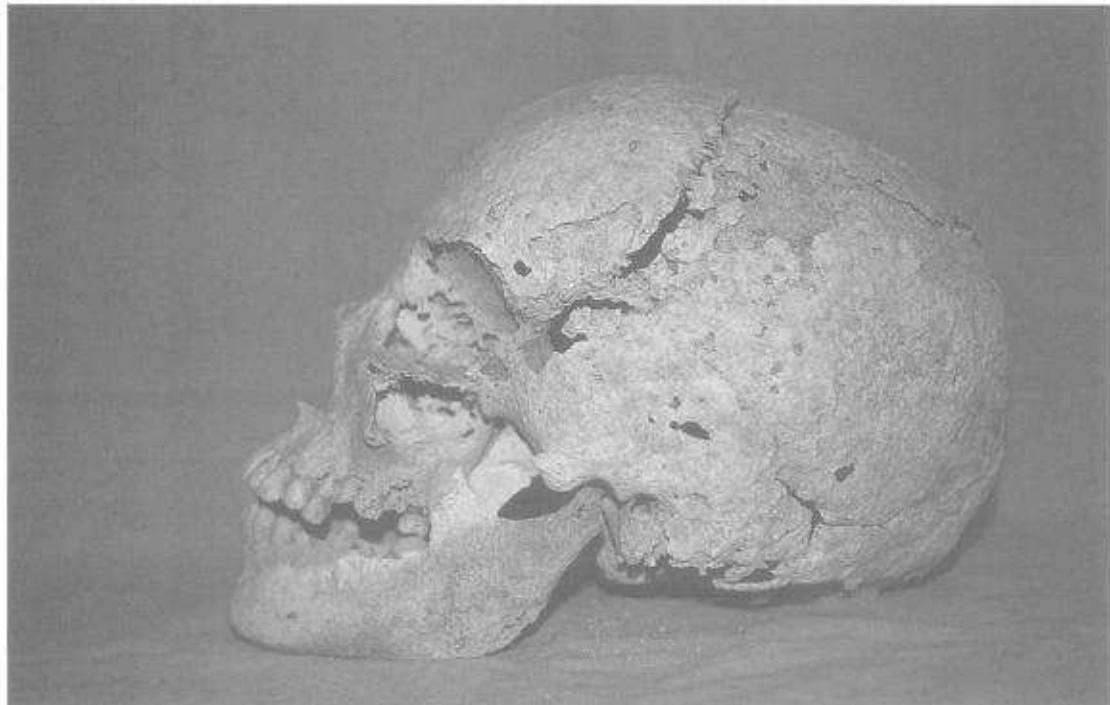


写真16 頭骨の左側面観

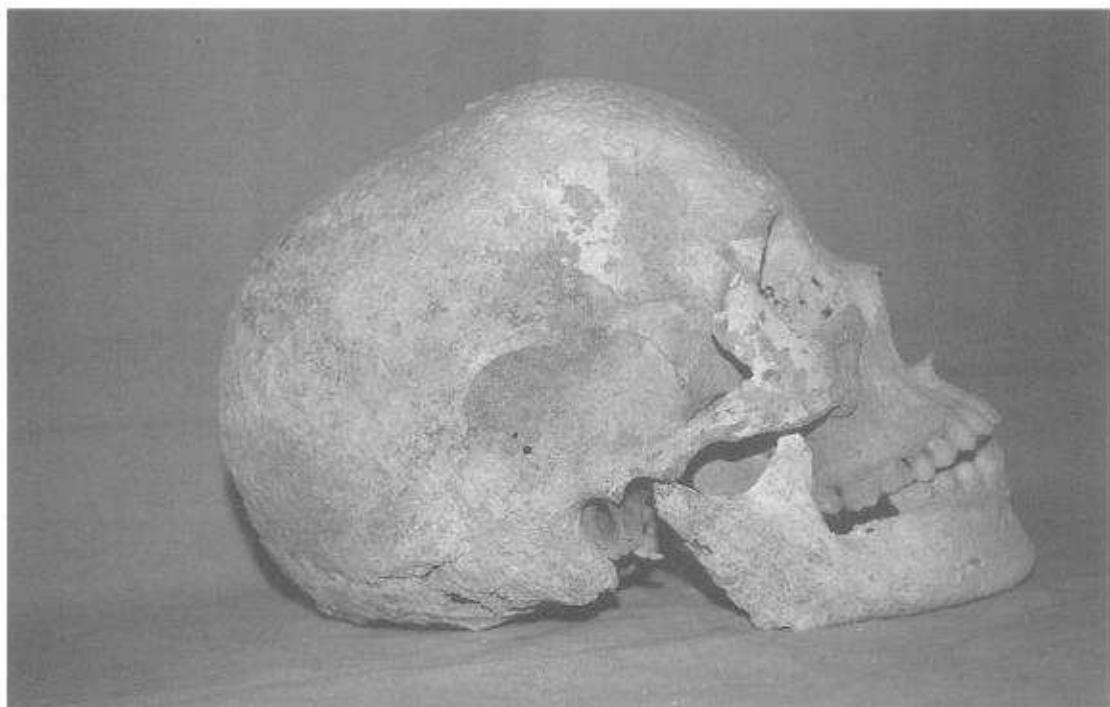


写真17 頭骨の右側面観



写真18 頭蓋骨の上面観

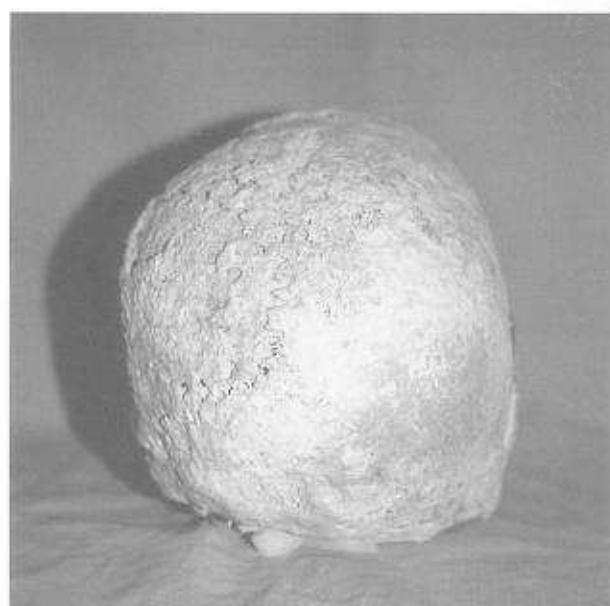


写真19 頭蓋骨の後面観



写真20 下顎骨の全体像

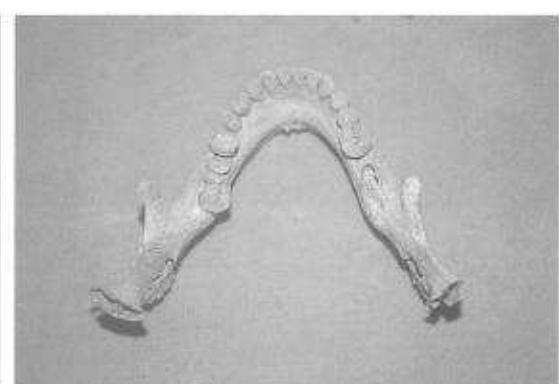


写真21 下顎骨の上面観

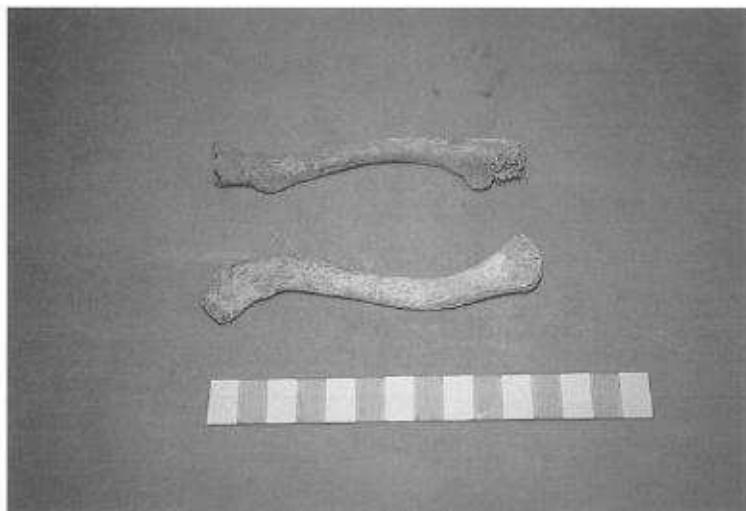


写真22 左右の鎖骨



写真25 頸椎

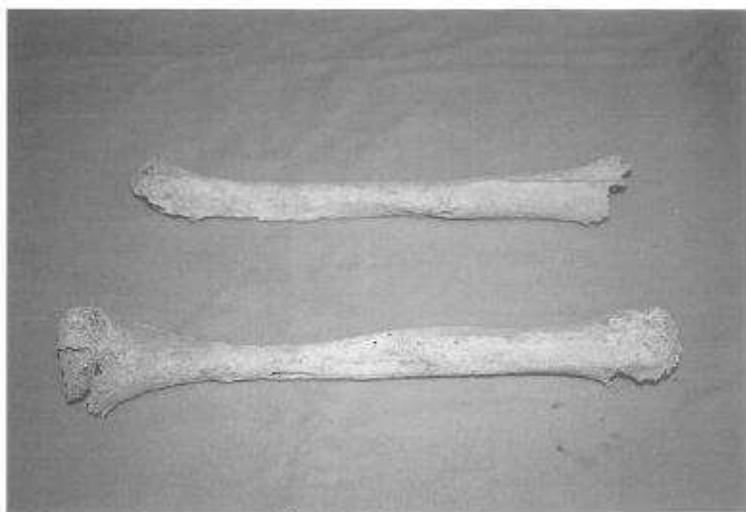


写真23 左右の上腕骨

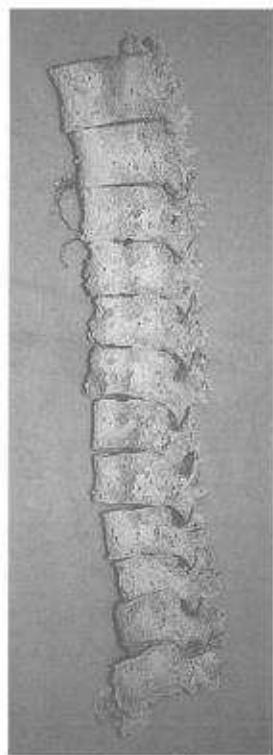


写真26 胸椎

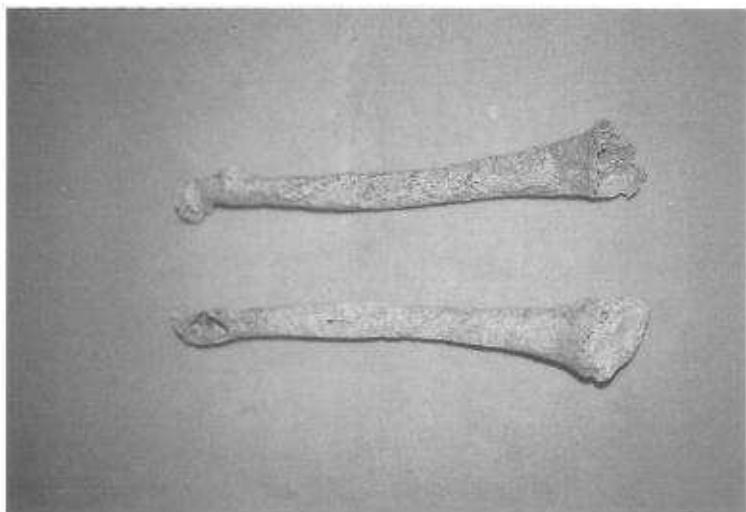


写真24 左右の橈骨



写真27 腰椎

胸骨については、全体に脊椎骨と胸骨は良好な状態で残るが、肋骨は保存がすこぶる悪い。胸骨は、剣状突起が壊れるが、ほぼ完形で残る。脊椎骨は24個のすべてが同定できるものの、いずれも椎弓や各突起を破損する（写真25・26・27）。肋骨は第1肋骨が同定できるだけで、あとは皆、小さな大量の破片として残っており、どの肋骨のものが、あるいは左右については、いずれも同定はままならない。

上肢帯では、鎖骨は左右ともに肩峰端と胸骨端の一部を破損するだけだが（写真22）、左右ともに肩甲骨は鳥口突起から関節窩の上半にかけての部位が断片として残るだけである。

自由上肢骨の残存状態は以下の通りである。上腕骨は左右ともに骨頭部が大きく壊れ、遠位端も腐食するようになっているが、骨体はほとんど無傷で残る（写真23）。桡骨は、右は骨体の一部しか残らないが、左は骨体の大部分を残す（写真24）。手根骨、中手骨、手指骨はすべて、瓦解しており、いくつかの破片を残すのみである。これらの破片については骨種の同定は叶わぬ。

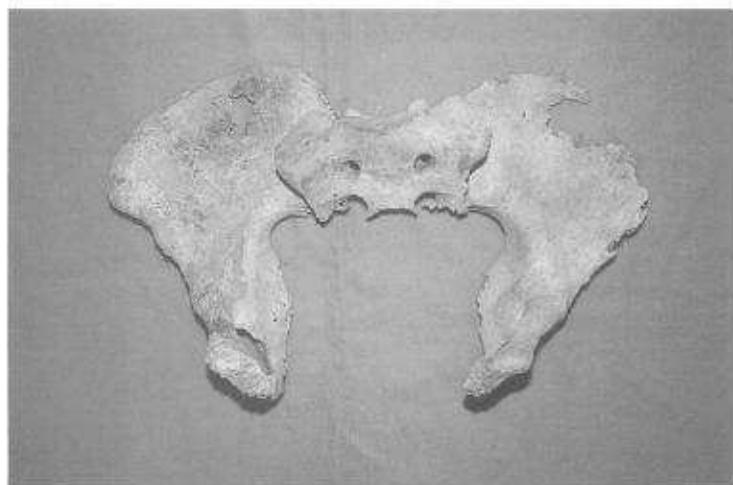


写真28 骨盤骨



写真29 左右の大腿骨



写真30 左右の脛骨

下肢骨については以下の通り。骨盤の骨については、仙骨は第3仙椎以下の部位を大きく破損しており、寛骨は左右ともに腸骨翼の大部分と坐骨の部分を破損するも他の部分は残っている（写真28）。大腿骨は左右ともに、大転子や小転子、内側頭や外側頭などの突起部を損なうが、ほぼ完形に近い状態で残る（写真29）。しかし外表面は腐食などのために原形をとどめぬ部分が少なくない。左右の脛骨はいずれも大部分が残り、わずかに上関節面の周縁や遠位端の一部を失うだけである（写真30）。腓骨は左右ともに壊滅状態にあり、左右の判別ができる骨体の一部が残存するだけである。膝蓋骨は左右ともに完形状態で残る。距骨と踵骨は、いずれも左右ともに残るが、断片となっている。左右側ともに舟状骨、第1楔状骨、第2楔状骨、第3楔状骨、第1中足骨などの断片がある。その他の中足骨や足指骨については、いくつかの破片があるが、どの骨か同定できる状態ではない。

＜各骨の形態特徴についての記載＞

頭蓋骨： 全体に小さく華奢であることが最大の特徴である。頭蓋最大長は175mm、頭蓋最大幅は126mm、バジオン・ブレグマ高は126mmであるので、かなり小さな脳頭蓋と言えよう。また、上顎高は61mmしかなく、頬骨弓幅も121mmほどしかないので、顔面頭蓋についても相当に小さいことが明らかである。

頭蓋骨の上面観は長い。頭蓋長幅示数は72.0の値を示すから、長頭型に区分できる。また、頭蓋長高示数および頭蓋幅高示数は、それぞれ72.0と100.0の値となり、中頭型でかつ狭頭型に区分できる。つまり脳頭蓋については、小さいだけでなく、前後に長く、左右への膨らみが弱く、ほどほどの高さであるのも特徴と言えよう。

顔面頭蓋について、いわゆるコルマンの上顎示数は51.2の値となり、中上顎型に分類できる。顎長が98mm、頭蓋底長が95mmであることから、顎示数は103.2の値となり、突顎型に区分できる。つまり、かなり口もとが前に出る特徴をもつ。右の眼窩については眼窩高と眼窩幅が計測可能であるが、それぞれ32mmと40mmであり、眼窓示数を計算すると80.0の値が求められる。これは中眼窓型に区分できる。鼻高と鼻幅は46mmと24mmである。これらから鼻示数は52.2と計算でき、広鼻型に分類できる。つまり、顔面頭蓋が低いことに伴って、それなりに眼窩も低いが、梨状孔は非常に広いのが特徴である。

鼻骨から眉間のあたりの部位について記載する。前眼窓間幅が20mmであるのに、前眼窓間弧長は21mmしかない。つまり眼窓間部で鼻骨の膨らみがなく、非常に扁平な様相を呈する。さらに眉間の隆起が極めて弱く、鼻根部の凹みが弱い。つまり、この頭蓋骨は鼻根から眉間にかけて、非常に扁平であるのも大きな特徴である。

その他の脳頭蓋や顔面頭蓋に関わる特徴を列記する。非常に明瞭に前頭縫合が認められる。乳様突起は小さく、乳突上稜や乳突切痕は、ほとんど目だたない。弱いながらも前頭結節が認められる。外後頭隆起は弱く、丸みを帯びる。側頭線は極めて弱い。頬骨や前頭骨の頬骨突起が非常に華奢であるから、眼窓縁が非常に鋭い様相を示す。

下顎骨： 頭蓋骨と同様、非常に小さく、かつ華奢である。筋突起は細く小さく、咬筋粗面や翼突筋粗面などは発達せず、これら咀嚼筋の付着部が見事に弱々しいことから、そもそも咀嚼筋が小さかったものと推測できる。オトガイ高は30mmあるが、下顎体高は26mmしかない。前者のほうが非常に大きいことから、いくぶん顎の尖った顎だちであったのであろう。関節突起が壊れているので、下顎枝高は計測できないが、下顎枝が非常に低い。しかるに下顎枝幅は33-34mmあり、並の大きさである。

胸骨： 胸骨は、胸骨柄に比べて鎖骨体が相対的に小さく長く華奢であるのが特徴と言える。どの椎骨も輪状骨端は完全に癒合するが、いずれも骨体は若々しく、いっさい加齢性の変化は認められない。これらの骨には、なんらかの病変のようなものは認められない。

上肢帶骨と上肢骨： 鎖骨は小さく、骨体が短く非常に細い。華奢そのものである。骨体の中央部は最大径が10mm、最小径が9mmほどしかない。肩甲骨も鳥口突起は非常に小柄であるから、この骨もそれなりに小さかったのであろう。上腕骨は骨体が非常に短い。でも、三角筋粗面は相当に発達しており、いささかアンバランスな感がしないでもない。橈骨と尺骨とともに非常に細いものの、どちらも骨間縁はよく発達しているほうである。

下肢帶骨と下肢骨： 骨盤を成す骨はいずれも、それぞれの部分で女性的な特徴が顕著である。寛骨は小さく骨細である。腰まわりが小造りな人物だったのであろう。腸骨の耳状面の前下部には、いわゆる妊娠痕が認められる。右側は痕跡程度でしかないが、左側は弱いものの、はっきりと認識できる。出産経験を有する者の遺骨と考えられる。大腿骨も短く細い。骨体中央部の矢状径は23mm、横径は24mmばかりである。骨体上部の最大径は30mmあり、最小径は19mmしかないので、やや扁平性を呈する。骨頭も小さく垂直径と矢状径ともに40mmしかない。特記すべきこととして、右大腿骨の栄養孔が非常に大きく開口している点があげられるが、それが何に起因するのか定かではない。もしかしたら、なんらかの傷害、あるいは疾病と関係するのかもしれない。膝蓋骨も小さく、繊細そのものである。左膝蓋骨の最大高、最大幅、最大厚は、それぞれ39mm、37mm、19mmである。同じく脛骨も短く小さく骨細である。骨体中央部の最大径は25mm、最小径は19mmしかない。腓骨の骨体は非常に細い。距骨や踵骨もひどく小さい。中足骨なども小さいことから、足が非常に小さかったことは疑うべくもない。距骨には、いわゆる蹠屈面が軽度ながらも認められる。日常的に蹠屈の姿勢をとっていたのだろう。

<性判別>

形態分析が可能な骨については、どの骨についても、男性の骨であることをうかがわせるような特徴は、まったく見あたらない。すべての点で典型的な女性の骨格であることを強く示唆する特徴が目だつ。したがって、被葬者が女性であったのは間違いない。

ここでは特に性差が大きい骨について、いくつかの要点を記載するにとどめる。

まず骨盤骨についてだが、恥骨下角が非常に大きいこと、恥骨下枝が弓状をなすこと、腸骨の大坐骨切痕が高く大きく、かつ円形をなすこと、腸骨稜が薄いこと、仙骨の岬角が大きいことなどが挙げられる。

頭蓋骨については、乳様突起が小さく乳突切痕が非常に弱いこと、前頭結節が認められること、眉間の隆起が弱いこと、外後頭隆起や側頭線など各筋の付着部を含めて、頭骨全体が非常に華奢であることなどを挙げる。

その他、下頸骨が非常に華奢であること、鎖骨が細く短く華奢であること、大腿骨の頸体角が大きく骨頭が非常に小さいこと、上下肢の長骨が細く華奢であることなど、女性骨の特徴ばかりしか見あたらないのである。

<死亡年齢の推定>

頭蓋骨の後頭骨蝶形骨軟骨結合が完全に癒合しており、鎖骨を含む長骨の骨端がすべて癒合していること、第3大臼歯が4本とも萌出していること、胸骨の胸骨体の各分節が完全に癒合していること、仙骨の第1仙椎と第2仙椎が癒合していることなどから成人年齢に達したのちに死亡したのは確かである。

しかしながら、各歯の咬耗は非常に軽微であり、エナメル質が磨り減り象牙質が微かに露出するほどになっているのは、各前歯と第1大臼歯だけである。第3大臼歯は咬耗の跡が、ほんの局部しか認められない。鎖骨の頸骨端や脊椎骨の輪状骨端は癒合を終えるも、前者においては、かろうじて骨端線が残っており、後者においては、まさに癒合を完了したばかりの様相を呈する。

第3大臼歯が萌出するのは、18歳以降の年齢であるが、この歯が萌出していたのは間違いない。しかし、その咬耗がきわめて弱いことから、萌出後さほど時を経ずに死亡したことを示す。また一般には腰椎などの輪状骨端が癒合するのは20歳前後、そして鎖骨の胸骨端が癒合を完了するのは25歳の頃である。これらの所見を総合すると、被葬者が死亡したのは25歳を少しこえる年齢であったと考えるのが理にかなっている。

実際、恥骨の結合面については、平行隆線は明瞭であり、腹側縁が明瞭に認められるなど、おおむね20~30歳くらいの年齢にある者の特徴を示す（埴原1952）。腸骨の耳状面にも周縁に骨棘形成がまるでなく、関節面の加齢変化もおよそ認められないので、30歳を大きくこえる者の寛骨とは考えにくい（写真31）。

その他、頭蓋骨の3主縫合には癒合らしき部分が認められず、いずれの骨の関節面にも骨棘形成のようなものが、いっさい現れていない。

以上のことから、この人骨を残した女性が死亡したのは25~30歳あたりの年齢であったと想定するのが妥当であろう。

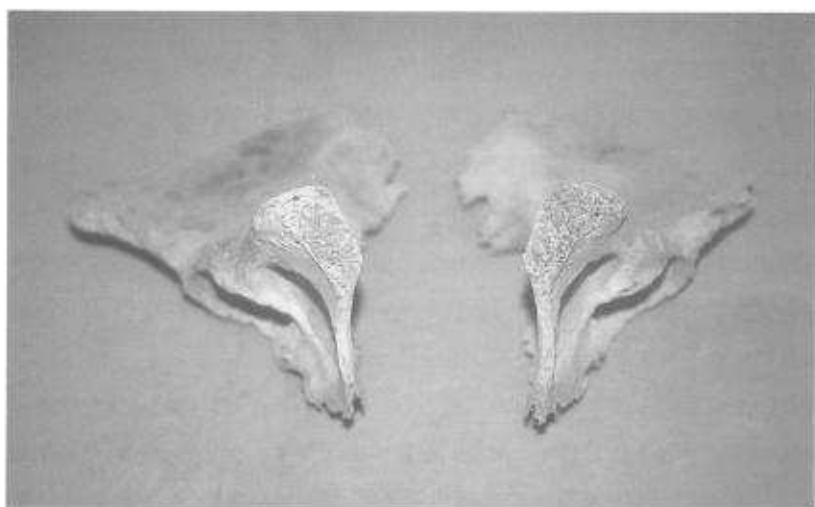


写真31 左右の恥骨の結合面

<身体特徴>

まずは身長であるが、それを推定するのに必要な四肢の長骨類の最大長は左右の大腿骨と左右の脛骨につき計測が可能である。それらの最大長から藤井式（藤井1960）を用いて生前の身長を推定すると、左右の大腿骨（それぞれ、386mmと381mm）からは、それぞれ147.8cmと146.4cmとなる。また、左右の

脛骨（それぞれ、311mmと312mm）からは、それぞれ146.5cmと146.5cmとなる。これらの推定身長は非常によく整合しており、当の女性の生前の身長は147cm前後であったのは間違いない。平本（1981）は関東地方の古墳時代の女性の平均身長が151.5cmほどであったと報告しており、当時の女性なかでも低身長の部類に属していたのであるまい。

つぎに体格についてであるが、さきに記述したように、頭蓋骨、胸骨類、四肢の長骨類、さらには足根骨などにいたるまで、およそすべての観察可能な骨は見事に細く華奢で骨細である。おそらくは相当に華奢な体格の人物であった可能性が高い。しかしながら、たとえば上腕骨の三角筋粗面や大腿骨の粗線など大型の筋肉の付着部は、それなりに頑丈性を備えている。小柄で華奢な体格であったであろうが、それなりに四肢などの筋肉は発達していたのかもしれない。

頭形や顎形についての特徴は次の通りである。脳頭蓋は小さいが、ことに左右に狭いので、かなり前後に長い長頭型に属する。顔面頭蓋も小さいが、高さも横幅ともに小さいので、ほどほどの中上顎型となる。眼窩も低く幅が小さく、鼻高なども小さいなど、顔全体が小造りの印象を強く与える。ただ鼻孔は小さくはない。突顎性が強い。下顎も小さく、下顎角は張り出しているので、いわゆるエラが張った顔ではなかったはずである。ちなみに、畿内の古墳時代の女性について報告された平均値（寺門1981）に比べると、頭幅、頬骨弓幅、上顎高、眼窩高、眼窩幅、鼻高などはとても小さい。長頭で小造りの顔だったのは間違いない。

<病変や骨折痕など>

齶歯（虫歯）や歯周病変など歯科的疾患の痕跡のほかには、なんらかの疾患に起因するとおぼしき骨変形は、どの骨についても、まったく認められない。クリプラオービタリア（眼窩上部内壁の多孔性骨過形成）や歯のエナメル質減形成など失調性疾患による変形の兆候もいささかもない。ともかく生前、各骨は健全そのものであったようだ。

齶食による損壊が上顎の左第2小白歯と第3大臼歯、下顎の左第2小白歯と第1大臼歯と第2大臼歯、それに下顎の右第1大臼歯に認められる。上顎歯のうち、第2小白歯では遠位隣接面が深くえぐられ、第3大臼歯では咬合面が同じく深くえぐられている。下顎歯では、右第1大臼歯は咬合面が小さく点状に齶食されるだけだが、左側の3本の歯はいずれも齶食が著しく進行しており、ことに第2小白歯と第2大臼歯は歯頸部近くまで歯冠が完璧に失われている。さらに逸失する4個の歯、つまり上顎の左第1大臼歯と第2大臼歯、および下顎の右の第2大臼歯と第3大臼歯も虫歯が進み、それが原因で歯根だけとなり、それゆえに発掘に際して逸失した可能性が高い。これらの逸失歯はいずれも齶歯に隣接し、しかも歯槽が歯周性の病変を呈するからである。

歯周性の病変は、どの歯にも多かれ少なかれ認められる。上下とも前歯部よりも後歯部のほうが顕著であるが、歯槽骨が退縮吸収されており、典型的な歯槽膿漏の症状を呈する。さらに下顎の左第1大臼歯と上顎の第2大臼歯の歯根がある部分の歯槽内部には外側に開放するほどの膿瘍の痕跡が認められる。おそらく虫歯が進行したために歯髓孔から炎症を生じたために生じしたものであろう。

このように齶歯が多く、しかも歯冠部を完全に失うほどのものが何個もあり、歯周性疾患も相当に進行してようで、歯牙の健康状態が恐ろしく悪かったことが推測できる。しかしながら、食生態に関係したものか、胎児期あるいは乳児期の栄養状態が劣悪であったためか、あるいは別の要因によるのか、その原因については推察できない。

どの骨にも、骨折痕のようなものは、いっさい認められない。左右の大腿骨の骨体の後部に直径が1センチから4センチほどにおよぶ、いくつかの大きな穴が生じているが、これらは死後にできたものであり、その穴の周辺を顕微鏡で観察した結果、齧歯類による典型的な咬痕が多数認められた。おそらく、石棺内に埋葬されたのちに白骨化する段階でネズミ類によって齧られたために生じたのであろう（写真32）。

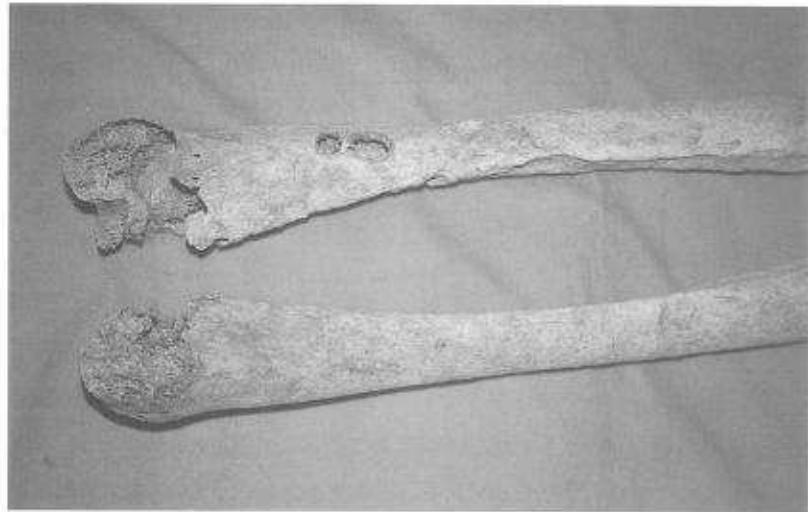


写真32 大腿骨骨体の後面下部にできたネズミ類による咬痕

<まとめ>

梅田15号墳で出土した人骨から被葬者の人物像を推理すると次のようになる。身長が147cmほどしかない小柄な女性である。非常に小造りで凹凸の弱い扁平な丸顔をして、顎が前後に長い特徴をもち、上半身と下半身ともにこぢんまりとした体格の人物であったろう。低身長で小柄な割には上下肢の腕や脚の筋肉は、それなりに発達していたようである。およそ25-30歳の年齢で死亡したと推定できるが、なぜこのような若齢で死亡したか、その原因は定かでない。死亡に関わるような疾病や損傷の跡が、いっさい認められないからである。特記すべき点としては、歳のわりに口腔内の健康状態が悪く、ことに大臼歯を中心に虫歯に悩まされていたこと、歯周症が進んでいたことが挙げられる。また、出産歴はあったようである。

<謝辞>

本人骨は非常に良好な状態で残っており、古墳時代の人びとの人物像を描くには理想的な資料と言える。このような資料を調査する機会を与えていただいたことにつき、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所の関係者の方々に御礼申し上げたい。

<参考文献>

- 埴原和郎（1952）日本人男性恥骨の年齢的変化について、人類学雑誌 62：33-49。
平本嘉助（1981）骨から見た日本人身長の移り変わり、考古学ジャーナル197：24-28。
藤井 明（1960）四肢長骨の長さと身長との関係に就いて、順天堂大学体育学部紀要 第3号：49-61。
寺門之隆（1981）古墳時代人骨、「人類学講座5、日本人I」（人類学講座編纂委員会編）所収、雄山閣出版、111-121頁。

第2節 梅田15号墳出土鉄製品に付着する赤色顔料の分析

独立行政法人奈良文化財研究所 高妻 洋成
兵庫県教育委員会 岡本 一秀

1. はじめに

梅田古墳群の15号墳より出土の鉄製品（ヤリガンナ・M1）には、赤色顔料が直径1mmほどの範囲に付着していることが肉眼観察で確認できる。通常、このような顔料の同定は、蛍光X線元素分析法とX線回折分析法により同定される。今回の試料の場合は、表面の平滑性、顔料の残存量などの諸条件が十分に満たされないため、従来の分析方法では満足のいく分析結果を得ることが難しい事が予想された。

そのため、今回はわずかな量の赤色顔料の同定を行うためにレーザーラマン分光分析法を適用した。

2. レーザーラマン分光分析法

単一の振動数(ν_0)をもつレーザー光を物質に照射し、入射光とは異なる方向に散乱される微弱な光を分光器に通して観測すると、入射光と同じ振動数(ν_0)を与えるレイリー散乱光と呼ばれる弹性散乱と $\nu_0 \pm \nu R$ なる振動数の散乱光を観測することができる。後者はラマン散乱と呼ばれる非弹性散乱である。入射光とラマン散乱光の振動数の差 $\pm \nu R$ をラマンシフトと呼んでおり、物質によって固有の数値を示す。従って、单一の振動数を持つレーザー光を物質に照射してラマンスペクトルを得ることにより、物質の定性分析が可能となる。ラマン分光分析法は、励起光源に可視レーザー光を用いるため、ガラスや石英ガラスの光学素子を使用することができ、種々の光学調整を肉眼で行うことができる。このため、顕微鏡を接続した顕微測定も可能である。

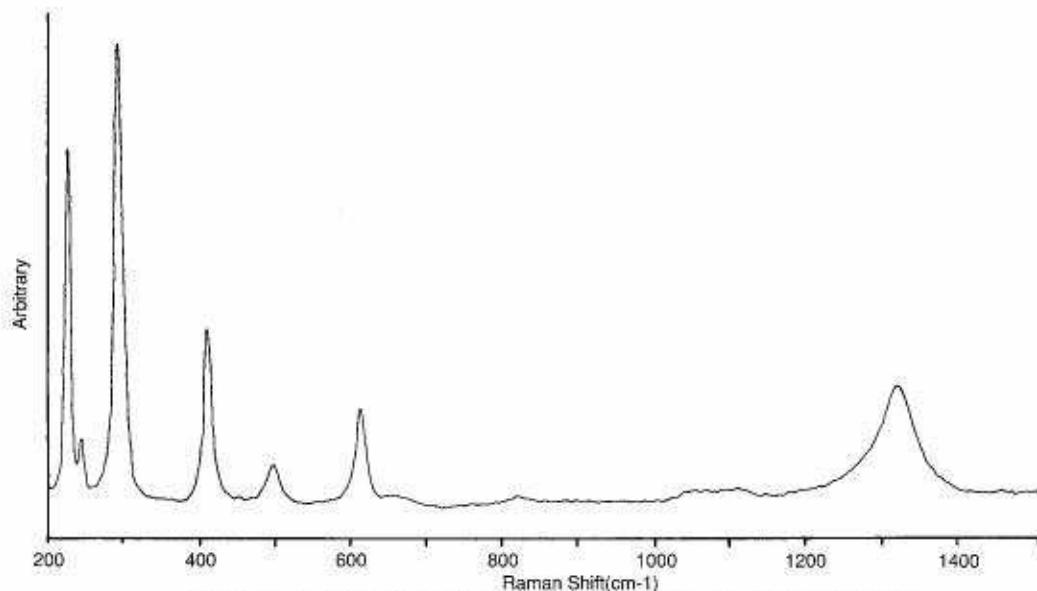
また、ラマン散乱光の検出には、極めて感度の高い分散型CCDを用いており、照射するレーザーの強度を低くすることが可能である。文化財の非破壊分析を念頭に置いた場合、レーザーラマン分光分析法は試料に対するダメージが少なく、感度の高い分析結果を得ることが期待できる。

3. 赤色顔料の分析

レーザーラマン分光分析には、クロメックス社製のRaman2000を使用した。励起レーザーは波長785nmで、出力5mWとした。鉄製品の表面に付着した微量な赤色顔料を分析するために顕微測定法を適用し、レーザーの直径は10μmまで絞り込んだ。さらにバックグラウンドの鉄のスペクトルも検出してしまったため、赤色顔料の認められる箇所と認められない箇所の2箇所を測定し、前者のスペクトルから後者を除算する事により、赤色顔料のみのラマンスペクトルを得た。得られたラマンスペクトルを第109図-1に示す。第109図-2はベンガラ（鉱物名：赤鉄鉱、化合物名： a 型の酸化鉄（Ⅲ）、化学式： $a\text{-Fe}_2\text{O}_3$ ）の標準試料のラマンスペクトル、第109図-3は水銀朱（鉱物名：辰砂、化合物名：硫化水銀、化学式： HgS ）の標準試料のラマンスペクトルである。

4. まとめ

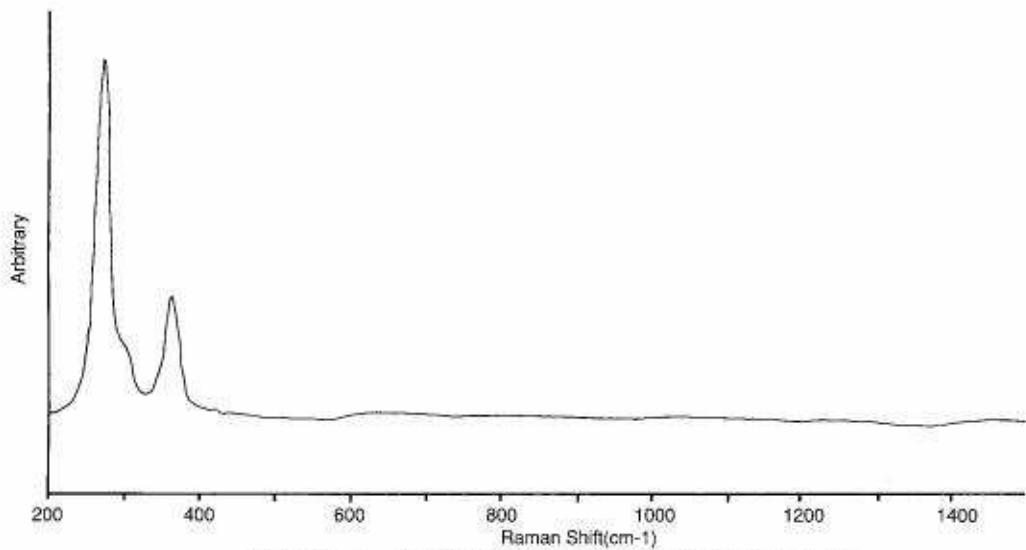
分析の結果、スペクトルのプロフィールより鉄製品に付着する赤色顔料は、ベンガラと同定された。15号墳の石棺や石材に付着する顔料については、X線回折法による分析も実施し（第6章 第3節参照）、ベンガラであるという結果を得ている。今回の分析結果と併せて15号墳では、埋葬施設内にはベンガラが施されていたといえる。但し、サンプルをとった場所が少ないので、施された顔料はベンガラだけだったのか、他に水銀朱も用いられたかについては、検討の余地を残す。



第109図-1 15号墳出土鉄器付着の赤色顔料のラマンスペクトル図



第109図-2 ベンガラ（標準試料）のラマンスペクトル図



第109図-3 水銀朱（標準試料）のラマンスペクトル図

第3節 梅田古墳群から検出された赤色顔料の分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. はじめに

梅田古墳群の11号墳から出土した土器、15号墳から出土した石材には、それぞれ赤色顔料が付着している様子が確認された。また、15号墳の石棺埋土と16号墳SX01埋土からも赤色顔料が検出され、死者への施朱の痕跡と考えられている。

本報告ではこれらの赤色顔料について分析を行い、由来を明らかにする。なお、赤色顔料として一般的なベンガラと辰砂は、いずれも鉱物由来であることから、分析は鉱物の同定に効果のあるX線回折分析で行う。

試料
試料は、11号墳、15号墳、16号墳から検出された赤色顔料4点（試料番号1～4）である。
各資料の詳細を第10表に示す。

番号	古墳名	出土位置など
1	11号墳	出土土器付着
2	15号墳	石材付着 (SX01北側壁積石5)
3	15号墳	石棺埋土
4	16号墳	SX01埋土

第10表 X線回折分析試料

分析方法

試料を105℃で2時間乾燥させた後、メノウ乳鉢で微粉碎した。この微粉碎試料をアセトンを用いてスライドグラスに塗布し、X線回折測定試料とした。作製したX線回折測定試料について以下の条件で測定を実施した（足立、1980；日本粘土学会、1987）。

検出された物質の同定解析は、測定回折線の主要ピークと回折角度から原子面間隔及び相対強度を計算し、それに該当する化合物または鉱物をX線回折線総合解析プログラム（五十嵐、未公表）により検索した。

装 置：島津製作所製 XD-3A Time Constant : 1.0 sec
Target : Cu (K α) Scanning Speed : 2°/min
Filter : Ni Chart Speed : 2 cm/min
Voltage : 30KV Divergency : 1°
Current : 30mA Recieving Slit : 0.3mm
Count Full Scale : 5,000C/S Scanning Range : 3~45°

結果

X線回折図を第110図に示す。以下に、各資料の特徴について記す。

・試料番号1

検出された鉱物は石英 (quartz)、カリ長石 (K-feldspars)、单斜輝石 (clinopyroxene)、赤鉄鉱 (hematite)、ギブサイト (gibbsite)、カオリン鉱物 (kaolin minerals)、雲母鉱物 (mica minerals) の6鉱物種である。

・試料番号2

検出された鉱物は石英、斜長石（plagioclase）、カリ長石、单斜輝石（clinopyroxene）、赤鉄鉱、カオリン鉱物、雲母鉱物の6鉱物種である。

・試料番号3

検出された鉱物は石英、カリ長石、赤鉄鉱の3鉱物種である。なお、20°付近からバックグラウンドが上昇する傾向が見られることから、試料中には多量の酸化鉄が含まれることが推察される。

・試料番号4

検出された鉱物は石英、カリ長石、单斜輝石、赤鉄鉱、カオリン鉱物の5鉱物種である。

考察

遺跡から検出される代表的な赤色顔料には、ベンガラと辰砂がある。ベンガラは、赤鉄鉱（hematite [$a - Fe_2O_3$]）に由来し、辰砂は水銀朱に由来する。今回の分析では、いずれの試料からも赤鉄鉱のピークが確認できたが、水銀朱は確認できなかった。したがって、赤色顔料は、いずれもベンガラに同定される。

ベンガラは、赤鉄鉱を碎いて使用する他にも、様々な鉄鉱物が利用されていたことが指摘されている（本田、1997）。中には、池などに堆積している鉄バクテリアの生成物を焼成したもの（パイプ状ベンガラ）も確認されている（岡田、1997；降幡・沢田、1997）。一方、水銀朱は、多くの場合水銀鉱床から得られるため、利用には地域差がある。

古墳の石室内や遺体にはしばしば赤色顔料が塗布されており、死者への施朱の風習が存在したことが指摘されている（市毛、1998）。今回の試料番号3、4もそうした施朱に由来する可能性がある。これまでに行われた調査例では、遺体の頭胸部に水銀朱、下半身にはベンガラを用いており、水銀朱とベンガラを区別して使い分けたことが推定されている。今回の調査では、全てベンガラであるために、使い分けの有無などについては不明である。

市毛（1998）によれば、県内でも日本海の京都府に近い地域には水銀朱の存在を示す丹生の地名あるいは丹生神社が分布している。従って、兵庫県内でも日本海沿岸や瀬戸内海沿岸地域では水銀朱の入手が比較的容易であった可能性もある。今後これらの地域で検出される赤色顔料との比較検討や、周辺遺跡における赤色顔料の出土状況や利用状況等に関する資料蓄積を行いたい。

引用文献

足立吟也（1980）粉末X線回折法。「機器分析のてびき3」, p64-76 科学同人

本田光子（1997）出土ベンガラの多様性について。日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集, p78-79

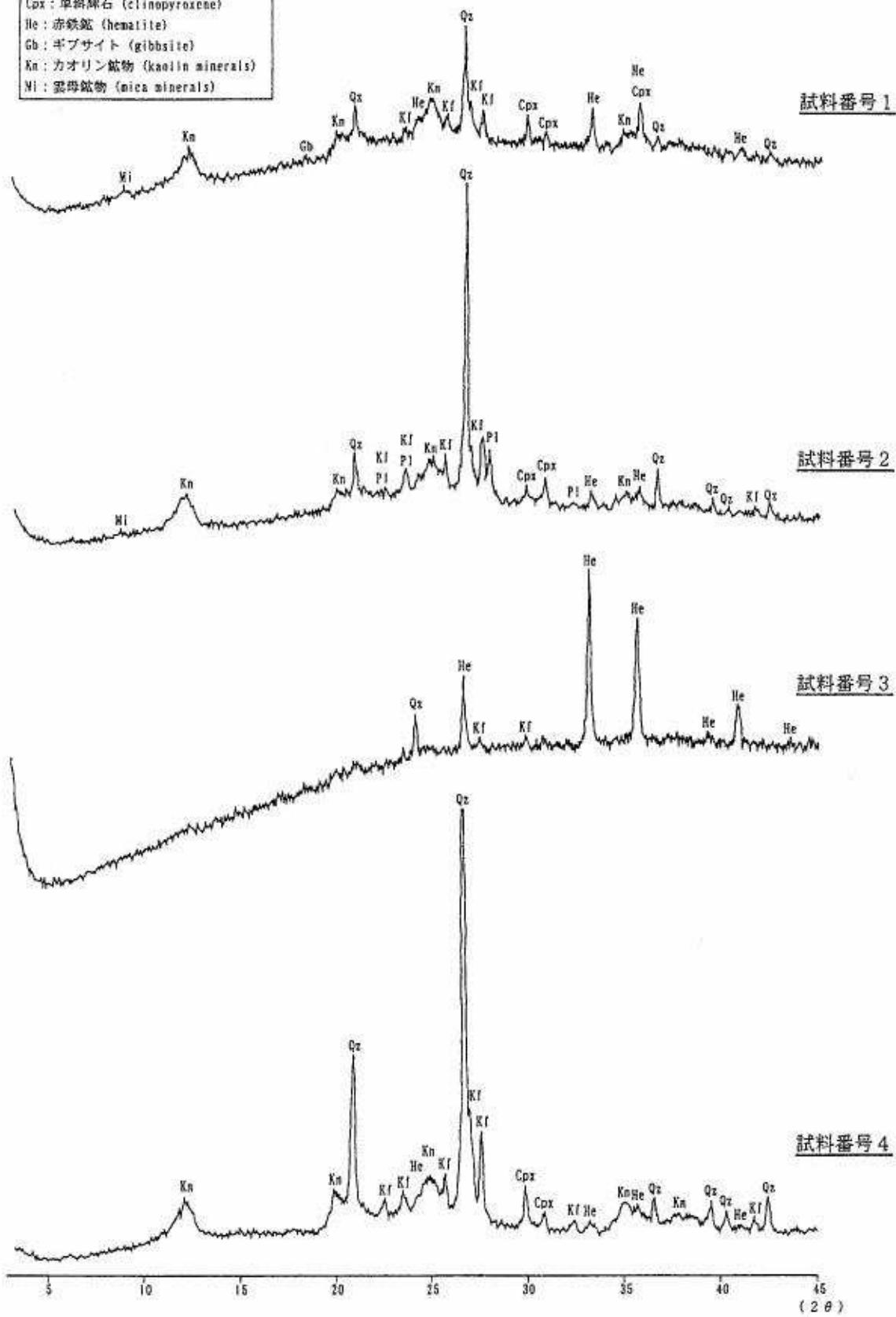
市毛 熟（1998）新版 朱の考古学, p296 雄山閣

日本粘土学会編（1987）粘土ハンドブック 第二版, p1289 技報堂出版

岡田文男（1997）パイプ状ベンガラ粒子の復元。日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集, p38-39

降幡順子・沢田正昭（1997）酸化鉄系赤色顔料の基礎研究。日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集, p76-77

検出鉱物略号	
Qz	石英 (quartz)
Pl	斜長石 (plagioclase)
Kf	カリ長石 (K-feldspars)
Cpx	单斜輝石 (clinopyroxene)
He	赤鉄鉻 (hematite)
Gb	ギブサイト (gibbsite)
Kn	カオリイン鉱物 (kaolin minerals)
Mi	雲母鉱物 (mica minerals)



第110図 赤色顔料のX線回折図

第7章 遺構・遺物の検討

播但連絡道路（5期）事業にともない、52基から構成される梅田古墳群のうち、半数以上におよぶ28基の本発掘調査（うち3基は部分調査、2基は抹消）が実施された。現状保存された古墳も數多く存在し、梅田古墳群全城の調査には及ばなかったものの、3ヵ年にわたる調査で南但馬における一古墳群の様相が明らかとなった。この章では、出土遺物と遺構の調査成果をまとめ、それらをもとに梅田古墳群の特徴を示すとともに、形成過程の復元を行いたい。しかし、今回の報告書作成においては、時間的あるいは人的に限られた中での刊行となつたため、すべての点について十分に言及できずに終わっている。このため、残された課題については、今後改めて検討を加えていきたいと考えている。

第1節 出土遺物について

遺物の特徴と時期

梅田古墳群の調査で遺物が出土した古墳は、主尾根平坦地に立地する15・16号墳・SK02、主尾根西緩斜面に立地する（18）・19・20・6号墳、中央の支尾根に立地する1・3・5・10・11号墳、東側の支尾根に立地する12・13・33号墳、西側の支尾根以西に立地する25～31号墳の以上21基の古墳と埋葬施設1基である。出土遺物は、土師器および須恵器の土器類の他に、大刀・鉄鎌などの武器や斧・鎌などの農工具を中心とした多量の鉄製品、碧玉製あるいは滑石製などの多量の玉類、この他にも鏡や琴柱形石製品、堅櫛など多種多様である。また、15号墳SX01では保存状態が良好な人骨一体が出土している。

土師器 但馬地域での土師器の編年については、資料の不足などによって現状では詳細にされていない¹⁾が、16号墳の墳丘裾部から出土した高杯は、その形状などから布留式（古）段階に位置付けられるものと考えられ、古墳は5世紀前半に築造されたと推定される。SK02より出土した甕も同時期あるいは少し下がった時期のものと考えられ、5世紀前半には埋葬されていたと思われる。このため、16号墳およびSK02に前出する15号墳は5世紀前半以前には築造されていたと推定され、16号墳と切りあい関係のあるその他の主尾根平坦地に立地する17・21・22号墳およびSK03は5世紀前半以降の近い時期に築造されたものと考えられる。また、高杯と壺が出土した1号墳は、鏡あるいは大刀などの豊富な副葬品との検討から古墳時代中期前半、5世紀前半に築造されたと報告されている。

須恵器 梅田古墳群では77点の須恵器（図化掲載）が出土しており、そのうち、杯蓋・杯身が約8割（61個体：有蓋高杯の蓋を含む）を占めている。土師器同様、但馬地域では古墳時代の須恵器の窯跡あるいは良好な一括資料の不足などによって編年が確立されていないため、ここでは陶邑古窯址群の編年を指標として各古墳出土須恵器の位置付けを行うこととする。

埋葬施設内あるいは墳丘上、墳丘裾部および区画溝内（以下、一括して墳丘周辺）から出土した須恵器を概観すると、19号墳SX01で出土した須恵器がTK208型式で最も古く、次いで30号墳出土杯蓋・甕がTK23型式、6・20・10・12号墳出土杯蓋・杯身あるいは高杯などがTK23～TK47型式、29号墳出土杯蓋・杯身がTK47型式、（18）・19号墳SX02・11・13・31・27号墳SX02出土杯蓋・杯身あるいは高杯などがMT15型式、33・25・27号墳SX01出土杯蓋・杯身などがTK10型式にそれぞれ位置付けされるものと考えられる。また、5号墳はTK47～MT15型式、3号墳はTK10～TK43型式に相当すると報告さ

れている。

これらのことから、梅田古墳群では5世紀前半には古墳が出現し、概ね6世紀中頃、古墳時代後期中半～後半まで継続して古墳がつくられていたことが判明した。但し、古墳群全域の調査は行われておらず、現状保存されている支尾根部の古墳については6世紀中頃以降に築造された可能性が高いことから、梅田古墳群の最終時期を確定することは困難である。このため、梅田古墳群に古墳が築造されなくなる最終時期との混乱を避けるために、今回の調査における最も新しい古墳の時期（TK10型式段階）を「最新時期（第3節ではV期に区分）」と仮称して記載を進めていきたい。

刀剣 古墳時代の剣は従来、長さと装具によって、槍、短剣、長剣の三形式に分類してきた。そこで、禹氏は全長の統計をとり、全長約20cm～50cmを短剣、約50cm～70cmを小剣、約70cm以上を長剣とし、短剣と長剣はさらに細分化を行った（禹1999）。禹氏の分類によると、全長63.4cmのM7は小剣に該当する（長茎・広茎Bタイプ）。小剣は古墳時代中期を中心に副葬され、M7も共伴する須恵器より古墳時代中期後半の時期が得られている。

今回調査分で出土した大刀は3振りである。梅田古墳群全体では、1号墳で2振りを確認された以外、大刀はすべて単数副葬であった。

27号墳出土の大刀にはどちらも刀装具が残っていた。SX01出土のM31の柄には、柄間の木質とそれを巻き留めた糸がほぼ同間隔で巻き留められていた。柄間の木質は背側ではなく、糸が直接、茎に触れている。これは、この大刀が木製II類（楔形）大刀であったことを示している。II類（楔形）は木製の場合、柄頭から柄縁装具までを一木で造るため、茎をはめ込むための溝を背側に切る。そこから茎を装具に「落としこみ」、目釘と糸で留める。この装着方法を「落としこみ」技法という。この技法は装具と鉄刀の装着を堅固にし、また大量生産を可能にした。SX02出土のM41は、柄縁装具に突起の痕跡があることから、鹿角製I類刀剣装具であると判断した。この突起はI類の特徴のひとつである。もうひとつの特徴である直弧文は表面の状態が悪いために確認できなかったが、施文されていた可能性はある。鹿角製I類の柄間は一木造りで、II類（楔形）の柄間と同じく背側に溝を切る。両端は鹿角製の柄頭と柄縁装具にはめ込むように枘状に加工する。柄間を目釘や糸で巻き留めるのはII類（楔形）と同じである。また、木製・鹿角製I類は刀剣両方の装具であった。鞘尻装具の底部が杏仁形のものは刀剣両方、倒卵形のものは大刀のみである。

M31、M41ともに鞘木の背側の一部が残っていた。鞘は二枚の板材を合わせて造る。外面の造りは、両端に枘状に加工し、別造りの鞘口と鞘尻をはめ込む形式（鞘装具I類）と、鞘口・鞘尻と一木造りにする形式（鞘装具II類）がある（置田1985）。どちらの場合も鞘間を布や糸で巻き留める。次に、内面の造りは、鞘木の両面を均等に削り抜く、現在の日本刀の鞘と同じ形式と、鞘木の一方だけを削り抜き、もう一方を添え木にする形式の2形式がある（大和久1974）。内面の造りの違いは、技術的な問題というより、製造効率を上げるために、納刀形式によるものであろう。

M31は鞘木の背側のほぼ中心に合わせ目が残っていることから、二枚の板材を均等に削り抜いて造られたことがわかる。しかし、鞘口・鞘尻装具及び鞘木の表面を欠損しているため、外面の造りがどちらであったかは不明である。M49も外面の造りについては判断できなかった。内面の方は、明確な合わせ目が背側にみられなかったことから、鞘木の一方のみ削り抜いた形式なのである。

木製・鹿角製I類、II類（楔形）刀剣装具は古墳時代中期から後期前半にかけて盛行するが、各形式で性格が異なる。大量生産が可能な木製II類（楔形）は実用的な刀装具であったが、直弧文付鹿角製I

類および木製・鹿角製Ⅱ類（楔形）は威信財として扱われた。しかし、両形式ともに中期末、金属装の大刀の出現によって価値が変わる。木製Ⅱ類（楔形）は木質の上に金属を被され、威信財としての価値がさらに高まり、鹿角製Ⅰ類はこうした大刀に圧されて衰退していく。こうした変化は社会情勢の影響によるところが大きい。

27号墳出土の大刀は金属装の大刀が出現する時期にあたる。威信財としての価値は下がったとはいえ、一地域の有力者もつにはふさわしい大刀である。また、27号墳の被葬者が同じ形式の大刀を持たないのは、被葬者の社会的性別が変わったためではないだろうか。

梅田古墳群の刀剣類の数量は決して多くない。その中でも鉄剣はM7、鹿角製Ⅰ類はM49のみである。しかし、近隣の市条寺・向山古墳群では鉄剣は5本、鹿角製Ⅰ類は2本、副葬されている。この違いについては次の機会に譲りたい。

刀子 刀子には片闇と両闇の両形式がある。片闇は古墳時代中期を中心に、両闇は中期末以降、主流となる。今回調査分では、片闇は16号墳のM3のみである。両闇で最も古い時期にあたるのは、19号墳SX01のM6である。M3は古墳時代中期（5世紀前半）頃、M6は須恵器のTK208型式と共に伴することから、この間に片闇から両闇への移行があったと考えられる。この点は魚津氏も指摘している（魚津2000）。なお、M3は抜き身で、M6は刀身を布で包んだ痕跡がある。また、M6は砥石とセットで副葬されていた。

全長15cm以上の大型品は33号墳出土のM20のみで、木製の鞘に納められている。M20と茎の形態が類似するものが、3号墳のM78である（現存長17.0cm・「梅田古墳群Ⅰ」）両方ともTK10型式の須恵器と共に伴する。

梅田古墳群では、刀子を副葬する位置が墓壙または棺の①小口方向と②側板方向の2形式である。①の時は単数副葬であり、②の時は単数または複数副葬になる傾向がある。なお、梅田古墳群中で複数の刀子を有するのは1号墳、3号墳第2主体、29号墳で、どれも2本である。

鉄鎌 鉄鎌は①機能差、②全体の構造、③鎌身部形態の三つのレベルで分類できる（尾上1993）。①は鎌身部が小さく幅の狭いものを尖根系、鎌身部が大きく幅の広いものを平根系とする。②は、尖根系は鎌身長と頭部長の比率で、平根系は矢柄への装着方法を基準として分類する。尖根系においては、頭部長が鎌身長の約2倍以下のものを短頭尖根式、それ以上のものを長頭式とする。

平根系鉄鎌は無茎式と腸抉柳葉式である。無茎式はM4（19号墳）、M54、M63（29号墳）の3本である。どれも鎌身に円形の透かしと重抉り（二段逆刺）をもつ。無茎式はTK10型式以降、消滅するが（豊島2002）、梅田古墳群では古墳時代中期後半を中心に副葬されていたようである。腸抉柳葉式は長頭式と共に伴する場合が多い。27号墳SX01ではこの形式の鎌を棺内に、長頭式鎌を棺外に分けて配置されていた。実戦用と儀礼用を意識していることは明らかである。また、SX02では鹿角装大刀とともに同型の鎌を2本、副葬している。この鎌が複数副葬されるのはSX02のみである。

尖根系は短頭尖根式と長頭式である。まず、短頭尖根式の柳葉式は28号墳出土のM44のみで、1号墳に同型式のものが多数副葬されている。1号墳では腸抉柳葉式とセットになっていたが、28号墳では後世の攪乱に遭っていることもあり、確認できなかった。大刀や鉢といった武器との共伴を考慮すれば、ある程度の数量が副葬されていた可能性がある。

腸抉柳葉式は、鎌身幅が2cm以下の鎌については均一的である。全長は平均9.0cm、鎌身長も平均4.0cmで、古墳時代中期後半の古墳に副葬されている。また、この形式の鎌では矢柄の残存状態が良好なもの

のが数点あった。M22、M55は先端を割った矢柄に挟み込んだ後、糸または植物性の帶で巻き止めてあった。この時、糸巻きは逆刺まで巻き込んでいる。M56、M61は茎があるにも関わらず、茎ごと矢柄に挟み込んでいた。これら4本はTK23～TK47型式にあたることから、この時期の矢の製作方法であったことは確かである。こうした方法が通用していたのか、特別な場合のものであったのか、検討が必要である。

長頸式は10号墳、11号墳、27号墳SX01、29号墳より、3～4本の割合で出土していることから、4本で1セットという単位があったと考えられる。組成については古墳ごとに異なっており、10号墳は腸抉柳葉式2本、片刃箭式2本、27号墳は柳葉式2本、片刃箭式1本、29号墳は柳葉式2本、腸抉柳葉式1本である。なお、29号墳には類鑿箭式(M67)があるが、これは棺上に配置されていた可能性があるため、組成から外した。おそらく、3～4本で1セットとなる長頸式は、その組成の中で、同形式については2本を1セットにすると決まっていたのであろう。さらに、これらの長頸式には必ず平根系腸抉柳葉式1本が共伴している。以上より、梅田古墳群では、同型式の長頸鎌を2本1セットにしたものも含む、3～4本の1セットと、平根系鉄鎌1本というセット関係が成立していたようである。

しかし、こうした長頸式をもつ古墳には時期差があり、最も古い10号墳がTK23～TK47型式の須恵器と共に伴し、以下、TK47型式の29号墳、MT15型式の11号墳、TK10型式の27号墳SX01となる。こうした時期差の中でセット関係が共有されていること、ひいては被葬者についての言及は今後の課題したい。

最後に、鉄鎌の副葬位置で特徴的なものをあげると、10号墳では長頸式の片刃箭式2本の上に、腸抉柳葉式2本と平根系腸抉柳葉式1本を、鎌身がみえるように少し位置をずらして置いていた。また、29号墳は棺内外に遺物が散乱しているように見えるが、無茎式は棺内の被葬者近くに、短頸尖根式の腸抉柳葉式と長頸式はそれぞれでまとめ、棺に近接して配置されていたようである。

鉢 古墳時代の鉄鉢は身部断面・袋部断面・袋端部によって形式分類できる。身部断面が菱形の鎌式、三角形の三角槌式、レンズ形の両丸式と身部が片刃で刀身形の刀身式である。古墳時代の一般的な形態は鎌式であった。袋部断面は円筒袋式と多角形袋式があり、多角形袋式は朝鮮半島(百濟・大伽耶)系であることがわかっている。袋端部は切れ込みのない直基式と切れ込みのある山形抉り式があり、両者の違いは日本への伝播ルートによるもので、直基式は中国戦国時代(燕)→楽浪地域→朝鮮南部地域、山形抉り式は漢→高句麗→朝鮮南部地域より渡来したものであると推測されている。

鉄鉢の機能には、実戦用武器・祭器・威信財という三つがあげられる。こうした機能は朝鮮半島での鉄鉢の位置づけの影響を大きく受けている。ただし、実戦用武器としては、古墳時代の他の武器類に較べて、大量副葬される例がないことから、実戦に使用された可能性は低いようである。これは中国や半島での戦闘方法が異なっていたことが要因のひとつとしてあげられよう。その代わりに、鉄鉢は祭器としての機能を重視された。鉄鉢が鋒を主体部の外へ向けて、主体部外に副葬される例が多いことから、高田氏は「(鉄鉢は)聖域を守護する「辟邪」的性格をもった武器形祭器」であり、「古墳副葬鉄鉢の重要な役割」であったと推測している。また、福岡県宗像郡大島村の沖ノ島祭祀遺跡での出土例が多いことや、記紀の国生み神話などにも登場することからも、古墳時代を通じて、鉄鉢が武器としてよりも祭器として扱われていたことが窺える。(臼杵1985、高田1998)

梅田28号墳の鎌式鉄鉢(M45)はどうであろうか。まずは時期についてだが、M45は身幅が狭く、厚みがあり、両側がある。また、身部と袋部の長さがほぼ同じで、袋部断面は円筒袋式、袋端部は山形抉

り式である。

鎌式鉄鋒は身幅が剣や槍身のように幅広で薄く、「突き刺す」「斬り払う」というふたつの機能から、全体的に細身の、身幅の狭く、厚みの増した「突き刺す」機能に精錬されていった。この結果、両関は徐々に退化し、無関の鉄鋒が出現した。高田氏は無関鉄鋒出現前をⅠ期、後をⅡ期とし、その境を5世紀中頃としている。次の画期は三角穂式鉄鋒が出現する6世紀前半（Ⅲ期）であり、鎌式は6世紀末までには完全に消滅する。

袋端部の山形抉り式はⅠ期中頃（4世紀後半頃）に出現し、Ⅱ期で徐々に衰退、Ⅲ期にはほとんどみられなくなる。のことより、M45は6世紀前半をくだらないことは確実になる。身部と袋部の長さの比率は、最初、身>袋であったが、Ⅰ期後半頃（4世紀末頃）にはほぼ身=袋となる。しかし、Ⅱ期以降は再び身>袋となるようである。これより、M45はⅠ期後半頃以降のものといえる。

M45は鋒を被葬者の頭部と同方向に向け、木棺の長辺に添う形で棺外副葬されていた。副葬当時は柄が装着されていたことが袋端部に残存している木質と出土状況からも明らかである。ここでも、辟邪としての武器、祭器として、M45が機能していたことは確かであろう。

残念ながら、28号墳は攪乱によって確実な時期を絞り込むことが難しい。しかし、M45はⅠ期後半頃からⅢ期（4世紀末から6世紀前半）までの間におさまることは確かであり、28号墳の立地や共伴する副葬品と照らし合わせれば、より絞り込むことは可能であろう。

最後になったが、鉄鋒が梅田古墳群中、28号墳にのみ副葬されていたことは、共伴した他の副葬品とも合わせて、被葬者の性格を知る重要な鍵である。また、馬具と共にすることも注意すべき点である。

鑿 鑿には叩き鑿と突き鑿がある。叩き鑿は柄の頭を叩いて木材を穿つため、穂先（刃先）も含めて、強い打撃に耐えうる頑丈な造りになっているのに対して、突き鑿は手の押す力で木材を削るもので、薄い造りになっている。古墳時代にはすでに叩き鑿と突き鑿が成立しており、叩き鑿は柱材、板材の切断、枘穴の穿孔に、突き鑿は叩き鑿による荒削りの後の仕上げ加工に用いられたことが、木材の加工痕よりわかっている。また、突き鑿は指物などの細工物を作る工具でもあったようである。

さて、M51のような無肩で首が長く、着柄部が袋状を呈するものは、古瀬氏の分類で叩き鑿のⅡA a類（平均：全長10~25cm、刃部1~2cm 厚1cm前後で片刃）に相当する（古瀬1991）。着柄部が袋状のもの（袋柄）は古墳時代中期に多く副葬例がみられることから、M51の時期もその範疇に収まるのであろう。

人骨 15号墳の中心施設であるSX01からほぼ完存した状態の人骨一体が発見された。人骨の形態学的分析（第6章 第1節に詳細）では、埋葬された人物は、身長147cm前後の当時の平均身長を下回る女性であり、およそ25~30歳の年齢で死亡したと推定されている。また、この女性には出産歴が認められており、隣接するSX02には遺存していた歯から2~5歳の子供が埋葬されていたとされ、両者が親子あるいはごく近しい血縁関係にあった可能性が高いと考えられる。しかし、15号墳の残る埋葬施設に葬られた人物については不明といわざるをえず、その他に調査された27基、42埋葬施設に葬られた人物についても同様に不明である。近接する向山・市条寺古墳群では、調査された15基、24主体部のうち、熟年女性2例、熟年および壮年男性各1例の人骨が出土し、被葬者の人物像が判明している^⑨。15号墳SX01を含めこれらの古墳から発見された人骨はわずか数例であるが、梅田古墳群において、初現期に四方を眺望できる最も高位置に築造された古墳の中心に比較的若くして亡くなった女性が埋葬されていたことによって、古墳群の実体解明、さらには当時のこの地域の社会を考えるうえで貴重な資料になる

ものと思われる。

遺物の出土位置

各古墳から出土した遺物は、棺内あるいは棺外（以下、墓壇内棺外）の埋葬施設内に副葬された遺物と、墳丘周辺から出土した遺物に分類される。棺内に副葬された遺物のうち、土器は今回の調査の最新時期にあたるTK10型式の須恵器が出土した3号墳第1主体・33・27号墳SX01において、土器枕あるいは頭上に置かれていた杯蓋・杯身のみである。また、15号墳SX01ではヤリガンナと勾玉が各1点、1号墳では長大な木棺内に4群に分けられた多量の遺物¹⁰が副葬されていた。この他、管玉・小玉などの玉類（19号墳SX02・13・28号墳）や刀子・鉄鎌などの鉄製品（16号墳SX02・19号墳SX01・20・3号墳第1～3主体・11・33・27号墳SX01・02・28号墳）、豊饒（28号墳）、砥石（19号墳SX01）などが棺内に副葬されていた。その中で、27号墳SX01は豊穴式石室に木棺が納められており、棺内から大刀・鉄斧に加えて馬具が副葬されていたのが注目される。

墓壇内棺外からは、SK02の墓壇上層から土師器の甕が、1号墳の棺上から土師器の壺1点と高杯3点が出土したのを除き、20・6・11・12・31・25・27号墳SX01・29・30号墳の各古墳からは須恵器が出土している。このうち、20・11・12・29号墳では刀子・鉄鎌などと、また25号墳からは馬具とともに出土している。この他、16号墳SX01・19号墳SX01・10号墳では土器ではなく、刀子・鉄鎌のみの出土である。須恵器は杯蓋と杯身のセットが多く出土しているが、出土位置は棺上あるいは棺検出面の棺外など統一されていない。

以上のことから、梅田古墳群では主尾根平坦地に築造された5世紀前半の15号墳SX01および16号墳SX02（棺内）、16号墳SX01（墓壇内棺外）において、わずかに副葬された遺物がみられるが、続く支尾根上に古墳が移行した1・19号墳SX01・28号墳からのちに棺内副葬および棺外供獻が始まられたものと考えられる。これは、向山古墳群では古墳出現当初の墳丘から土器が出土している状況とは趣を異にしており、今後検討すべき課題のひとつである。

第2節 墳丘および埋葬施設について

墳丘

梅田古墳群は、出土した遺物などから主尾根平坦地に立地する15号墳が最初に築造され、16・17号墳が続き、その後21・22号墳と併行して主尾根西緩斜面および各支尾根へと古墳の築造地点が移行していくことが判明した。築造開始時の15・16号墳では地山を整形し、約2mの高まりをもつ墳丘を明確につくりだしているが、続く17号墳は後世に削平の影響を受けているものの墳丘は明確につくられておらず、21・22号墳は16号墳の墳丘裾部の平坦地に築造され、ほとんど墳丘の高まりは認められないものである。

主尾根西緩斜面および支尾根に築造された古墳は、基本的に斜面上方側（以下、墳丘背後）を削り、削った残土を斜面下方側に盛土をし、墳丘との間に区画溝を設けている。しかし、主尾根平坦地の古墳に続く、支尾根先端（枝尾根に分岐する起点）に位置する1・28号墳では、墳丘背後に区画溝を設け、尾根と切り離して墳丘を形づくっているが、明確な盛土による墳丘の造成は行われていない。また、墳丘裾部には何もみられず、墳丘・墳形・規模などは不明瞭である。これ以後に支尾根上に築造された古墳も、墳丘は埋葬施設を構築する平坦地をつくりだす以外に大規模な造成は行われていないため、古墳

の盛土は0.2~0.4m程度のわずかなものあり、墳丘など不明瞭な古墳が多く存在している。その中で19号墳が約0.7mの厚さに盛土が行われているのを除けば、梅田古墳群の「最新時期」(MT15~TK10型式)に位置付けられる3・13・25・27号墳で約1mの厚さに盛土が行われている。このため、梅田古墳群では「最新時期」段階に比較的大規模な造成が行われ、古墳築造にひとつの画期があったと考えられる。

また、25号墳はほぼ同時期の小規模な31号墳を埋めた上層に築造され、27号墳は近接した時期のふたつの埋葬施設と区画溝がほぼ同一地点に重なり、古墳を拡張したように改築されている。3・19号墳でも同様に複数の埋葬施設が検出されており、墳丘に盛土が行われる「最新時期」に同一地点で一墳丘一埋葬施設の古墳が重なって築造・改築されている状況が確認された(19号墳は5世紀後半に築造、6世紀前半に改築)。このような古墳の形態は、但馬地域では初例であり、他の古墳群ではこの時期、墳丘上に木棺が複数埋葬される古墳が出現している。しかし、これらは同一墳丘内に埋葬されるもので、のちの横穴式石室墳における追葬との関連で捉えられており、梅田古墳群にみられる一墳丘一埋葬施設のように同一地点に重なりあった例ではない。このため、一様には比較できず、今後の類例を待ちたい。

以上のことから、梅田古墳群では墳丘は時期によって築造方法が異なり、それらが変化する過程で但馬地域でもこれまでに例のない特異な形態をもつ墳丘が形成されていったものと考えられる。

埋葬施設

主尾根平坦地に築造された15~17・21・22号墳の埋葬施設には、竪穴式石室状石棺および箱式石棺、「H」字形・割竹形・箱形・舟形の各木棺など多種多様なものがみられる。これらの埋葬施設の変遷を古墳の築造順序からみれば、竪穴式石室状石棺および箱式石棺から、「H」字形・割竹形・箱形・舟形の各木棺へと推移している。これは、最も古い15号墳では、石棺が中央に構築されているが、次の16号墳の時期には木棺が中心になり、それ以降も21号墳において石棺は存続し、23・24号墳でも石棺を埋葬主体に構築しているが、古墳中央の埋葬施設になることは少なくなり、古墳群全体においても木棺が主流となっていく。

主尾根西緩斜面に築造された古墳では、19号墳SX02の舟形木棺、その周辺に位置する23・24号墳の石棺を除き、長さ約1.7~2.4mを測る箱形木棺が納められていた。また、支尾根に築造された古墳は、すべてが箱形の木棺であり、長さが1.8m以上のものが大半を占める。そのうち、1号墳は長さ約5mを測るいわゆる「長大な木棺」であり、27号墳SX01は梅田古墳群唯一の竪穴式石室が構築され、木棺が納められていた。

石棺 石棺は竪穴式石室状石棺から箱式石棺に変わると、箱式石棺も割り石を利用し、側壁の背後に控えを施すもの(15号墳SX02・04・21号墳SX03)から、6世紀以降には河原石を利用し、背後に控え石を施さないもの(23・24号墳)へと変わっている。石棺が埋葬施設の中心施設である初現期の15号墳では、石棺は3基(SX01・02・04)検出されており、相違する点がいくつかみられる。その中でも、石棺の規模は大中小と三種類にわけられ、石棺の小口構造もSX01は「Ⅱ字形」、SX02は「口字形」、SX04は「H字形」にそれぞれ分類される。また、床面については、15号墳SX01は砂が多く混じるもののが礫床(「無底石」礫床)であり、四方の壁面および頭部の蓋石内面に赤色顔料が塗られていたため、床面も赤味を帯びた状況であった。15号墳のその他の石棺および23・24号墳は「無底石」に分類され、21号墳SX03のみが板状の1石が据えられた「有底石」であった。

木棺 今回調査された28基の古墳からは、「H」字形・割竹形・箱形・舟形に分類される各木棺が検

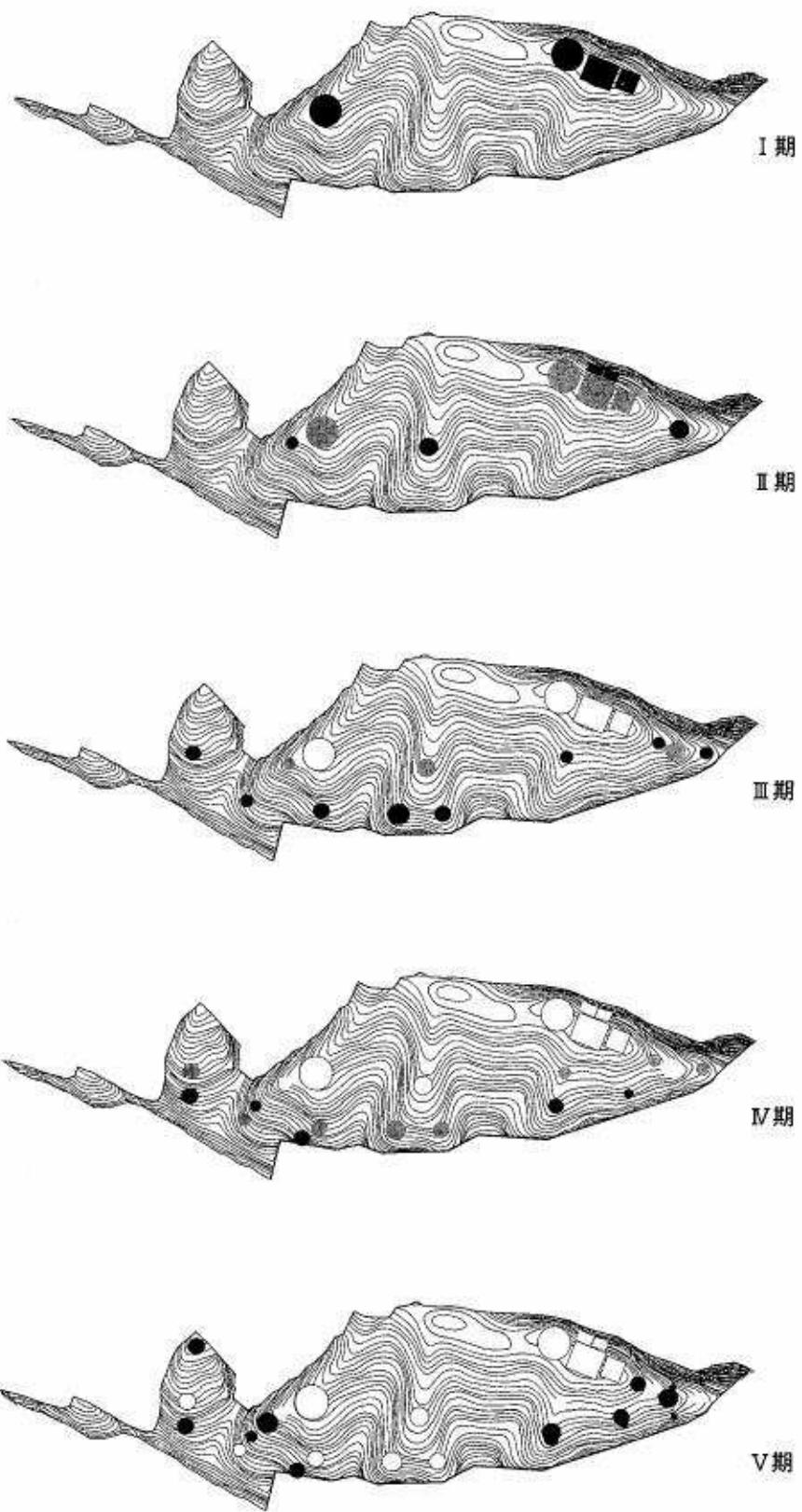
出され、総数は36基を数える。そのうち、箱形木棺が約9割（86%、31基）を占め、わずかに「H」字形および舟形木棺が各2基、割竹形木棺は1基のみであった。多数を占める箱形木棺は、15号墳SX03にすでにみられるが、続く16・17号墳では「H」字形・割竹形の木棺が中心に納められ、箱形木棺が主流となるのは、主尾根西緩斜面および支尾根に古墳が築造される時期からである。また、木棺の規格には規則性は認められないが、主尾根平坦地に立地する古墳には木棺の長さが1.5mに満たないものが多く、それ以後の古墳では一部に例外はあるものの長さ1.7m以上の木棺が埋葬される傾向がみられる。この他、SK02・03は調査当初、箱形木棺と考えられていたが、墓壙の完掘によって、長さからは成人が埋葬されたと推定されるものの極めて幅が狭く（0.38～0.39m）、木棺を想定することが困難に思われた。しかし、土層では陥没状況が観察されていることから、蓋の存在が考えられ、両側辺に側板を立てずに蓋のみを架構した木蓋土壙というべき形態によって埋葬された可能性が考えられた。このような長さに対して、極めて幅の狭い木棺は22号墳でもみられたが、2号墳において、長さ1.37m、幅0.40mの木棺が検出され、両側に2～6cmの棺材の痕跡らしき土（7層）が確認されている。但し、長さに対して幅の比率の違いや、SK02・03・22号墳で断面に棺材の痕跡が確認されていない状況では、極めて幅の狭い木棺の可能性は残っているが、周辺の古墳の類例および今後の調査による資料の増加を待って判断したい。また、2号墳の木棺には唯一、棺底に小礫が撒かれているのが確認されている。

第3節 梅田古墳群の形成過程

出土遺物を中心にして、すでに梅田古墳群の築造順序の記載を進めてきたが、ここで改めて今回調査を実施した33基の古墳（うち2基は抹消）の形成過程の復元を行いたい。若干、記述の重複する箇所もみられるが、遺構・遺物の検討を通じて、梅田古墳群の「築造開始時期」から「最新時期」（今回の調査における古墳の最後の時期：TK10型式）に至るまでをI～V期に区分し、各期の古墳にみられる特徴もあわせて記載し、本報告のまとめとしたい（第111図）。

I期 梅田古墳群の山塊に古墳が出現するのは、主尾根平坦地に15号墳が築造されたのが初現であり、続いて16・17号墳が顕につくられる。16号墳は出土した土師器から5世紀前半に築造されたと考えられ、16号墳を中心にして前後に切り合い関係が確認されている。このため、前出する15号墳は5世紀前半以前に、後出する17・21号墳などは5世紀前半以降の近い時期の築造がそれぞれ推定される。初期の15・16号墳とも四方を眺望できる地点に立地し、約2mの高まりをもつ墳丘が築造され、複数の埋葬施設が検出されている。また、中央の支尾根先端（枝尾根に分岐する起点）に立地する1号墳は出土遺物から、5世紀前半頃に位置付けられており、15号墳より後出するものの16号墳と同時期あるいは近い時期に築造された可能性が高いと思われる。しかし、出土遺物が極めて少ない主尾根平坦地の古墳との前後関係を決定するのは困難であり、ここでは16号墳と併行する時期と考えている。

II期 I期に続くこの時期は、16号墳の墳丘南側を削り込んで区画溝を巡らした墳丘の高まりをもたない21・22号墳および埋葬施設のみのSK02・03が主尾根平坦地に継続してつくられる。21・22号墳は区画溝の切り合い関係から22号墳が先行し、のちに21号墳がつくられていることが確認されたが、北側裾部に位置するSK02・03との前後関係は不明である。その一方で、主尾根の西緩斜面と北に派生する支尾根上にも古墳が相次いで築造されるようになる。主尾根西緩斜面では須恵器が出土した19号墳SX01が築造され、西側の支尾根先端（枝尾根に分岐する起点）に立地する28号墳もこの時期に築造さ



第111図 梅田古墳群の形成過程

れたと考えられる。また、1号墳の下方に立地する2号墳は遺物が出土していないため、時期の確定には至らないが、尾根筋に立地する一連の古墳（1～5号墳）との関係からこの時期に築造されたものと推定される。なお、19号墳はふたつの埋葬施設と区画溝（SX01・02）が重なって検出された古墳であり、切り込まれた旧いSX01はこの時期では他の古墳ではみられない厚さ約0.7mの盛土が行われ、区画溝も直線的に深く設けられている。また、28号墳は1号墳とともに枝尾根に分岐する地点に立地し、豊穣や鉄鉢などが出土しており、総体的に遺物量が少ない梅田古墳群の中でも、比較的豊富な遺物が出土した古墳である。1号墳を含め、主尾根の斜面地および支尾根に移った19・28号墳は、いずれも尾根筋の比較的傾斜が緩やかになった地点に築造され、各尾根筋の拠点古墳の様相が認められる。

Ⅲ期 Ⅲ期になると墓壙内棺外および墳丘周辺から須恵器が出土するようになり、TK47型式を中心として、一部前後するTK23・MT15型式を含めた時期を対象とした。しかし、出土した土器には形態あるいは技法上に顕著な特徴がみられないものも含まれ、他の前後する古墳との比較でこの時期に位置付けしたものも存在している。このため、Ⅲ期では20・6・5・10・12・26・29・30号墳の8基の古墳がある時間の経過の中で築造されていったと考えられる。19号墳下方には6号墳、1号墳下方には2号墳に続いて5号墳とさらに分岐した枝尾根上に10号墳、28号墳下方の分岐したそれぞれの地点に29・30号墳が前後して築造されている。その中で20号墳については、19号墳の上方に立地しており、通常みられる尾根の上方から下方へと古墳の築造地点が移行していく状況とは異なっている。このように新しい古墳が斜面上方に築造される逆行状況は、梅田古墳群では続くⅣ・Ⅴ期においても数例が確認されており、他の古墳群にはみられない特異な点であるといえる。また、12号墳の立地する東側の支尾根では、3基の古墳が調査されているが、1・28号墳のような尾根筋の拠点となる12号墳に先行する古墳は調査区外の上方に立地しているものと考えられ、Ⅲ期以前の状況については不明である。なお、26号墳からは上方のSK02から流失したと考えられる土師器が出土したのみであるが、下方に位置する27号墳に先行して築造されたものと判断し、Ⅲ期としている。この時期に築造された古墳の墳丘は、前後するⅡ・Ⅳ期とともに斜面上方側を削り、削った残土をわずかに斜面下方側に盛土し、墳丘との間に区画溝を設けたもので、埋葬施設についても一様に木棺が納められている。

Ⅳ期 Ⅲ期に続き、出土した須恵器からMT15型式段階の時期を対象とした。杯蓋の口径が大きくなる他、杯蓋天井部および杯身底部のヘラ削りの範囲が狭くなっているのが特徴といえる。この時期に築造されたと考えられる古墳は、19号墳SX02・4・11・13・31・27号墳SX02の6基である。11・13・27号墳SX02は、Ⅲ期の10・12・26号墳のそれぞれ下方に築造されているが、4号墳は5号墳の上方に位置する地点に築造されている。5号墳の築造地点が尾根の裾部に近いことから、上方に立地する1・2号墳との間の空いたスペースを利用したものと考えられる。また、Ⅱ期に築造された19号墳の埋葬施設および区画溝（SX01）をそれぞれ切り込んで新しくSX02が改築されている。Ⅴ期に出現する25・27号墳SX01とともに一墳丘一埋葬施設という特異な形態の古墳である。この他、尾根状に張り出した地点に築造された31号墳は、直径約4mの小規模な円墳である。

Ⅴ期 今回調査された古墳の「最新時期」にあたるが、梅田古墳群では現状保存された古墳の中に立地的な点などから、Ⅴ期以降に築造された可能性が高いものが存在するため、梅田古墳群に古墳が築造されなくなる最終時期とはいえない。このⅤ期に築造されたと考えられる古墳は、18・23・24・3・33・25・27号墳SX01の7基である。出土した杯蓋の天井部と口縁部を画する稜の突出はほとんどみられず、杯身の口縁部の立ち上がりは短く内傾するなどの特徴がみられ、TK10型式段階の時期と考えら

れる。主尾根西緩斜面につくられた18・23・24号墳のうち、18号墳は20号墳の斜面上方に位置し、Ⅲ・Ⅳ期に統いて上方へと移り、結果的に尾根筋の最も高位置に築造されている。19号墳の裾部に位置する23・24号墳は、小規模な造成が行われた墳丘に石棺を埋葬主体とした古墳である。中央の支尾根でもⅢ・Ⅳ期に統いて下方から上方へと築造地点が移行し、3号墳は5基の古墳（1～5号墳）の真ん中に築造されている。3基の埋葬施設をもつ3号墳の第1主体の棺内には、この時期に但馬以外の地域にはあまりみられない鏡が副葬されていた。また、25・27号墳SX01は、それぞれ古墳の築造形態に違いはあるものの、ともに19号墳と同様、一墳丘一埋葬施設という特異な古墳である。墳丘に約1mの厚さの盛土が行われるのも3・25・27号墳などこの時期の古墳の特徴といえる。なお、33号墳は埋葬施設の部分的な調査であるが、Ⅲ期に築造された12号墳の南上方約27m、標高で約10m（両古墳の埋葬施設を基準）上方に立地しており、東側の支尾根においても斜面の下方から上方に逆行して古墳が築造されるこの古墳群の特徴が認められる。

この他、14号墳は遺物が出土しておらず、8・32号墳については大部分が調査範囲外であったため、時期を想定することはできなかった。

以上、I～V期に区分した梅田古墳群の形成過程をまとめると、古墳時代前期末～中期初頭に主尾根平坦地および支尾根先端に古墳が出現し（I期：15～17・1号墳）、中期前半～中半には主尾根上に古墳は継続しつつ、主尾根の斜面地や新たな支尾根先端に古墳が築造される（II期：21・22・19・28号墳他）。中期後半～後期前半になると引き続き、主尾根の斜面地あるいはそれまで古墳が築造されていない尾根筋に移るとともに枝尾根にも広がり（III～IV期：6・20・10・12・29・30・27・31号墳他）、後期中半以降は尾根筋の古墳と古墳の空いたスペースやすでに在る古墳を新たに改築するなどが行われている（18・3・33・25・27号墳SX01他）。その後、次の世代も梅田古墳群は継続していくが、南但馬地域において横穴式石室が導入される時期（TK43型式段階）には、当時の社会変化とともに終焉を迎えたものと考えられる。

第4節 さいごに

梅田古墳群から出土した遺物の共伴関係について簡単にまとめておく。

もっとも多く出土した遺物は須恵器あるいは土師器といった土器で半数以上の古墳から出土している。そして、土器の出土した古墳の半数以上から鉄器が出土している。土器を伴わずに鉄器が出土しているのは、28号墳のみである。梅田古墳群中、最も豊富な遺物が出土した1号墳では、遺物の種類もそれぞれの数も多いが、遺物を全く出土しないものも多い。1号墳に次いで豊富な遺物が出土しているのは、28号墳である。

出土した鉄器の中で、一番点数が多いのは鉄鎌であり、その次が刀子、その次が刀である。刀・鉄鎌は武器であり、被葬者の遺愛品的なものを納めるというよりは、遺体を守るために副葬することが考えられる。刀子は武器ではなく工具に分類すべきものであろうが、刀を持つ利器として捉えるならば、同様の辟邪的な性格を考えることもできる。

武器以外の鉄器としては、鍬・鎌・穂摘具といった農具、斧、のみ、ヤリガンナといった工具、轡や鉗具などの馬具、それらの分類に属さぬ針がある。また、鉄器以外の金属器としては、1号墳・3号墳から出土した鏡、13号墳・33号墳から出土した銅製の耳環がある。耳環はいずれの出土例でも対にな

って見つかってはいない。他に時期は下るが銅鏡が12号墳から出土している。

出土品の組み合わせで、一番多いのは、須恵器と鉄鎌数点と刀子1点という組み合わせで、これが標準的なパターンと考えられる。

鉄鎌・刀子・刀以外では、斧・鎌の出土点数がそれに次ぐが、斧と鎌が伴って出土する例が多い。

なお、25号墳のように鉄器が馬具のみという例は、他の古墳群の出土例と比較しても余り例がないようと思われる。また、鏡をもつ3号墳と馬具・農具・工具をもつ27号墳は土器からみた時期は近接しており、刀・鉄鎌以外の出土品の組み合わせが全く異なる点が非常に興味深い。

金属器以外では、漆塗りの堅櫛と玉類、琴柱形石製品がある。漆塗りの堅櫛が出土した1号墳・28号墳は、とともに玉類を伴っている。他に玉が出土したのは13号墳・19号墳がある。13号墳では耳環が出土しているものの、この2基からは鉄器は出土していない。

以上、述べてきたように、ここでは梅田古墳群出土の遺物の組み合わせについて、簡単にまとめておくにとどまるが、周辺の古墳群と比較検討し、遺物の形態的な変遷なども詳しくみてゆけば、当地域の古墳群の動態を語るより多くの情報を得ることができるであろう。今後の課題としたい。

近年、南但馬地域では和田山町加都を終点として、播磨地域（姫路市）と接続した今回の播但連絡道路（5期）事業に加え、丹波地域（氷上郡春日町）とをつなぐ一般国道483号線北近畿豊岡自動車道春日和田山道路Ⅱ（以下、北近畿豊岡自動車道）の建設が続き、それらにともなう大規模な発掘調査が実施してきた。このため、和田山町および東接する山東町においては、数多くの遺跡の調査が行われ¹⁾、古墳時代の資料は増加し、その様相が明らかになりつつある。今後、発掘調査の整理作業が進むとともに、北近畿豊岡自動車道は日本海沿岸（豊岡市）にむけて北伸する計画であり、北但馬地域での発掘調査の増加が予想される。道路工事による周辺の自然環境は著しく変貌していくが、全国的にも有数の古墳密集地域である但馬において、古墳およびそれらを形成した集落遺跡などの調査によって、当時の人々の生活を解明する機会になるものと思われる。

今回の発掘によってえられた梅田古墳群の調査成果については、南但馬における古墳群の様相を知る資料として活用されることが望まれる。しかし、近接する向山・市条寺両古墳群や梅田東古墳群との比較検討、和田山町内の古墳および集落遺跡との位置付け、さらに但馬地域あるいは山陰地方など広い地域間の関わりの中での梅田古墳群の解釈などは行っておらず、多岐にわたって数多くの検討すべき課題が今後に残されている。

本章は、第1節の「刀剣・刀子・鉄鎌・鋒・鑿」を大前が、第4節の前半を菱田が、その他については仁尾がそれぞれ執筆した。

註

- (1) 近年、谷本 進氏によって、但馬地域の庄内・布留併行期の土器の基準資料が示されている（参考文献）。また、播但連絡道路（5期）事業において、和田山町最大の平野部に所在する加都遺跡の調査が行われ、古墳時代の中期～後期の土師器が出土しており、現在、遺物の整理作業が行われている。
- (2) 1号墳木棺の1群からは銅鏡1面、針状鉄製品12点、琴柱形石製品4点、碧玉製勾玉1点、碧玉製管玉8点、

滑石製勾玉88点、滑石製臼玉264点、堅楠6点が出土し、2群からは碧玉製勾玉2点、緑色凝灰岩製の管玉20点、3群からは大刀2点、鉄鎌30点、4群からは土師器壺1点、高杯3点、穂摘具1点がそれぞれ出土している。他に棺上に鎌1点、穂摘具9点、刀子2点、鉄斧1点が置かれていた。

- (3) 郡司晴元・片山一道「向山古墳群で出土した古人骨」および「市条寺古墳群で出土した古人骨」より（参考文献）。
- (4) 木棺の長さに対しての幅の比率は、幅÷長さとして計測すれば、SK02・03・22号墳では長さ1.7~2.6mを測るため、それぞれ0.149・0.193・0.216の数値を示す。木棺の長さが比較的短い2号墳では、比率数値は0.291となり、幅が0.5m以上の他の木棺と比較しても変わらない数値である。
- (5) 和田山町では加都遺跡の他、近畿地方最大の円墳である茶すり山古墳などの調査が行われ、山東町内では古墳時代初頭の王墓である若水A11号墳や古墳時代中期の居館が発見された柿坪遺跡などが調査されている。

参考文献

- 村松貞次郎 「大工道具の歴史」 岩波書店 1973
- 田辺昭三 「須恵器大成」 角川書店 1981
- 白杵 繁 「古墳出土の鉄刀について」『日本古代文化研究』第1号 古墳文化研究会 1984
- 置田雅昭 「古墳時代の木製刀剣鞘装具」『考古学雑誌』第71巻第1号 1985
- 白杵 繁 「古墳出土鉢の分類と編年」『日本古代文化研究』第2号 古墳文化研究会 1985
- 高田寛太 「古墳副葬鉄鉢の性格」『考古学研究』第45巻第1号 1998
- 古瀬清秀 「農工具」『古墳時代の研究』第8巻 雄山閣 1991
- 尾上元規 「古墳時代鉄鎌の地域性—長柄式鉄鎌出現以降の西日本を中心にして—」『考古学研究』第40巻第1号 1993
- 禹 在柄 「鉄劍の型式学的研究」「国家形成期の考古学」 大阪大学考古学研究室 1999
- 魚津知克 「鉄製農工具副葬についての試論」「表象としての鉄器副葬」 鉄器文化研究会 2000
- 谷本 進 「但馬における庄内式併行期の土器様相」「庄内式土器研究会」XXII 2000
- 谷本 進 「但馬における庄内式併行期の土器様相」「北近畿の考古学」 両丹考古学研究会・但馬考古学研究会 2001
- 清家 章 「畿内周辺における箱形石棺の型式と集団」『古代学研究』152 2001
- 大前篤子 「刀剣装具の装飾とその社会的意義—木製・鹿角製刀剣装具を中心に—」『滋賀史学会誌』第13号 2001
- 豊島直博 「後期古墳出土鉄鎌の地域性と階層性」『文化財論叢III』 独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所篇 2002
- 地域文化財展「古代但馬の王墓」 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 2002
- 『陶邑古窯址群I』 平安学園考古学クラブ 1966
- 『七廻り鏡塚古墳』 大平町教育委員会 1974
- 『筒江遺跡群I』 兵庫県教育委員会 1985
- 『向山古墳群 市条寺古墳群 一乗寺経塚 矢別遺跡』 兵庫県教育委員会 1993
- 『梅田古墳群I』 兵庫県教育委員会 2002
- 『梅田東古墳群』 兵庫県教育委員会 2002